山岳

第三十五年
第二號

山岳

第三十五年第二號

山岳第三十五年第二號目次

			頁
行爲と冒險	(會員)	伊藤秀五郎	一
ミニヤ・ゴンカ山群	(會員)	望月達夫	一七
千丈澤を繞る山々	(會員)	法政大學山岳部	空
高所に於ける總代謝に就て(綜說)	(會員)	額田敏	二三
平ケ嶽を繞る澤について	(會員)	中村謙	三九
白馬三山とその以北	(會員)	盛岡英治郎	六一
春の白馬頂上より糸魚川へ	(會員)	盛岡英治郎	九一
三月の北ノ又		田中實	九九
尾瀨原貯水池反對說		川崎隆章	三七

追悼記

辻本滿丸君逝く	木暮理太郎	三七
我が山の友辻本滿丸君	武田久吉	三〇
小森宮章正君を偲ぶ	金山淳二	三五
	谷口現吉	四一
會務報告		四二

圖版

北鎌尾根……石原博和 對頁 八〇
硫黄岳（三月）……五味三郎 九六
北鎌尾根第一峰（三月）……石原博和 九七
池ノ岳より平ケ嶽を望む……中村謙 一四四
中ノ岐川上流（平ケ嶽澤）……中村謙 一四五
朝日岳國境より白馬方面を望む……田邊主計 一九二
故辻本滿丸氏……二一八
故小森宮章正氏……二二九

挿圖

打箭爐附近の圖……五三
ミニヤ・ゴンカ山群圖……五四
千丈澤概念圖……七一
平ケ嶽西南面略圖……一三一
平ケ嶽北面之略圖……一四三
白澤之略圖……一五六
北ノ又上流略圖……二〇一

行爲と冒險

——學校山岳部に對する反省——

伊藤秀五郎

一

山登りの內容はもとより複雜であり、その動機も多樣である。しかし植物採集とか地質調査とかいふやうな純學術的研究のための登山は別として、所謂遊技的な山登りに於ては、一般的に山登りといふ行爲が何によつてなされるかといへば衝動によるといへると思ふ。衝動は登山行爲の原因の最も根本的なもの、少くともその一つである。衝動はいふまでもなく生命の象徵であり、最も活氣に滿ちた青年の行爲が最も衝動的であるのは當然であつて、從つて生涯を通じて青年時代の山への憧れが最も強く最も衝動的であるのも自然である。しかし衝動は自覺以前のものであるから、その意味で身體的な內的刺戟であるといへるであらう。だから自覺を伴はない衝動による山登りはある意味で盲目的といふことが出來る。勿論盲目的な行爲が無價値であるといふのではない。いはば無自覺的な山登りにも技術は必要であり、技術の錬磨は同時に精神の鍛錬でもあつて、正しい意味の山登りであれば、自らそれに伴つて人間陶冶がなされてゐるのである。學生の頃に山登りを始めた者は誰しも數年間の盲目的な登山時代を經驗してゐるのが普通であらう。そしてその盲目的な時代の數年間が、その後の山登りの上

に、またひろく一般の人生に於て極めて有益な役割を果してゐることも疑ひないであらう。

しかし人間の行爲は總てが衝動によるのではない。いふまでもなく人間は本能的存在であると同時に自覺的存在であつて、眞の人間的行爲は自覺によるものでなければならない。山登りに於ても經驗の集積と共に盲目的から自覺的に發展するのは自然である。ここに自覺的といふのは、私達が私達の行爲の價値とか意義とかいふやうな事について反省することを意味する。山登りといふ行爲が私達の生活に如何なる意味をもつものであるか、山登りは如何なる仕方、如何なる態度でなされなければならないか、――假りに如何なる態度でなされてもよいといふ結論を得るとしても、やはりこの問題に對する解答としてはじめて得られることに變りはない――、また何故私達は山登りをするのであるか、といふやうな事に對する反省を意味してゐる。

このやうな知的反省は、言葉のすぐれた意味に於て二つの重要性をもつてゐる。しかしこの重要性は從來必しも正しく評價されてゐた譯ではない。例へば、山登りが人生に如何なる意味をもつかといふやうなことは、登山技術とは直接の關係はない。我々は山に登りたいから登るのであつて、登りさへすればいいではないか、我々は登ることそれ自身に喜びを見出すのであつて山登りが我々の人生に如何なる意味を持たうと、それを知ること自身は何ら我々の山登りに附け加へるところはない、況や登山の動機の分析的な又は心理學的な考察などは山登りの純粹性を傷けこそすれ我々には少しも必要がないといふやうな考へが有力になされて來たのである。しかしこの考へ方は私には甚しく淺薄な、功利的な、又狹い個人主義的なもののやうに思はれる。もとより山登りは行爲であつて思辨ではない。山登りの世界は山登りをすることによつて始めて開けてくるのであつて、描かざる畫家といふものが在り得ないやうに登らざる登山家といふものは在り得ない。しかしそこから登山家は考へてはなら

ないといふことも云ひ得ないし、又考へることが無駄だといふ結論も出て來ない。山登りの人生に於ける意義といふやうなことを知ることの價値は、登山に直接必要な技術の實用的な價値とは別個のものである。それは登山家としての教養の一部をなすものであつて、それの價値はそれを知ることが山登りに於て直接有用であるかどうかによつて決るものではない。ボレルはこの事をアインシュタインの理論の解說書の中で、一つの比喩を以つて語つてゐる。「建築家にとつて地球がまるいといふことは殆ど重要でない。むしろ一軒の家を建築してゐる間は、恰もすべての鉛直線が平行であるとして、卽ち地球が平坦であるとして、仕事をする事が肝要である。しかし、もし建築家が地球がまるいといふことを知らなかつたとすれば、我々の驚くのは當然であらう。」

山登りの目的は人により、又時により様々である。人はそれを單なる健康のための運動としてもやれるし、又自己の虛榮心を滿すためのみにもする。しかしまたそれを人生に於て一つの意義あるものと考へることも出來るし、人間陶冶（教養）をその主要な目的とすることも不可能ではない。事實私達は山登りを公園の散策や見世物見物とは區別して來たのである。既に山登りが私達にとつて教養としての意味をもつならば、そこから當然山登りに關する知的反省が要請されなければならないであらう。唯遠くから山を眺めてゐる人、或は自ら登ることをしないで山を論じてのみゐる人を私達は決して眞の登山家とはいはない。と同時に、唯登ることのみに沒頭して山の內面的な思索にふけらない人、或は山に關する先人の著書を通じて、山に關する廣い知識の獲得やその崇高なる精神に觸れることに努力を拂はない人も亦良き登山家とは云はれない。それはいはゆるメカニシアンに過ぎない。木村素衞氏の「我々はそれぞれの領域に全然身を以て觸れることを爲さず唯單に眺めて理解するだけの人を、決して良き教養者とも眞の教養人とも呼ばない。それは單なる物識りであり、時としては衒學者であり、輕

侮的な意味で呼ばれる場合の學者であるに過ぎない。同時に併し逆にまた、道德的に單に善良で正しき人、信仰に一途に篤くして知的反省のない人、唯作ることにのみ沒頭して美や製作に就て識見を持たない人、かかる人々をも亦我々は決して教養人とは云はない。それは善人であり、信者であり、或は工人、職人、藝人ではあり得ても、教養のある人ではあり得ない。例へば東洋の文人畫家達は單なる筆先の技巧者とみづからとを明確な意識を以て峻別してゐた。」といふ言葉はよく以上の如き教養の意味を明かにしてゐる。

このやうに正しい意味の教養とは、單に多く物を知るとか單に廣く物を知るといふ意味での知識に局限されないで、實際に身についた働きあるもの、卽ち根本的に人格と結びついた綜合的なものを指してゐる。故に教養するとは人格陶冶、人間形成のことに外ならない。私のいふ教養としての山登りといふことは、虚榮心を滿すに過ぎない身を飾るための裝飾ではなくして、人間陶冶としてのそれを意味してゐる。人間形成の手段は多いが、私達は山登りがその有力なものの一つであると信じてゐるのである。それだからこそ私達は若き日の多くの時間を惜しみなく山に打ちこんで來たのである。いふまでもなく人格の陶冶とは空氣を摑む如きものではない。頭の中でだけ考へる觀念的な抽象的な思惟ではなく、その人の專門を通じ、或はその社會生活や日常生活を通して具體的に營まれ把握され形成されて行く實踐的な行爲的な創造的な過程である。山登りを通じて人間を形成するとは、實際に山に登ることでなければならない。あらゆる困難を克服して登行する實踐的な創造的な行爲を通じてなされるものである。而も私達は唯登ることのみに沒頭するメカニシアンであることに滿足すべきではないのである。

また知的反省の閑却といふことは、今日、日本の登山大衆の登山道德の廢頽といふことにも關聯があると思は

れるが、ここでは觸れる餘裕がない。

二

現在數百乃至數千を數へる日本の登山團體はあらゆる階層を網羅してゐると思はれる。何れも登山といふことを中心にして集つてゐる團體であるが、その目的はまちまちであつて、同好の士の交友的なクラブであれば必しも難しい指導精神などといふものも必要ではないし、特別に會の目的などを考へなくとも差支ない。しかし學校の山岳部はその點特別な性質のものと考へられる。學校は本來教育の場所であり、教育を目的とする國家活動であるから、學校に屬する山岳部の如きも、同好者の單なる個人的な集りとは存在の意義を異にするのであつて、そこには何らか教育的な意義がなければならない。私は山岳部の有ちうる、また有つべき教育的意義は、山登りを通しての人格の陶冶にあると思ふ。それが山岳部の指導精神でなければならない。そこでは身體の鍛錬・技術の錬磨に伴つて、意力をはじめ人格の具體的内容をかたちづくる精神的諸力の鍛錬が期せられなければならない。それと同時に魂の德、人格的德ともいふべき協和・友愛・互助・責任・自律・服從・正直の如き精神の養成が目的とされなければならないと思ふ。ゲーテが考へたやうに、技術は人間に對して道德的教育的意味をもつてゐる。ひとは彼の技術に深く達することによつて人間としても完成されるのである。私達は技術によつて技術的德を獲得しうるが、しかし魂の德は道德的反省によらなければならないであらう。

しかし山登りを通じて人格を陶冶するといつても、私達は山を登り乍らいつも自分は人間を作るために登つてゐるのだといふやうなことを考へ乍ら登つてゐるのでは勿論ない。否、むしろ、眞の學問がさうであるやうに、

一切を忘れて山に登ることに沒頭することによつて始めて山登りの眞髓に觸れうるのであり、――それが眞の自由の境地であり、精神の解放である――又その沒我の境地に到ることが行であり、人間を作ることなのである。しかし山岳部は何故存在するかの問題に答へるためには、單に體位向上とか、友情を深めるためとかいふだけでは完全ではないと思ふ。少くとも學校の部としてはそれ以上のものがなければならないであらう。本來私達は好だから山に登るのであつて、他に何ら理由を考へる必要はないのである。しかしこの登りたいから登るといふ主體的行爲が客觀的な妥當性を以つて是認されうるのは、實に山登りといふ行爲が道德的であるからに外ならない。もし非道德的行爲であれば如何に好であらうともそれは是認さるべきではない。而もこの場合に道德的であるといふのは、他人の迷惑にならないといふやうな消極的なことではなく、より積極的の意味がなければならない。私達はその積極的な意義を人格の陶冶といふことに見出すのである。學校山岳部の對象とする山岳は、人間修行の道場たるの意義をもつものでなければならない。

かう言つたからといつて、私の部に求めるものは、人間性を無視した嚴格一點張りの、狹い努力ではない。ゆとりのある精神を無駄だといふのでもない。山登りに限らずあらゆる場合にゆとりをもつことは必要である。しかし或る意味で嚴格であることは必しもすべてにゆとりをもたないといふことではない。嚴格であつて而もゆとりを失はない境地は可能である。むしろ眞の精神的餘裕は高い意味の精神的緊張の中に於てのみ成立する。私達は精神的餘裕と精神的弛緩即ちだらしなさとを混同してはならない。又私は山岳部から總ての精神的無駄を省けといふのでもない。無駄は恐らくあらゆる場合に必要でもある。例へば私達が教養を高めるための讀書に於て、私達は思想のエッセンスともいふべき格言集のやうなものばかり讀んでゐたのではほんとうに自己の思想を豐か

にすることは出來ない。色々の本から適當な仕方で内容を選擇し滋養となる部分を消化吸收してはじめて自分のものとなるのである。山登りに於てもさうである。山に登つてゐるうちに自ら人間が創られて行くのである。しかし山登りの精髓が何であるかを私達山岳部員ははつきりと摑んでゐなければならないと思ふ。その心構へがあれば、宴會の席上で禁酒演說をやるやうな非常識もやらないと同時に、山へ酒を持ち込むやうな場所と立場を辨へない行爲もやらないであらう。山岳部にとつては山は人間修業の道場であり、學生は修學といふ人生に於ける特殊の地位にあり、從つて學生の仕事は知識・精神・身體に全體的調和を保ちながら人間として又國民としての自己完成に專念することであり、本質的に他の階級の人たちよりも嚴格な道德的規範を要請されてゐるからである。

三

しかし、山登りの最も高い境地は、他の世界に於けると同樣に、極めて自由なものでなければならない。堅苦しい道德的規範に捉はれてゐる間は、まだ眞の山登りを樂しんでゐるとは言へないであらう。恰も眞の有德者とは道を習慣的に自得した人、卽ち己の欲するところを行つて則を踰えない境地に達した人をいふのと同じである。眞に山登りを樂しむ境地は、自己と自然（山岳）とが完全に包和融合した境地であり、主體と客體、思想と行爲の完全なる統一された心境であり、單なる專門家的技術の熟達の域をも超へたところのものである。高い意味の靜觀的な態度であり、眞の人格的な自由の境地である。それは感覺的な陶醉の境地ではなく、鍛錬の後に達する透徹の精神であり、和悅の境地である。それは卽ち東洋的無の世界であり、所謂あそぶといふ境地であら

う。それは又劍道の極地といはれる無念・無想の境地、或は禪に於ける無我・無心の境地であり、哲學者のいふ絶對無の自覺的限定の立場である。ある高名な登山家の「なぜ山に登るか、好きだから登る。答は簡單である。しかし夫で充分ではあるまいか。」といふ言葉も以上の如き意味の自由の境地と解していいであらう。それが敬虔な態度を以てする數十年の登山の經驗を有する先覺者の言葉である故に、私達はそれを無責任な恣意とはとらないのである。

しかしかくの如き眞の自由の境地は誰にでも始めから與へられてゐるのではなく、又誰もが努力なしに到達しうる境地でもない。何年かを、恐らく何十年かを學問なり、藝術なり、事業なり、或は山登りなりに一途に魂を打ち込んだ生活の經驗を通して、始めてその人の前に開けてくる境地ではないであらうか。そしてその生活行動が一見衝動的であり、無目的的であるやうに見えても、そこには必ず自己の人格を向上しようとするかくされたる意志と精神とがなければならない。かかる道德的反省と努力なくしては恐らく眞の自由の境地に達することは出來ず、唯卑俗な意味に於ける心の滿足を得るのみに止まるであらう。「道德の本質は道を自得する努力の中にあり、德は道を得た喜びであると共に、道を得又保つ爲の努力でなければならない。孟子が云つたやうに、道德は美しい心を存養し、又かく求める所にある。」

だから同じ「好きだから登る」といふ言葉にしても、未だ山登りの經驗の淺い者のいふ場合と、眞に自由の境地に到達した達人の言葉との間には、その內容に格段の差のあることを知らなければならない。僅か數年の山登りの經驗しか有たない青年が、無反省に達人の言葉をそのまま自己のものとして、何等道德的反省をなさず、人格陶冶のための努力を忘ることの危險を私達は注意しずにはゐられないのである。私は學校山岳部の精神的基體

は人間陶冶に對する痛烈なる自己反省でなければならないと思ふ。

四

山登りは危險を含んでゐる。その危險は大きいともいへるし、又小さいとも云へる。經驗の深い優れた登山家でさへも屢々山での災害に遭遇してゐることからみれば山登りには大きな危險が伴ふといへるし、又山での多くの災害が技術の未熟と不注意に基くものであつて、若し經驗者によつてなされたならばそれらの多くは除け得られるものであるといふ意味では、山登りに伴ふ危險性は小さいともいへる。しかしハイキング程度の低い山歩きや、又相當の高山であつても道もあり山小屋も完備して女子供でも危險なく行かれるやうな踏み慣らされたところは別として、いやしくも若者の精神を鍛錬すべき道場たる意味をもつやうな山岳に於ける困難な登行に危險の伴ふことは必然である。勿論除け得られる危險は出來るだけ除けなければならない。未經驗者の無謀な登山を是認するのでもない。私達は僥倖による成功よりも堅實な思慮に基く退却を以つて登山の常道と考へてゐるのである。それにも拘らず私達は不可抗力的な自然の偉力から逃るべき術を有たない。かかる災害に遭遇した場合には、人はこれを運命として素直に受けいれるより外はない。のみならず人間は萬能の神ではない。神でない人間に過失のあるのは當然である。勿論過失を犯さないやうに萬全の努力は拂はなければならないが、自分だけは絶對に過失を犯さないなどとは誰しも斷言出來るものではない。してみれば山登りに於ける危險性は平地の生活に比して相當大きいと言はなければならない。

さうとすればそのやうな危險を冒してまで何故山に行くかといふことが問題となるであらう。優秀な部員を一

度に八名も失ふといふやうな遭難事件があると、その社會的反響は極めて大きい。それを大げさに興味本位に取扱ふジャーナリズムの態度の可否は別として、人間の行爲が社會的行爲である以上、それに對する責任は重いのであつて、假令それが不可抗力的な運命であつたにしても、自ら深く愼しめるところが無ければならない。しかし、學校當局は何故危險性のある登山を許可するのであるか、危險を伴ふ登山は禁止すべきではないかといふやうな一部の世論に對しては、山岳部としては、何故に危險なる登山をもなすかの正當な理由を明かにする責任があると思ふ。私達が自己の行爲に責任をもつといふのは、自分自らが行爲を選び、その結果生ずる善惡の價値評價を自分自身に引き受けることである。私達が自由意志を以つて選んだ行爲である以上、その行爲の結果に對する責任は私達自らが負はなければならない。自己の正しいと信ずる信念さへあれば、世俗の非難などには超然として構ふ必要がないといふやうなものではない。從つて私達は冒險の人生に於ける意味を明かにする必要がある。私はここに島芳夫氏の冒險の心理に關する考察を引用しよう。

「フランスの優れた思想家ギュイヨーは功利主義の人間觀の誤りを指摘して、人間の行動は純粹になる程快の爲めの打算を忘れ、却つて苦痛を進んで求めさへすると云ふ行動心理を力說してゐる。これが冒險家の心理であり、戰ふ者の心理である。冒險家は決して苦痛や困難を避けない。冒險家とは呼んで字の如く、危險を冒す人であり、そこに却つて一種の快を感ずるのである。不快や苦痛を受けて快を感ずる傾向の中には、病的なものもある。然しここで云ふ心理は健康な生命の最も昂揚した行動力を現はしてゐる。健康な生命は戰ふ生命である。生命の本質は行動であるが、行動は戰ひなくしては不可能である。而して、戰ひと冒險とは離すことは出來ぬ。戰ひは人生の困難に對してそれを克服する爲めに行はれる。困難を恐れ、冒險を恐れる人は行動の資格を缺いた人

である。行動的である程困難と戰はうとする欲求をもち、この戰ひと征服との中に大きな力の喜びを感ずるのである。行動の力は困難にぶつかることによつて發揮されるから、却つて困難を求めるのである。デカルトは快は力の快であると云つてゐる。青年が時として何等の利益もない而も危險な事柄に向ふのは、彼等がそのやうな危險を敢て冒し得る程充分に自分達は勇敢で幸福で強いと考へてそこに快を感ずるからである。「憂きことのなほこの上に積れかし限りある身の力ためさん」これこそ戰闘的な人生觀の心構へである。」

「道德生活も亦戰ひであり、冒險である。「朝に道を聞けば夕に死すとも可なり」と云つた孔子は燃えるやうな道德的情熱によつて生死の彼岸へ冒險したのである。冒險的情熱の中で最も著名なものは勇氣であるが、道德的冒險にもこれが必要である。道德的勇氣は色々の形で存在する。最も目につき易いものは愛國的犧牲心であらう。祖國の爲めに生死を賭する勇氣がなくては國家は保たれない。然し道德的勇氣は總じて私達の生命を高め、擴げる創造的行爲の中に現はれる。本當の愛國心はそのやうな行爲の一つである。道德的理想は理想であるから、それがどこまで人の力で實行出來るか分らない。然し兎も角押して見ることだ。敲かなければ開かれない。或る時に實行出來なかつたことも、次の時には實行出來る。或る日には情欲に負けても、次の日には勝つ。それは確かに理性と意志の緊張した努力である。然しそこに道德的冒險と戰ひの生活がある。」

「道德は精神の冒險だと云つたが、然しそれは決して輕率な冒險を是認するのではない。道德的冒險は高い生命の爲めに、低い生命の安全を顧みない理想的情熱に發するが、よくない冒險はその反對である。その場合の勇氣は本當の勇氣でなくして、一時の輕率なる情熱である。無謀と勇氣とはよく混同されるが、これは斷然區別せねばならぬ。又道德的冒險は、反省を輕んずるのでなく、寧ろ放縱な感情や想像を制してよく反省した上の行動で

ある。ただどんなに反省して見ても理性だけでは行動の未來は分らぬから、そこで始めて未來への冒險が必要になる。私達自身が行動的に未來へ飛び込んでゆく時、始めて未來に觸れることが出來る。」

以上はよく冒險の意味を明かにしてゐると思ふ。私達の創造的行動にはその一向きな情熱からいつもある種の危險がある。英雄でも、科學者でも、政治家でも、事業家でも、見えざる世界に出立する人々は皆創造的冒險を行ふのである。そこが自己保存欲や消極的な幸福欲だけを人間の本質とする功利主義では分らないところである。勿論世間の喝采を博すために自己の生活を滅すやうな無謀な行ひを道德的冒險とは云はない。しかし若者の山岳を慕ふ心には利害の打算を越へた純乎たるものがあるのである。

「或は登山の行其のものをヤングハスバンドが云つてゐるやうに藝術として見ることも出來よう。或はスポートに現れた國民の若い精神の發現とも見ることが出來よう。ともあれ爲さでは止むことの出來ない魂の活動であつて假令其結果が毀譽褒貶何れに終らうとも、そんな事は未事である。私等の期するところは何時も乾坤一擲の努力なのである。そして其處に興味も渾然として融合してゐる。大きな自然の中に自分を見たいのだ。而も其超越を自己の心身の鍛錬に依つて克ち得ようとするのだ。であるから若し玆に單に登山は危險であるからとて、夫れを抑止しようとするならば何時迄も君子危きに近寄らずの桃源鄉に千年の夢を見つつ打ち果つるがよい。死生の巷を往來するとか、ニイチエのやうに危險のみが偉大を齎らすと云ふことを取り次いで高唱しようとするのではないが、少くとも私等は何事に就いても頗る神經衰弱的な、直ぐに恐怖や打算にのみ依らうとする或る時代病に注意しても可いではないか。もつと精神本來の晴朗な健康さを自重して行くのに心すべきではあるまいか。」（山行）これが私達の立場である。敢へて大言壯語しようとするのではないが、今現に日本が當面してゐる新東亞建

設にしても大なる國家的冒險である。それを私達は進歩的民族にふさはしい冒險的情熱を以つて突破しようと覺悟してゐるのである。山登りといふ行爲の現れは誠に小さいが、それを眞摯なる熱情をもつてなす青年の精神は根本に於て東亞建設の理想に通ずるものがあると思ふ。過去數世紀に亘るイギリス人の驚異に値する世界的進出とアルプスに於けるあの目覺しいイギリス人の活躍とが全く無關係であつたとは考へられないのである。

私達が山岳行をなすに當つては、愼重の上にも愼重を期すべきは論を俟たない。しかし、人間が人間である以上、山登りから危險を全然無くすることは出來ないのであつて、人事を盡した後にも尙破れることのあるのを覺悟しなければ山登りは出來ないのである。私達はこの點に關する正當な理解を山に登らざる人達にも期待したいのである。

五

かく冒險は山登りの本質であるといつても、輕率な冒險や無謀な試みが許さるべきでないことは云ふ迄もない。冒險を敢てする勇氣なしには青年にとつて意義ある山登りは出來ないが、山登りの危險を出來るだけ少くするには無謀な試みは愼しまねばならない。一つの試みが無謀かどうかといふことの判斷は困難な場合が少くないが、人を無謀であることから救つてくれるものは經驗であり、それにも增して大切なのは謙虛な心である。謙虛といふことは自らへりくだる心である。他人に對し自然に對しへりくだる心である。そして自然に對して謙虛になるとは、自然の偉大さを認識すると同時に人間の力の限度を知ることに外ならない。自然を征服するためには自然に服從しなければならない。この素直な心の前にのみ自然はよくその眞の姿を顯現する。この心を失つた時

自然は飽くまで苛惜なき力を發揮する。謙虚の心はまた尊敬の念に通ずる。人を尊ふことは自らへりくだる心でもある。山登りでも自分ひとりで出來るやうになつたと思ふのは思ひ上りである。先輩の好意的忠告に耳を藉さないといふやうな態度では、眞に高い山登りの境涯には達し得ない。

「人生のおそれは、だからして、第一にへりくだりの心なのである。自分にはまだ人間といふものが分らないと思ふ心である。實際分らなくて分つたつもりでゐる人がゐるのに、それより分つてゐても分らないと思ふ心がある。その心である。ありやうは、人間といふものが分つてくれば來るほど、却つて分らないと思ふものであるらしい。」といふ谷川徹三氏の言葉はよく謙虚なる心を言ひ盡してゐると思ふ。この文章の人間といふ文字を山登りといふ文字で置きかへてみると、山登りに於ける謙虚なる心とは如何なるものかが解るであらう。吾が北大山岳部が昨冬受けた如き大きな打撃から甦生する道は、謙虚なる心を以つてする自己否定に出發することにあると思ふ。そこに始めて悲痛なる經驗が新しい發展の契機となりうるのであり、また獨りよがりの僭上からの解放があるのである。

六

最後に私は山登りといふ個人活動と現代の全體的國家觀との關係について觸れて置かうと思ふ。登山は原則として數人或はそれ以上の編隊として行はれる。それは一つの協同體であつて、そこでは隊員個々の利己的な行動は許されない。全體の目的のためには各個人の犧牲を必要とするのであつて、全體のために自己を滅することにより、より高い意味に於て自己を生かすことが出來るのである。それは恰も國家と個人との關係と同じである。

山登りの協同體的活動を通じて私達は協和・互助・友愛・團結等の諸德を磨くことが出來る。しかしこの人格の陶冶なる作用に於て、陶冶し陶冶される主體は個人である。それは自律的な自己陶冶であり、自己活動に基く自己創造である。而もその自己創造たるや、自己形成そのものを唯一の目的とするものではなく、その自己形成を通して民族的社會（國家）に貢獻するところの自己創造でなければならない。それは自己の陶冶理想が國家の國民に對する陶冶理想と完全に一致するときに於て始めて可能である。そこでは個人の行爲が完全に國民の一人としての行爲と一致してゐるのである。自己完成（敎養）それ自身が窮極の理想であるのではなくして、自己完成を通しての國家への奉仕が私達の目的でなければならない。否、有爲なる國民たることを目的とする自己完成でなければならない。そこでは、自己完成がそのまま眞の日本人となることに外ならない。ここに於て山登りといふ個人活動の國家的創造への參加が可能なのであり、そこに山登りの社會倫理的基礎があるのである。

だからして、登山形式の問題にしても、單獨登山そのものは決して排擊さるべき性質のものではなく、單獨登山を山登りの最も純粹な最高の形式と考へる考へ方が個人主義的なのである。また多人數の團體登山が時代に卽した最高のものと考へるなども甚しい思ひ違ひと云はねばならない。登山隊の人數の問題は廣い意味の技術であつて、登山の難易と相對的のものである。山登りに於て多人數の團體的訓練をするのは勿論善いことであるが、私達の目的とする山登りはそれだけが目的なのではなく、むしろそれは第二義的のものであり、事實アルプスの困難な登攀やヒマラヤの高山などでは、五十人百人の登山隊が珠數繋ぎになつて登ることなど出來るものではない。學校山岳部はよく登山の本質を認識して、淺薄な流行性を脫却すべきである。

現代の敎育は、本來自律的な自己陶冶と共に、陶冶理想をもつところの他律的な訓練——學問的・精神的・身

體的・國防的・公民的訓練等――の意義と重要性を把握したものでなければならないが、山岳部の如きもさうであつて、その冬季合宿の如きも享樂本位のものであつてはならないであらう。訓練の場所たることを自覺したものでなければならないと思ふのである。（十五・五・六）

（附記）本文はもと私の關係する北大山岳部が昨冬遭遇した不幸な經驗を機會に、かねがね私の包懷する學校山岳部に對する考を述べたものである。山登りに伴ふ地理的探檢、未踏の山岳・未知の地域の地理的開發といふことも、山登りの本質的な動機の一つであり、その方面に對する我國學校山岳部のなした功績も少くないが、その點に關してはこの小文では觸れなかつた。尙、文中英國の世界的進出云々の一句は、唯客觀的事實を述べたのみであつて他意はない。私は世にいはゆる親英論者でも反英派でもないが、日本國民の一人として英國が支配的地位を占める舊世界秩序の諸矛盾にはかねがね慾邇を禁じ得ないものである。しかし英國民が一面極めて保守的でありながら、不拔の意志と進取の氣象とを以つてよく大英帝國を建設した事實には、大戰後の獨逸國民が殆ど破滅に瀕する窮乏に堪へてよく今日の大を築いた事實と共に、おしなべて熱し易く冷め易い我が國民の撝つて以つて範とするに足るものも決して少くないことを思ふのである。兎角冷靜なる判斷の失はれ勝ちな此頃のことであるから、駄足とは思ふが誤解のないやう一言お斷りしておく次第である。

又最近我國で特に問題視されてゐる集團訓練についても、山登りに關して本文中に一寸觸れておいたが、その重要性は今更事新しく述べるまでもないのであつて、北大山岳部では創立以來毎冬百名内外の部員が、學校山岳部としては稍嚴格過ぎるかとも思はれる合宿訓練を行つて來たことを附言したい。

ミニヤ・ゴンカ山群

——主としてその探檢史に就いて——

望月達夫

一　概觀
二　一八七〇年——一九二〇年代
三　一九二九年頃
四　ロックとハイム
五　西康遠征隊（登頂）
附・ミニヤ・ゴンカ關係主要年表

一

ミニヤ・ゴンカ山群 Minya Gongka とは、支那西康省の主邑打箭爐 Tatsienlu（註）の西南、大體北緯二九度三〇分、東經一〇二度の附近に位する雄渾な山群であつて、その中には幾つかの壯大な氷河を有ち、主峯ミニヤ・ゴンカは高度實に二四、八九一呎（七、五八七米突）を算する。

此の山脈が何處から派出してゐるか、詳細に說明することは甚だ困難であるが、印度測量局發行の Himalaya Mountain and Surrounding Regions（二百五十萬分の一、一九一九年版）及び小川琢治博士監修に關はる「東亞大陸諸國疆域圖」（四百萬分の一、東方文化學院京都研究所編纂）に依れば、北部西藏から青海を貫いて走る崑崙山系の南

に連る可可稀立山脈 Koko Shili range（北緯三五度、東經八八度から九四度）が、東南に走つた山脈を巴顏喀喇山脈（北緯三四度、東經九九度）と稱し、それが北緯三三度、東經一〇一度の附近から南方に向つた一脈の隆起したものと見ることが出來よう。

勿論今日に於ても、右に述べた地域は一般に不明な箇所が多く、部分的には詳細な地圖も現はれてゐるが、全體としては既述の地圖の上で想像した結果に過ぎないものである。この點について、北黃河の上流から、南揚子江の源流一帶の地域は、まだ殆ど正確な測量がされてをらず、山脈の走向等も不明な箇所が多いことをバラードも認めてゐるのである。(Sidney Burrard, H. H. Hayden, A. M. Heron "A Sketch of the Geography and Geology of the Himalaya Mountains and Tibet" 1933. Part II, p. 134)

わが陸地測量部の東亞輿地圖や古い支那の地圖には、打箭爐の西方に大雪山山脈（或ひは大雪山脈）と記されてゐることを、木暮理太郎氏も述べられてをり（「山岳講座」第七卷、二八四―五頁）、「ゴンカ」の文字が後述する如く「雪の山」を意味するものであるから、この山脈名は至極穩當であると思はれる。併し又或る地圖には大雪山脈の位置が、それよりも遙か西方に寄つたものもあり、現に前記の疆域圖に於ては、麗江（雲南省）の西北に雪山山脈と記されてあるやうな次第で、大雪山脈を直ちにミニヤ・ゴンカの位する山脈であると斷定するには一應研究の餘地がありそうである。けれ共今後、この山脈に大雪山脈の名稱を確定するのであるならば、それは最も當を得たものであらう。

この山群の東側は打箭爐を流れる大渡河 Tung-Ho の支流ルーホー Lu-Ho を以て境とし、西側は同じく支流

ビュチウ Buchu の谷を境とし、北はほぼ北緯三〇度、南はほぼ二九度三〇分の線を以て夫々その境として、樞軸は大體南北に走つてゐる。又、ビュチウの西を流れるユーロンシイ Yulongtsi の谷は、南流して鴉礱江 Yalung Kiang に注ぐものである。

山群中に存在する主な山岳は、北からチブロンギ・ゴンカ、リュウチ・ゴンカ(ジャゼ・ゴンカ)、グロースヴナー山、レッドドメイン、グッドドメイン、ロンゲメイン、ミニヤ・ゴンカ、朱山、戴山及び主脈の東側に位するエドガー山、孫逸仙山、西側に位するニャンプ・ゴンカ等である。

一九三二年の亞米利加西康遠征隊及び一九三〇年のアーノルト・ハイム Arnold Heim の測定の結果に從つて標高順に之を示せば次の通りとなる。

(西康遠征隊)		(イタリア)	
Minya Konka	24.891 ft. (7587 m.)	Minya Gongkar	7700 m.
Mt. Sunyatsen	22.990	M. Sunyatsen	7000
Mt. Edgar	21.978	M. Edgar	6950
Riuchi Konka	21.653	Djaze Gongkar	7200 (20.789 ft.)
Mt. Chu	21.467	M. Chu	—
Mt. Grosvenor	21.188	M. Grosvenor	6940
Daddomain	{21.067 {20.850	——	

Longemain	20.856	——	
Reddomain	21.365	Reddomain	6440
Nyambö Konka	20.028	Nyambö	6250
Chiburongi Konka	19.775	Tshiburongi	5900
Nochma	18.530	——	
Mt. Sherap	18.069	——	

戴山 Mt. Tai はハイムの地圖にも、西康遠征隊の地圖にも標高の記入は無いが、おそらく二一，〇〇〇呎（六四〇〇米突）内外のものであらう。この外西康遠征隊の地圖には Peak 46 (19.727 ft.)、Peak 53 (19.810 ft.) Peak 87 (20.144 ft.) Peak 111 (21.226 ft.) 等の無名の高峯の記入がある。

山名は——Gongka (Konka) を伴ふものは大體土着のものと思惟せらるるが、其他はほぼロック Joseph Rock ハイムによる命名のもの多く、孫逸仙山は周知の通り孫文、戴山は戴季陶 Tai-Chi-tao（戴傳賢、戴天仇とも稱し國民黨中央執行委員其他要職にありし人）、朱山 Mt. Chu は朱家驊 Chu-chia-Hua（同じく中央執行委員、伯林大學出身、地質學博士）の名をとつて、又エドガー山はこの山群の先驅者なる J. Huston Edgar の名をとつて、ハイムの命名せるものであり、グロースヴナー山は當時の亞米利加地學協會長を記念して同國の探檢家ジョセフ・ロックが名附けたものである。ロンゲメイン、ダッドドメイン、レッドドメイン等も亦ロックの命名に關はるものであらう。

尙この山群に屬してゐる山ではないが、これより北方、大體東經一〇一度四〇分、北緯三〇度二〇分位の處にジャラ山 Jara と呼ばれる山のあることを爰に附言してをかう。この山は、孤立峯である爲、古くはミニヤ・ゴンカよりも高く、七千米突級の山として目されてゐたが、ハイムによれば五九三〇米突、西康遠征隊は一九、三八三呎（五九〇七米突）と測定したのであつた。

ミニヤ・ゴンカ山群に關する地圖としては、西康遠征隊のバードソル R. Burdsall 及びエモンズ A. B. Emmons が測量作圖せる "Minya Konka Region"（三十萬分の一）("Men against the Clouds" 所收、本稿にも挿入せり）及びハイムの作成した "Kartenskizze von Tatsienlu und Minya Gongkar-Gebirge"（二十七萬五千分の一）の二つが、現在入手し得る最も正確な地圖であらう。然しこれとても、細かい點ではまだまだ將來の探檢家に殘されてゐる空白部は多く、大體の概念と地形、氷河の位置等を知り得るに過ぎない。

又西康省附近の全體的な概念圖としては、既述の印度測量局發行 "Himalaya Mountain and Surrounding Regions" が先づ擧げられるが、一九一九年版は丁度地圖の右境がミニヤ・ゴンカの少し西で終つてゐるのでその記入がなく、只西康西部の地形、山勢に就いて概念を知り得る程度である。併し "Highland of Tibet and Surrounding Regions" と銘打つて發行されたその新版にはミニヤ・ゴンカが二萬四千九百呎としてその東端に記入されてゐる由である。その他印度測量局發行の地圖が二、三種ある筈であるが、不幸にしてまだ見る機會を得ない。

本邦で編纂されてゐるものとしては、同じく前記の「東亞大陸諸國疆域圖」であるが、これにはミニヤ・ゴンカと覺しき地點に貢噶山（五、三〇〇米突）の記入を見るが、若し之がミニヤ・ゴンカを意味するものであるな

らば、その標高は勿論訂正せらるべく、又打箭爐の北西に標高七、〇〇〇米突の無名峯の記入があるが、恐らくそれは往古より旅行者の注意を引いたジャラ山（沙魯里山）Jara Dzan（五九〇七米突）であり、その標高も亦修正せられねばならない。

又 "Men against the Clouds" 所收の "Tatsienlu-Yachow Region" の概念圖は中々便利なものである故本稿中にも挿入してをいた。

ミニヤ・ゴンカ山群の巨峯中、登頂されたものは主峯ミニヤ・ゴンカ只一つで、他の峯は總て未登頂である許りでなく、一九三二年以後それを目指した遠征隊あるを聞かない。

然し主脈に沿つた山々は大體西側のビュチウ谷からその支谷を採つて登り得るであらうし、エドガー山、孫逸仙山、戴山等は東側のルーホー谷からその支流なるヤンツーコー Yantsoko 乃至ハイローコー Hailoko 等の氷河を經て登路を開拓し得るやうに思はれる。西側は一般に取りつき易いやうであるが、ハイムの指摘せるやうに東側は山勢急にして、登路に採り得るは前記二氷河以外にはなく、それだけに未知未踏の分野も多分に殘されてゐるのである。

登山の時期としては、往古の旅行者達が屢々遭遇した夏季は、山々が深く雲霧にとざされてゐて、眺望は全然きかず、又八月、九月は雨が多くて適當ではない。モンスーンの時期は概ね八月下旬から九月にかけてで、それ以後十月、十一月、十二月が登山に一番向いてゐるとされてゐる。既にハイムも又西康遠征隊の人々も經驗してゐる通り、十一月、十二月の冬季は、ヒマラヤ主脈では冬の吹雪と强烈な北西風がつのる季節であるが、此の邊

の山々では降雪少くその心配は殆どないと云はれてゐる。春季はむしろ屢々降雪があり、又安定した天氣に惠まれず不適當であるとされてゐる。

以上を以て甚だ不完全乍ら、この山群の概觀を終る心算りであるが、主峯ミニヤ・ゴンカが登頂された以外には、この附近の山岳地帶には、登山の方面にも又探檢の方面にも、將來に殘された領域は甚だ多く且大きい。僅かに三千米突級の山しか持ち合はせてゐない吾々にとつては、たとへこの山群が、ヒマラヤ主脈の八千米突、七千米突級と比較してかなりの遜色があるにせよ、地理的に非常に近いと云ふ一事を以てしても吾々の遠征慾を刺戟せずにはをかないであらう。私は此の附近の山々に入り得る時代の一刻も早からんことを希望して止まないものであり、それと同時に、今の時こそその準備に不斷の努力を積まねばならないと信じてゐるものである。

（註）打箭爐は屢々最近の地圖に康定 Kang Ting と記されてゐる。が此の名稱は土着人には餘り用ひられてゐない。土着人の發音は Tatsienlu ではなく Da Chien lu であり、これは西藏語の Da r'Tse m'Do から轉化したものと云はれてゐる。"Do" は此の地方の都會名の語尾に屢々附く形であり（例へば察木多 Chamdo 盖古多 Jyekundo）、二つの川の合流點を意味するものである。

× × ×

探檢史に入る前、ミニヤ・ゴンカの山名に就いて一言してをかねばなるまい。私は本稿の統一を計る爲、原著者の引用文以外はすべて、現在最も妥當と考へられてゐる、ミニヤ・ゴンカ Minya Gongka の山名を使用した。併しこの問題に關しては未だ研究の餘地があるやうに思はれる。

此の附近の高峯に對して、土着の西藏人は一般にガンカー Gangs t'Kar と云ふ呼名を與へてゐる。ガンカーとは「雪の山」、「白い氷の山」の意味であつて、特定の山岳に名附けられた山名ではない。卽ち、この地域にはミニヤ・ゴンカの他にも土着人にガンカーと呼ばれてゐる高嶺が幾つかある譯である。

このガンカーと云ふ言葉に對してツェチェニイ Count Bela Szechenyi は Kunka クーフェル Dr. Tafel は Gungga エドガーは Gangka スティヴンス H. Stevens は Gonka ローズヴェルト T. Roosevelt は Koonka ロックは Konka ハイムは Gongkar ワード K. Ward 及びバラードは Gongka 等と綴つてゐるのであるが、要點は最初の文字GとKの差異にあることが氣附かれるであらう。その何れを是とするかは、西藏語に對して何等知識のない私の如何とも出來ぬ事柄であるが、ジェオグラフィカル・ジャーナルには Gongka がほぼ忠實な西藏音に近い綴り方であると記されてをり、Konka を採る西康遠征隊の人々も、ある場所にては屢々 Gongka と Gungka との中間音で發音されると記してゐる處から考へて、大體 Gongka が正しい綴り方であると思惟するものである。

更に常識的な推論を許されるならば、西藏語のGとKとの發音には甚だ似通つた、紛らはしい點があるやうに思はれるふしがある。例へばこれよりも更に西南方に位する巨峯にゴンカリンと呼ぶ山岳があるが、ロックは Konkaling バコ M. Bacot は Conkaling と綴るに對し、ワードは Gongkaling 或ひは Gangkaling と綴つてゐる例をみるのである。（「雲南の雪山」——日本山岳會々報第八十八號——參照）

尙 "Men against the Clouds" の八三—八五頁及び "Minya Gongkar" の七〇頁には、西藏語の綴りも現はれてゐるから、これ以上深く立入る方々はそれに就いて研究されんことを希望する。

次に山名の前半部であるミニヤ Minya とボー Bo に就いて述べやう。始めて此の山が記述に表はれた時は、Bo Kunka であり、Minya Gongka の形が表はれたのは一九二九年の頃であつた。Minya とは Minyag から轉化した言葉であつて、一説に依ればそれは唐古特 Tangut と共に、古代北東西藏を占めてゐた二つの王國であつたと云ふ。そして今日でもこの附近の住民は Minyag 種族と云はれ、それは又土地の名稱としても用ひられることがあるらしい。

それ故に、此の地方に存在する幾つかのゴンカ Gongka 即ち「雪嶺」の中、特に傑出した一岳に對してこの地方の山々を代表するミニヤのゴンカなる山名を與へたことは、當然の成り行きであらう。南方から旅したステヴンスやロックの連れてゐた西藏案内人が、このゴンカを指し示して、ミニヤのゴンカであると稱したのは、決して怪しむに足らない。この様にしてミニヤ・ゴンカの山名は世の中に傳へられてきた。

一方、古く記錄されたボー Bo は如何と云ふに、この言葉は元來 Bang Gangs t'Kar の最初の文字から轉化されたと解かれてゐるが、この綴り方は今日でも一部には認められてゐる。即ち一九三一年ゴンカ僧院 Gongka Gomba に滯在中、エドガーは其處の僧侶に、ミニヤ・ゴンカの正しい山名を尋ねた處、その僧侶は明瞭に "Bang Gangs t'Kar" と答へ、これは又此處から三十五哩南に離れた、鴉礮江畔の主僧院に於ても同樣に用ひられてゐると附け加へたのである。

此の點に就いては未だ疑問の節が殘るのであるが、先づ以上をもつて、Minya を採用することは概して穩當のことと思ふし、從つて又この山の名稱に對してミニヤ・ゴンカ Minya Gongka を用ひる所以もほゞ明らかとなつたことゝ思ふ。

二

ミニヤ・ゴンカの存在が、探檢家、旅行家乃至は地理學者の間に興味ある問題を投じたのは、それ程古いことではない。勿論東部西藏及び支那西康省の多くの雪嶺は、打箭爐と拉薩とを結ぶ交易路の開鑿と同時に、許多の峠から望見せられたに違ひなからう。然し其等の雪嶺が、稍科學的に歐洲人に取扱はれたのは、十九世紀の後半に到つてからのことであつた。卽ち一八七〇年代に、數年間打箭爐に滯在してゐた、佛蘭西のジェスイット敎徒の一團が、傳道の餘暇に此の地方の山岳や峠に關して、相當詳細な又正確な地圖を作成してゐたことが知られてゐる。(二)然しこの山群の高度、位置、山脈の方向等が具體的に問題となつたのは今世紀に入つてからのことであらう。

殊に一九二九年、雲南、西康、四川方面に冒險旅行を試みたローズヴェルト Theodore and Kermit Roosevelts が、その著 "Trailing the Giant Panda" に挿入した地圖に、Mount Koonka 30,000 ft.? と記してから、高度に於て斷然エヴェレストを凌ぐこの山に、世の探檢家、地理學者達の注意が向けられたことは、當時のジェオグラフィカル・ジャーナルを繙けば一目瞭然たるものがある。(三)

今日、ミニヤ・ゴンカ山群の古い歷史を考へるに當つては、當然過去半世紀に亙る此の地域の探檢記及び旅行記を繙かねばならないのであるが、簡單に入手し得る書物も殆ど稀な折柄、右のジェオグラフィカル・ジャーナルに揭載された「打箭爐を繞る山々」なる一文は、この山群の過去に就いても相當詳細に亙つて述べられてゐるので、主としてこれに從つて初期の歷史を述べていかうと思ふ。

（註一）　拉薩と打箭爐とを結ぶ交易路が何時の時代から開拓されてゐたか詳細に調べる餘裕はなかつた。唯次のことを述べてをかう。

拉薩と打箭爐を結ぶ往古の公路は、ホコウ Hokow 裏塘、巴塘、察木多を經るもので、その間には高峻な峠が在り難路である。今日拉薩へ到る交易路はもつと北西を通るもので、ダオ Dawo 甘孜、蓋古多 Jyekundo を結ぶものであり、此處で青海からの徑路と合してゐる。（"Men against the Clouds" p. 47）

これ等の交易路は、支那の絹を歐洲にもたらした新疆省の天山南路が「絹路」"silk road" として知られてゐた如く、支那の茶を西藏へもたらした「茶路」"tea road" として知られてゐたのである。

尙後述オリバー・コールスの記述を參照。

（註二）　American Alpine Journal. Vol. II.No. 1. 1933. p. 2.

（註三）　"The Mountain about Tatsienlu" (G. J.Vol. LXXV. No. 4. pp. 345—352).

J. H. Edgar "Note on the Mountains about Tatsienlu" (G. J. Vol. LXXXII. No.3. pp. 264—267).

東部西藏を探檢した歐洲人で、最も早く此の地域の山岳を稍正確に描寫してゐるのは、一八七七年西康、雲南の山岳地帶を旅行したギル Captain William Gill であらう。ジャラ Jara 及びリュウ・チン Ruh-ching の二山岳に就いて彼は次の様に述べてゐる。

「一八七七年八月、打箭爐から南へ向け出發」

……右手にはリュウ・チンの雪嶺が陽光に輝き、南東には鹿の子斑らの殘雪をもつた一山が聳えて、その雄渾な頂稜には雲霧が去來してゐた。（"River of Golden Sand" 1880, Vol. ii, p. 119).

「チェットオ・シャン（折多山）Cheh-toh shan 峠（クーパーの云ふ Jeddo）から西進」

その朝は麗はしく明け離れていつた。大氣の中にはえも云はれぬ和やかな氣分が流れてゐた。谷の下方を眺めると、そこ

には一連の雪山の壯麗な姿があり、その山襞は昇る朝陽に輝き出され、そしてその氷と雪の燦爛たるピナクルは、まるでキラ〳〵する光の點の樣に輝いてゐた。(p. 121)

「更に巴塘 Batang に向け西進を續く」

吾々が達した最初の稜線は西藏語でカ・ヂ・ラ Ka-ji-La 支那語でコ・エル・シ・シャン Ko-Erh-Shi-Shan と呼ばれ、海拔一四、四五四呎を算する。その頂に達した時の眺望は全く無類であつた。遙々辿つて來た方を振り返へると、重疊たる山波は足下に橫はり、その窮まる處最も秀麗な雪領が聳え立つて、その一峯は隣峯を拔きん出ること四千乃至五千呎にも及んでゐる。それは正に莊嚴そのものの山岳であり、此處から遠望すると殆ど垂直に見える。その西藏名はジャ・ラ（山の王）と云ひ、かくもその名に相應しい山を未だ知らない。そして又眼前に展開された、この雄渾な雪の萬岳のやうな素晴らしい光景を、私は未だ曾て恣にしたことはなかつた。この無比なる景觀を後にすることは、私にとつて實に苦痛でもあつた。(p. 133)

以上に依つても判る通り、ギルはミニヤ・ゴンカの本體には觸れてゐない。彼は唯この山群北端の一峯リュウチン（ロックに依るリュウチ・コンカ Riuchi Konka 一二、六五三呎）と、打箭爐の北西に位するジャラ（一九、三八三呎）に言及してゐるだけである。

ミニヤ・ゴンカの山名が、ボークンカ Bokunka と云ふ呼び名を以て、始めて世に表はれたのは、ギルに次いで此の地方に入つたツェチェニイ Count Bela Szechenyi の書物に依つてであらう。一八七七年より八〇年に亙つて西部支那を探檢したツェチェニイの遠征隊が、打箭爐近傍にやつて來たのは一八七九年であり、彼は北方三十五哩のドソンゴ Dsongo 若しくはキン・クヮン・チャイ Yin Kwan Chai からこの山を觀察して、その高度

を七、六〇〇米突(二四、九三六呎)と算定した。

その報告書は一八九〇——九七年の間に三巻の書物としてハンガリイで出版され、次いで獨逸語に飜譯された。十五版の行程圖と許多のスケッチを挿入せるこの書物は、最近迄此の地域に關しての最も組織的な報告書となつてゐた。又この遠征の測量は專らクライトナー Lieutenant G. Kreitner によつて爲され、彼はその測量の困難であつたこと、爲されたのは僅かに原始的な方法に依つてであつたことを述べてゐる。又右の書物には次の如き記述がなされてゐる——

タル・クジョ Tar-Kjo 谿谷の南及び東には鋭峻顯著な高山が在り、その主脈は東西に走つて、高度六千米突以上に達してゐる。その最も高い峯からは長さ七粁にも達する大氷河が流れ出、又その鋸齒狀の岩峯や深い谿谷には特に心を引き附けられた。其處には小さな氷河が無數に存在してゐるやうである。主脈の雪に覆はれた部分は、核心たるボークンカ Bokunka から東の方打箭爐の附近迄、六五粁乃至七〇粁も蜿蜒と續つてゐる。又この山の上部は全くの岩場から成り、支脈は腐植土の薄い層に包まれ、疎に灌木が生えてゐるやうである。打箭爐から折多 Tscheto の間では草地を見ることが殆どない。打箭爐の西方山脈はそれ程急峻ではなく、タル・クジョ谷近くの山巓は高度四千五百米突乃至五千五百米突に達してゐる。路は折多から北西の谷沿ひに上り、それ程の困難はなくて四時間の後に、四四九九米突のジェ・ラ Dje La 卽ち鴉礱江 Yalong kiang と大渡河 Ta'u ho 間の分水嶺に立つことが出來る。峠の頂近く迄谷の兩側(傾斜約二五—四五度)には灌木が密生し、上部百米突位は草地である。ジェ・ラの北には、巨大なむき出しの壁の樣な折多山の岩峯が聳え、その稜上の鞍部は多量の雪に覆はれてゐる。その最高峯はこの峠の北西、約三十粁に在り、主脈の上方に一千米突も拔きん出てゐて、七、八〇〇米突の驚異的な高度を示してゐる。それはデシャラ Dschara 卽ち「山岳の王」と稱されてゐる。數日後私は、ドルカ・ラ Dorka La の峠からこの壯大な山脈を支配する第二の高峯を、更に北方三十粁の地

點に望見することが出來た。この山は支那の行政區劃の境界を指示してゐるものの樣に思はれる。そして之等二岳は相共に燦爛たる白雪を冠り、鋭い圓錐形の山である。

ジェ・ラの南には岩尾根が怒濤の樣に擴がり、その高度は次第に增して、果ては岩海に穿たれ、絶壁に取卷れた荒涼たるクンカ山群 Kunka に盛り上つてゐる。そして雄渾な七六〇〇米突の岩峯なるボークンカ Bokunka がその支配者である。その絶巓は、半月の如く西から北を迂廻して東に走るこの纖細つた雪山脈の上方へ、約千三百米突も躍り出てゐる。しかもこの連嶺は更に遠く迄蜿蜒と續き、高度は幾分低下するにしても、その灰色の岩峯はことごとく雪嶺上に亂立して見える。

(Die wissenschaftlichen Ergebnisse der Reise des Grafen Béla Széchenyi in Ostasien 1877—1880, Wien, 1893—98, Vol. I, p. 265—6)

この遠征隊の一員であつた地質學者ロツイ教授 Prof. de Loczy は、ボークンカに就いて次のやうに述べてゐる。

ドソンゴ Dson-go の部落は、廣々とした谷に在る……打ち開けた谷の南には、高峻な圓錐形の山が、まるでマッターホーンを思はせるやうに聳え、その形から判斷するに、それは花崗岩から成つてゐる。それを取り捲く平坦な山々は、ドソンゴ近くの同じ樣な形の山々と等しく、粘土及び砂岩から成つてゐる樣に思へる。この一本柱の樣に聳える岩峯はボークンカと呼ばれ、その急峻な斜面には殆ど雪を殘してゐない。ドソンゴの谷から東北東に在る雪の山脈、卽ちクンカ山群は、片麻岩の樣に見える。三角形をなせる打箭爐の山群は、カシ・ラ Kaschi La からその全區域を見渡すことが出來、吾々は其の構造及びその岩質までも、かなり遠方から充分見極めることが出來た。更に北東に當つては、視界を占めてデシャラの片麻花崗岩の山塊が蟠踞してゐる。(Loczy, "Geological results," Vol. I, pp. 703—05)

印度測量局の探檢家 A-K（キシェン・シン Kishen Singh）がこの地域を測量しつつ歩いたのも、矢張り一八八二年の頃であらう。（「山岳第三十四年第一號」一七六―七頁及び一八一頁の〔註・三十一〕を參照）

ジャラ及びクンカの二岳に與へられた七八〇〇米突及び七六〇〇米突と云ふ高度は、吾々の見出し得る範圍に於て、一九三〇年迄に公表された唯一の測定された高度であつた。又この二つの高度は明らかに "Map of China . . . to illustrate the author's History of Botanical Discoveries in China, 1896." 中でブレットシュナイダー E. Bretschneider の採用した高度の典據となつてゐる。彼はその中で、ダボ峠 Dabo の南、打箭爐の北々西三十哩の地點にある一山を二五、五九二呎、又打箭爐の南西二五哩の地點にある一山を二四、九〇〇呎と記してゐる。然し一九〇〇年刊行の「完全に改訂された第二版」の地圖に於て、ブレットシュナイダーは前者の高度を落してゐるし、後者の高度は、共後版を重ねるに連れて脫落されていつた。恰も一九二二年版の印度測量局の百萬分の一、「嘉定府」Kiatingfu の圖幅と同じ樣に。

共後打箭爐を通過した旅行家は數指に止まらない。或る者は溪谷から溪谷へ越す際に通過した峠の頂で好晴に惠まれ、雪嶺に關して貴重な記述をなし、又或る者は天候に惠まれず、從つて山々のことには全く觸れてゐない。次に述べるものは、その中でも閑却し能はざるものであらう。

一八八九年北西方タイリン Tailing から來たロックヒル W. W. Rockhill は述べてゐる――

> 此の谷の東側には急峻な山々が聳えて、その頂は深々と雪の衣を纏ひ、一際傑出したジャ・ラ・リ Jara li の尨大な山塊は、下方數千呎も擴がる雪と氷の床から急激に跳り上つてゐる。

ジャ・ラ・リの山塊は三つの峯に分れ、その最も高きは約一六、五〇〇呎に達してゐる。そしてその南走せる山脈はジェトー・ラ（折多）Jeto La へ續いてゐる。その東側には、チェ・チュウ Ché ch'u や吾々の辿る可き途が在る。又この地方はギロン Girong と云はれてゐる。ジャ・ラ・リと云ふ山名にはギルが教ふる様な意味があるのではなく、それは非常に遠方から支那の土地を示す處の、「支那のホーン」(Horn of China) と云ふ意味であると私は考へる。或はチャラリ Chalari 卽ち「打箭爐の山」と云ふ意味であらう。(W. W. Rockhill, "The Land of the Lamas" 1891, pp. 238—9)

東方、ヒュアリンピン Hualinping から來たジョンストン R. F. Johnstone は述べてゐる——

打箭爐への三日間の旅路では、視界に入る風光は洵に雄渾壯麗であつた。ヒュアリンピンを去つてから、私を迎へて呉れた山々の風景程に素晴らしい眺めは、今迄餘り經驗したことがなかつた。光り輝く雪、紺青の蒼穹、ほの暗き峽谷、之等の一切は、何と形容してよいか解らない様な繪畫を繰り擴げてゐる。(P. 123)

だが之等の明媚な風光も雲に覆はれ、或ひは雨や霧に鎖されてゐた時があつたであらう。そして旅行者の中には一人ならず之等の驚異的な眺望には殆ど接することなく、この地方を通過して了つた者もあつたに違ひない。(P. 124)

タプエンパ Ta P'eng Pa を過ぎると長い登り路となり、次いで短い急な下りとなつて、木橋で溪流を渡るやうになる。此處から南西に當つて、雪嶺の莊嚴な眺望を得ることが出來た。(P. 127)

打箭爐と云ふのは、山に取圍まれた、細長い小さな都であつた。之等の山々は一年中雪に覆はれ、その幾つかは非常に高峻でもある。ブレットシュナイダーの地圖に依れば、その一つは二五、五九二呎、又今一つは二四、九〇〇呎もあると云はれてゐる。(P. 129)

折多 Ché-to からは登り路になるが、餘り急ではなく、せばまつた谷間を、流れの左岸沿ひに進む。晝近く吾々は深雪の中を難澁して歩を運び、午過ぎ海抜一七、四〇〇呎を算するチェ・リ・ラ Ché Ri La の頂に達した。峠は二つの頂をもち、その間には長い谿谷が在つて曾つては氷河の床であつた様に思はれた。吾々が達したのは高い方の頂であつた。北

東には、更に數千呎も高い巨岳が亂立し、又南方及び南西には視界の屆く限り、無數の谿谷に刻まれた山々が、大波の如くうねつてゐるのであつた。(R. F. Johnstone, "From Peking to Mandalay" 1908, p. 155).

東方クウェイユン Kweiyung から來たウイルスン E. H. Wilson は述べてゐる——

稀に見る快晴に惠まれ、峠の頂からの眺望は私の熱狂的な夢を遙かに凌駕してゐた。それは私が今迄に見た如何なる景色よりも飛び拔けて素晴らしいものであり、私の筆舌を以てしては到底それを充分に描寫することが出來ない。吾々の眼前、少し右手に寄つて、萬年雪に輝く尨大な山塊が橫はり、その高度は確に二二、〇〇〇呎を越えるものに違ひない。雪や氷河の下方には、岩石や堆石の大群が見られた。更に遙か彼方、打箭爐の周圍には萬年雪の巨大な山群が蟠踞し、近く峠の北西には、同じやうに雪に鎖された山々が在つた。遙々來し方を振りかへると、そこには急峻な山脈に圍れた峽谷があり、その峯々は全て雪を冠つてゐるが、大體に於て雪線には達してゐない樣である。(P. 200)

谷の兩側をなす山脈は、その最も高い箇所に於て明らかに雪線を拔いてゐる。その低い面は、草、矮小な針葉樹、灌木等に覆はれてゐる。(P. 201)

麗はしく晴れ上つた日、吾々は打箭爐を圍繞する雪山や、其の都會の東南東迄續く高峻な山脈の壯大な光景に接することが出來た。(E. H. Wilson, "A Naturalist in Western China." 1913, p. 202).

一九〇七年四月——五月に、甘孜 Kanze から南進してきたターフェル Dr. Tafel は述べてゐる——

ヘカ峠 Heka pass を越へて、ダオ Dawo から打箭爐へ通ふ二本の道がある。私の辿つた西方の路はデブリが散在し多くの小流が橫切つてゐるが、大體四千米突乃至四千二百五十米突の高度を有つ臺地を行く。天氣淸朗にして、吾々は二日間、左手にはデシャラ・レ Dschara re (Zarsun) 及びハイ・ツェ・シャン Hai tse schan 山群の雄渾な景觀を眺めることが出來た。その主峯は路上から約二千米突も聳立してゐる。遙か南には、六千米突以上のボーグンガ Bogungga の

聖山が聳え、又西の方裏塘 Li-tang へかけては四千米突の高度を有つ草原（ステップ）が擴つてゐる。此の方角には特に注意を引くやうな山々は外にはない。茫漠たる草地が續き、そこには無數の犛牛が草をはんでゐる。こゝが卽ちミニヤー Minyag の地方である。(Dr. Tafel "Meine Tibetreise" Vol. 2, p. 200).

打箭爐に二年も滯在してゐたオリバー・コールス Oliver Coales は述べてゐる——

私が約二年間滯在してゐた打箭爐と云ふ邊疆の都會は、一つの關門であつて、此處から西部支那の茶や絹が西藏へ齎らされる。氷河に鎧はれた急峻な山脈の取卷くこの狹い谷間に、拉薩と支那とを結ぶ二つの主要路が通つてゐる。公路は巴塘 Batang を通り、キャラヴァン道路は蓋古多 Jyekundo を經てゐる。(P. 231)

この路の高所からは打箭爐東南方の壯大な山岳や氷河を見ることが出來、その最も高い峯々は一七、〇〇〇呎以上にも達してゐる……

その峠の直下で、吾々は巴塘への主要路から分れ、北西に進路を採つて、その方向に走る荒涼たる山脈の基部へと堆石の上を登つていつた。その盡くる處には、雪の帽子を冠つた美しい山があり、西藏人はジャラ・リ Zhara Ri と呼んでゐる（支那名はハイ・ツウ・シャン Hai-tzu Shan 卽ち「湖水の山」。その基部には幾つかの小さな湖があり、その一つは氷河からの瀑布によつて生じた、美しい綠色の湖である。(Oliver Coales, "Eastern Tibet," G. J. Vol. 53, April 1919, p. 233)

タイクマーン Eric Teichman は述べてゐる——

カム（康）Kam に於ける今一つの顯著な山岳は、蓋古多（ジェクンドォ）から打箭爐に至る主要路の右手に、それと平行して走つてゐる巨大な山脈である。それは今迄見た中で一番大きな障壁であつた。その山脈はジェクンドォの南方で、揚子江とメーコン河（瀾滄江）源流の分水嶺をなしてゐて、ジェクンドォから察木多（チャムドォ）（昌都）Chamdo に通ふ路は、この山脈をシュン・ラ

Shung La と呼ぶ高い峠で越えてゐる。この山脈は東南に進み、チュンコール・ゴンバ Chunkor Gomba (Tengko) の下で揚子江の峽谷にたち切られ、更に甘孜 Kantze の下方に延びて揚子江、鴉礱江間の分水嶺となつてゐる。此の方面ではゾオチェン・ゴンバ Dzogchen Gomba の背後に非常に高い山や氷河を有し、又その下方をデ・ゲ De-ge に至る主要路がトロ・ラ Tro La を越えて通つてゐる。更に下ると莊嚴な雪嶺が現はれ、それはロンバッツア Rongbatsa から甘孜下方に至る鴉礱平原の南側を走つてゐて、この附近にはベユウ Beyü やデ・ゲの南方に通ふ路がツェンギュ・ラ Tsengu La 及びヒュン・ラ Hön La を越へ、又ニャロン（里郎）Nyarong に通ずる路には更に高い一峠がある。甘孜の下方で、この山脈は鴉礱の峽谷にたち切られ、ここにニャロンの聖山なるカワロリイ Kawalori と呼ぶ雪峯が聳立してゐる。此處からこの山脈は打箭爐の南東方に連續して、支那と西藏の兩住民の明瞭な人種學的境界線となつてゐる。この山脈はここで打箭爐の河谷により二分され、又この都の兩側には高い雪峯が存在する。打箭爐から更に南に延びて、幾つかの巨峯を聳立せしめつつ、雲南の境界に達してゐる。私は、この巨大な山脈こそ拉薩の北なる唐拉山脈 Dang La の東南方に蜿蜒と連つたものであり、その故にこそ西藏山系の主要なる一脈をなしてゐるものと思ふ。

デ・ゲ・ゴンチェン De-ge Gonchen 及び巴塘間の揚子江の兩側には幾つかの高峯があり、殊に巴塘の直ぐ東にも巨峯を見る。然し私はまだこの附近の山脈の走向や連結について明確に說明することは出來ない。

カムの山々の高度が近い將來に於て、科學的測量により確定されることは殊に望ましいことである。其の結果は、おそらく非常に高い山々の存在が明らかにされるであらう。最も高い山群は、ゾチェン・ゴンバの背後にあるもの（別言せばベユウ近くのミゾ・ラ Mizo La の北）、甘孜下方の鴉礱江近くにあるカワロリイ、察木多と阿墩 Atuntze と同緯度間のメーコン・サルウィン分水嶺上の山々、巴塘東方の山々、打箭爐の北と南の山々等であると私は確信するものである。(Eric Teichman, "Journeys through Kam," G. J., Vol. 59, January 1922).

プラット A. E. Pratt はその "The Snows of Tibet" 1892 中で、ワシュウ Wassu から打箭爐へ赴く途上、

「許多の山谷の奥に雪を冠つた山々を望見した」こと及び打箭爐の北方では雪線は約一六、〇〇〇呎であることを指摘してゐる。

ルジャンドル A.F. Legendre は La Géographie, 15 Dec. 1911 の地圖の中で峠の高度を記してはゐるが、山頂については殆ど書いてゐないし、勿論その山名高度等に觸れてゐない。アムンゼン Edward Amundsen も亦打箭爐から南々西に旅した折、豐富な針葉樹林に覆はれた山脈につき語つてゐるが（G. J. Vol. 15. p. 620）、何等峻峯については述べてゐない。

デヴィス Major H. R. Davies はギ・ラ Gi La を越えてチェ・トー Che-to に來り、「綠の峽谷を下つて、高峻な山々に圍まれた谷間に在る打箭爐に到つた」が、彼の書物及び地圖（"Yunnan, the Link between India and China" 1909）の何處にも何等高峯のことは書いてない。

其後ミニヤ・ゴンカを觀察した者は、多年打箭爐に滯在した支那內陸教會の宣教師エドガー J. H. Edgar であつた。彼は一九二三年キンカンチャイからこの山をスケッチに收め、その記述にはガンカ Gangka と云ふ山名を與へてゐる。

彼は又一九二九年にも此の山を觀察し、一九三一年には、ゴンカ僧院を訪れて、その山名に就き研究をなしてゐる。

III

以上長々と種々な探檢家、旅行家の書いたものの中から拔萃を抄錄したが、一九二〇年代迄には、ミニヤ・ゴ

ンカ山群に關して詳細に說明し得た者は殆ど皆無であつた。勿論西部支那の此の地域には、大ヒマラヤの蜿蜒東漸した分脈が猶餘勢を弱めず、その中には六千米突或は七千米突に近い峻峯が許多存在してゐると云ふことは、以上の記述から推しても疑ふ可からざる事實と考へられてゐた。然し當時に於ける高地亞細亞を目指した探檢家乃至登山家の注意は殆ど總て、ヒマラヤ及びカラコラムに集中せられ、又其處に於ては既に純粹な登山遠征も屢屢敢行されてゐたので、西歐からみればヒマラヤよりも遙かに遠ざかり、交通の極度に不便な、且はヒマラヤの巨峯と比較してかなり遜色ある、この西部支那の山々に關心を持つ者の少なかつたことは、むしろ當然の事情であつたと思はれる。

ところが一九二九年の旅行の結果、ローズヴェルトがミニヤ・ゴンカの標高を三〇、〇〇〇呎？ と記した事實は前にも述べた通り果然斯界の識者の注目を引いた。もともとローズヴェルトの旅行は何等科學的な遠征ではなく、むしろ興味本位なものではあつたが、その記述は一時忘れかけてゐた西部支那の山岳に、新らしい關心を與へしめる一つの契機ともなつたのである。

ローズヴェルトは次のやうに記してゐる——

> 或る朝まだき、吾々は甞めて天を摩して聳立する白雪の、神祕的なクーンカ Mount Koonka の雄姿に接した。……この豪宏たる山岳の高度は未だ知られてゐない。然しそれは三〇、〇〇〇呎よりも高く聳え、世界最高の山岳であると主張する人々が相當にある。(Roosevelt, Theodore and Kermit: "Trailing the Giant Panda" 1929, p. 129).

ローズヴェルト遠征隊の一員であつたスティヴンス Herbert Stevens は歸途採集旅行をやつた爲、ローズヴ

エルト達より數日間おくれて、打箭爐にやつてきた。彼は幸ひにも例外的な好晴に惠まれ、近傍の峠から、附近の雪嶺の貴重なスケッチをえがくことが出來た。之等の山々は明らかにその隣峯から數千呎も高く拔ん出て、萬年雪や氷に包まれてゐる。乍然スティヴンスは殘念にも何等の測量をやつてをらず、その故に山の正確な高度に對して少しも光明を投じては呉れない。（スティヴンスの觀察の結果は後に述べやうと思ふ。）

今日西藏東南部及びアッサム・ヒマラヤの權威であり、嘗て打箭爐の周圍を探檢したキングドン・ワード Kingdon Ward は、一九二四年の昔にミニヤ・ゴンカと覺しき山岳に對して次のやうに述べてゐる。

ペエマ・シャン Paima Shan（譯註・雲南の山）から東北方遙か彼方には、ピラミッド型の巨大な雪嶺が望見された。それは揚子江を越えた東側、四川省に在るものである。その遠望から判斷した處に依ると、この山はカカルポ Kakarpo（二二、〇〇〇呎）よりも遙かに雄渾なるものに違ひないと思ふ。（K. Ward：“Snow Mountains of Yunnan”, G. J. Vol. 64. No. 3, 1924. 拙譯「雲南の雪山」日本山岳會々報第八十八號所收。）

彼は又ローズヴェルトの指摘したミニヤ・ゴンカの高度に關しては、その豐富な經驗を援用して次のやうな見解を發表してゐる。彼の推定したミニヤ・ゴンカの高度は、後年の測定と概ね等しいものでもあつた。

私は打箭爐を繞る雪山の問題に幾分立入つてみたいと思ふ。最初にお斷りしてをかねばならないことは、この問題に關しては何等正確な資料が無いのであるから、總て推定から出發して、その近傍の外觀から結論を引き出さねばならないことである。然し私は讀者諸氏と雖も、この地方に第二のエヴェレストを發見するの可能性が甚だ少ないことを想定しうる。私が强張したいのはこの點である。二、三の旅行家達は打箭爐を繞る山々の高度が非常に高いことを指摘してはゐるが、

最も著名なかの雪嶺の出現が餘りにも突發的であることを深く注意しなくてはならない。又四川の平野から觀察されたそれ等の高度が、甚だ誇張されたものであることにも氣を附けなくてはならない。然も打箭爐南方の山々の中、少しでも測定されたものは殆ど無いのである。デヴィスは高度一七、五〇〇呎を下る一、二の峯を示し、ルジャンドルは六、〇〇〇米突を算する一、二の峯を數ふるのみである。

扨此の地方の雪線は、嘗て私が木裏 Muli 近傍で經驗した處に依れば一七、五〇〇呎、少なくも一七、〇〇〇呎である。ウイルスンは「雪線は一七、五〇〇呎より低きには達し得ない」と明言し、又、一二、〇〇〇呎乃至一七、五〇〇呎の多くの峠を越えたジョンストンは、「その幾つかは萬年雪の線を超えてゐた」と云つてゐる。假りにこれ等の山々の平均高度を二〇、〇〇〇呎とするならば、或る有利な地點からの雪嶺の眺望は、洵に素晴らしいものなることは想像に難くない。ギルはその景觀を敍するに美詞麗句を連ねてはゐるが、何等簡單な測定さへも行つてゐない。彼の注意は主に打箭爐の北に集中され、ジャラ Ja-ra (Ja-ri?) と呼ばれる山はその隣峯を拔いて四千乃至五千呎も高く聳えてゐると云つてゐる。彼はその山を三十哩遠方の一四、四五四呎の地點から見たのであつた。如何なる登山家の眼にも、隣峯から五千呎も高く聳ゆる山は相當に注意を惹く對象物であらう。ナムチャ・バルワ Namcha Barwa を北からみると、周圍の峯々の上にほぼ四千呎も高く拔ん出て、恰も山家の屋根を睥睨した教會の塔のやうに見える。カカァルポ Ka-kar-po (Kagurpu) はおそらくその隣峯より二千呎は高いであらう。私はその高度を二二、〇〇〇呎もどうかと思つてゐるが、グレゴリイ J. W. Gregory は二四、〇〇〇呎と推定してゐる。さて、打箭爐を取り捲く山々の高度は約二〇、〇〇〇呎と推定してほぼ誤りはないと思ふが、然らば其處に二五、〇〇〇呎を算する一峯を想像すると、正に驚異的な光景となるであらう。その七、〇〇〇呎以上が雪に包まれてをり、氷河は一五、〇〇〇乃至一六、〇〇〇呎の低きに下つてゐる。卽ち氷河は少なくも雪線下二千呎迄垂下してゐるものとみて良い。

右の故に打箭爐近くにエヴェレスト級の山岳が存在することは、私にはどうしても首肯し得ぬ處である。若しそんなに

も高い山が存在してゐるならば、曾ての旅行家達は少しなりともそのことを述べてゐる筈である。だが然し、この附近に暫く滞在したプラットは雪嶺に關しては殆ど話つてゐないし、クーパー Cooper もウィルスンもデヴィスも、殆ど述べてゐない。かくてミニヤ・ゴンカ Minya Gongka の高度は二五、〇〇〇呎を超ゆるものではないと、主張するものである。

又同じ時分に此處を訪れたゴルドン C. B. Stavely Gordon は、ミニヤ・ゴンカの高度に關聯して次のやうに述べてゐる。

昨年（一九二九年？）の十月、私はキャラバン・ルートに從つて雅州 Yachow からチインチ Ch'ing Chi 富林 Fulin ユウシ Yeuhsi リュクゥ Luku を經てニィンユァン Ningyuan に旅をした。チインチの眞北で高度約一〇、〇〇〇呎の大相嶺 Ta Hsiang Ling の峠を越えた。その時は天氣が惡く視界は狹かつた。打箭爐の南や私のルートの西方に當る山々の高度は大相嶺よりも五千呎は高く、ほぼ一五、〇〇〇乃至一六、〇〇〇呎位であらう。之等の山々は總て北西より南西に展開する孤線の上に見られた。この峠の南西に當つて顯著な一山岳が、附近の一五、〇〇〇呎級から獨り躍り出て、それ等よりも約四、五千呎は高く聳えてゐるやうに思へたが、その絶頂は隱れてゐた。この山岳は印度測量局の地圖（Kiatingfu 百萬分の一）によれば、大相嶺の西南約四十五哩の地點にツメイ Tzumei と記されてゐるものに相當する。ユウシとリュクゥの間にある小相嶺 Hsiao Hsiang Ling（高度約九〇〇〇呎）から右の山を見ようとしたが、濃霧の爲失敗して了つた。大相嶺からの寫眞も視界の狹かつたせいか、遠方の雪は少しも寫つてゐなかつた。以上がこの附近の山について私の說明し得る總てである。私は、嘉定 Kiating に於けるアメリカン・バプティスト・ミッションのラブグレン L. A. Lovegren（彼は又優れた地理學者であり、旅行家でもあつた）及び雅州の同ミッションのクルック Dr. R. L. Crook の兩氏から一九二八年の夏、成都大學の或るアメリカ人の一隊が、此の地方の最高峯と信じられてゐるツメイ・シャンの測量と觀察とに約六週間を費したと云ふ話を聞いた。そしてその結果によるとツメイは二八、〇〇〇呎以上、おそらくは二九、〇

〇〇呎以上であると云はれてゐる。然しその測量の成果は、更に觀察研究を必要とするが故に未だ公刊されてゐない。

（註）爰にツメイ山 Tzumei（又は Tseme）に就いて記してをかねばならない。元來之はミニヤ・ゴンカよりもかなり南に存在してゐると信じられてゐた山であるが、西康遠征隊の觀察に依れば、それに該當する高嶺は無く、一行はこの山を傳説的な存在と結論するに至つた。又エドガーは、ツメイは山岳の名ではなく、此の附近の峠の名前であると云つてゐるが、果して然らば、それは恐らくロックの云ふツェミ峠 Tsemi 西康遠征隊の云ふツェメ・ラ Tseme La に相當するものであらう。

尚一九二六年、成都の華西大學 West China Union University の學生より成る一隊が、間近からミニヤ・ゴンカの測量を敢行したが、その結果は公刊されなかつたと云はれてゐる。

ローズヴェルト遠征隊の一員であつたスティヴンスは、途中一行と分れてこの地方の山岳につき貴重な觀察を遂げた。彼の目的は主として動植物の採集にあつたが、モンスーンの影響によつて一年の中ほんの僅かしか見られない山岳地帶の景觀を、稀に見る上天氣に惠まれて彼は飽かず視界に納めることが出來たのであつた。

一九二八年十二月二十六日、一行はバモ Bhamo を出發し、九日目に騰越 Tengyueh に着き、メーコン川を渡つてから十四日目に大理 Tali に到つた。それからキャンチュワン Kienchwan を經て麗江 Likiang に達するには五日を要した。一九二九年三月七日麗江を去り、途中幕營に五十五日、行進に三十八日を費して、六月一日打箭爐に到着することが出來た。この間彼は折多 Cheto ワリィ Wali 近くの二箇所の幕營地で研究をなし、その後は、友人であり、又早くから此の地域の山群に就いて鋭い觀察をしてゐたヒュストン・エドガーと共に二回に亙る山岳地帶の踏査を爲した。

第一回は、西藏との國境地帶を踏査したもので、折多（峠、一五、〇〇〇呎）、アンヤンパ Anyangpa キンク

ワンチャイ Yingkwanchai を經、トンゴロ Tongolo で巴塘への道路を離れ、北進してペエサン Pehsang に至り、チェンメンカ Chengmengka ハラゴン Hlagong パメイ Pamei タイリン Tailing の三僧院を訪れ、クワンチャイ Kwanchai から引き返へしてタイリンから東方に進み、南に下つて、ジャラ山の東方に在るハイツェシヤン Haitzeshan の峠（一五、〇〇〇呎）を越え、シンティエンツェ Sintientze ツォンクゥ Tsongku を經て打箭爐に歸還した。總日數十八日を要したものである。

第二回の踏査は、瓦斯溝 Waszekow へ東進し、此處から北に折れて大渡河の右岸を溯行しクツァ Kutsa（僧院）に至り、更にチンシュイ Chingshui で渡河し、メイポン Meipong を見おろす約八、五〇〇呎圏の尾根へ登り、一旦下つて更に大渡河の峽谷を見下す一〇、八〇〇呎の尾根へ登つた。此の地點から彼等のルートは北東に延びてティエンク Tienke に下り、小部落の上方、右岸は聳壁をなせる小さな峽谷の地點で川を渡り、コチャイホバ Kochaihopa トラシィチョテン Trashichoten（僧院）、シュワン・ユウ Shwang Yu トンリン Tongling を經てこの分水嶺の西側に於ける最後の民家に達した。それから九、八〇〇呎の川床に、又一一、五〇〇呎のサントチャイ Santochai に幕營し、一二、一〇〇呎の廣闊たる草地に唯一軒家の殘れるリャンホーコウ Lianghokow を經、一三、一〇〇呎に漸登し、更に南東方に急下降してムウピン Muping の町に着き、次いで雅州に到つた。この行程に要した日數は二十一日であり、スティヴンスは一九二九年十一月六日、上海に歸還したのであつた。

彼がこの旅行中觀察した處を、彼自身の言葉から聞くことにしよう。(H. Stevens "Sketches of the Tatsienlu Peaks" G. J. Vol. LXXV. No. 4. April 1930 pp. 358—6).

一九二九年の始め雲南を横切つてゐた時、遙か北に當つて雪を戴いた山々が見られた。私が麗江に辿り着きニュルクウ

Ngululö の部落に幕営したのは丁度二月で、そこはサツェトウ Satsetö の山（譯註・麗江山脈の主峯）の麓から北に十二哩離れた地點であり、麗江山脈の氷河や雪峯は比較的短い山脈として見られた。又サツェトウの山巓は部落の狹い道路からも見ることが出來る。この山脈の今一つの峯なるギナラダウ Ginalakö は、其後北へ半日程進んだ平原上の、南北に走る路上から見ることが出來た。

三月二十五日の薄暮、木裏の遙か南、高度一二、〇〇〇呎の天幕からは約八十哩の南方地平線上に、この山脈はいとも鮮やかに望見することが出來た。クル Kulu を去つた後四月二十三日の朝方、一二、五〇〇呎の廣闊な地點から尨大な雪嶺の印象的な光景が西北西に望まれた。私の伴つてゐた喇嘛僧は、この山脈をショラ・ゴンカ Shola Gonka と呼んでゐた。同三十日の午後、ヤツウ Yatsu とバウロン Baurong の間で鴉礪の峽谷へ下る寸前、私は又東方に雪嶺の素晴らしい眺めを得たが、喇嘛僧や擔夫はそれをミニヤ・ゴンカ Minya Gonka と教へて呉れた。それは後日私が完璧に望見し得た同じ山脈の一峯であり、稀にみる快晴のお蔭でこの點には少しの誤謬もないと思ふ。五月三十一日、私のキャラバンはハジャ・トゥング Haja Tungu の部落を去つて峠の苦しい登りにかかつた。ハジャ・ラ Haja La（一五、三〇〇呎）の頂に辿り着いた時、人跡稀な一山脈が、その形狀いとも幻想的に聳立せるのにいたく驚愕したのであつた。私はこの近邊にみられる珍らしい高山蝶の採集を從者に托し、更にすぐれた南東の眺望を得んとして、左手の高みに登つていつた。二百呎許り登ると、私の勞は報ひられて、ピラミッド型の一大雪峯を恣に眺めることが出來たのである。カメラは永寧 Yungning に着く前に破損して用を無さなかつたが、全能力を傾注したスケッチはかなり正確なものと思ふ。だが高度はアネロイドによつて讀まれたもので、正確を期し難い。

六月三十日には打箭爐の南約十五哩、ヤジャジェン峠 Yajajen の北なるワリィの上方から、その南西方に見らるゝ此の山脈の主峯を觀察したいと思つてゐた。けれ共晴天に惠まれなかつたので、僅かにその顯著な峯を瞬時雲間に垣間見ることが出來たのみであつたが、この方角からはその絶頂は幾分かたむいてゐて、左側は急斜面をなし、反對側は殆ど垂

直に思はれた。（G・J編註・おそらくこれはギルの云ふリューチン Ru-ching であらう。）

七月十五日の午後甫めて、エドガーと私はキンクワンチャイに於て、完全にこの山を眺めることが出來た。此處から見るとすつかり雪に包まれたピラミッドに見え、その距離は約三十哩と思はれる。又同二十六日の朝タイリン僧院の北方二哩の地點から、この全山脈の眺望が得られその多くの谷は豐富な氷河に覆はれてゐた。

ヒマラヤの延長なるこの地方の山脈中で、今一つの雄峯は、打箭爐の北に在るジャラで、この山は甫めキンクワンチャイの西方一四、五〇〇呎の小丘から眺められた。が七月十九日ヒラゴン僧院 Hlagong の南端に達した時始めて、東方に雪線を拔いて聳ゆるその山體が誇らかに望まれたのである。又ヒラゴン北方の幕營地からは（七月十九―二十二日）その一部が見えたが、二十三日の夕刻ベマイでは隈なく見ることが出來た。此の山が全く孤立してゐる處から、西藏人はミニヤ・ゴンカよりも高いと云ふ。萬年雪の量から考察するに、之等の山々のあるものは非常に高く、その形も亦壯麗である。八月三日の夕方、一三、〇〇〇呎の幕營地から、ジャラは吾々の南方へのルートを鎖すかのやうに立ちはだかり、次の夕刻吾吾がハイツェッシャン峠（一五、〇〇〇呎）に幕營した時その氷河や雪はもつと近くに眺められた。翌朝は程なく視界は雲にほかされ、南降するに從つてその山も見えなくなつた。八月六日の夕暮には打箭爐の北七哩の處から南南西に當つて、この同じ山脈の一雪峯が見られたが、これはメイボンを去つて大渡河の左岸の山上から八月二十日の午頃南西方に見られた同山群の一峯と同じ山であると思ふ。之等の山々はヤァ河 Ya の或る場所で水面上から見え、又峨眉山 Omeishan からも非常に良く望見出來る。がかの威壓的なミニヤ・ゴンカが峨眉山の頂上から見えるかどうかは確言し難い。十月五日から九日迄滯在したシィシャシュウ Shihsiahshu からはゴンカは山の肩に隱されてゐるが、西北西方面をよく注意すれば、それ等の山々の束の間の眺めが得られると思ふ。

四

ミニヤ・ゴンカ山群及び其の近接地域の初期の探檢史は、大體以上の通りであるが、ロック及びハイムの探檢を記すに先き立ち、ヒマラヤ研究の一權威書であるバラードの書物から、この山群に就いて聞くことにしやう。この書物はヒマラヤ研究者が必ず座右に備へるべき書であるが、この山群に關する記述は極めて不完全であり、前揭ジェオグラフィカル・ジャーナルの說明を要約したものに過ぎないことは、甚だ物足りなくもある。

ナムチャ・バルワの東四百哩に位置する打箭爐の雪嶺に關して、最近報告されたことは、かなり興味ある問題を捲き起した。ヒマラヤ山脈の屈曲は、その東部に於て北東の方向をとつてゐる。若し支那に向つたアッサム・ヒマラヤの直接の延長線をあがいてみるならば、それは打箭爐よりも遙か北方を通過するであらう。

一八九八—九九年に、ライダー大佐 Colonel Ryder は支那雲南省の測量をした。彼は巴塘から東進して、打箭爐へ向つた（G. J. Feb. 1903）。巴塘はナムチャ・バルワの東僅かに二百哩の地點である。ライダーは打箭爐でも又その他の場所でも、全然雪嶺を見なかつた。打箭爐の山々は雲に隱れてゐたに違ひない。併し巴塘及びその東方からの彼の觀察は、ヒマラヤ山脈の東に延長したものが、正しく打箭爐の南方迄も達してゐると云ふ堂固な證據を與へたのであつた。

打箭爐の高峰に就いて得らる可き說明は悉くジェオグラフィカル・ジャーナルの編輯者によつて集められ、その一九三〇年四月號に載せられた。彼はその地理的位置に就いて、打箭爐近き山々に關する吾々の知識は極めて不完全であると云ふ結論を述べ、且ミニヤ・ゴンカ Minya Gongka は二五、〇〇〇呎を超えるものではないと云ふ、キングドン・ワードの言をも引用してゐる。ミニヤ・ゴンカは打箭爐から見える山々の中で一番高いものと信じて差支へあるまい。（S. G. Burrard, H. H. Hayden, A. M. Heron "A Sketch of the Geography and Geology of the Himalya Mountains and Tibet" 1933, Part II. pp 88—89）

ミニヤ・ゴンカ山群に對し直接に又間接に注意を拂つた許多の先驅者の中で、その壯麗な山容を巧みにカメラに納め得た最初の者は、亞米利加の探檢家ジョセフ・ロックJoseph F. Rock であつた。

一九二八年六月、ロックは雲南との境界近き四川省の雪嶺コンカリン Konkaling（キングドン・ワードはゴンカリン Gongkaling 又はガンカリン Gangkaling と綴る）を踏査してゐた時、その一六、三〇〇呎の山稜から、遙か北東に當つて雄麗な白雪の一脈を望見したが、彼の伴つてゐた西藏人は、これこそミニヤ・ゴンカの山群であると教へて呉れた。その時以來彼はゴンカに引附けられ、まだ世に知られてゐないこの白銀の王者に接近せんと機會を待つてゐた。

彼が亞米利加の國立地學協會遠征隊 National Geographic Society Expedition を率いて、雲南のニュルクウ Ngulukö を出發したのは、前記のローズヴェルト及びスティヴンス等とほぼ同じく、一九二九年の三月であつた。

一行は北進して揚子江を渡り永寧、木裏を經て裏塘河を渡つた。クル Kulu から更に北進してレッドォ Reddo に到り、鴉礱江を渡つてムティロン Mutirong に達し、ワジャンラン峠 Wadzanran（一六、〇〇〇呎）を越えた。此處からは、未だ全然記述に表はれたことのないムティ・コンカ Muti Konka の雪嶺（一九、〇〇〇呎）がムティロン部落の背後に眺められ、又西の方にはコンカリンの三つの聖峯が天を摩して聳えてゐた。

かくして四月末にはドルドロン峠 Druduron を越えてブリュデュ Brudu の河畔に到り、五月六日には吹雪を冒してチプリン峠 Chiprin を越えてチェンチ Chengtsi の部落に達した。そして遂にゴンカ山群の西麓なるユーロンシイ Yulongtsi に辿り著いて、ドロンボ Dronbo と呼べる西藏の一主長の家に迎へられた。

ロックはこの主長から、ミニヤ・ゴンカを望見するにはユーロンシィの谷の東山稜が一番良いことを教へられ、積雪の殘つてゐるその尾根へ早速取附いて一六、五〇〇呎の高度から感動的なミニヤ・ゴンカの山體に接することが出來た。その時のことを彼は次のやうに感激に滿ちて述べてゐる——

其の時突然、白雲の隆起するやうな、大らかなミニヤ・コンカの山體が、二五、六〇〇呎の高度を以て凜々しく聳立する光景に接した。

私は全身の感動をどうしても抑へることが出來なかつた。此の素晴らしい景觀に對して私は釘附けになつて了つた。コンカをこんなに間近かに仰ぎ見た白人は、おそらくは私が最初であらう。

無數の雪の山脈は南北に走り、ミニヤ・コンカの處女峯はその隣峯を從へて、藍綠色の空に毅然と聳えてゐる。その幾分傾いた三角形の山體の側面は多くの胸壁に張り巡らされ、それを刻んだ幾條もの氷河は長々と延び下つてゐる。

南微西にはニャンブ・コンカ Nyambö Konka と云ふ一山が在り、この連嶺の南端を成してゐる。

あらゆる峯からは悉く氷河が垂下して、この山群の西側なるビュチゥ Buchü 谿谷に流入してゐる。ミニヤ・コンカから垂下する主氷河はコンカ・ロンバ Konka Longba の谷に流れ、次いでビュチゥと合して、末はツァウクゥ川 Tsauku となつて大渡河に合流するのである。

ミニヤ・コンカに次いで壯麗な山岳は、その直ぐ北に位するロンゲメィン Longemain とダッドドメィン Daddomain である。クリノメーターによる測量の結果、この二峯の高度は夫々二二、五〇〇呎及び二一、五〇〇呎と算定された。

扨この山群を踏査する上に春季は雪が多くて最も困難である處から、ロックの一行はヂェシィ峠 Djesi を越えて打箭爐へ旅をした。この峠からも彼は又ゴンカの素晴らしい眺めに接し、その黑灰色の岩面によつて、彼はゴンカの山體を花崗岩と判じた。更に北側のリュウチ・ロンバ Riuchi Longba の谷に入り、ゴンガ連嶺の北側

の峯を偵察し、チブロンギ・ゴンカ Chibirongi リュウチ・ゴンカを近くより眺めた外、その南の無名峯に國立地學協會々長の名譽の爲に、Mount Grosvenor の名を與へた。此の三峯は黃紅片麻岩より成つてゐる。そして打箭爐東方の山々から見えるのはこれらの山嶺で、ミニヤ・ゴンカそのものではないと考へるに到つた。

彼は又次のやうに述べてゐる——

リュウチ谿谷の源頭やヂェシイ峠を睥睨する秀峰の一つは二三、〇〇〇呎の高度を有するレッドドメイン・ソロ Reddomain Solo である。この山は打箭爐の宣教師達によつて、ミニヤ・コンカと間違へられてきた。晴れた日ならばヂェシイ峠からミニヤ・コンカが見えるのであるが、それも頂上附近僅かの部分である。

ミニヤ・コンカ山群にはこの外にも澤山の峯々が屬してゐる。その中の幾つかは、二〇、〇〇〇呎以上の高度を有つてゐる。レッドドメイン・ソロからは一つの分脈が派出して、ミニヤ・コンカの位する主脈とほぼ平行に走つてゐる。そしてリュウチ・コンカの一脈はレッドドメインから連續せるものと思はれる。打箭爐の近くには更に他の山脈があり、その中には二二、〇〇〇呎の高度をもつヤチャガン Yachagan が在り、ピラミッド型の二峯から成つてゐる。

斯くてロックの一行は二週日を打箭爐におくり、その間を寫眞の現像、食糧品の補給、人夫や動物の休養にあて、再度ミニヤ・ゴンカ山群へとつてかへし、ユーロンシイの根據地に向つたのであつた。そしてドロンボ及びジュメ Jumeh と呼べる西藏人を案內者として、ミニヤ・ゴンカ氷河の末端に在るゴンカ僧院 Gongka Gomba に達しようとした。それは丁度六月上旬であつたが一三、八〇〇呎のユーロンシイでは寒氣はまだ相當に嚴しかつた。一行が僧院に赴かんとしてツェミ峠 Tsemi（一六、〇〇〇呎）を越えた時は、その山麓でひどい降雪に出會つたが、峠からは南西方に當つて更に別の山脈（高度約二〇、〇〇〇呎）を許多眺めることが出來たのである。そ

して彼等はビュチウの流れを渉り、それとゴンカ渓谷とを分つ支脈を越え、次いでゴンカ渓谷を登つて遂に物さびた僧院に達した。

翌日ロックは午前四時に起きて、ビュチウとゴンカ渓谷とを分つ尾根を登り一七、二〇〇呎の高度から間近にミニヤ・ゴンカの聖峯を恣に眺めた。その日は實に天良く晴れて、壯麗無比なパノラマを眺め得たと云ふ。

ロックの一行はほぼ目的を達してゴンカの山懐を去り、ムジ・ュウ Mujju から往路とは別路を採つてウシィ Wushi バウロン Baurong を經てクルに達し、再び往路とは別に永寧を經て、雲南のニュルクウに歸還したのであつた。

（註） J. F. Rock "The Glories of the Minya Konka" (The National Geographic Magazine, Oct. 1930, Vol. LVIII, No. 4.) に依る。

ロックに次いでミニヤ・ゴンカ山群に潜入したのは、瑞西の地質學者アーノルト・ハイム Arnold Heim であつた。一九二九年彼が四川省で地質學の調査に從事してゐた時、偶々西方遙か彼方に巨大な雪の山脈を望見し、その時以來此の西藏境の山脈は彼の心を捕へてしまつた。

然し四川から奥地へ進むには、政治上經濟上の諸々の困難が附きまとつた。けれ共ハイムは當時彼が地質學の教授をしてゐた廣東國立中山大學の後援を得て、遂に翌一九三〇年一遠征隊（川邊調査團）を組織し、この祕境に入ることとなつたのであつた。

雲南府に於て暫くの滞在を餘儀なくせられ、六月下旬、彌々一行は支那人護衛者を伴つて北進し、匪賊の横行

する山地を旅し、大體揚子江と大渡河の分水嶺に沿つて進み、打箭爐に達したのは眞夏の候であつた。此處で遠征の準備を完了し、夏の終りから十一月に至る約三ケ月間をミニヤ・ゴンカの踏査、偵察に費し、比較的不順な惠まれない天候にも拘はらずその周圍を隈なく探査した。就中西側の大ゴンバ氷河 Great Gomba 及び東側のヤンツウコー Yantsoko ハイローコー Hailoko 二氷河の研究は著名なものであつた。此の時測量は主として同行せるイムホフ教授 Ed. Imhof によつてなされたが、其の結果ミニヤ・ゴンカの高度は七、七〇〇米突（二五、二〇〇呎）と算定された。

一九三〇年十一月ハイムは一旦打箭爐に下り、更に西進してアッサムのサヂャ Sadiya に赴かんとしたが、種種の障害は彼に幸ひせずして巴塘までも行くことが出來ず、已むを得ず北西に歩を延ばして裏塘からニャロン Nyarong の山地を跋渉して、甘孜に旅し、引きかへして道孚 Taofu を經てタイリンに到り、ジャラ山の莊嚴な冬の姿に接し、その高度を五九〇〇米突（一九、三〇〇呎）と算定し、成都に下つて彼の探檢を完了したのであつた。

この探檢の報告書は "Minya Gongkar" なる題名の下に、一九三三年刊行されたが、この未知なる東部西藏の諸々の地理的事情を明らかならしめたことは、許多挿入された素晴らしい寫眞版と共に探檢文學の白眉と稱されてゐる。殊に此の中に收められたミニヤ・ゴンカ山群の地圖（二十七萬五千分の一）は、甫めて世に現はれた詳細な地圖でもあつた。

以下ハイムの觀察の結果を要約してみよう——

ミニヤ・ゴンカ西面の主氷河は大ゴンバ氷河と稱される。甫めてこれを寫眞に納めたロックが、ニャムブウ氷河と誤記

してゐるものである。氷はミニヤ・ゴンカの南側に集められ、流域は約十粁程ある。氷河の舌端はゴンカ僧院の北東約二粁海抜三八〇〇米突の地點迄きてゐる。

小ゴンバ氷河はミニヤ・ゴンカの北西側から發し、ほぼ直角に大ゴンバ氷河に合流してゐる。この二氷河の表面には到る所に周圍の山々から落下した花崗岩の塊が散在してゐる。又モレーンの表面には數個の小さな湖が見出された。

孰れの側も氷の舌端は、深く刻まれたV字形の氷河流によつて岩面から離れてゐる。南方の一流はモレーンの上を流れ、その中央部は百米突も深く立ち切られてゐる。氷河はこの多量の碎岩を動かす力がなく、モレーン自體に乘り上げてゐるのである。

ミニヤ・ゴンカ北面及び東面の氷河は、一九三〇年私（ハイムを指す）が發見したのであるが、東面のものはこの山群中最大の氷河であり、森林地帶迄延び下つてゐる唯一のものである。

ヤンツウコー氷河はミニヤ・ゴンカと孫逸仙山（七〇〇〇米突）間の大雪谷から流れ出て、長蛇の如く西進し、一旦北にまはつて更に東へ流れ去る。北西から流れる一支谷の水は一旦氷洞に落ち入り、三—四粁下方でこの氷河の融水と合流して流れ出る。ゴンバ氷河と對比して、ここの側堆石は氷河に面して高さ十米突乃至二十米突の鋭い絶壁をなしてゐる。それ等はおそらく第三世紀上層の一部を示すものである。

ハイローコー氷河は全長實に十六粁、その舌端を取圍む針葉樹林に達してゐる。二つの氷瀑が在るが、一つは下方に在つて餘り大きなものではなく、他の一つは上部に在つて約五百米突程落下し、傾斜の強いコンヴェックスした斜面に懸つてゐる。ヤンツウコー氷河と同樣に、ここに現殘せるモレーンも眞の氷の流れによつて削り取られて鋭い角度を示してゐる。この低い部分には幾つかの美しい氷河臺地（テーブル）がある。そして氷河の末端は、樅、山毛欅、石楠花等の森林に取圍まれてゐる。ここの高度は、器械破損の爲殘念にも測定されなかつたが、ほぼ三〇〇〇米突位だと思ふ。

ミニヤ・ゴンカ山群中、これに次いで大きい氷河はミニヤ・ゴンカの北二十粁に在るジャゼ氷河 Djaze である。これ

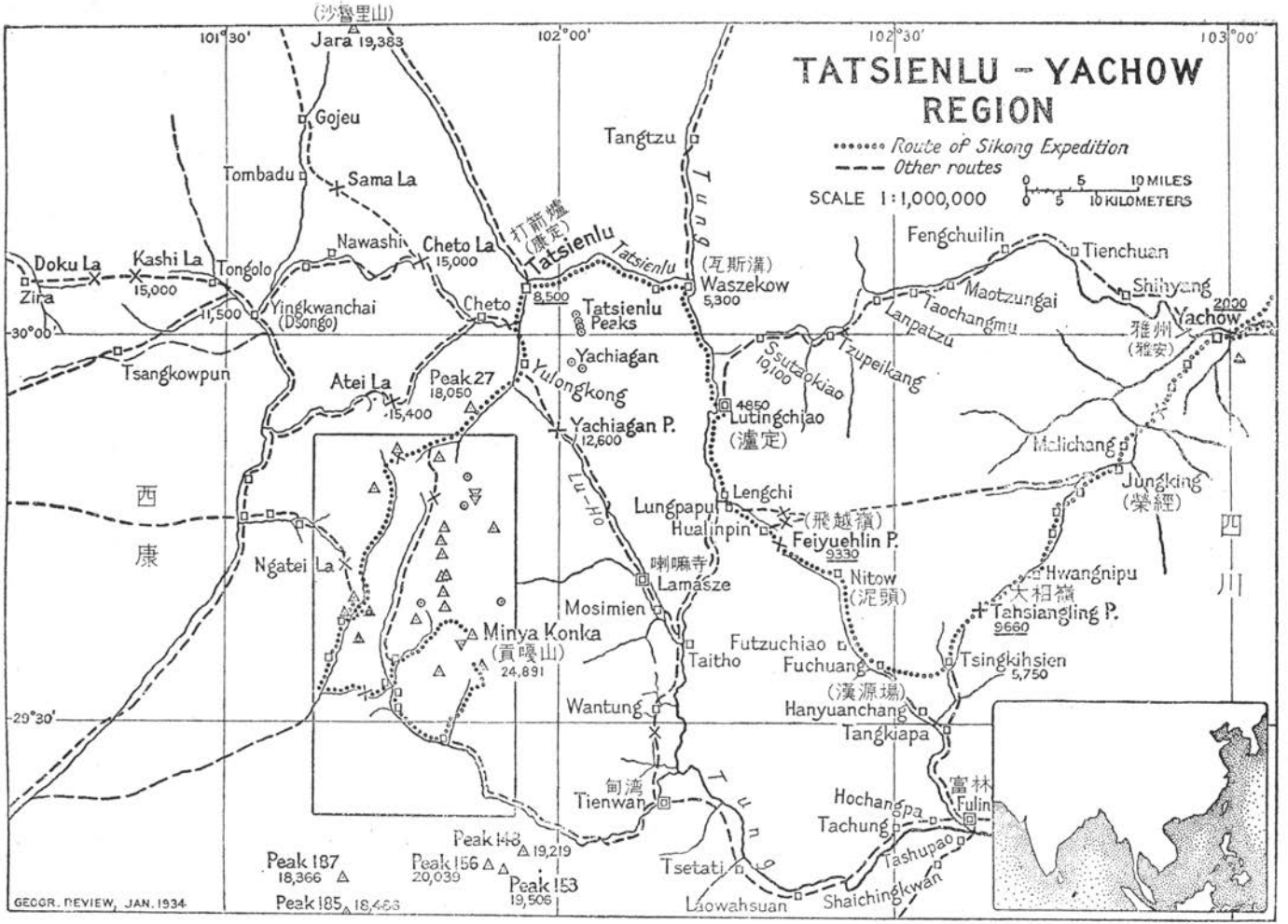
に續いてレッドドメイン氷河がある。ジャゼ・ゴンカの東側に在る氷河は未だ踏査されてゐない。又打箭爐群山 Tatsienlu Peaks に在る氷河（ラモシェ氷河 Lamoshé 打箭爐氷河等）に就ては餘り知られてゐない。（"Minya Gongkar" 所收の二七五、〇〇〇分の一の地圖參照のこと。）

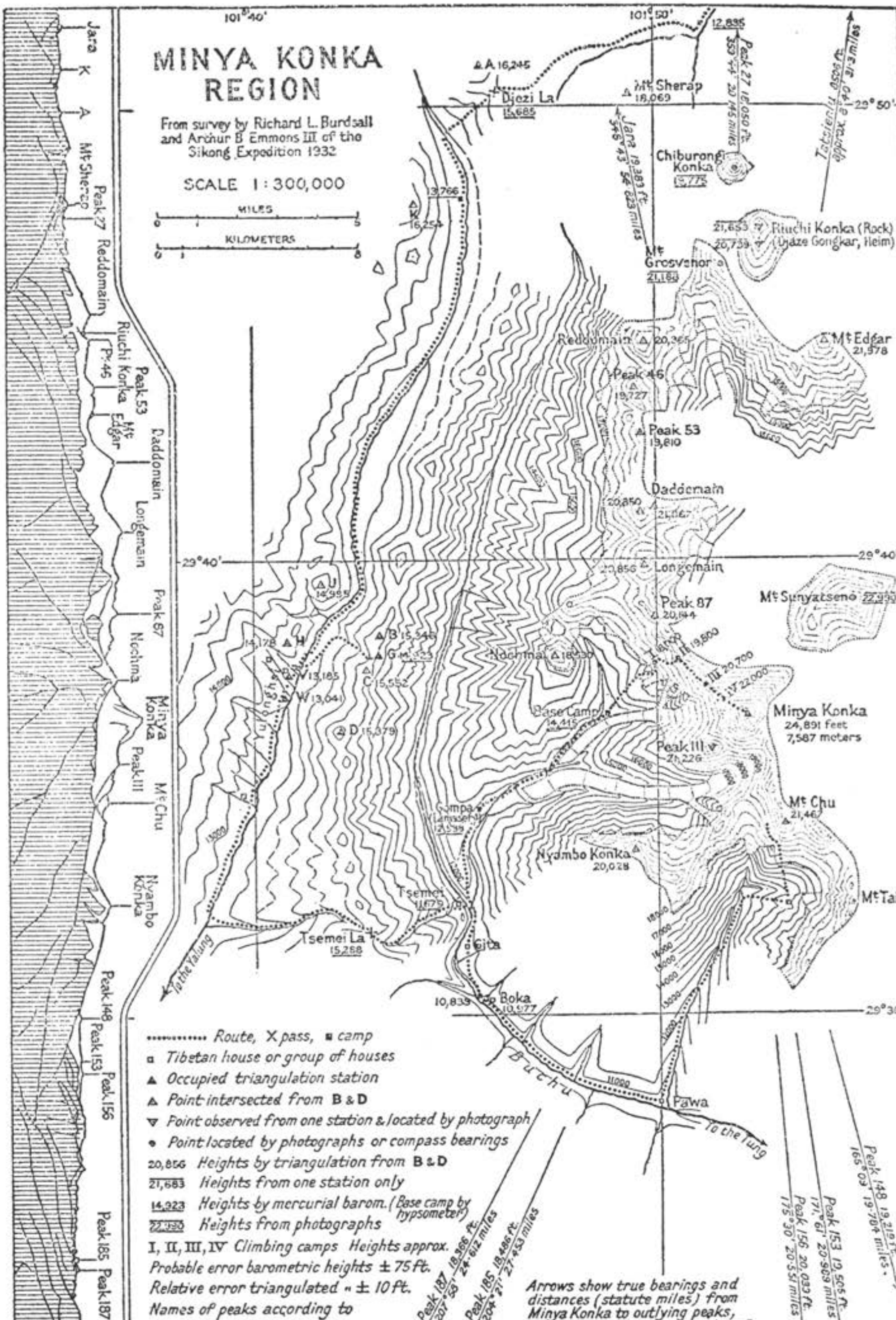
次に降雪に就いて說明を進めやう。高地に於ては主として夏の終りと秋、殊に八月、九月、十月に降雪をみる。九月と云ふ月は旅行に一番惡い氣節のやうに思へる。山々が雲にとざされてゐる期間は長い。嚴冬には餘り降雪無く、吾々は唯十一月二十二日と一月十四日との僅か二回だけしか經驗しなかつた。早春の候にはもう少し多量の雪が降るであらう。冬季は概して乾燥した清朗な天氣が續き、この大山脈の背後に連なる西藏高原には殆ど積雪を見ることがない。それ故、既にエドガーも指摘してゐる通り、揚子江の夏季の氾濫は內陸の融雪に因るものではなく、西藏境の山脈に殘つた氷雪の融解はそれに殆ど關係が無いと考へられるのである。（A. Heim "The Glaciation and Solifluction of Minya Gongkar" G. J. Vol. LXXXVII. No. 5, pp. 444—454）.

一九三一年には、ブルック・ドラン Brooke Dolan とゴルドン・ボールス Gordon Bowles の兩者が、數ケ月をミニヤ・ゴンカ山麓にをくり、動物學、人種學上種々なる調査を成し遂げたことが知られてゐる。

五

「支那のマッターホーン」と呼ばれたこの巨峯ミニヤ・ゴンカも、この樣にして次第に神祕のヴェールを剝がされていつたが、遂に一九三二年、亞米利加の少人數よりなる一パーティにその初登頂を許したのであつた。この遠征隊はミニヤ・ゴンカ山群を目指した始めての純登山遠征ではあつたが、比較的簡單にその登頂に成功


TATSIENLU – YACHOW REGION
Route of Sikong Expedition
Other routes
SCALE 1:1,000,000
0 5 10 MILES
0 5 10 KILOMETERS
101°30'
102°00'
102°30'
103°00'
30°00'
29°30'
(沙魯里山)
Jara 19,383
Gojeu
Tombadu
Sama La
Tangtzu
Tung
Doku La
Kashi La
15,000
Tongolo
Nawashi
Cheto La
15,000
打箭爐
(康定)
Tatsienlu
Tatsienlu
(瓦斯溝)
Waszekow
5,300
Fengchuilin
Tienchuan
Shihyang
Maotzungai
Taochangmu
Lanpatzu
Yachow
2000
雅州
(雅安)
Zira
11,500
Yingkwanchai
(Dsongo)
Cheto
8,500
Tatsienlu
Peaks
Tsangkowpun
Atei La
15,400
Peak 27
18,050
Yachiagan
Yulongkong
Yachiagan P.
12,600
Ssutaokiao
10,100
Tzupeikang
4850
Lutingchiao
(瀘定)
Molichang
Jungking
(榮經)
西
康
Lu-Ho
Lengchi
Lungpaputi
Hualinpin
(飛越嶺)
Feiyuehlin P.
9330
四
川
Ngatei La
喇嘛寺
Lamasze
Nitow
(泥頭)
Hwangnipu
大相嶺
Tahsiangling P.
9660
Mosimien
Minya Konka
(貢噶山)
24,891
Futzuchiao
Taitho
Fuchuang
(漢源場)
Tsingkihsien
5,750
Wantung
Hanyuanchang
Tangkiapa
甸湾
Tienwan
富林
Fulin
Hochangpa
Tachung
Tung
Peak 148 19,219
Peak 187
18,366
Peak 156
20,039
Peak 153
19,506
Tsetati
Tashupao
Laowahsuan
Shaichingkwan
Peak 185 18,463
GEOGR. REVIEW, JAN. 1934


MINYA KONKA REGION
From survey by Richard L. Burdsall and Arthur B Emmons III of the Sikong Expedition 1932
SCALE 1 : 300,000
MILES
KILOMETERS
Djezi La 15,685
Mt Sherap 18,069
Chiburongi Konka 19,775
Mt Grosvenor 21,180
Riuchi Konka (Rock) (Djaze Gongkar, Heim)
Reddomain 20,365
Mt Edgar 21,978
Peak 46 19,727
Peak 53 19,810
Daddomain
Longemain
Mt Sunyatsene
Peak 87 20,144
Nochma
Base Camp 14,415
Minya Konka 24,891 feet 7,587 meters
Peak III 21,226
Mt Chu
Nyambo Konka 20,028
Mt Tai
Tsemei
Tsemei La 15,288
To the Yalung
Gita
Boka 10,977
Buchu
Pawa
To the Tung
29°50'
29°40'
29°30'
101°40'
101°50'
Route, X pass, ▪ camp
Tibetan house or group of houses
Occupied triangulation station
Point intersected from B & D
Point observed from one station & located by photograph
Point located by photographs or compass bearings
20,856 Heights by triangulation from B & D
21,683 Heights from one station only
14,923 Heights by mercurial barom. (Base camp by hypsometer)
22,930 Heights from photographs
I, II, III, IV Climbing camps Heights approx.
Probable error barometric heights ± 75 ft.
Relative error triangulated " ± 10 ft.
Names of peaks according to Rock and Heim
Arrows show true bearings and distances (statute miles) from Minya Konka to outlying peaks, computed from observations at B & D
GEOGR. REVIEW, JAN. 1934
Jara
Mt Sherap
Peak 27
Reddomain
Riuchi Konka
Peak 53
Mt Edgar
Daddomain
Longemain
Peak 87
Nochma
Minya Konka
Peak III
Mt Chu
Nyambo Konka
Peak 148
Peak 153
Peak 156
Peak 185
Peak 187

したことは、過去を顧て幾分飽氣なく感ぜられもするのである。

一九三二年、ミニヤ・ゴンカ登攀のパーティは左の四名より成る亞米利加の小さな隊であつた。

バードソル Richard L. Burdsall エモンズ Arthur B. Emmons (III) モーア Terris Moore ヤング Jack T. Young

バードソルはスワーズモア大學 Swarthmoore College 出身の機械工學士であり、アルプス及びロッキイで登山の經驗を積み、又鳥類採集にも素養があつた。エモンズはハーバード大學工科學生であり、ドロミテ、アルプス、カスケード山脈、カナディヤン・ロッキイ、アラスカ等に於て登山の經驗を納め、その中マウント・フード Mount Hood 北面の初登攀は著名なものであつた。モーアはハーバードの經營經濟學科の學生であり、エクアドルのサンガイ Sangay の初登頂及びチンボラゾ Chimborazo の第二登頂、アラスカのマウント・ボナ Mount Bona マウント・フェアウェザー Mount Fairweather の初登頂に成功してゐる。ヤングは紐育大學新聞學科の學生であつた。彼の家族はもと廣東の出であるが、彼はハワイで生れ、曾てミニヤ・ゴンカ近傍に旅行したローズヴェルト遠征隊の一員でもあり、動物採集の部門を擔當することになつた。

この遠征隊はその目指す地名をとつて「西康遠征隊」 Sikong Expedition と命名され、主たる目的として次の三つが擧げられた。

(一) ミニヤ・ゴンカ及びその隣峯の高度を正確に測定すること。

(二) ミニヤ・ゴンカの登路偵察をなし、若し可能ならばその初登頂をなすこと。

(三) この地域の動植物學上の採集をすること。

かくして測量は主としてエンヂニヤーのバードソルとエモンズが擔當することゝなり、この二人は一九三二年六月十六日上海を出帆、揚子江を溯行して、內陸へ向つた。モーアとヤングは暫く後に殘つて、殘餘の準備を完了し、西藏で合流する段取りとなつた。

先發の二人は約二十日間揚子江を溯上し、嘉定府 Kiating-fu で船をすて、みすぼらしいバスや人力車によつて雅州 Yaelow へ達した。此處からは地方長官の兵隊に護衛され、約二十人の人夫と共に目指す打箭爐へ向つた。そして八日間の行程中、九、〇〇〇呎の峠二つを越へ、約二百哩を進んだのであつた。

打箭爐に着いたのは七月廿三日で、こゝに住む支那內陸傳道の宣教師カンニンガム博士夫妻の厚遇を受け、住居の心配は勿論のこと、犛牛、人夫、食糧等の問題に對して惜しみなき援助をうけたのであつた。

荷物の整理等で打箭爐に四日間滯在し、いよ〳〵目指す山懷に足を向け、先づゼジ・ラ Djezi La（一五、七〇〇呎）を越え、甫めて雪の山々の姿に接した。殊にこの山群北端の雄なるチブロンギ・ゴンカ（一九、〇〇〇呎）の針狀峯は二人の登攀慾をいやが上にも刺戟したのであつた。

四日目、ユーロン・ロンバ Yulong Longba の山溪に這入り、一行が測量の基地にせんと目論んでゐたユーロン・シイ Yulong Hsi の西藏部落へ達したのは日沒時であつた。そして先づ測量上のベース・キャムプを部落東方の丘陵上約一五、〇〇〇呎の、小さな湖のある地點に設置した。そこは深いビュチウ溪谷を一つ距てゝ眞正面にゴンカの山群と相對峙してゐる所であつた。

エモンズはこのB・Cの景觀について左のやうに記述してゐる——

この測量基地からの眺望こそ、全く我を忘れる程に素晴らしいものであつた。壯麗、雄渾、崇高——どんな形容詞もこ

の光景を述べるには用を爲さないであらう。吾々の熱狂は際限がなかつた。吾々の測量に對してこれ以上に理想的な場所を得ることは、困難なことであつたらう。

この丘陵はほゞ南北に走り、その兩側には數千呎の下方に急深な溪谷が刻まれてゐる。東面の視界を隈なく占領するのは、雪に覆はれたコンカ Konka の大山脈で、そのフランクやパットレスは足下の谷底迄急激に落ち込んでゐる。南方遙か彼方には、同じ樣に印象的な他の山群が聳立してゐる。それ等の山々は今もつて神祕と寂寥の雲にとざされ、その位置する現行の地圖には等しく「未測量」と記されてゐる。殊に吾々の注目を喚起したのは二つのピラミッド型の巨岳であり、それは高度に於てもミニヤ・コンカと匹敵するものゝ如く思はれた。吾々はそれに Cathedral Peaks の名稱を與へたが後にその高度は二〇、〇〇〇呎內外のものであることが明らかとなつた。

西方には鳶色の草原につゝまれた丘陵が幾重疊となく重なり合つて、末は遙けき西藏內奧の靑い靄の中に消え入つてゐる。後日吾々がコンカの高所から見出した西南方に在る數個の巨峯は、當時はまだ視界の外にあつた。之等はロックがコンカリン・ピークス Konkaling Peaks 或はアウトロウの聖なる山 Holy Mountain of the Outlaws 及びコンカ・リズウムゴンバ Konka Risumgongba（ロックによると高度約二〇、〇〇〇呎）と書いてゐる（Nat. Geogr. Mag., July 1931.）ものに當ると思ふ。

更に西方には尙壯大な一山脈が見出されたが、それは一五〇哩も離れてゐる甘孜山脈 Kanze Range であらう。北西方には一岩塊が蟠り、雪と岩との尖塔が巍然と天を摩してゐるが、これは土着民がコンカよりも高いと信じてゐるジャラ・シャン Zhara Shan である。この尖峯は孤立して聳え、何等支稜を持たぬ一本柱である爲に、西藏人がコンカよりも高い山だと誤信したのであつた。ハイムはジャラの高度を一九、〇〇〇呎と測定したが、吾々の算定もほゞそれと等しく、一九、三八三呎であつた。ジャラは吾々の三角測量地點から五十六哩離れてゐる。(A. A. J. Vol. II. No. 2, 1934, pp. 138—9) 測量班は無類の上天氣に惠まれて、八月の三週目にはほゞ大體測量を完了してゐた。一八、〇〇〇呎から二三、

〇〇〇呎に至る巨大な雪峯二十五座以上が測定せられ、ミニヤ・ゴンカの高度は最後に二四、八九一呎と決定された。

一行が彌々登路の偵察に取りかゝらうとした時分、モンスーン襲來の徴候が顯著となつて、今迄晴朗であつた天氣も崩れ出した。

ミニヤ・ゴンカの北面及び西面は孰れも急峻であつて、最始は不可能のやうにさへ思はれてゐた。然し、その南面、東面に關しては當時何等知られてをらず（東面を觀察したハイムの書物は一九三三年に刊行された）若し北乃至西面よりするならば、ゴンカから北西に走る主稜こそ唯一の登路であると思考されたのであつた。

然しそれ以前に東面及び南面の謎を解決せんとして、バードソルとエモンズは一旦ユーロン・シイに下り器具備品の荷造りを終り、南進して更に東へ方向をとり、ツェメ・ラ Tsome La（一五、二八八呎）を越へ、ビュチウの谷へ下つた。そしてゴンカ・ゴンバの喇嘛僧院に一日をおくつて、再度北西稜の觀察をなし、次いで南面の偵察に出發した。

二人はビュチウ川に沿つて南東に進み、ボカ Boka と云ふ西藏の小部落に達し、河畔にベース・キャムプを建設した。それから八日分の食糧を持つて更に東へ東へと進み、約八哩下方で、北から注入する一支流に出會ひ、この流れに沿つて山懐へ突入することゝなつた。

此の支谷の源流地は二一、〇〇〇呎以上の雄大な峯々に取圍まれた壯麗な圏谷を成してをり、二人が此處に達した時は折良くも雨は上つて天氣は好轉しかけてゐた。キャムプは一六、〇〇〇呎の氷河地域に設置された。

翌九月七日は美しい天氣が訪れた。二人は朱山 Mt. Chu（二一、四六七呎）の西側に當る約二一、〇〇〇呎の一

コル目指して登攀を続けたが、高度馴致の不足と、三呎以上の新雪の爲、ゴンカの全貌には全く接することなく、一八、〇〇〇呎の地點で退却を餘儀なくされた。再度コルへの登高を企てたが、今度は暴風雪の爲又々失敗し、加ふるに食糧缺乏の結果、キャムプは次回の爲にそのまゝ殘し遂にボカへ下つて了つた。

モーアとヤングとが殘餘の備品、食糧等を携行してボカにやつてきたのは九月十九日のことであつた。この二人は八月上旬上海を出發、ほとんど先發隊と同じ旅程を辿つてやつてきたのである。其處でモーアとエモンズとは偵察を續行し、バードソルとヤングは動植物の採集に力を注ぎ、登攀ルートが決定した曉は、四人共總て登頂に協力することゝなつた。

モーアとエモンズは、かくして再度過日エモンズとバードソルが達した關谷のキャムプに戻り、その翌日の快晴を利して前記のコルへ登攀した。途中二つの氷瀑を越へ、雪崩の危險に曝されつゝ急斜面を苦闘して、遂にコル東方の肩（高度約二〇、〇〇〇呎）に達することが出來た。

しかし二人は、この肩から眺められたゴンカの南面及び東面が到底登攀の對象にはならない迄に物凄いことを知つた。そしてゴンカの登路は最初偵察した通り、その北西稜こそ最も可能性があると云ふ結論に達したのであつた。

そこでこの偵察基地は早速撤收せられることゝなり、十月上旬には全員四名、ゴンカ・ゴンバの僧院に集り、荷物食糧の荷造りも出來て、ゴンカ攻撃の準備は完了した。

十月二日、一行四名は六人の人夫をつれて僧院を出發、ハイムの云ふ小ゴンバ氷河に沿つて山懷に喰入り、丁度北西稜の下、過日エモンズが見出した恰好の場所に到着したのは午後四時。此處にベース・キャムプを建設し

た。

それから北西稜上へ到る途中一八、〇〇〇呎にCI、北西稜上一九、八〇〇呎、二〇、七〇〇呎に夫々CII、CIIIを建設し、CIVを二二、〇〇〇呎に設立し得たのは十月二十六日であつた。この間CI以上の荷上げは全く四人の力でなされ、その爲隊員は同じ處を何度も上下して異常の勞力を用ひたのであつた。又ヤングは下方の荷上げと動植物採集に專心することゝなつて、ベース・キャムプに留り、二十六日CIVに入つたのは三人であつた。そしてエモンズとモーアとは更に上方の偵察をなし、登路を見極めて、登頂に際してはバードソルも加へ三人して一擧に行ふことに決められたのであつた。

ところが其の晩、凍つたビスケットを切らうとしたエモンズは、不幸にも左手に相當な負傷をして了つたので登頂は遂にバードソルとモーアの二人で解決しなくてはならなくなつた。

かくて二十七日は終日休養し、翌二十八日登頂を目指す二人は超人的な努力で午前三時半起床。暗闇の中でクランポンをつけ、五時にCIVを出發した。そして午後二時四十分遂にミニヤ・ゴンカの絶巓に達した。この感激に滿ちた日についてのモーアの敍述を左に引用しやう。

エモンズを天幕に殘して吾々二人が出發した時、外はまだ眞暗だつた。東の地平線迄擴つてゐる青黒い空には、星屑が輝やいてゐた。しかし、凍つたクランポンが堅く締つた萬年雪に食ひ込むのは、仄かな雪明りで僅かにそれと知られた。私は小さな燈をもち先頭に立つて進んだ。この前來た時の足跡が時々光を洗びて目の前に現れた。雪の傾斜は強くなり、結ばれた綱の一端に居るバードソルは防寒手袋をはめた手を使ひ、苦心して登つてくるのが感ぜられた。途々、下方から搬び上げた楊柳の枝を雪に突き立てゝ、足跡の目印にしてをいた。

このやうにして約二百呎許り登り、急な一小突起の上で、上部の斜面を照らし始めた早曉の光線に接することが出來た。こゝで一先づ腰をおろし、嗄い陽の光を今か今かと待望したのであつた。

頭上の蒼穹には一點の雲も無かつた。百五十哩離れた西藏は、紫紺の線に限取られてゐた。そして絶巓の東の空には、まだ木星が餘光を輝かしてゐた。一陣の突風が力強く吹く。邊りは次第に明るくなつて、もう燈りはいらなくなつた。雪眼鏡をなほさうとした時、革のマスクが風に飛ばされ、遂に見えなくなつて了つた。マスク無しでは實に辛いのであつたが、さりとて戻る暇はない。そのまゝ吾々は前進を續けた。

太陽は刻一刻昇りはじめたが、吾々が登つてゐるのは山の日陰の面であつて、その紫の影は足下西藏の前山の上を蔽つてゐた。太陽が地平線を遠去かるにつれて、山の影は目に見えて小さくなつていつた。この影に蔽はれてゐる廣大な地域を見下ろしてゐた時、はじめて吾々の居る高度の非常に高いことを感じたのであつた。

吾々は一時間三百呎と云ふ、最も普通の速度を以てゆつくり登高を續けていつた。そして、十日前エモンズと私とが達した最高地點に辿り着いた時、太陽の輝く外輪は丁度肩の上に現はれ出た。

此處は今迄の滑らかな稜線が、氷に鎧はれた連續した岩場に變つてゐる處である。雪の詰つたクラックに氷斧を突き刺し、その頭に綱を卷いて、始終一人が確保しつゝ、二人は愼重にその岩場を登り切つた。尾根の傾斜もグツと增し、スリップに對して不斷の注意が拂はれねばならなかつた。クランポンは堅雪に對して實に效果を現し、ステップ・カッティングに貴重な時間と勞力を浪費しないで濟んだことは、何んとしても嬉しいことであつた。

小さな雪のクーロアールを登つて、この最初の岩場を通過した後、吾々は幾分廣い斜面の基部に達した。然しこの上部に吾々の見たものは、極度に痩せ細つた鋭い稜線と、それを覆つた手強はそうな雪の障害物であつた。そしてその背後の樣子はこの尨大な雪塊と雪庇とにかくれて窺ふことが出來なかつた。

登路の選擇に幾分の誤算のあつたことは、稍もすれば敗北に導くものでもあり、又身の高まるにつれて次第に顯著にも

なつてきた。しかし一旦後戻りをすれば、最早や今日中に絶巓に達し安全に下降しうる精一杯の時間さへ無くなるであらう。

それで、下から双眼鏡で偵察した際の、私の記憶に殘る臆測のルートに頼つて行動しなければならなかつた。

吾々は、疲勞を出來るだけ省くやうに、緩りと而も確實な歩調を以て、登攀を續けた。今や高度は大體二四、〇〇〇呎に達し、この山群の他の峰々は遙か下方に低くなつて了つた。私自身に就いては、過日二二、〇〇〇呎地へ荷物を搬んだ二日間よりも、高度に因る呼吸困難を感じなくなつてゐた。之は疑もなくCIVに於ける高度馴致と、荷物を持たないお蔭である。バードソルも亦以前よりも遙に調子良く、見事な登攀振りを示してゐた。

亂立した氷の取附きにぶつかつていつた時、太陽は丁度正午の時間を示してゐた。吾々は、聳立する小突起や、亂立した氷塊の間を、右に左に捲き乍ら登つていつた。僅かの距離ではあるが、前方が見通せた時、吾々の位置が絶巓からそれ程遠くないのを知つた。最後の頑張りを咬り出して登つたが、その速度は匍匐するのと大差はなかつた。數歩進んでは、氷斧に身をもたせ、頭をたれて、烈しい動悸を靜めるために休まねばならなかつた。振りかへつて、綱に沿つてゐる自分の足跡を眺めた時、バードソルの立つてゐる處からこゝ迄の、そんな僅かな距離を登るのに、非常な時間を要してゐるのが不思議な位であつた。

その上、吾々が眞の頂と思つてゐた峰は、尾根の一隆起に過ぎないことを知つた。それに達して、私は更に右手にトラヴァースし巨大な西面へ進路を採り、その間バードソルは愼重な確保を續けて呉れた。このやうにして、前方の見通しを得た時、頂上は紛れもなく未だ三百呎上方であることが明らかとなり、この方向に進んだならば到底頂上に達する望みはなかつた。そこで私は少し戻り、もつと左手にルートを採つた。

或る低い壁に足場を切つて登つた時、遂に私の位置が、痩せた鋸齒狀の頂稜によつて絶巓と接續してゐるのを知つた。それから約一時間の後、卽ち九時間半の勞多い登攀を繰返へして、最高點に達したのは午後二時四十分であつた。

頂上は極く接近した三つの峰に分れてゐた。吾々はその一峰一峰を克明に踏んで、三つ目の峰の雪の上に、感謝に滿ちて坐り込んで了つた。こゝは風に對して防禦物があり、下から吹上げる疾風は、遙か頭上を通り過ぎた。吾々は甫めて幾分寛りした氣持で周圍の景觀を眺めることが出來た。それ程迄に、今迄の苦闘は血みどろな戰ひであつた。

吾々を取圍む山々の線は、完全な一つの環であつた。紺青の天空に、吾々よりも高く浮び上つてゐる山塊はなく、又雲でさえ無かつた。このやうに異常な高度に於ては、目に見える山々の線は、實際の高度よりも遙かに低く見えるものである。このやうにして私は地球の圓いことを事實見ることが出來たやうに思へた。一九、八〇〇呎の天幕で、天空を專占してゐた許多の壯麗な雪嶺のパノラマは、今や蒼色の高原に點在する小さな雪の一片の如くその高さを低くして了つた。

休息の後、吾々は腰を上げて、頂の東端の雪庇の處迄いつてみた。足下三哩も下方には、一面の雲海が山々の裾を包んでゐた。遙か東の方を眺めれば、果てしない支那の平原が打ち續いてゐて、末は天と地とが一つに會してゐる。荒々しい岩頭は、この霧の中に此處彼處島のやうに浮彫りをなしてゐた。

吾々の足下には、北にも南にも雄大な山脈が横たはつてゐた。西方には西藏の渺茫たる高原が波打ち、その彼方此方に神秘と寂寥に閉された雪の山脈が走つてゐた。

吾々は、天幕の毛布にくるまつてゐるエモンズのことを話し合つた。そして彼が、この勝利の瞬間を、吾々と共に味つてくれることを心から祈つたりした。("Men against the Clouds" pp. 195—199)

かくて二人は亞米利加と支那の國旗を頂にたて、又寫眞撮影等をなして一時間後に頂上を去つた。下降中風速は次第に強くなり、多大の苦心を嘗て、エモンズの心配しつゝ待てるC IVに無事歸着したのはその夕刻六時半頃であつた。翌十月二十九日から下山を開始し、往路通り天幕、備品、器具等の引下しをして、モーアとエモンズ

は十一月五日夜おそく打箭爐へ歸還し、ベードソルはベースキャムプで荷造り等をした爲、彼等より數日おくれて山を出た。ヤングは動植物の採集をしつゝ Lolo 地方 Lolo を東に旅行し、十二月三日雅州で三人と一緒になり、所期の目的をほゞ完全に遂行して、無事上海へ歸着したのであつた。

—了—

參考文獻

(1) "The Mountain about Tatsienlu" (G. J., Vol. 75, Apri, 1930).

(2) Herbert Stevens: "Sketches of Tatsienlu Peaks" (G. J., Vol. 75, Apri, 1930).

(3) Joseph F. Rock: "The Glories of the Minya Konka" (National Geographic Magazine Vol. LVIII, No. 4, Oct., 1930).

(4) J. H. Edgar: "Notes on the Mountains about Tatsienlu" (G. J., Vol.82, No. 3, Sept., 1933).

(5) Arnold Heim: "The Glaciation and Solifluction of Minya Gongkar" (G. J., Vol. 87, No.5, May 1936).

(6) Arnold Heim: "Minya Gongkar-Forschungsreise ins Hochgebirge von Chinesisch Tibet" (Bern, 1933).

(7) Terris Moore: "The Minya Konka Climb" (American A. J., Vol. II, No. 1, 1933).

(8) Terris Moore: "The Ascent of Minya Konka" (A. J., Nov. 1933).

(9) A. B. Emmons, 3rd: "The Reconnaissance of the Minya Konka" (A. A. J., Vol. II, No. 2, 1934).

(10) Terris Moore: "La premiére ascension du Minya Konka" (La Montagne, No. 262, Oct., 1934).

(11) R. L. Burdsall and A. B. Emmons, 3rd: "Men against the Clouds" (New York, 1935).

(12) Kingdon-Ward: "Snow Mountains of Yunnan" (G.J., Vol. 64, No. 3, 1924). (抽譯：日本山岳會々報第88號)

(13) S. G. Burrard, H. H. Hayden, A. M. Heron: "A Sketch of the Geography and Geology of the Himalaya Mountains and Tibet" (Delhi, 1933—1934)

(14) 木暮理太郎　「中央亞細亞の山と人」（「山岳講座」第七卷一就中284—5頁及328—9頁）

(15) 黒田孝雄　「1932年のミニヤ・ゴンカ登攀概報」（日本山岳會々報第34號）

ミニヤ・ゴンカ關係主要年表

年　代	人　名	摘　要
1877	W. Gill	ミニヤ・ゴンカ山群北端の Ruh-ching (Riuchi Gongka) に關し記述を殘す。
1879	B. Szechenyi	ミニヤ・ゴンカを Bokunka として始めて記錄し、その高度を 7600 m. (24.936ft.) と算定す。
1923	J. H. Edgar	北方からミニヤ・ゴンカをスケッチし Gangka と命名す。
1929	T. Roosevelt	ミニヤ・ゴンカを Mount Koonka と綴り 30.000 ft.? と記して問題を投す。
1929	H. Stevens	ミニヤ・ゴンカの貴重なスケッチをなす。彼はMinya Gonka と綴る。
1929	J. Rock	ミニヤ・ゴンカ山群の西側を踏査し、山容を巧みに寫眞に收む。Minya Konka と記す。
1930	A. Heim	ミニヤ・ゴンカ山群の周圍を詳細に踏査測量し、且その氷河を研究し、ミニヤ・ゴンカの高度を 7700 m. と算定す。彼は Minya Gongkar と綴る。
1932	R. Burdsall 他三名	ミニヤ・ゴンカ山群の詳細な測量に成功し、且主峰ミニヤ・ゴンカに登頂す。

以　上

千丈澤を繞る山々

法政大學學友會山岳部

一、概　説
二、冬の赤、硫黄岳
三、三月の北鎌尾根より大槍へ

一、概　説

歴史的概説

千丈澤は天上澤、湯俣川と共に高瀬川の源流にして、その源を西鎌に發し今日に於ても登山者によつてはあまり探られてゐない原始境である。千丈澤なる名稱は現在の陸測五萬分の一の地圖によるもので、「山岳」第六年第一號の辻村伊助氏の『高瀬入り』に於ては千丁澤と呼ばれ、現在でも信濃大町の百瀬慎太郎氏は千丁澤が正しいと說かれてゐる。此處では通稱に從つて千丈澤として置く。千丈澤に就いて述べる前に先づ私達の部と千丈澤、及それを繞る北鎌、赤、硫黄との關係に就いて左に登攀年譜を揭げる。

年	月日	登攀個所	摘要	パーティー
一九二七年	六月二十八日より七月二日	赤岳	中山澤出合にキャムプして赤岳四峰まで縦走。所要時間十時間三〇分	高橋榮一郎、信濃山岳會の土橋莊三氏案内者中山彦一、大和由松、近藤一雄
	八月四日	北鎌尾根	大槍より往復	安藤治彌 土屋鑛雄
一九三四年	十月	北鎌尾根	千丈澤生活	岡田友次郎、小倉武雄、山中利貞、近藤一雄（案内）
	十月	北鎌尾根	多門治新道（北鎌澤）より北鎌尾根	宮島英郎、千貿武彌、五味三郎、五十嵐小二郎
一九三五年	三月	赤岳 硫黄岳	中山澤出合にキャムプ	岡田友次郎 宮島英郎 小倉武雄
	七月	北鎌、赤、硫黄	千丈澤合宿	宮島英郎、宮島啓二、岡田友次郎外十名
	十一月	北鎌尾根	千丈澤生活、多門治新道、北鎌澤の偵察	宮島英郎 五味三郎 小倉武雄
	十二月十八日より一月三日	北鎌尾根	ポーラーメソッドに依り、多門治新道より獨標（二九〇七米）まで初縦走	宮島英郎、宮島啓二、小倉武雄、五味三郎、江上久三郎、長岡利泰、關野欽彌外に人夫近藤一雄、太田八郎
一九三六年	三月	赤岳 硫黄岳	中山澤出合に幕營	宮島啓二、五味三郎、長岡利泰、小倉武雄

	七月	北鎌集中攻撃	千丈澤生活	宮島啓二、五十嵐小二郎外七名
一九三七年	三月二十二日より四月三日	北鎌獨標西鎌尾根	中山澤出合幕營	長岡利泰、五味三郎、山本正治、近藤一雄（案内）
	七月二十五日より八月三日	北鎌、赤、硫黄の綜合的研究	千丈澤合宿	長岡利泰、五味三郎以下七名
一九三八年	七月十四日より二十五日まで	北鎌、赤、硫黄の綜合的研究	高瀬入り、千丈澤合宿	長岡利泰、江上久三郎外十六名
	十二月十七日より三十一日まで	赤岳獨標往復	中山澤出合幕營	長岡利泰、江上久三郎、中村史郎、藤野關夫、石原博和、泉谷駿一
	三月十八日より四月一日まで	北鎌平往復	中山澤出合幕營	江上久三郎、内山正治郎、阿部太朔、石原博和、藤野關夫、小林市郎
一九三九年	七月二十三日より八月一日まで	北鎌、赤の綜合的研究	千丈澤合宿	江上久三郎、内山正治郎外二十一名
	十二月十七日より二十八日まで	赤岳硫黄岳	中山澤出合幕營冬季赤、硫黄の初登攀	江上久三郎、中村史郎、石原博和、泉谷駿一、福島元康、秋本力治、各務泰成、李京燦
	三月十六日より二十八日まで	北鎌尾根より大槍へ	天上澤のピンボウ澤出合幕營。北鎌第一峰鞍部に前進天幕建設	中村史郎、石原博和、藤野關夫、福島元康、秋本力治、古屋恭平、大石昇次郎、近藤一雄（人夫）
一九四〇年	七月二十三日より八月三日まで	北鎌獨標以下附近を集中攻撃	千丈澤合宿	中村史郎、石原博和外十五名

卽ち最初に千丈澤に注目したのは一九二七年の夏で、高橋榮一郎が赤岳に初登攀してゐる。積雪期に於て初めて千丈澤に入つたのは一九三五年の三月で、岡田、宮島、小倉の三名が赤、硫黄にアタックしてゐる。そして同

年七月には最初の千丈澤合宿をして北鎌、赤、硫黄の綜合的研究に着手して北鎌の全貌が明瞭となり、同年十二月十八日から翌一九三六年一月三日にかけて冬期の北鎌縱走を行つたが天候不良と凍傷のため獨標（二九〇七米）にて撃退された。（詳細は『三月の北鎌尾根より大槍へ』の項に讓る）。

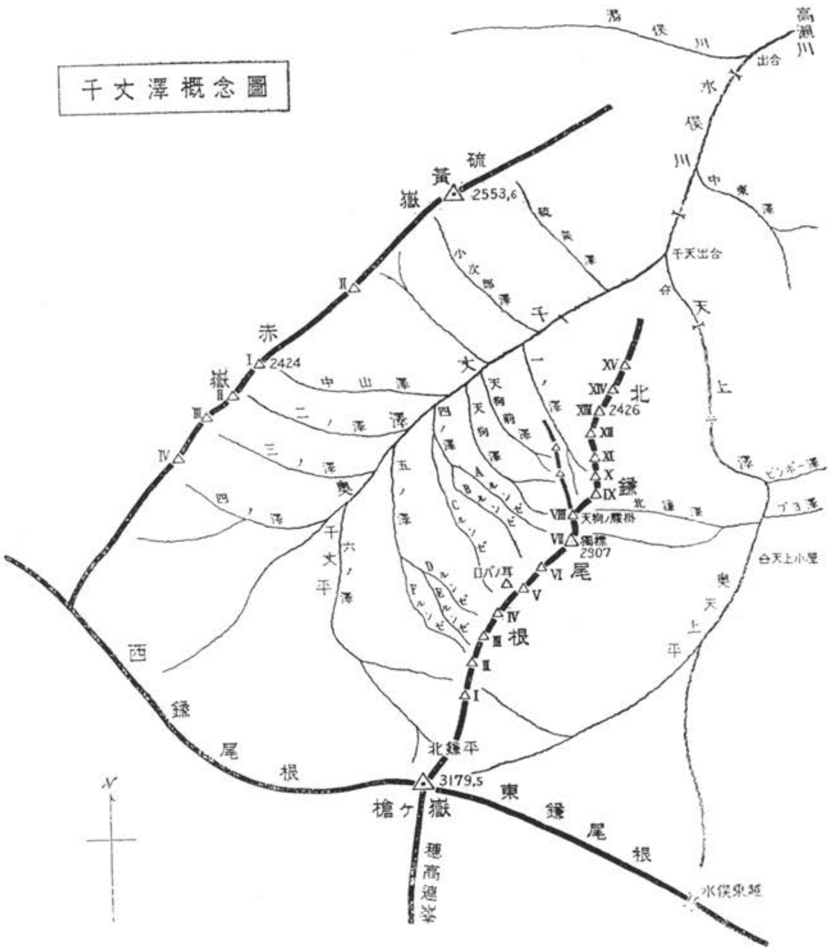
此のアタック以來毎年夏冬春を通じて、北鎌、赤、硫黄にぶつかつてゐたが、パーティーの不揃その他の都合上で、單に偵察程度に過ぎなかつた。かくして冬期の北鎌の獨標より大槍まで、及び赤、硫黄岳は未登攀の狀態にあつたが一九三九年の十二月に至り冬期の赤、硫黄岳が初登攀され、續いて一九四〇年の三月には天上澤より北鎌にアタックして第一峰鞍部に前進天幕を建設して、大槍の頂まで往復し、殘す所は獨標（二九〇七米）と第一峰間のみとなつた。（此の詳細は『冬の赤、硫黄岳』及び『三月の北鎌より大槍へ』の項參照）。

地理的概說

積雪期の千丈澤に入るには大別して二つのルートがあるが（高瀨入りと、上高地より槍を越して西鎌から下るもの）私達は後者よりは比較的容易に思はれる前者を採つてゐた。然し夏は坦々として、長いだけで餘り問題にならない高瀨入りの道も、積雪期となると至る所でデブリに惱まされ、湯俣の出合に滿足な時間に着いた事がない。湯俣の出合には多門治小屋があるが、積雪期には何時も取入口の宮田英雄氏の宅に厄介になつた。宮田氏は此處の社宅に年中一人暮しでゐるが洵に親切な面白い老人である。此處は高瀨川最後の人家で積雪期の北鎌、赤を目指す場合には唯一の根據地となる。

—水　俣　川—

千丈澤概念圖


硫黄嶽
2553,6
赤嶽
2424
槍ヶ嶽
3179,5
西鎌尾根
東鎌尾根
北鎌尾根
穂高連峯
北鎌平
獨標
2907
天狗ノ腰掛
2426
ロバノ耳
高瀬川
湯俣川
出合
水俣川
千天出合
天上沢
千丈澤
小次郎澤
中山澤
二ノ澤
三ノ澤
四ノ澤
五ノ澤
六ノ澤
一ノ澤
天狗前澤
天狗澤
北鎌澤
千丈平
天上小屋
奥天上平
水俣乗越
N

取入口からの上流は例の水俣川を溯行して、千丈、天上の出合まで行くのであるが、夏には一時間半足らずで行ける坦道も、積雪期には夏道を全然用ひる事が出來ぬ爲、五六回の架橋を強要されるのと、道踏のために一日や二日は手間取るのは普通となつてゐる。

此の架橋がやつと終ると千丈、天上出合の釣橋に出て、此處から又崖の腹を捲かなければならないが、夏道は崖の腹に丸木二本を渡してある所もあるので、積雪期には雪がべつとり付いて、道踏も困難で重い荷を背負つては餘り氣持ち良いトラバースではないから、少し時間を掛けても崖の手前の釣橋の所から大天井側の尾根を高く捲いて天上澤へ下つた方が安全である。そうすれば千丈、天上の出合を遙か斜右下に見て岩小屋の前に出る事が出來る。此の岩小屋は十五人位は收容出來る大きなもので、水も小屋の隅の方を流れてゐるので非常に便利ではあるが、天上澤が增水すると、小屋の隅は瀧の樣になり、或る年の秋は寢たまゝ水浸しになつた事もある。入口は大きいので圍をして使用してゐる。

次に夏道から出合への下り口であるが、水俣を溯行して來ると、夏道は釣橋を過ぎてしばらく進むと、急に高捲きになり栂の森林帶に入り出合への下り口は熊笹が密生して見當が付かないが、『右千丈澤。左天上澤』と記した導標を五六十米過ぎて下りた方が良い。

千丈澤

千丈澤、天上澤の出合から千丈澤に入るには、先づ天上澤を渡らねばならないが、積雪期には徒涉は出來ないので、架橋をするのであるが附近には適當な樹はなく、遠くから切り倒して引いて來るのは雪中の難事である。

此處を渡つて千丈澤に入ると澤は狹く左岸の斷崖、右岸の熊笹の急斜面に行手を遮ぎられ、無我夢中で笹にぶら下りながらトラバースしなければならないが、積雪期には雪の急斜面となり大して惡くはないが、スキーの使用は少し危險である。

此のトラバースが終ると、澤は急に展開して、右手には赤、硫黄の峻峰がすさまじい形相でその赤肌を暴露し、左手には峨々たる北鎌の岩稜が聳えてゐる。此の附近から針葉樹、濶葉樹の交錯せる林相も美しく、激流は岩を嚙み、飛沫をあげ、澤は幾重にも曲折して、轉石傳ひに、或は流に沿つてブッシュをかきわけながら二時間餘りも溯ると中山澤の出合に出る。

積雪期には前記のトラバースが終ると、澤は大體雪に埋つてゐて、スキーには絶好の場所となるが、惡くすると中山澤出合までに二三回も架橋をしなければならない年もあつた。此處から上流は、澤も狹く、流は益々激しく、兩岸は偃松、白樺の灌木帶となり、積雪期には谷は全部埋り、約一時間半も上ると奥千丈平に出る。

次に天幕場であるが、積雪期には中山澤出合の栂の森林帶に天幕を張る。此處は積雪期には最後の水場であり、雪崩の危險も一番少い樣に思はれるし、又何よりも三時間餘りで中山澤をつめて赤岳の獨標の上に立つ事が出來る。又此の天幕場は夏にも使用出來るのであるが、少し濕氣を帶び、北鎌を岩登りのゲレンデとする場合には稍不便である。

此の場合には奥千丈平、卽ち赤岳四ノ澤出合の北鎌側に良い天幕場がある。此處は數年前私達の部で手を加へたもので五つ位張れ、水はすぐ前を流れ、北鎌の大觀が存分に味はれる恰好の場所である。此の外の天幕場としては西鎌の最低鞍部（二六〇〇米附近）から千丈澤の大雪渓を下つて來て、左に大きくカーブしてゐる瀧の所か

ら約三〇〇米も下ると赤岳側に草地の天幕場がある。此處は從來慶應の人たちが入つてゐた所で、昨年夏（一九三九年）手を入れて九つも張れる様になり階段狀になつてゐて立派なもので、北鎌の大槍附近を岩登りのゲレンデとする場合には甚だ便利な場所であるが、雪渓がなくなると水が不足する心配がある。

—北鎌尾根—

北鎌は槍ヶ岳を中心として東西南北に派出せる岩稜のうちで、北東に延び、千丈、天上の出合深く落入つてゐる鎌の如き痩尾根である。その大槍から「天狗の腰掛」までは鋸の齒の如く多數の岩峰が連續し、それより下は假松や白樺の密生で、數年前竹村多門治氏が多門治新道を開拓したが、殆んど道らしい道ではなく、僅か數ヶ所の惡場に針金を吊し、假松や白樺に鉈目を入れたのみである。

北鎌のピークは小さいものを入れると三十位もあつて數へれば限りがないので、大きく分けて十五峰とする。先づ下から多門治新道を登つて來ると、第十五峰と第十四峰の鞍部の假松の痩尾根に出る。更に進んで行くと第十三峰と第十二峰の鞍部に出る。

此處は一九三五年の冬私達が北鎌縱走をした際に第一天幕を張つた所である。

此處からはだんだん歩き易く、どんどん登つて行くと第十一峰の上に出る。此の登りは赤肌の岩に草を付けて積雪期には先づ第一の難關でどうしても千丈側を捲かなければならない。此を越してほつとすると又もや第十峰は殆んど垂直の岩壁で聳え立ち、此も鞍部から千丈側のテラスに出て草付きの上を攀ぢ登る。

此の二つのピークは此の附近での惡場で、赤岳の獨標から眺めると駱駝の瘤の様に見えるので私達は「駱駝の

瘤」と呼んでゐる。

更に次のピークを越すと北鎌澤のコルに出る。此處もやはり一九三五年の冬期に第二天幕を張つた所であるが、無雪期に天幕を張るのは少し無理の様に思はれる。

それから假松や岳樺の尾根を登つて行くと「天狗の腰掛」（松高「わらぢ」一九二八年では天狗岩）がある。名前は恐ろしい様だが大した事もなく登る事が出來る。此れから一段登ると所謂北鎌の獨標であるが、此の間に岩峰が四つ介在して、積雪期には相當な難物でどうしても天上側を捲かねばならない。獨標の登りは距離では大してないが、相當な難關で千丈側にある二十米許りのチムニーを利用するか又チムニーの左を登るか、さもなくば千丈側を捲いて獨標の先へ出るよりルートは無い様である。

尙天上側は見た目は良さそうであるが、取付いて見ると案外の惡場で、積雪期にはどうしてもリッヂ通りに登らなくてはならない。此の獨標の二九〇七米の標高は昔の古い地圖に記されてあり、現在は十三峰の二四二六米が獨標になつてゐる様であるが、從來通り二九〇七米を獨標として置く。

獨標を越して更に進んで行くと、「ロバの耳」に達する。

此は大槍の頂から眺めると第五峰と、千丈側にあるすぐそばの岩峰の二つで丁度ロバの耳の様に見えるのである。

さて此れから後は第四、三、二峰と介在する鋸の齒の如き長い岩稜を尾根傳ひに各ピークを越して行くと、二峰と一峰との鞍部に出る。此の鞍部は非常にガラ〳〵の痩尾根で夏には天幕を張れないが、今春三月（一九四〇年）には天上澤から登つて此處に前進天幕を張つた。此處から大槍は目の前に見えてゐるが、まだ相當長く第一

峰は千丈側を捲いて再び尾根傳ひに大槍の裾の北鎌平に出る事が出來る。此の平は北鎌の樣な痩尾根にはあるとは思はれない廣い平で大きな岩が堆積してゐる。

次は大槍の北面を登る事になるが、是はリッジ通りに登りチムニーを利用してお宮の横に出るか、さもなくば千丈側を捲いて小槍寄りに登りお宮の後に出るかの二つのルートがあるが、どちらでも甲乙はなく、肩の小屋側から登るルートより良い樣である。

積雪期にはリッジ通りに登りチムニーを越してから千丈側をトラバースして小槍寄りにお宮の後に出た方が良い。

—北鎌尾根西面（千丈澤側）—

北鎌尾根の岩場で最も壯大なのはその西面、卽ち千丈側の岩場である。北鎌も多門治新道の開拓により近年著しく登山者に親しまれて來たが、殆んど全部が尾根の縱走のみにて此の岩場は顧みられないで、喧噪なる登山界から取り殘されてゐる。その大觀に接しようとするならば、赤岳より眺めるのが最も良く、積雪期なら尙更素晴しい。右端の槍のシュピッツェから鋸の齒の如き峨々たる岩稜が續き、千丈澤を目がけて多數の澤、岩稜が走り、屛風の如き岩壁が峭立して全く威壓的である。

此の岩壁、澤の登高を目指す場合には、前述（千丈澤の項）せる奧千丈平のキャムプ・サイトに生活して、早朝に天幕を出發すればそのルートに依り大槍までも延ばせて西鎌を下る事が出來、快適な一日のクライミングを味える。そのルートとしては下より一の澤、天狗前澤、天狗澤、四の澤、五の澤、六の澤が主なるもので、此の

外幾多の岩稜、岩壁等のバリエーション・ルートがあり、何れも瀧あり、チョックストーン、チムニー等あり多種多様の岩場を形成し、岩登りのあらゆるテクニックを合理的に利用出來、存分に岩を樂しむ事が出來る。以下是に就て簡單に述べよう。

一の澤

千丈澤を溯り硫黄岳から小次郎澤が落ち込むのを見て約三百米も進むと、左から最初の澤が入つて來る。是が一の澤である。

入口は廣くガラ〳〵の石の堆積で餘り惡くは見えないが、約二十分餘りも登ると三米位の瀧がある。此を越すと目の前に瀧が二つ續いてゐる。下の瀧は約三十米位で少し冠り氣味なので、敬遠して右の急な草付を卷き、次ぎの瀧は巨大なチョックストーンを挾んで居る二十米許りの瀧で、是は文句なしに右を捲く。

此の三の瀧から一旦澤に下り五〇米位登ると四の瀧がある。此の瀧は約五米位で無理をすればそのまゝ登れるが右に羚羊道があるので右を捲く。此の附近から傾斜はゆるくなり「駱駝の瘤」が上方に見えて尾根は間近である事がわかる。暫らく登ると雪渓に入り、傾斜は又もや急峻となり、カッティングしながら三〇分も登ると、澤は二つに分れ、左するものは本澤で「駱駝の瘤」につき上げ、右するものは天上の北鎌澤のコルに出る。

左するものは暫らく登ると二米位の瀧があり此を簡單に越すと、急峻な草付きとなり、第十峰と十一峰の間に出る。右するものも急な草付きとなり間もなくして北鎌澤のコルに出る。澤の入口から此處まで約四時間位で、早朝に天幕を出れば「天狗の腰掛」を越して四の澤のAルンゼを降り、日のあるうちに天幕に歸る事が出來るが相當なアルバイトを覺悟せねばならない。

天狗前澤

更に一の澤の上方から出てゐる澤が天狗前澤である。入口から相當急峻で細い流れに沿つて約二十分餘りも登ると急峻な雪渓となり雪渓の中途で屏風の如く兩側の岩壁は迫り、狹いルンゼ狀となる。此の雪渓の盡きる少し手前で第一の瀧に會ふ。此の瀧は二十米位あつて右側の岩壁寄りに登るのであるが、水が流れホールドが不確實で相當な難物である。びしよ濡れになる事は覺悟せねばならぬ。此の瀧は殘雪の多い時は殆んど埋つてゐる。此を越すと又續いて二つの瀧がある。いくら殘雪の多い時でも此の一の瀧で雪渓は盡き、二、三の瀧は何時も露出してゐるので雪渓の末端から左側のシュルンドの間を瀧の下まで下る。此の瀧は十米位であるが巨大なチョックストーンを右側に挾み、左はオーバーハングである。然しチョックストーンは全く浮いてゐて動くので左側を登らなければならない。第三の瀧は五米位で下の取付きはホールドも足場も悪いが肩を足場に使用すれば容易に登る事が出來る。此處を越して三十分位も登ると又もや巨大なチョックストーンを挾んだ第四の瀧に出る。是は約十米位でチョックストーンと左側の岩壁の間をフリクションで登るより方法はない。此の附近からルンゼも廣く明るくなつて、もう悪場はないと思つて安心してガラ〳〵の石の堆積の上を樂しみながら登つてゐると二十米餘りの瀧が行手を遮る。左側は一見して容易に登れそうであるが逆層の上に上部は稍オーバーハングであるから右側を登つた方が良い。是れから上部は滑瀧が十幾何も續いて一時間も愉快なクライミングを樂しむと上部に偃松や岳樺の尾根が見え始め、急峻な草付きとなり約一時間もすると尾根に出る。此の尾根は「天狗の腰掛」から千丈澤目がけて走つてゐるもので終始不愉快な偃松や岳樺や石楠花の藪をくゞり、急峻な尾根を登り大きな瘤を二つ越すと「天狗の腰掛」に出る。此の尾根の登りは約一時間半位である。千丈の分岐點からこの「天狗の腰掛」

までは大體六時間位のアルバイトである。

天狗澤

天狗前澤に續いてすぐ上方から入つてゐる澤が天狗澤である。入口は小さくて僅かに偃松や岳樺の藪の間から水が流れ出てゐるに過ぎないので餘程注意しないと見當が附かないし、積雪期には殆んど分らない。千丈の流れに岐れて、藪をくぐつてしばらく登ると、澤は急に緩く展けてガラ〳〵の小石の堆積となり、上方の雪渓の溶けた水は細い流となる。暫らく登ると澤は右に大きく曲り、殆んど惡場と云つてはなく、瀧も若干散見するが大したものではなく簡單に越せる。澤は割合明るく約一時間許りも登ると、澤は又左に曲り二つに岐れ、左するものは「天狗の腰掛」から出てゐる尾根につき上げてゐる。是も小石の堆積で問題にする程でもない。右するものは本澤で上部に至り更に二つに岐れ右の本澤は「天狗の腰掛」のバットレスにつき上げ、左に入る小さい澤は上部は草付となり「天狗の腰掛」から二つ目の瘤の右裾に出てゐる。

此の天狗澤は說明する程の澤でもなく入口から三時間半位で尾根に出る事が出來る。

四の澤

千丈澤を更に溯り獨標（二九〇七米）の左裾から出てゐる尾根の裾を捲いて數丁上ると四の澤の入口に着く。入口は廣く相變らずガラ〳〵石の堆積の上を二十分も上ると、澤は二つに岐れ、左するものを更に登ると亦二つに岐れる。左よりAルンゼ、Bルンゼ、Cルンゼとする。

Aルンゼは獨標の左裾から出てゐるもので、Bルンゼと岐れてしばらく登ると、五米から十米許りの瀧が大小取り混ぜて五つ許りあるが、皆左右の草付を捲ける簡單なもので、此の部分を除くと大體天狗澤に似てガラ〳〵

石の堆積で、獨標直下は急峻なガレとなつてゐる。所要時間は大體四時間位である。

Bルンゼは「ロバの耳」の左裾から出てゐるもので、下から見ると相當險惡に見えるが餘り大した物ではない。Aルンゼと分れてからは、ルンゼは廣く明るく、ルンゼとは云へない様であるが、三十分餘りも登るとルンゼは急に右に大きく曲り、兩側の斷崖は迫り狹く暗くなり急峻な雪渓となる。此の雪渓は何時も遲くまで殘り、此處の地形から察して、相當惡い瀧が若干あるらしい。此の雪渓はカッティングで登る程急峻なもので約三十分も登ると此は盡きて目の前に二十米餘りの瀧が行手を遮つてゐる。上部に巨大なチョックストーンを挾んで非常に惡く、此の瀧だけで四十分位も費すであらう。兩側は切り立つた岩壁でどうしても瀧を登り、右側の岩壁とチョックストーンの間に出なければならない。

此處を越すともう瀧はなく三十分餘りも登るとルンゼは大岩壁につき當り左に曲つて「ロバの耳」の左裾に出る。「ロバの耳」直下はホールドも足場も惡く注意を要する。所要時間は大體五時間位である。

Cルンゼは「ロバの耳」の右裾につき上げてゐるもので、Aルンゼと分れて暫らくガラ〳〵石の堆積の上を登ると小さな瀧が四つ連續して愉快なクライミングを樂しませてくれる。此を越して細い流に沿つて三十分位も登ると急峻な雪渓の上に出る。殘雪の少い時はスノーブリッジの様になり危險なので右側の一枚岩との間のシュルンドに下りて、チムニー登りの形式で上に出る事が出來る。此の上に十米餘りの瀧があるが、瀧は惡くてどうしても登れないので左の草付きを捲く。此處で一息してほつとして上方を眺めると、又もや瀧が三つ續いてゐる。最初の瀧は巨大なチョックストーンを挾み二十米位の高さで左の岩壁を捲き、その次の二つは何れも十米位であるが非常に惡く右の壁を捲く。此處からは大して惡場はなく雪渓の上を一氣に乘越すと「ロバの耳」が左に見え

北 鎌 尾 根 ——赤岳第三峯より望む——　　石 原 博 和

て來る。所要時間は四時間半位である。

五　の　澤

五の澤も四の澤と同じく途中より三つに岐れ、左よりD、E、Fルンゼとする。

DルンゼはEルンゼと分れて急峻なガレを登ると五米餘りの瀧がある。此の瀧は左右どちらでも捲ける。此の上に又三米餘りの瀧があるが是も左右どちらでも良い。此の附近からルンゼは急角度に上昇して、樂しい岩の感觸が次から次へと連續して滑瀧や、チョックストーンを挾んだ五米許りの瀧を越して一時間も登ると、ルンゼは益々峻嶮になり、兩側の大岩壁は迫り、約二十米許りの瀧にぶつつかる。此の瀧は上部にチョックストーンを挾みオーバーハング氣味でどうしても左側の一枚岩と瀧との間を登るよりルートはなく、相當な惡場である。右には殆んど取付けそうにもない逆層の大岩壁が峭立し、ルンゼは左に曲り又もやチョックストーンを挾んだ十五米許りの瀧がある。此の瀧は割合良く右側を登つた方が良い。是を過ぎると北鎌の尾根は間近に見えて、終始落石の絶え間ない急峻なガレを登りきると三峰と四峰の間に出る。所要時間は四時間位である。

Eルンゼは距離にしては短いが相當惡いルンゼである。Dルンゼに岐れて間もなく第一の瀧にぶつつかる。此の瀧は五米位であるがオーバーハングの上に水がちやぶ〳〵流れ、どうしても右の壁を捲かなければならぬが此の壁が又惡く、ジッヘルの場所も惡く相當な惡場である。下手にまごつくと一時間以上も費す事であらう。此處を越して暫らく登ると雪渓となり、これが盡きると第二の瀧がある。

此の瀧は十米位で巨大なチョックストーンを挾みどうしても直登出來ないので、右側の尾根から出てゐるルンゼに入り、此の尾根の下部を捲くのであるが、急峻な草付きと岩場を混え、その上オーバーハングの巨大な岩塊

が突出して相當な惡いトラバースである。此の瀧が終ると次にすぐ第三の瀧が控えてゐる。此れも巨大なチョックストーンを挾み、水蝕された十米許りの瀧で右側を捲くのであるが、物凄い壁で、三つ道具の厄介にならねばならない。此れから後はルンゼは急峻になり兩側の岩壁は峭立してくるが惡場と云ふ程の所もなく、チョックストーンを挾んだ瀧が無數に散見するが、大した事もなく尾根近くは急峻なガレとなり、第三峰の右裾に出る。所要時間は大體六時間位である。

Fルンゼは五の澤の本澤と稍下方で岐れ、暫らく登ると雪渓が長く續く。約一時間もすると行手は大岩壁となり、右に小さなルンゼが入り六の澤との間の尾根につき上げてゐる。Fルンゼは左に曲り間もなくチョックストーンを挾んだ瀧にぶつつかるが大した事もなく登る事が出來る。此の附近からルンゼは右に曲り、急峻になり、兩側には多數の岩峰が峭立して愉快な登攀が續き相變らずチョックストーンの瀧が三つ許りあるが、何れも左右を捲く事が出來、行手は第二峰から出てゐる岩稜の末端のバットレスにつきあたる。

ルンゼは此のバットレスの間にあるチムニーにつき上げてゐるが、上部の出口に巨大なチョックストーンを挾んでゐて此のチムニーの登攀は不可能で、バットレスの下部の草付きのバンドからEルンゼとの間の痩尾根をトラバースしてEルンゼに入る。所要時間は約四時間位である。

六　の　澤

五の澤に續いて出てゐる澤が六の澤で此は北鎌の澤のうちで一番長いが、大槍の上から一見して分る様に瀧もなく、ガラ〳〵の小石の堆積の平凡な澤である。中途より二つに分れ左するものは一峰の左裾につき上げ愉快な岩登りを樂しませてくれる。

右するものば大槍の裾の北鎌平に出てゐる。更に大槍直下で大槍と小槍との間にルンゼとなり深く切れ込んで階段状になつてゐる。

此の附近は特別に取上げる程のルートとてはなく、此の附近全體が岩登りのゲレンデになり樂しい岩の感觸に浸る事が出來る。

—赤　岳、硫　黄　岳—

大槍の頂の上に立つと眼下の千丈澤のカールを距てて、西鎌より北方に派出してゐる赤褐色の岩稜が目に映ずる事であらう。此處から眺めると四圍の山々に壓迫せられて平凡な山に見え、その登攀は容易に出來そうであるが、實際は此に反して岩は脆く不安定で、ホールド、足場は不確實で落石多く簡單には寄せ付けない。

赤岳の大觀はなんと云つても積雪期、殊に三月が素晴しい。直線的な赤褐色の岩肌に白の對照も美しく、その威容は筆舌に盡し難い莊嚴さである。

次に赤岳と硫黄岳の限界は餘り確定してゐない。私達は中山澤より右へ二つ目の小さなピークまでを赤岳とし、それから右を硫黄岳としてゐるが大體中山澤を限界としてゐる。赤の主峰は四つ數へる事が出來る。

西鎌から四の澤のザッテルまでは物凄い偃松の藪くぐりで、約一時間餘りもすると四の澤のザッテルに着き、眼前に赤岳の全貌が展開する。此のザッテルからは痩せた岩尾根となり大して惡場と云ふ程の所もないが、始終不氣味な落石が絶間なく續く。

一峰から中山澤のザッテルえの降りは非常な惡場で、最初からリッジ通りに下るのは避けて、千丈側を捲き氣

味に下り、再びリッジに戻り、ザッテルに降つた方が良い。

リッジに出てからは急峻な一枚岩で、觸れる岩は脆く、ホールドは一枚々々剝取れ、落石は多く、千丈、硫黄澤の兩側は殆んど垂直に切れ込んで相當な難關である。

中山澤のザッテルから更に進むと小さなピークが次から次へと現れて來る。

最初のピークは硫黄側を捲き、その次は割合良くリッジ通りに登る。此の二番目のピークを越すと、一寸した平な場所で、有明村の近藤一雄案内によれば此處までが赤岳の領分であるとの由。

その次の三番目のピークは中途にスラブがあり、僅かに割れ目があり、相當に惡い。どうしてもフリクションによらなければならない。此のピークの下りは割合良くその次の四番目のピークは偃松で問題なく登る事が出來る。

その次の二つのピークは今までのピークにも劣らぬ惡さで、何れも硫黄側を捲いて硫黄岳の三角點の手前の大きな二峰の頭に出る。

此の二峰の頭から三角點の鞍部までは偃松の尾根で、此の頭は廣々としてゐる。此の頭から硫黄側の偃松を漕いで下つて行くと鞍部に着く前に行く手の山稜は岩尾根となり、岩峰が聳えてゐるが、千丈、硫黄の兩側は惡いので尾根傳ひに鞍部に下つた方が良い。

此の鞍部からの登りは急峻なガレが二筋になつて硫黄側に出てゐるので、此のガレを登ると三角點の手前の肩に出る。此の肩から三角點まではだら〳〵の偃松の尾根續きで、小次郎澤の鞍部からは益々偃松は深く、一寸したアルバイトの後三角點に立つ事が出來る。

次に千丈澤からのルートとしての澤に就いて簡單な説明を加へよう。

四の澤

奥千丈平から三十分も流に沿つて大きな石の堆積の上を進むと殘雪が暫らく續き、二十米許りの瀧にぶつつかる。水はあまりないが逆層でどうしても登れないから右側の草付きを捲くのであるが、急峻で相當な惡場である。此を越して二十分餘りも登ると、第二の瀧がある。此の瀧は割合良く左の方を捲き氣味に登る。此の附近から澤は急角度に上昇してガラ〳〵の石は絶間なく落ち、間もなく第三の瀧が控えて居る。此の瀧は三十米位で左側は逆層のスラブに草付を混え、右側は同じく逆層の上にザラメの砂をのせてどうしても登れないから左側の尾根から出てゐる澤に入り約一〇〇米許り高く捲く。此の瀧をすぎると澤は益々急峻となり、水はなくなり約三十分も落石に惱まされながら苦しい登高を續けるとザッテルに出る。所要時間は大體三時間位である。

三の澤は別段此と云つて惡場も瀧もなく、只長いだけで、ガラ〳〵の石の堆積のみで四峰と三峰のサッテルにつき上げてゐる。

二の澤も平凡な澤で途中に十五米餘りの瀧があるが簡單に左側を登る事が出來、二峰と一峰の間につき上げてゐる。

中山澤

此の澤は有明村中山彦一案内（常念で遭難した）が最初に登つたので此の名稱がある。

赤岳を目指す場合に一番親しまれる澤で、入口からザッテルまで惡場もなく大體二時間位で登る事が出來る。積雪期には赤岳への唯一の登路でザッテル直下までスキーの使用は可能で、降りは存分にボーゲンを樂しませて

くれる。

次ぎに硫黄岳の三角點の左側の肩につき上げる澤がある。此の澤は上部に於ては二つに岐れ、瀧もなく急峻なガレとなつてゐるが、入口は栂の森林と藪で、千丈澤への落口は絶壁となり終始水が流れ落ちて餘り面白い澤ではないからルートとしては不適當である。

小次郎澤

此の澤は硫黄の三角點の左のザッテルから出てゐる澤で、千丈澤からの入口に十五米餘りの瀧があり左側の尾根を假松にぶら下り乍ら高捲きをする。此れから上は急峻なガレが續いてゐる。

此の澤は陸地測量部の人達が三角點を立てるために登つた時に、獵師の永田小次郎を同行して此の澤を登つたので此の名稱がある。

硫黄澤

此れは硫黄の三角點の右下から出てゐる澤で、千丈澤からの入口は崩れ谷となり、大きな石のガラ〳〵の連續で尾根近くは急峻な草付きと灌木になつてゐる。然し此の尾根から三角點までは急峻な假松漕ぎでルートとしては不適當である。

以上大體私達の綜合的研究に就いて述べて來たが、此んな具合に調子良く登れるわけではなく、研究の不充分な個所も多く、拙筆の運びではその表現も不充分で、將來大方の御盡力により、より一層研究されんことを望む次第である。

二、冬の赤、硫黄岳

無雪期の赤、硫黄嶽が一九二七年に初登攀されて以來、私達の部では夏春共に屢々登攀して居たのである。然し冬季に於ては唯一九三八年の十二月にアタックしたが天候不良の爲失敗したので、翌一九三九年の冬に再び挑戰した。此の記錄はその時のもので澤出合のベースキャムプより赤、硫黄嶽に登攀せるもので、連日快晴の春の様な天候に惠まれて所要時間は非常に短縮されたが、普通の冬なら相當な時間を要する事と思ふ。尙東京の本部角田吉夫氏へ通信の爲使用した傳書鳩は、信濃大町の鳩協會から借用したものであるが大體不　功であつた。

登攀報告

パーティー

リーダー　江上久三郎　中村史朗

石原博和　泉谷駿一

福島元康　李京燦

秋本力治　各務泰成

近藤一雄（人夫）他に荷上げ人夫二名

期間　一九三九年十二月十六日——二十九日

登攀日誌

十二月十六日　晴　新宿夜行發

千丈澤を繞る山々（法政山岳部）

十七日　晴　大町對山館―笹平―葛溫泉
十八日　晴　葛溫泉―湯俣出合
十九日　晴　出合より千、天出合まで荷上げ
二十日　晴　出合―千、天出合岩小屋
二十一日　晴　岩小屋より中山澤天幕場まで荷上げ
二十二日　晴　岩小屋―中山澤天幕場天幕建設、江上來る
二十三日　晴　登攀隊　天幕―中山澤―赤岳―天幕
　サポート隊　天幕―千丈澤―三の澤出合―天幕
二十四日　晴　登攀隊　天幕―中山澤―硫黄岳―硫黄澤―千丈澤―天幕
　サポート隊　天幕―中山澤の登攀隊スキーデポー―千丈澤―硫黄澤出合―天幕
二十五日　晴　千丈澤にてスキー練習、並に西鎌にて新人養成
二十六日　晴後雪　前日に同じ
二十七日　晴　天幕撤收　天幕―千、天出合―湯俣出合
二十八日　晴　湯俣宮田氏宅滯在
二十九日　晴　湯俣―葛―松本

紀行

一二、一六　晴　新宿夜行發

諸準備で慌しい出發前のいら〳〵した氣持もいざ汽車に乘込んでしまふと、すつかり忘れて、多年憧れた冬山が走馬燈の様に次から次へと移り變る。苦心して集めた裝備、食糧は八十貫にも及んだ。

一二、一七　晴　大町對山館（一〇、三〇）—笹平（一一、〇〇—一一、二〇）—葛温泉（一二、三〇）

早朝信濃大町着。最早十二月中旬と云ふに町中には雪一片も認められずパンパンに乾き切つて居る。然し良く晴れたアルプスの連山は清澄な大氣の中に純白の雪を戴いた姿で迎えて呉れ、くつきりと大空を切る雪稜は盛んに雪煙を上げ、吾々の闘志をいやが上にも駈り立てる。何時も御厄介になる對山館にて諸準備の後、車に分乘して葛温泉に向ふ。笹平にて車を捨て高瀬の溪谷に沿ひ溯上ること一時間にして葛温泉に着く。

一二、一八　晴　葛温泉（八、三〇）—七倉澤（九、〇〇）—神澤（九、四〇—一〇、〇〇）—濁小屋（一一、〇〇—一二、〇〇）—第五發電（一二、四〇—一二、五〇）—名無澤（二、一〇—二、二五）—湯俣出合宮田氏宅（四、二〇）

高瀬の溪谷を溯上る。例年になく積雪は少く所々に土も出てゐるので輪樏も履かないで歩く。七倉澤、神澤と過ぎ濁小屋にて中食を攝る。何時も入るので此の道には充分馴れて地圖より詳しい積りだが、實に長道だ。第五發電での御茶の接待も先を急ぐので憩ふ間もなく出發。名無澤より積雪深くスキーを履く。出合の宮田老人はうれしそうに、にこ〳〵顔で迎えて呉れ、早速河原の温泉に浸り電氣炬燵で暖を攝る。宮田氏の歡待にすつかり時の過ぎるのを忘れて十一時半寢床に入る。

一二、一九　晴　出合（一〇、一〇）—中東澤（一、〇〇）—千、天出合手前釣橋（四、〇〇—四、二〇）—出合（六、三〇）

早朝人夫二名を歸す。そのため千、天出合まで二回に荷上げをする事にする。今日は道踏が主なので荷は稍々輕くしてスキーを運ぶ。

朝のうちに準備してあんまりのんびりし過ぎて、出發したのは十時を少し廻つて居た。

取入口より水俣川の斷崖の夏道をからんで、山の神手前の釣橋を渡り夏道に沿ふ。夏道は殆んど絶壁の中腹をからんでゐて、その根を水俣の激流が岩を嚙み飛沫を上げて流れ、取入口から千、天出合までは餘程積雪多く澤が埋らない限りは、スキーの使用は不可能である。雪は例年に比較して非常に少く、そのため殆んど夏道を通りリュックを置いて空身で一人づつ交替に輪樏でラッセルする。スキーは背負ふわけには行かず手に持つて歩くので、相當にもて餘しながら進む。

中東澤出合の左岸の絶壁まで來ると、夏道は氷柱と雪で閉されて恰もアーチの如くになつて居る。例年なら手前に橋架けをするのであるが、時間がないので無理をしてピッケルで道を作り乍ら通過したが、氷の上を輪樏で歩くのは餘り氣持ちの良いものではなかつた。

最後の高廻りも斷崖に架けられた丸木橋の夏道を通り、千、天出合の釣橋の手前に來た時はもう四時を少し過ぎて居た。暮れ足の早い冬の日は最早や薄暗く、木蔭にリュックを置いて出合へ引返す。本日の行程僅に一里餘。然るに時間にして六時間餘も費して居る。此を見ても此のコースが如何に惡場の連續であるかが判る。

一二、二〇　快晴　氣溫—11°c（午前九時）

湯俣出合（九、〇〇）—千、天出合釣橋（一〇、二〇—一〇、五〇）—岩小屋（一一、五〇）—釣橋（〇、四五）—岩小屋（一、五〇）

昨日の道踏があるので荷物は重かつたが餘り休むこともなく、案外早く昨日の荷上げの場所に着いた。そのまま岩小屋へ。

釣橋を渡ると例年なら大天井側の尾根を高く捲くのであるが、積雪が少いので夏道を通り餘り時間を要しなかつた。岩小屋にて晝食後昨日の荷を岩小屋に運び、日暮までには時間があるので、千、天出合に橋架けをして、千丈澤入口の惡場の道踏をして岩小屋に寛ぐ。

眞黒な顏に物々しく毛皮を着て、焚火を取り圍みあぐらをかいて居る樣はまるで山賊の酒盛の樣だ。早く寢るのも名殘惜しく雜談に花を咲かせ、天上の流れを子守歌の如く聞き乍ら眠に着く。

一二、二一　快晴　氣溫午前九時—10°

岩小屋（九、一〇）—千、天出合（九、二〇）—硫黄澤（一二、一〇—一二、三〇）—中山澤天幕場（一二、〇〇—二、三〇）—岩小屋（四、〇〇）

夜明けの寒さが身にしみて目が覺める。外に出て見るとまだ眞暗だが、空一面良く晴れて天氣は相變らず良いらしいので又シュラフにもぐり込む。今度目が覺めた時はもうすつかり明るくなつて少し寢過ぎてしまつた。

今度は荷上げをするので荷を重くして出發。

昨日架けた橋には、もう一寸程の水が張り、つる〳〵滑る。昨日道踏した夏の熊笹帶の急斜面の道はもう堅く凍つて居て輪樏の爪がざく〳〵と氣持ち良くさゝる。此のトラバースが終つて千丈澤に下りたが、積雪が少いのでスキーも履けない。澤の中は大きな石がぼこ〳〵出てボカリ〳〵ともぐり込むので流に沿つてブッシュを分け乍ら歩く。小次郎澤出合まで來ると北鎌から雪崩が出てゐるので硫黄側に渡りスキーで進む。約三十分許り登る

と行手は斷崖で遮られ、橋を架けようとして適當な場所を捜して居ると昨春（一九三九年三月）の橋が殘つて居るのでその上を北鎌側に渡る。かくして千丈澤を溯上ること五時間餘にして中山澤出合の天幕場に着く。荷物は木蔭に置き、歸りはスキーを樂しみ乍ら岩小屋へ。

一二、二三　快晴　氣溫　午前九時—8°c

岩小屋（九、〇〇）—小次郎澤（一一、三〇）—中山澤天幕場（二一、〇〇）午後三時頃江上來る。

吾々はなんて天氣男許り揃つてゐるのであらう。今日も快晴で冬山には珍らしく天氣續きだ。殘りの荷上げに出發。荷は馬鹿に輕く昨日よりも一時間許り早く天幕場に着く。

雪洞を二つ作り、食糧と傳書鳩の鳩舍に當つ。午後三時頃後發の江上單身來る。

連日の疲勞で明日は休養にしてスキー練習でもしたい所だが、山に入つて一週間も快晴が續き、いさゝか不氣味になる。なんと云つても冬山だ、此の分だと崩れ始めると何日間吹雪が續くかも分らないので、明日は赤岳の縱走に行く事にする。

一二、二三　快晴　氣溫　午前九時—8°c

赤岳登攀

登攀隊　江上久三郎、中村史郎、近藤一雄（人夫）

天幕（六、〇〇）—赤岳第一峰（一一、二五—一一、三〇）—第二峰（一二、〇〇）—第三峰（一、一〇）—第四峰（一、五〇）—三の澤出合（三、一〇）—天幕（四、〇〇）

サポート隊　石原、泉谷、福島、秋本、李、各務

天幕（九、〇〇）―中山澤コル下スキーデポ（一一、〇〇）―天幕（一二、三〇―一、三〇）―三の澤（二、四〇）―天幕（四、〇〇）

昨夜は相當に冷えてしばしば目が覺めた。冬の四時はまだ眞暗だ。出發の準備をして、焚火の明りで朝食を攝る。凍る様な星が林間にまばらに輝いて、今日の快晴を約束してゐる様だ。焚火に寒さをしのぎながら夜明けを期しての赤岳挑戰を靜かに待つ。午前六時、愈々樹間がほのかに明るくなつて來た。サポートを石原に一任して出發。天幕を出ると栂の森林帶のすぐ上に雪の一線によつて碧空に劃された中山澤のコルが遙かの彼方に見える。

連日の快晴で雪は良くしまり、ラッセルも樂だ。暫らく登ると右手に赤岳獨峰の岩膚が凄味を帶びて吾々の頭上に蔽ひ被さる様に現れる。澤は中途より大きく右にカーブして、又中山澤のコル下で少し右にカーブする。始終左右の岩壁、澤を見て雪崩を注意しながら登る。

やつと北鎌尾根を出た陽光は、赤岳の赤褐色の岩肌に照りつけて、ます〳〵赤味を帶びて凄味を加へ、莊嚴な景觀を現出する。コルは一つの大きな凹形を作り、然もその兩側には岩峰が聳え立つて居るので、窓でも開けた様に青空を覗かして居る。

午前九時中山コル直下にスキーデポ。輪樏に替へる。中山澤のコルから一峰への登路は夏でも非常に峻嶮なリッジで、冬にはべつとり雪を付けて尙更悪いので、吾々はコルへ出るのを避けて、第一峰より出て居る尾根より直接一峰に取付く登路を取る。

此の主峰の尾根に至る澤は、夏は非常に深く切れ込んでルンゼ狀になつて居るが、澤一面は雪で埋り、その上ウィンドクラストして居る。次第に急峻となるのでアイゼンに替え、雪崩の危險を警戒し乍らも一歩々々ステップを切つて愼重に登る。尾根近く斜面はます〳〵急峻となりジクザックを五六回切つて、十時五十分遂に尾根の上に出た。

遙か下方を眺めると、吾々のスキーが小枝でもつきさした様に小さく見えて居る。

目を轉ずれば谷底より尾根筋近くまで純白の雪に蔽はれ、それより赤裸々の岩肌をさらけ出した赤岳の全貌が見渡される。

突然下方からヤッホーが聞える。振り返えるとサポート隊の石原等が最早スキーを下げに登つて來て居る。ヤッホーの應酬に激勵されて第一峰へ向つて尾根筋を攀ぢ登る。岩と雪と氷の尾根の上にアイゼンが氣持ち良くさされる。段々主峰に近づくに從つて興奮は一層激しくなる。第一峰の岩膚を守護して居る最後の雪面を駈ける様にして這ひ登る。

遂に赤岳頂上に達したのだ。時に十一時二十五分。今こそ多年憧れて居た冬季赤岳山頂を踏んだのだ。喜びがどつと胸に込み上げて來る。息づまる様な感激の一瞬。

冬山には珍らしく風もなく靜かに良く晴れ渡つた天氣で、目を遮るものは何一つない。

頂上よりの展望は素晴しく又面白い。南には槍ケ岳の尖峰が雪を付けて白と黒の對照も美しく屹立し、その頂は陽光に煌きながら遙か大空に聳え立つて居る。

それより北東に向つて鋸の齒の如く岩峰の立ち並ぶ北鎌尾根が荒々しい姿をして、千丈、天上の出合へ深く落

ち込んで居る。

西には全山雪に蔽はれ乳房を思はせる様な、なだらかな山稜をもつ双六の山々が見渡される。山を蔽ふた雪は鮮かな白さに照り映えて居る。雪は穢れたる地上から高く離るる程更に清らかな光を發して居る。此の二つの景色が赤褐色の赤岳の痩せ尾根を境にして、全く趣を異にした大きな二つの繪を吾々にホレて居るかの如くに見える。

足下は硫黄澤の谷に向つて深く切れ落ち、赤肌の斷崖が凄まじい形相を呈して居る。

目指す各ピークは折重つて西鎌へと連らなつて見える。その間は雪稜、或は岩稜一線によつて、千丈と硫黄の谷とを境する痩せ尾根が結んで居る。然し、夏季幾回となく縦走を試みた尾根だけに、雪に包まれ山容を一變してゐるとは云へ大なる自信を持つて第二峰に向ふ。

第一峰と第二峰の間は深く切れ込んで居る。寫眞を撮つて居る間に、中村が偵察に行き、最初千丈側を捲いたが物凄い深雪の急斜面のため引返す。そのため一峰の頭より岩稜を傳つて、殆んど垂直に二〇米許り下り硫黄側の少し悪い岩角を捲いて、再び雪稜に出て尾根傳ひに二峰の岩峰を攀ぢ登る。尾根筋は岩が崩れ易く急峻ではあつたが此處を登るより外に良いルートはない様であつた。

第二峰は赤岳の最高峰にして三人乘れば一杯になる様な小さな頂だ。

時に丁度正午。頂直下の風當りの少い岩蔭にて晝食。パンを噛り、ソーセージ、ハムを切る。ふと見ると西鎌尾根の中腹を二匹の羚羊が登つて行く。頂のケルンに名刺を殘す。夏に置いた名刺も五六枚殘つて居る。

今まで良く晴れ渡つて居た天氣も崩れ始め、風も出て來て双六山には雲が去來し始めた。いくら日がさしてゐ

ても多山だ、二十分許りの食事の間も寒さが身にしみて始終手足を動かし、休む暇もなく腰を上げて二峰へ向ふ。

二峰の雪の斜面を五〇米許り下り氣味にトラバースして二峰の頂に立ち尾根傳ひに三峰へ向ふ。氷を被つた岩を摑みつつ登るため手足は凍み、その上手袋をはめて居るので指先の感覺が鈍り、しつかり岩を摑んでも賴りない。成るべく容易な登路を偵察して進む。

アンザイレンしても良いが時間がかゝるのでこのまゝ愼重に登る。頂直下の雪面から岩に移る所で雪の足場が崩れて一寸手間取つたが漸くにして頂に出る。あと一息、第四峰の頂が目前に手に取る樣に見える。愈々最後の岩峰目がけてより一層愼重に前進する。立つ事も危險なナイフリッジの上に馬乘りになつて進む。此處を通過して四峰の肩から硫黃側を捲き氣味に遂に頂上に立つ。

是非我々で踏みたいと、この數年來の宿望であつた冬季赤岳の四つのピークは、遂に我々の足によつて完全にその頂を踏んだのだ。

愈々下山の途につく。

登攀を開始する前に選定した降路は、最も長いが雪崩の危險性の少い第三峰と第四峰の中間の三の澤と決めて居たが、危險性は少いとは云へ尾根近くは相當の急傾斜をなしてゐるため尾根筋を森林帶まで下りそれより澤に入る。振り返えると双六の山々から湧いたガスは第四峰を蔽ひ、我々に完登された赤岳の全貌を次第に包まんとして居る。風も次第に强くなつて來た樣だ。登攀の後の滿ち足りた幸福な氣持を抱いて、腰を沒する深雪の急斜面を一歩々々と下る。ピッケルが手袋に凍り付く。相當に溫度が下つて來たらしい。

千丈の出合近くでスキーを持つて來たサポート隊の連中に出合ふ。全部員元氣一杯スキーを樂しみ乍らベース

硫黄岳（三月）　　五味三郎

北鎌尾根第一峯（三月）　　石原博和

キャムプへ。

時に午後四時。

一二、二四　快晴

硫黄岳登攀

登攀隊　中村史朗、石原博和、近藤一雄（人夫）

天幕（六、〇〇）―スキーデポ（七、一〇―七、二五）―一峰（九、五〇―一〇、一〇）―二峰（一一、五〇―一二、〇〇）―小次郎澤の鞍部（一二、五〇）―三角點（一、二〇―二、〇〇）―千丈澤（三、二〇―三、四〇）―天幕（四、四五）

サポート隊　江上久三郎、泉谷駿一、福島元康、秋本力治、李京燦、各務泰成

連日の快晴に惠まれて、赤の登攀が豫定より早く捗つたので、續いて硫黄にも行く。

まだ眞暗だが星は滿天に輝いて、本日も昨日に劣らぬ快晴らしい。夜明けと共に六時出發。昨日のラッセルに從つて中山へスキーを進める。約一時間位の登高の後、硫黄の一峰より出てゐる小さな急峻な澤に入る。約十分位登つたがクラストして居てスキーでは困難なので、輪樏に替へる。輪樏は氣持ち良く效き約一時間位登つたがます〳〵急峻になるのでアイゼンに替える、折から東鎌を昇つた陽は北鎌より赤の全貌を照し莊嚴の極だ。

此の邊から澤は小さく澤山に岐れ右へ〳〵とつめる。一峰直下は非常に急峻で、その上偃松は點々として頭を出して、ボカリ〳〵と膝まで沒するので、交代にトップに立ち、頂上に着いたのは十時少し前であつた。

陽は眞上から照り、風はなく全く春の樣に暑く汗はたら〳〵流れ、冬山とは思はれない。頂の偃松は全部埋

り、相當な廣さを持つて居る。溫い紅茶に喉を潤し、二峰へと向ふ。尾根傳ひに鞍部へと下つて行くと、雪稜は盡きて岩稜となつた。行く手に岩峰が聳へその向ふは深く切れ込んでギヤップの樣になつて居るが、大して惡そうにないので構はずにどん〳〵登つてひよいと下を覗くと、案の外惡場に出てしまつた。夏なら此の下りも問題ではないが、何しろべつとり雪を付けて居るので始末に負へない。引返して千丈か硫黄のどちらかを捲かうとしたが、此のトラバースは尙更惡いので、近藤、石原、中村のオーダーで、アンザイレンして下る。

此のピークは一峰の頂から見ると、二峰のガレに重つて全然見えないので注意を要する。鞍部から二峰への登りは硫黄側に二筋のガラ〳〵の澤が出て居るので、比較的良さそうに見える左側に取付いたが、見た目よりも案外惡く右側の澤に入る。

此のガレには雪は殆んどなくガラ〳〵と薄氣味惡い音を立てながら盛んに硫黄澤に落石する。

此のガレを過ぎると、二峰の頂は頭の上に見えるのであるが、相變らず雪の中に假松が頭を出して、腰までずつぽり沒し、やつとの事で頂に立つ事が出來た。

此處から小次郎澤の鞍部まではだら〳〵の尾根を下る。

鞍部からは又しても深雪で腰までもぐり、アイゼンは假松に引掛り、思ふ樣に歩けず、相當なアルバイトの後三角點に立つたのは、一時を少し廻つてゐた。

激しい登高の後の疲れで三人共しばし茫然として腰を下して周圍の山々を眺めてゐた。

振り返ると吾々の登つて來た硫黄、赤の峻嶮なピークが折重つて連らなり、その背後の遙か彼方には双六の連山がなだらかな眞白いスロープを見せてゐる。

休んでゐると、汗ばんだ肌は急に寒さを覺え、早急に晝食のパンを食べ終へて下りにかゝる。小次郎澤の下り口は相當に廣く急峻で、板狀雪崩の危險を注意して、三十米の間隔で下る。澤は大きく左に曲り、再び右に曲る邊から千丈の出合が見えて來た。

暫らく下ると行く手は狹くなり瀧でも有る樣に見えたが、雪に埋つたのかそれらしい物もなくどん〳〵下つてゐると、サポート隊が出合にやつて來て居る。

急に元氣付けられて勇んで下つて居ると、遂に恐れてゐた瀧に出てしまつた。雪が少いので瀧の下半分は露出して降れそうにないので右側の尾根に取付き、僅松にぶら下りながら向ふ側の澤に下り千丈の出合に出た。

三、三月の北鎌尾根より大槍へ

積雪期の北鎌尾根縱走を計畫するとき、そのコースは二つに分ける事が出來る。

卽ちその一つは大槍の肩の小屋を根據地として獨標まで往復し、或ひは天上澤に下るものと、他の一つは高瀨川を溯行して天上澤に入り、岩小屋を根據地として多門治新道を登り、獨標を越して前者のコースを逆に大槍に出るものである。

然し今日まで行はれてゐたのは殆んど前者のコースで、後者の代表的なものは一九三五年—三六年の冬に私達の先輩で當時の部員宮島英郎、宮島啓二の兩名がポーラーメソッドに依り、第一天幕を第十三峯鞍部に、第二天幕を北鎌澤のコルに建設してアタックして居るが、天候不良と凍傷のため獨標の難關で擊退されてゐるのである。

此のアタックの結果あの長い北鎌尾根は多門治新道から獨標の難關を越して肩の小屋に出るには非常なアルバイトと長時間を必要とし、又第三天幕を北鎌平附近に設けた方が好都合だと云ふ事が判つたのである。そしてそれにともなつて優秀な多數のサポーティングパーティーも必要である。

此の記錄は一九四〇年の春三月に天上澤の岩小屋を根據として、天上澤のビンボウ澤出合にベースキャムプを設け、北鎌の第一峯下の鞍部に前進天幕を設けて、大槍の頂に往復した時のものである。

登攀報告

パーティー

登攀隊　中村史朗、石原博和、藤野關夫

サポート隊　古屋恭平、福島元康、秋本力治、大石昇次郎、近藤一雄（人夫）

他に湯俣出合まで荷上げの人夫二名使用

期間　一九四〇年三月十六日——三十日

登攀日誌

三月十六日　晴　新宿夜行發

十七日　晴　松本—大町—葛溫泉

十八日　晴　葛—湯俣水俣出合、宮田氏宅

十九日　晴　千、天出合まで荷上げ

二十日　晴　湯俣出合—千、天出合岩小屋

二十一日　晴後雪　天上澤天幕地まで荷上げ。福島、秋本は千丈の中山澤出合まで冬の殘りの食糧を引下げに行く

二十二日　吹雪　岩小屋滯在　スキー練習

二十三日　吹雪　岩小屋滯在　スキー練習

二十四日　晴　岩小屋―天上澤の貧乏澤出合。ベースキャムプ建設

二十五日　晴後曇　中村、石原、大石、近藤（人夫）は北鎌第一峰まで荷上げ。藤野、古屋、福島、秋本は北鎌澤より天狗の腰掛へ

二十六日　曇　北鎌第一峯下に前進天幕建設
登攀隊の中村、石原、藤野の三名は殘り、他は天上澤のベースキャムプに下る

二十七日　時々曇　風强し
登攀隊は大槍往復
サポート隊は天上乘越へ

二十八日　晴風强し　登攀隊は天上のベースキャムプへ下る。全員休養

二十九日　晴　天幕地―宮田氏宅

三十日　晴　宮田氏宅―松本

紀行

三、十九　晴　湯俣水俣出合（九、〇〇）―中東澤（一〇、一〇―一一、〇〇）―大鎌澤（一二、〇〇―一二、一

五）―千、天出合釣橋（三、五〇―四、一〇）―湯俣水俣出合（六、四〇）

水俣川の釣橋は破損して渡れないので、ダムの下から湯俣の河原に下りて、宮田老人の架けて呉れた板橋を渡つて硫黄側の山の神の前に出る。三、四日前の雨で雪は割合堅くしまり大體夏道に沿ふ。

中東澤の手前の場所は例年なら橋を架けるか、夏道に沿つて硫黄側の高廻りを捲くのであるが、大天井側からの雪崩でスノーブリツジが出來て居るので右岸に移る。

中東澤の出合を過ぎると間もなく行手は斷崖で遮られて居るので、丸木橋を架けて再び硫黄側に歸る。人夫の近藤は戰地から歸還した許りで、昨日マラリヤが發病し宮田氏宅で休養して居るので、雪中の橋架けは吾々の手ではなか〳〵の難事であつた。

それでも馴れた者が多かつたので比較的短時間で完了した。大石は此の作業中腹痛を催し出合へ歸る。此處を通過してからは大體夏道に沿つて進み、次の高廻りは辛じて下を通り、最後の高廻りは、手前から河原に下りて大天井側に移り釣橋に達した。もう一息で岩小屋であるが、最早四時前で、湯俣へ引返す時間を考慮して、此處の木蔭に荷を置いて空身で引返す。

歸途第一の高廻りが悪いので、橋架けをして置く。湯俣の出合へ着く頃は薄暗くなつて振返ると北鎌の上には星が輝いて、明日の好天氣を約束してゐる様だ。

三、二〇　晴　氣溫　午前八時―5°C

湯俣出合（九、三〇）―大鎌澤（一〇、五〇）―千天釣橋（一二、三〇）―岩小屋（一、二五―一、四五）―岩小屋（三、一〇）

昨日の疲勞でぐつすり寢込んで朝寢し、昨日よりも三〇分許り遲れて出發。

今日はスキーもなく、道踏してあるので手間取る事もなく案外早く釣橋に着いた。昨日の荷は後から上げる事にして、釣橋の所から小さな澤に入り尾根を高く捲いて岩小屋の前に出た。岩小屋の入口は雪が吹込んで切り開くのに一苦勞であつた。小憩の後、殘りの荷上げを終了。日暮までには時間があるので石原、藤野は天上澤の炭燒小屋まで偵察に行く、他の者は燃料不足なので薪を作る。

此の偵察の結果、澤の狀態は申分なく上乘で、天上の小屋は屋根や天井板が破壞されて雪の吹込が多く使用不可能、又水場はビンボウ澤出合の所でなくなつてゐる事が判つた。

夕食はライスカレーに舌鼓をうち、天上の流れを聞きながら早くシュラフにもぐり込んだ。

三、二一　晴　午後より雪　氣溫　午前九時—8°c

岩小屋（一〇、〇〇）—天上澤のビンボウ澤出合（二、〇〇—三、〇〇）—岩小屋（四、三〇）

昨夜のうちにすつかり荷物の分擔はして置いたのであるが、それでも色々手間取つて出發したのは十時近くであつた。

福島、秋本は千丈の中山澤出合へ多の殘りの食糧その他の引下げに行き、他は天上澤へ荷上げとベースキャムプ建設に行く。

昨日のシュプールに從ひラッセルの必要もなく石原と藤野は先に天幕場に着き、藤野は岩小屋へ荷上げに、石原は北鎌平への登路偵察のため奥天上平へ行き、午後一時四十分頃天幕場に歸着したが誰も着いた形跡がない。心配になりビンボウ澤出合のカーブの所まで下つて行くと中村、大石が登つて來るのに會ふ。古屋が居ないので

貰ねると、途中の高捲きで澤の中に落ちて全身びしょ濡れになり藤野と共に岩小屋へ乾燥のため下つたとの事。

雪も降り始め三人ではとても天幕を張れないので、食糧若干と防寒具を持つて下る。

古屋の落ちた近所で近藤の登つて來るのに會つたが共に下る。

岩小屋の手前で藤野達にも會つたが共に下る。岩小屋に入ると間もなく風も加はり、六時頃からは猛烈な吹雪になつた。

燃料も食料も充分にあるので幾日吹雪いても籠城の覺悟をする。

三、二二　吹雪　氣溫　午前九時—11°c　積雪五十糎

覺悟はしてゐたものゝ案の定吹雪だ。岩小屋滯在。吹雪の中をスキー練習。

三、二三　吹雪　氣溫　午前九時—12°c　午後八時—10°c

本日も滯在、午後から小降りになつたので雪の合間にスキー練習。

三、二四　晴　風強し　氣溫　午前九時—9°c　午後八時—14°c

岩小屋（九、三〇）—釣橋（一〇、一五）—貧乏澤出合天幕場（一二、一〇）

昨夜まであんなに強く吹雪いてゐたのに、今日は忘れたかの様にからつと晴れ上つた。然し風はまだ強い様だがなんと云つても春だ。うつすらと汗ばむ位だ。

小憩の時には皆んな張り切つてスキー練習に餘念がない。ビンボウ澤出合の手前のカーブの夏道に上る大岩の所から澤は大體埋り、澤の中を進む。牛首の頭が針葉樹の間に美しく光つて居る。ビンボウ澤出合よりやゝ上手の所に天幕を張る。近藤は二時頃又マラリヤが再發してガタ〳〵震へ出し、傍で見てゐるのも氣の毒な様だ。割

合暖いので作業は早く捗り、燃料も豊富に出來た。夜が更けて來ると、月は東鎌の上に昇り北鎌は青白く輝き、靜寂さが天上一杯に漲る。

三、二五　快晴　氣溫　午前九時—12°c　午後八時—10°c

北鎌平班　中村、石原、大石、近藤（人夫）

天幕（九、三〇）—奥天上平上のスキーデポー（一二、〇〇—一、〇〇）—北鎌第一峰下鞍部（四、〇〇—四、一〇）—天幕（六、五〇）

北鎌澤班　藤野、古屋、福島、秋本

天幕（九、三〇）—北鎌澤出合（九、四〇）—スキーデポー（一〇、一五）—北鎌澤コル（一二、三〇）—天狗の腰掛（一、五〇）—北鎌澤コル（二、五〇）—スキーデポー（三、四〇）—天幕（四、三〇）

北鎌平偵察の北鎌平班と、天狗の腰掛偵察とビギナー養成のための北鎌澤班の二つに分ける。

北鎌平班　中村、石原、大石、近藤（人夫）

北鎌澤入口で北鎌澤班とお互に激勵し乍ら分れ天上小屋を通り、奥天上平を過ぎるまでは大した上りもなく、寫眞を撮り乍ら樂に進む。此處からは比較的急峻となり、デブリーとスカブラに惱まされる。天上の本澤と、北鎌第一峰下の鞍部から出てゐる澤との分岐點でスキーデポして晝食のパンを嚙る。大石は身體の調子惡くベースキャムプへ歸す。此のスキーデポは北鎌平から出てゐる尾根の末端で、此の尾根は最初石原の偵察で登路と決めてゐたものである。

此の尾根は夏は痩尾根であるが、雪をべつとり付けて物凄く急峻で全く取付けそうもなく、取付いたとしても十二、三時間位は費しそうである。晝食の後此の尾根の右側の澤に入る。輪樏で約一時間位登つて更に左に入る小さな澤に入る。此の澤は夏には急峻なルンゼ狀で入口に巨大な瀧があるがすつかり埋つてゐる。

第一峰の岩壁直下は非常に廣く急峻なので、直接第一峰の右に出る積りでぐつと右に寄ると雪庇の上に出てゐたので、あわてゝ左に切つて岩壁直下に出る斜右の鞍部に出た。

最早時間も遲く、近藤もマラリヤで疲勞してゐるので、天幕、アイゼンその他を雪の中に埋めて下る。約一時間でスキーデポに着き、ベースキャムプへ歸つたのは七時に少し前であつた。此の頃から天候は急變して、北鎌東鎌はすつかりガスにかくれ風さえ加つて來た。

最初の計畫ではサポート隊も登攀隊と交替して前進天幕で生活させる豫定であつたが、何んの違算か、食糧、殊に米、パンが缺乏して止むなく荷上げのみで下し、翌日天上乘越へ行く事にする。ベースキャムプの食糧は最少限度に制限して、前進天幕にはコツペー三十本、バクー一ポンド、ジャム（大罐二つ）、ハム（角）一本、その他堅パン、ユデアヅキ、カリン糖、ミルク等が準備された。九時頃から空は眞黒に曇り、バロメーターの氣壓は下り、一抹の不安の中に眠に就いた。

三、二六　曇　氣溫　午前九時—6°C

天幕（八、〇〇）—スキーデポー（一〇、〇〇—一〇、二〇）—第一峰下岩壁（一一、四〇—一二、一五）—北鎌尾根第一峰鞍部（一、二〇）

昨夜はなんだか寢苦しく、夢うつゝの中にまどろんでゐると夜明けの寒さで目が覺めた。オーバーシューズは

取れて足は物凄く冷えて寒い。もうすつかり明るくなつて良い時間であるが、曇つて居るためか、なんだか薄暗い感じがして明けきらない様だ。

でも風のないのが何よりだ。

七時には出發出來たのであるが、天候を見合せてゐたので八時になつてしまつた。

昨日と同じ場所にスキーデポして輪樏に替え一時二〇分に尾根に出た。一先づ休憩して一峰に取付いたが、新人が不馴れの上に荷が重く、アンザイレンの必要があるので、北鎌平へ着くまでには相當時間が掛り、サポート隊をベースキャムプに歸す時間がなくなるので鞍部の右の凹地に天幕を張る。

室一面墨を流した様に曇つてゐるが、風が殆んどないので比較的暖かで、作業も二時間許りで終了した。防風壁は千丈側の雪の吹きたまりを掘り下げて作る。

皆んなでテルモスの紅茶を飲み、カリン糖を食べ、サポート隊が下つて行つたのは三時三〇分であつた。

天幕に入つてから夕食の後は何もする事はなく、雪を溶かして明朝のお茶を作る。六時頃から風が出て、七時頃には猛烈となり雪さえ交えて來た。

三、二七　晴時々曇　風強し　氣溫　最低—14°c

天幕（九、〇〇）—第一峰（一〇、一〇）—北鎌平（一一、一〇—一一、二〇）—大槍（一、一五—一、二〇）—北鎌平（三、五〇）—天幕（五、三〇）

前進天幕の一夜は明け放れた。昨夜からの猛吹雪は依然として續き、今朝は益々強くなつて來た。天幕は物凄く搖れる。然し空は次第に明るくなつて來るので吹雪の治まるのを待つ。ジュエル（石油コンロ）を焚いて暖を

取る。異臭を發して、またゝく間にむせ返る様に暖かくなる。暫らくすると急にパアッと天幕に陽が指す。飛び出して見ると雪は降らないが、風は夜明け頃にも増して強い。

雲足は早く亂れ飛び、所々に青空さえ見えて來た。風は強いが兎に角大槍まで行く事にして出發。獨標も穗高連峰も雪煙を上げて霞んで見える。東鎌は陽光に赫々と輝いて、その影を天上澤に黑くなげかけてゐる。

天幕を出るとすぐ第一峰の登りにかゝる。

尾根傳ひはオーバーハング氣味が惡く、千丈側を捲き氣味に登る。此のピークの上に立つと大槍小槍の全貌が展開して、大槍と小槍の間に二つの小さなピークが覗いてゐる。

北鎌平までは殆んど天上側に雪庇が出てゐるので千丈寄りに尾根傳ひに行く。北鎌平は夏でも相當の廣さを持つて居るが、雪が付くと一層廣くなる。最初は此處に天幕を張る計畫であつたが、千丈、天上から大槍に向つて吹き上げる風が渦卷く缺點がある。

大槍の登りは千丈側の小さな澤に入りチムニーの下に出る積りで、千丈側に降つて見たが取付きが青氷で惡いので、夏道に沿つて登る事にして尾根に引返して肩まで行く。

『さあー行こう。』中村、藤野、石原のオーダーで登攀の一步を踏む。登るに從つて風は益々強く、中村は這ふ様にして愼重にステップを切る。然し此のルートは夏に幾回となく登つて居るので自信たつぷり。のんびりした氣持で進む。

チムニーの約三十米位下の岩壁の所から青氷が點々として散在してゐる。

此の岩壁は天上側を捲く事にして先づ中村がトップで登る。續いて藤野が登り初めると、中村が『右側の澤に

入れ』とどなつてゐるので引返す。中村は岩壁に隠れて見えず、只苦心し乍らステップを切つて居る音のみが、かちん〳〵ざく〳〵と不氣味に聞える。暫らくして『出たぞー』と聲がかゝる。見上げるとチムニーの入口に立つて深刻な顏をしてゐる。相當な惡場だつたらしい。『行くぞー』と呶鳴ると石原は澤の中に這入つて行く。ホールドも良く十米位登つて行くと、遂に惡場に出てしまつた。靑氷を付けた岩の上に出て、足を踏み出す事も出來ず動けなくなつてしまつた。

ピッケルで盛んに氷を切つてゐるが不安定なのでアンザイレンして中村の所まで登る。

續く藤野もアンザイレンして途中のテラスで休み、中村がチムニーを登るのを待つ。

中村は元氣良く入つて居たがなか〳〵惡く『駄目だ』と云つて斷念して右側の澤に入り、二十米許り登つてテラスに出る。間斷なく吹き付ける風は氷粉を混えて、顏に針を刺す樣だ。顎は寒氣で思ふ樣に動かず、發音は明瞭を缺き、呶鳴らなければ聞えない。全く殺氣立つてゐる。

此のテラスに出ればもう大丈夫と思つて、一息入れて、石原が天上側に這入つたが、雪を物凄く付け、殆んど垂直に切れてゐてどうしても足が出ない。お宮は手の屆く樣な所に見えるが、夏より惡く、小槍寄りにトラバースしてお宮の後に出る事にして約十米斜右上のテラスに出る。此のテラスに來ると眞直ぐに頂に出られそうなので、此の岩壁に取付いたが、二米許り登るとオーバーハングになり、素手になつて交代に取付いたが、テラスは狹く確實なジッヘルも困難なので斷念して、小槍寄りにトラバースする。

此のトラバースは千丈側に殆んど垂直に切れ込んで、餘り氣持ち良いものではなく、岩角にザイルを卷きつけて確保した。

此のトラバースが終ると二米許りの上のテラスに出て、逆層の上を十米許り登つてお宮の後から頂に出た。頂の上にはツアッケの跡が點々としてゐる。肩の小屋から誰か登つたらしい。風が強いので休む暇もなく記念撮影の後、トラバースの所まで下つて一休みする。

腰を上げて下りにかゝる。此のトラバースは前より稍々下を通つてテラスに出た。

ピッケルで岩角を掘り出してピンにして、第二のテラスまでアップザイレンで下る。

此のテラスで遅まきながらも晝食にする。

コッペーをトーストにして、ハムやジヤム、バタを挟んで置いたが、パンはかち〳〵に凍り、ハムは氷が張つてザクザクして、何を食べてゐるのか分らない。テルモスの暖いミルクで咽喉に流し込む。早々に食べ終つて、最初アンザイレンした所まで四回のアップザイレンで下り、登りに刻んだステップの跡を這ふ様にして肩まで下る。最後に下りて來る中村を待つて、三人は無言のうちに握手を交して、につこりほゝ笑んだ。折から陽は大槍の上を過ぎて西鎌の上にかゝり、北鎌は夕陽に赫々と燃えてゐる。激しい登攀の後で疲勞したゝめか、緊張してゐた心もゆるんで、三人は默々とひたすら天幕へと歸路に就いた。

第一峰の上に立つた時は全く滿足し切つた心で、天幕をじつと眺めてゐたが、急に元氣づいて最後の岩場を下つて行つた。

のんびりした氣持ちで天幕に入り、ぐつたり横になつて早速煙草に火を付ける。

暫らく茫然としてゐると、寒氣が身にひし〳〵と凍みて來るのでジュエルを焚く。

ボウ〳〵音を立て乍ら調子良く燃え、天幕内は蒸し返す様だ。頭はぼうつとして來る。

外の張綱の唸り、天幕のはためきと相交響して、此の世界唯一の音響だ。

漸く元氣付いたが何一つする事もなくパンを噛り、今日の登攀を語らひ乍ら冷いシュラフに身を包む。

三、二八　吹雪後晴　氣溫　最低—16°c

天幕（七、〇〇）—スキーデポー（七、四〇—八、〇〇）—ベースキャムプ（九、三〇）

バンブーの折れる音で中村の目が覺めた。天幕は盛んに搖れて今にも倒れそうだ。ローソクに火を付ける。石原と藤野を叩き起す。バンブーは一本折れ、一本は、はづれて天幕は破れそうだ。まだ四時前で暗くて外は良く分らないが、一昨夜以上の猛吹雪らしい。

何んの取るべき處置もないが、兎に角內張りを取りはづして修繕に取り掛る。風は容赦なく吹き込む。全く縮み上る樣だ。バンブーは修繕したがまだ物凄く搖れる。多分張綱が取れたらしい。寒氣はひし〳〵と身にせまる。

ジュエルに火を付ける。風が吹込むのでなか〳〵火が付かない。これでは尾根歩きは危險なので獨標（二九〇七米）までの縱走は斷念してベースキャムプへ下る事にする。

バンブーを交替で支え乍ら食事をして夜が明けたらすぐ天幕を撤收出來る樣に準備して待つ。煙草の煙は天幕の搖れるまゝに尾を引く。

漸く明るくなつて來たので、天幕の外に出て見ると、雪は降つてゐないが、風は依然として猛烈で、その上ガスが一杯かゝり、視界は全然利かず、何處がなんだか分らない。

これでは駄目なので、天幕に入つて今暫らく待つ、三十分位して再び出て見るとガスは少しは消え、風は弱目

になつたので飛び出して天幕をはづす。豫期してゐた様に張り綱は全部根元から切れてゐる。風は千丈と天上の兩側から吹き上げて此の鞍部で丁度渦巻いてゐる。天上側に防風壁を作らなかつたのが失敗の原因だ。

愈々輪樏で愼重に一歩〳〵鞍部へ進む。鞍部の下りからは風が弱く約四十分許りでスキーデポに着く。スキーはスカーブラの上をぱんぱん飛び横に投げ出され乍ら惡戰苦闘の後、ベースキャムプに着いた。ベースキャムプも昨夜から今朝にかけて風が強く、皆んな心配して迎へに出掛け様としてゐる所であつた。

天候は下り坂になり、食糧も缺乏して來たので明日下山する事にして、本日は休養にする。いざ下山となると何んとなく名殘惜しく、皆んな森林帶でスキーの練習に餘念がない。晝間は割合暖い春の山も、山の背に陽が沈んで行くと寒氣はひし〳〵と身に凍みる。東鎌風か、北鎌風か、澤は又一しきりざわめいて來た。

綜説

高所に於ける總代謝に就て

額田敏

一、身體靜止時の總代謝

總代謝量測定には種々なる方法があるが、呼吸に必要なる酸素量と、之によつて發生する CO_2 量を測定することが多く用ひられる。處が *Mosso* は發生する CO_2 量だけを測つてゐる (1894)。又 *Zuntz-Geppert* の法や、英國及び米國の學者は *Douglas* の法、*Benedict* 法、*Kestner*, *Schador* の考案した法を屢々使用する。

測定する場所が餘り高からざる高所に於ても往々起る現象である處の局部的酸素缺亡を發生す樣な場合には之等の諸法を使用しても正確な結果を得ることは出來ない。何となれば之等の諸法は高所に於ける全體の酸素減少より來る作用を調べるものであるからである。且つ之等の方法は高所に永く滯在する場合に生ずるガス代謝を測るに適した法であると云ふことをも注意しなければならぬ。

高所に於ける代謝の研究は主に歐洲アルプス地方で其の初め行はれたのであつて、次で Teneriffa に於て *Durig* 及び *Zuntz* (1), *Kestner* (2) が之を調査してゐる。例へば十九世紀後期 (1870) に於て *Mermod* は St. Croix 1100m. の高所で、*Marcet* はアルプス及び Pic von Teneriffa で CO_2 の發散に就き調査した。又その後約20年の後 *Veraguth* は Engadin に於て之に

關する調査を成した。又北米の高山岳に於て *Schneider* (3) 及び *Haldane* と其の共同者 (4) が之に關する調査を行つてゐる。而し其頃の調査は何れも餘り完全な方法では無かつた。

これに次いで 1894～1896 頃に至りて *Mosso, Zuntz, Schneider, Loewy* 兄弟の研究があり、更に 1901～1906 年に至りて *Zuntz* と其の共同者、*Zuntz* と *Durig*, *Durig* と其の共同者等の研究が行はれた。

之等の諸先人の研究より知る處は總代謝は高所に於て興進するが此の興進を初めて起す高さは各々個人によりて一定してゐないと謂ふ。又高所刺戟に對しての感受性の強弱と之に對する馴致作用如何が主な役割を演ずるものであると謂ふ。

アルプス並びに Teneriffa に於て調査されたガス代謝の興進が起り得る高さを示すと第一表の如き値をとる。

身體靜止時代謝興進と高度との關係を示すと第二表の如し。

第一表

高度 m	實驗者	ガス代謝	
		興進せざる者 人數	興進する者 人數
500	H. u. L.; Z. u. Gen.	8	—
1000	D. u. Gen.	—	—
1100	Moss.	1	—
1300	D. u. Gen.	2	—
1550	L. u. Gen.	3	1
1600	J. u. ST.; Z. u. Sch.	2	2
2300	Z. u. Gen.	—	6
2900	A. u. J. L.; L. u. N. Z.; D.	3	2
3100	Z. u. D.; K. u. Gen. (Teneriffa)	8	1
3450	L. u. Gen.; K. u. Gen.	7	2
3700		1	—
4550	J. L. u. Z.; Z. u. Gen.; D. u. Gen.	10	1
		47	15
		計 62	

第二表

種々なる高度に於ける靜止時代謝興進の變化

高度 m.	最小 %	最大 %	平均 %	實驗數
500	+1.1	+12.4	+3.97	6
1000	+4.1	+7.2	+5.6	2
1000～2000	+1.0	+15.9	+9.16	5
2000～3000	−8.2(?)	+10.7	+1.35	15
3000～4000	+5.3	+21.9	+10.6	7
4560	+9.9	+45.1	+22.0	10

第一表の結果を見ると 62 の調査例中 47 例は代謝興進せるを見るが、其の興進の程度に就ては同一人に就て等しき高度に於ても種々な高所では一定した興進を示さず、寧ろ甚だ異る結果を得ることが今迄知られてゐる。之は其の人が場合に依りてその循環系統の條件が異ることが主な原因であるのではないかと云はれてゐる。而し注意すべきは高度 3000～4000m. の間に於いて高層氣象に對し感受性の強き者もあれば又 Monte Rosa 頂上 (4560 m.) の高度に於いて漸く代謝興進を見る者もある。

Loewy 及び其の共同者の調査 (6) に依ると 1550 m. の高度に於て 2450 m. の高度よりもガス代謝値が大なる場合がある。此の現象は馴致作用に歸することは出來ないが、ガス代謝が興進すれば酸素吸入が却つて減少すると云ふ事が發生すると說明せられる。

第二表に示した代謝興進の量的變化は個人に依りて其の最大値並びに最小値並びに平均値に著しき差異があることは個人的に高度の感受反應性に差異のあることを示す、又此の興進變化の狀態を同一人に就いて見るも高度と共に規則的に變化せずして高度大なる所では高度のより低き所に於けるよりも却つて弱きことがある。斯かる場合に之れを馴致作用にのみ歸することは出來ずして、其の原因を決定することは甚だ困難である。

又中級程度の高所に永く滯在する時は代謝興進に退行を來す傾向を有することもある。例へば *Durig* は

Semmering (1000 m.) に於いて、又 Sporner Alpe (1300 m.) に於て、又 *Kestner* の調査隊員が 3450 m. の高所に滯在せる時此の現象を見た。而し Monte Rosa 頂上 (4560 m) に於て 4 週間滯在せる場合には其の代謝は何等退行を見ざりしと云ふ。

又斯かる高所に於ては高度馴致及び前以つてのトレーニングの有無は代謝興進に關係を及ぼさずと云ふ。而し *Mosso* の調査に依ると山岳兵の如き常に高所にて作業を爲す者は高所に於いて何等の代謝興進を起さずと云ふ。若し此の事實が全般的に眞實であるとすれば *Zuntz* 及び *Durig* の調査の確實性には疑問の點がある譯となる。

呼吸商を物質代謝の結果であるとして此の値を標準と考へれば、種々なる場合の呼吸商値は 0.7～1.0 の間に在ると謂はれ決して 0.7 よりも以下に降ることがないと生化學的に謂はれてゐる。*Bornstein* 及び *Loewy* (7) の調査に依れば高所で朝食前、靜止時の實驗に於ては屢々低地のそれに相當する値よりも低き値を見ると謂ふ。*Zuntz* 及び *Durig*, *Durig* 及び其の共同者の研究に依れば此の理由はまだ充分に確定しないが、恐らく高所に於いて、炭水化物の代謝に變化を來す爲めであると云ふ。今高所に於ける實測値を示すと第三表の如き例がある。

高所に於ては呼吸商が 0.7 よりも少きことは稀でない。此れは烈しき登高の後も尙其の影響が殘るからである。之は尙如何なる理由によつて起るかと云ふと烈しき勞働すればグリコーゲンの貯藏量が使用し盡され、此の後靜止によりてグリコーゲンは再び新生せられ此の關係から勞働後靜止時の呼吸商が低値をとると謂はれる。

高所に於けるガス代謝興進の原因は諸學者によつて研究せられて居るが就中 *Zuntz* 及び其の共同者 *Durig* 及び其の共同者が著明である。*Zuntz* 及び其の共同者に依ると、高所の空氣はイオン化すること多く此のイオンの過剩が代謝興進に原因するとされてゐるが、*Zuntz* 及び *Durig* が更に研究した處によると必ずし

第　三　表

實驗者	場　所	被實驗者	呼吸商 平地	呼吸商 高所	
Durig及びZuntz(1)	Teneriffa	Durig	0.923	Candias 2100m.	0.755
			0.922	AltaVista 3260m.	0.774
〃	〃	Zuntz	0.817	Canadias	0.787
			0.817	Alta Vista	0.755
〃	〃	Carrière	0.831	Canadias	0.806
			0.831	Alta Vista	0.798
Durig(2)	Monte Rosa	Durig 1906	Alagna 0.817	Monte Rosa	0.757
〃	〃	Kolmer 1906	0.851		0.785
		Rainer 1906	0.877		0.811
		Reichel 1906	0.856		0.808
Bornstein-Loewy	Muottas-Muraigl	Loewy 1926	Hamburg 0.89	Muottas-Muraigl 2450 m.	0.81
		Bornstein	0.91		0.77
		Heyer	0.83		0.74
		Loewy 1930	0.77		0.72

Wien 0.820

(1) Bioch. Z. 39. 435 (1912).

(2) Deutschr. Akad. Wiss. Math.-naturwiss. Kl. (1909) 86.

されてゐる。

而し高所の光線量はガス代謝の興進には往往特に著しき意義を有することは *Hasselbalch* 及び *Lindhald* が高度 3290 m. の高所に於て實驗した處によると認められた。而し彼等の實驗は強き日光殊に短波光即ち化學線に吸收されるが爲めに皮膚の刺戟によるものとされてゐる。(*Herxheimer*) 即ち彼等の實驗に依れば日光照射により烈しき紅斑或は皮膚に顯著な變化を來して、其の爲めに物質代謝の興進を來す、若し日光照射を行ふも斯かる現象を發生せざる場合には代謝興進は起らないと云ふ。又 *Duriy* 及び *Zuntz* は高度 4560 m. に於いて、*Durig, V. Schrötter* 及び *Zuntz* は Teneriffa 3100 m. の高所に於いてガス代謝に影響する日光照射作用を研究した。又其後 *Kestner* は日光照射がガス代謝に及ぼす影響につき研究した(8)處によると特に紫外線部分に於て著しき興進を

も其の爲めでは無く高層空氣のイオン化或はポテンシアル減少にはガス代謝は關係が無く又其他の高所氣象的因子、空中水分、空氣移動或は光線量にも關係無しと

起すと云ふ。彼の實驗は最初 Davos (9) に於ける夏季及び冬季の日光につき調査した。之に依ると夏は常態と變化なく。冬季に於て興進を起すと云ふ。此の夏季の作用なき事は日光の過熱作用によりて第二次的な化學的熱調節作用が起る。此の作用は日光殊に紫外線によつて皮膚部に生ずる色素メラニン様物質によりて光のエネルギー變換機の作用が掌られて且つ不必要な光の量を保護調節する作用をなすことによると言はれる (Rollier) (9) からであると云ふ。此の關係は *Plaut* 及び *Wilbrand* が提唱するもので皮部の過熱は代謝の退行を來し、發熱作用が減退して過熱作用を防止するに在ると云ふが之が果して人類に於ても云ひ得るかは疑問に屬す。

Kestner は又第二次的な化學的熱調節作用は日光照射によりて生ずる基礎代謝興進を退行せしむると云ふ。而し冬季の代謝興進現象は實驗の全部につき起る現象で全く其の中斯かる現象が現はれたと云ふに過ぎず、この例を以つて冬季一般的な斷定を下すことは出來ない。

故に日光照射が代謝興進を招來するとは云ひ得ない。

更に *Kestner* は紫外線を使用して甚だしき高所に於て實驗を行つたが日光が代謝興進の主因であると云ふ事につき確答は得られなかつた。又 *Lippmann* や *Vi-ker* (10) 並びに *Loewy* 及び *Vogel Eysern* (11) 等の學者の調査も同樣であつた。

Kestner に依れば 3000 m. の高所に於て日光照射の下に於て著しき代謝の興進を見るが、之は他の原因に歸せねばならぬ、卽ち日光下では皮膚部は過熱せられるが又日陰では甚だしく冷却せられる。之が *Loewy, Vogel-Eysern* 等の論議の的である。

空氣の稀薄は又酸素分壓を減少すると云ふことが又此れに關する一つの有力な問題である。何となれば酸素吸入により代謝興進は收まり得るからである。之の點に關して研究せる學者は *Loewy* 及び其の同輩であつた (12)。彼等は高度2450 m. の處に於いて酸素吸入

により共迄興進せし代謝を平常値に迄戻し得た。而し此の場合には馴致作用により酸素の使用量は低下して居り、酸素呼入の爲めに低地に於けるが如き著しき興進の退行は見ることが出來なかつた。而し被實驗者中（其の一部は 2450 m. 他は 3450 m. で調査した）學者は低地に相當する値以下に迄降下したものもあつたと云ふ。

更に Davos に於いて *Krieger* は二人の被實驗者の中一人は酸素吸入によりて酸素使用量は低地の値以下になつた事を知り得た。中級山岳の高度に於ける酸素吸入が招來する代謝興進の減退作用は一般から認められてゐる。之に對して *Kestner* 及び其の共同者は高度 3450 m. に於て酸素吸入を爲さしむるも興進せるガス代謝は下降せざりし事を認め、而し實驗者夫々個々獨立的に行つた實驗方法は全く異つてゐて之が爲めに種種なる結果を導いたものであるとも云はれてゐる。

Loewy の實驗によると Monte Rosa 頂上氣壓 435 mm. では酸素の使用量は 13.4% 興進し、*Zuntz* によれば氣壓 482 mm. の高所で 16%, 424 mm. の處でも 86% 興進した事を認めた。之等の何れの結果にせよ、之に酸素吸入を爲さしむれば興進の退行作用を起すが、高山に於ては酸素の他に種々なる高山的氣象原因、之は別々には何等の作用も之に與へ得ないが互の合成作用の爲めに代謝興進作用を起す因子を含むことは忘れられない。

二、筋肉勞作時の總代謝

勞働の程度を等しくした場合に高所に於ける勞働時の物質代謝は一般に興進すると謂はれてゐるが靜止時の代謝に比して高度の影響は少なからずと謂ふ。

Zuntz 及び *Schumburg* が 2600 m. 及び 3860 m. の高所に於て、更に *A. Loewy* 及び *J. Loewy* の兄弟が高所 2900 m. の Col d'Olen で此の研究を行つた。又 *Zuntz* 及び其の共同者は 5 ヶ所の高所に於いて、又 *Burgi* は 2300 m. で、*Durig* 及び *Zuntz* は 3100 m. で、*Selmeider* (13) は 4300 m. で、*Durig* 及

び其の共同者は 1000 m. 1350 m. 及び 4500 m. で實驗を行つた。

それ等の結果に依ると筋肉勞働時の物質代謝に關する高所影響の初め並びに其の後の作用は個人に依りて著しく異なる。而して其の起つた變化が果して高所の影響に基くものなりや否やを判定することは頗る難しき問題である。何となれば筋肉勞作に際してエネルギー消費は高所に於て高度の影響の他に尙ほ多くの因子を含み、之等が低地に於けるとその關係を異にしてゐるからである。又實驗の條件も高所と低地とで甚だしく異つた時には之等の二つの實驗は比較對照することは出來ない。

例へば平地の筋肉勞作實驗には特別な足踏運動を爲す樣な道に對しての調査せられること多く、之は自由な道の運動に比して馴れざる事其他の原因で餘分の勞力の消耗を爲すこと多く、この二つの運動を同一條件の下に比較對照する事は出來ない。實驗の條件の一つとして足場が條件の甚だしく主要なる問題となることが屢々ある。例へば足場は堅く平坦一樣であるか、或は軟かく、或は固り易きか、凹凸があるとか、或はアスファルト、砂利又は石で鋪裝されてあるか、或は又は雪上、氷河上を行くかにより條件は甚だしく異なるべし。

高山では屢々雪上或は氷河上の勞作が多いから、若し此の雪、或は氷河上の運動と雪或は氷河上に非らざる運動とを（他の條件は等しくされても）比較することは出來ない。之に關して *Durig* は甚だ條件の異つた勞作實驗を同一條件の下に直す事に就きて論じて居るし、又 *Zuntz* も雪上の登高運動に關する實驗に就いての報告があるが、その比較對照の結果上甚だしく正しからざるものを見る。山を登るに登高の道程及び其の高距を考へる場合に道の條件如何を無視して之を論ずる譯には行かない。而し登山者が彼等の多數の體驗から得た處は道の條件が少し位變つても登高の困難さ（エネルギー消費量）は殆んど變らないと云はれてゐる。又登行路の傾斜が又著しき主要な因子となる。

此の傾斜の急になるに從つて山に馴れて居ない者にとりては之を登高する時代謝量に異常の增進を來す。斯の如く被實驗者の個人的條件（登り方の巧拙、馴れ不馴等）を異にすることにより、同一實驗の結果が甚だしく異なる。

最も快適なる慢歩に於いてエネルギーの消費量は最小であるが、此の運動に於ても個人的に脚長、體重、歩行の遲速如何により代謝の結果は興進度を異にする。

之等の諸條件の異ることに依りて調査された結果は直ちに比較は出來ない事は明かで、個々の實驗は、これに取り入れられた條件を考慮して夫れ自身に考へられなければならない。

Zuntz 及び其の共同者は彼等が實驗より得た結果を次の如く說明してゐる。卽ち高度 500 m. の如き低き所に於ても筋肉勞働に際してはエネルギー消費上に代謝の興進を來す。又 *Durig* が諸條件を考慮に入れて（之に就ても科學的に論難の餘地はあるが）實驗せし處によると Semmering 1000 m. の高度に於ける結果は高度と共に代謝の興進を見ると云ふ。高所に於ける總ての條件（速度、足場の性質等）を低地に於けるものに等しくした場合に第四表の如き値を示してゐる。

第四表　Semmering に於ける水平歩行平均値

實驗者	場所	毎分速度 m/分	エネルギー消費量 cal./kg.-m.	興進量 %
Durig	Wien	104.14	0.554	
	Semmering	104.40	0.596	6.9
Reichel	Wien	98.9	0.560	
	Semmering	100.0	0.610	8.9

此の表を見ると高度と共に代謝興進することを見る。他の學者の調査結果を見るも矢張り等しき傾向を辿る。此の代謝興進の原因は高度が原因中の主要なる役割を勤めることは次の第五表を見ても解る。

山岳登高に際しては個人的條件卽ち體の能力、訓練の有無等が實驗の結果に可成大なる役割を演ずる。*Durig* 及び其の共同者の調査に依れば充分に訓練された者は歩行速度が餘りに異ならざる場合には此の速

第　五　表

1kg.-1m.毎の水平歩行に對する勢力消費量（g.-cal.）

實驗者	低地	高所 2900m	高所に於ける興進増加 %
A. L.	0.668	0.674	＋1.
J. L.	0.544	0.816	＋50
L. Z.	0.574	0.604	－5.2
N. Z.	0.678	0.663	－2.2
A. D.	0.527	0.584	＋10.7
平均値	0.598	0.668	11.7

度には代謝興進は影響しないが *Zuntz* 及び *Loewy* 及び其の共同者の調査に依ると訓練の足らざる者に就いては歩速の遲速が著しき結果に差違を來す。又 *Durig* に依れば歩む道の傾斜（餘り變化せざる時）如何は認知される様な變化を結果に及ぼさないが、他の測定者によると道の傾斜はエネルギーの消費量に影響を及ぼすと云ふ。而し速度/體重、即ち m.-kg. に對する此の二つの因子（速度、傾斜）によるエネルギーの消費量は低地よりも高所に於て增加する。而し實驗の際被實驗者の任意に歩行せしむる以上高度の高まるに從つて歩速は漸次緩慢となる。

特に高度がエネルギー消費に如何なる影響を及ぼすかは次の第六表に見るが如き値をとる。但し表の値は高度と雪面との影響を與へてゐる。

表中低地に於ける *Durig* 及び *Zuntz* の標準値は 7.55〜8.4 cal./m.-kg. に對して 12.7% の增加を示す。此の表に依ると充分に馴致した *Durig* ですら高度 4500 m. に在りては Wien の雪上よりも 1/5 だけ高き値となる。

4500 m. に於ける氷河上の歩行に於ては C. Z. I. 等の實驗者（1901）に就ては條件の好き場所で實驗が行はれたのであつたが 67.9—141% の增加を見る、餘り良好ならざる地勢の處では高度 2600 m. の處（Bétemps hütteで）でも *Zuntz* 及び *Schum'urg* は 21.3—30.7% のエネルギー消費增加を見、*Loewy* 兄弟及び *Zuntz* は高度 2900 m. の所で充分に踏跡をつけられた處で 19.6—37.2%, 3700 m. の處で餘り大なる登

第六表　m.-kg. に對する登高勞作のエネルギー消費量（cal.）

實驗者	Brienz にて 25% 興進	Berlin及Wienにて等中	4500m の氷河上にて	增加量 %	
K. 1901	5.48		13.21(1)	141.1	(1),(2),(3)はBerlinの水平値,(4)及(5)は Monte Rosa 頂上で得られた高値を引けるものなり
C. 1901	6.60		11.60(2)	75.8	
Z. 1901	6.16		10.34(3)	67.9	
Z. 1903	—	12.68(6)	14.65(4)	15.5	
D. 1903	—	8.2 (7)	9.76(5)	19.0	

(1) 興進 22.0%, (2) 興進 29.9%, (3) 興進 28.8%, (4) 興進 8.83%, (5) 興進 6.93%, (6) 興進 3.42%, (7) 興進 10.32%, 步速 79.8—87.1 m./每分

行を爲さざる時も 24.5—36.9% の增加を見′ Monte Rosa Sattel に於て *Schumburg* 及び *Zuntz* は 47.1 % の增加を見たと云ふ。

氷河上の步行に就ては他の場所を步行するよりも步行者がより疲勞が大であることが多くの Expedition によりて實證せられてゐる (13′)。此の所謂 Gletschermattigkeit 或は Gletschermüdigkeit も亦エネルギー消費量增加の重要なる一因であることは疑なき處である。

充分に高所に馴れた *Durig* 及び其の共同者の 1906 年以來の調査に依れば′夏季低所に於ける實驗値に比して Monte-Rosa 頂上では 48—65% の增加を′又低地で冬季雪上で得た値の 11—14% の增加を見た。こゝに注意すべきは低地に於ても雪上を步行する時はエネルギーの消費量は著しく增加 (30—44%) するを見る。

Zuntz 及び *Schumburg* (14) は′訓練することにより高所に於ける代謝値の減少することをも實驗した。訓練すること或は又馴れることによりて如何なる影響があるかは′山岳地帶の住民で山岳勞働を職業とするものに就ての調査は——充分訓練された者で低地に於けると同樣なるエネルギー消費量の關係を見たと云ふ。

例くば *Loewy* 及び *Schrötter* (15) の調査に依れ

ば Davis に於いて土着の人夫が 65 kg. の荷を負ひ水平な道を運ぶに m.-kg. 毎日 0.18 cc. の酸素量を要する。之は低地に於いて見出される最低値 0.17 cc. に殆んど一致してゐる。又 65 kg. の荷を負ひ傾斜階段を昇るには m.-kg. に就いて 1.05 cc. の酸素を要する。此の値は又低地に於ける見出された最低値に當る。

山岳登行のみならず又下降の場合もエネルギーの消費を要する。此の點に就いて Zuntz は高度 500 m. の處で登高と同一の距離に就いて試驗せる處 1 kg.-1m. に就きてのエネルギー消費を求め、之を登高の場合の値と比較すれば 水平 下降 0.586 : 0.580 : 2.370 の關係が得られた。卽ち水平な處を行くよりもエネルギーの消費量は少ない。道の傾斜が 35° 迄は下降は快適であり、之より傾斜が更に增加する時は下降にも困難を感ずるに到り、筋肉の緊張、地面への注視、身體の安全確保の爲め脚部諸關節等に力を要し、エネルギーの消費量は增加する。而し此の限界は又個人的に大いに異なる。

高所に於ける勞作の實驗は多く步行試驗であるが又稀には廻轉運動による作樣試驗も行はれる。

今迄述べた步行實驗に於ては周圍の因子が多少にても影響を及ぼして居るが此の廻轉運動に於ては之等の諸因子を除外することが出來唯氣象的影響のみを加入するの便利がある。

Loewy 及び其の共同者は此の廻轉運動に就き試驗を行つたが（16）此の結果に由ると 2450 m. の高度に於て未だ疲勞を生せざる時に於て、高度 1550 m. の勞作に比して著しき酸素消費量の增加を見る。高度 3450 m. では呼吸興進の爲めに組織へ酸素供給を良好ならしむる爲めに更により以上の酸素消費量が增加せざるを見ると云ふ。その結果次の第七表の如し。

第七表　1m.kg. 廻轉運動に就いての酸素消費量

場所及び高度 m.	實驗者	
	C	Schm.
Davos 1,550	8.15	5.26
Muottas Muraigl 2450	8.31	6.56
Jungfraujoch 3450	7.48	6.41

他の總ての條件を等しくして唯減少せる酸素分壓のみがその高度に於いて酸素消費量增進の原因と見ることが出來る。その增進程度は減退せる酸素供給に對する歩行に際しての代謝興進に相當すると見ることが出來る。

酸素の缺乏が其の消費量興進の原因とする時は酸素吸入を行へば其の興進は消滅すべきであるが、*Loney* の實驗では之の確答は得られなかつた。

一般に筋肉勞働に由りて酸素消費量の興進は勞働終了後直ちに靜止時の値に迄戻るものに非ず、其後暫時（或は時により更に一度興進を起して）の後に原値に戻るものである。此の復舊時間は勞働の程度種類により異なる。*Hill* は之に關して及びスポーツ醫學につき研究した學者であつた。

勞働終了後にも尙過剩の酸素を必要とすることを爾後酸素過剩消費と稱するが、勞働時のガス代謝を測定するも其の後に到り代謝値は一樣なる値に迄達する。此の代謝値の大さに就いては、爾後酸素過剩消費量及び物質代謝の關係から精しく調べることが出來る。

此の如き研究は *Margaria* (17) 其後 *Durig* 及び其の共同者によつて別々に秩序的に行はれた。*Margaria* は筋肉勞働後ガス代謝を Tirin 及び Col d'Olen に於けるものに比較して興へた。此の實驗に於ては五分間毎分 120 回體を持ち上げる運動を爲し、此の運動の終了後 30 分間も回呼吸室氣を試驗した。此の結果に依れば運動後の最初の一分間中に於ける酸素使用量增加は高所及び低地共に等しくあつたが爾後過剩酸素消費量値は高所に於けるものが大であり、又靜止値に戻る迄には長時間も高き値を續けた。而して之より酸素の爾後過剩酸素消費量の値が 50% であることが計算より出された。此の値と、筋肉に供給せらるべき酸素量（減少した）との關係を求め、之より勞働時生じた乳酸は酸化緩慢である事を知つた。此の事は亦著しき高所に於いて筋肉の機能減少することにも關係あると云ふ。又 *Wertheimer* は之は筋肉中のグリコーゲン消費量にも關係付けられた。高山に於ては此の物質代

謝のみならず、脈搏數、呼吸數、肺換氣量、呼吸商が低地に於けるよりも正常値に戻ること徐々である。

且つ運動により變化するものは乳酸が唯一の有效因であるか否かは未だ疑問に屬する事で *Simonson* 及び *Gollwitzer-Meier* (18) は血液中乳酸量と勞働後期に於ける呼吸の變化との間に並行性が無き事を確めた。

又純粹なる空氣稀薄の作用が身體靜止時並びに運動時に於けるガス代謝に對し影響を及ぼす事は減壓室中の實驗でも確かめられた (1b)。

長期間高所に滯在する者が低地に降る時は物質代謝は直ちに低地の値或はそれ以下に降る、之は *Zuntz* 及び其の共同者並びに *Durig* と其の共同者等によりて確められた事實で、*Zuntz* 等の實驗に於ては 2300 m. の高所に長く滯在せる者が 500 m. の處 (Brieuz) へ降つた時は酸素消費量は、以前同所に居た時の値よりも著しく少きを見た。又 *Durig* も共の調査隊員中の多くが Monte Rosa より Alagna に降つた時の酸素消費量が Wien に於ける値よりも低き事を見出した。

高所より其の刺戟因子を持つて低地に移る際は諸機能が低地正常値以下に低下することは他の例に於ても認められる所である。但し場合によりては例外もある。例へば *Jaquet* 及び *Staehelin* (20) は 1600 m. より低地に降つた後一週間もガス代謝は興進を續けて居たと云ふ。

比較的最近に行はれた Himalaya に於ける諸外國の Expedition では遺憾ながら此の代謝に關する科學的研究の遂行せられて居ることが甚だ少い樣で、筆者は *Dyhrenfurth, Bauer, Rutledge*, 或は南米 Peru Expedition の *Phi ipp Forchers* 等の報告中に之を見出し得なかつた事を殘念に思ふものである。

引用文獻

(1) Durig u. Zuntz: Arch. f. Physls. 1901.
(2) Kestner mit Peemöller u. Schadow: Pflügers Arch. 217 (1927).
(3) Schneider: Amer. J. Physiol. 65 (1923).
(4) Haldane mit Douglas, Henderson, Schneider: Philos. trans. roy. Soc. B. 103 (1913).

(5) Bürgi,E.: Arch. f. Physiol. 1900.
(6) Loewy mit Constamm, Ernst, Schmid, Blaschko: Pflügers Arch. 207, Erg. Physiol. 24 (1925).
(7) Bornstein u. Loewy: Biochem. Z. 230 (1931)
(8) Kesteer: Handbuch der normolen und pathologischen Physiologie Bd. 17. 1926.
(9) Kestner mit Dannmeyer, Peemöller, Liebeschütz-Plaut: Klin. Wschr. (1925).
(9′) R. C. Macfie: Sunshine and Health. 1927.
A. Rollier: Die Helistherapie der Tuberkulose (1924).
Hausser und Vahle: Strahlencherapie (1921).
(10) Lippman u. Völker: Klin. Wschr. 1928. Nor. 5.
(11) Loewy mit Vogel Eysern: Strahlenther. 29. (1928).
(12) Loewy mit Constamm, Ernst, Schmid, Blaschko: Pflügers Arch. 207; Erg. Physiol. 24. (1925).
(13) Schneider: Amer. J. Physiol. 65. (1923).
(13′) Hingston: Noxton. Bis zur Spitze des Mount Everest (1924).
Kraus: Bauer. Im Kampf um den Himalaja (1920).
H. Richter: Dyhrenfürth's Himalaya unsere Expedition 1930.
(14) Zuntz u. Schumburg: Physiologie der Marsches, Berlin 1901.
(15) Loewy u. Schrötter: Wien. med. Wochr. 1925.
(16) Loewy mit Constamm, Ernst, Schmid, Blaschko: Pflügers Arch. 207; Erg. Physiol. 24. (1925).
(17) Margaria, R.: Arch. di Fisiol. 26. (1928).
(18) Simonson u. Gollwitzer-Meier: Klin. Wschr. 1929.
(19) Loewy: Die Respiration und Zirklelation in verdünnter Luft usw. Berlin 1895.
(20) Jaquet u. Staehelin: Arch. f. exper. Path. 46. (190.)

平ヶ嶽を繞る澤について

中村謙

平ヶ嶽（二一三九・六米）に源を發する澤に六條ある。西南より之れを列擧すれば、

利根川方面

1 水長澤
2 劔ヶ倉澤

只見川方面

3 中ノ岐川（本流）
4 二岐澤
5 戀ノ岐澤
6 白澤

となる。いま私の過去數ケ年に亘る貧弱な經驗から及ぶ限り、これを詳述して見ようと思ふ。聊でも御參考になれば望外の幸である。

水長澤

水長澤は三流澤ともいふ由、郡村誌藤原村水長澤の條に、

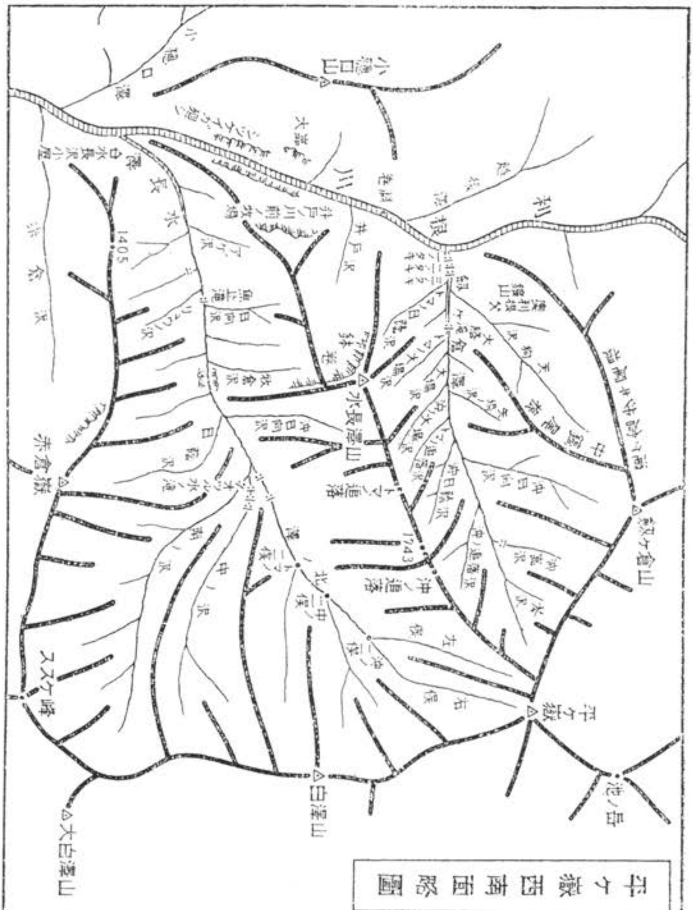
「源を三所に出す。一は戸倉村尾瀬の界笹分峯より出し、一は尾瀬の石坂の西脊に出し、一は中手山の北端に出す、之を三弦と云。皆數ケ所に瀑布あり。下流合して岩崖の溪底を漲り、西下して利根川に入る。長十四里、幅十三間。三溪の内源を文珠岩に發するものありといふ」

とあるを見ても「水長澤」なる名稱は流域の長きより附せられたるものに非らずして、其上流が北澤・中ノ澤・南澤（越後清水の獵師衆の呼稱に從ふ、以下同斷）の三條に分れてゐるより斯くは稱へられたものらしい。

終列車で東京を立てば水上から歩いたところで正午過ぎには湯ノ花溫泉に辿りつく。こゝには汚穢しいながら掘立小屋があるし、番人も居て炊事の面倒を見て呉れるから水源を志す人々の根據地とするには充分である。

從來は右岸沿ひの小徑に從つて西仙ノ倉を過ぎ、西仙コイデと稱する徒渉點で左岸に移るを常としたが、最近では湯のところで直ぐ籠渡しに依つて對岸に渡るやうになつてゐる。楢・栃・樅などの濶葉樹林に覆はれたヒラをへづつて進み、一旦川岸に降つて小黒（コグラ）澤を渉つてから樅付きの段にうつり、東仙ノ倉を過ぎて崩壞地にかゝると右岸に西仙ノ瀧が現れる。

ワレノカヤ澤附近には小さな濕地があり、水芭蕉・スゲなどが生育してゐる。再び樅付きの段に登つて進む。本流はこの邊で大きく灣曲してゐる。



平ケ嶽西南面略圖

ワレ澤は赤倉嶽の南面より流出する可なり大きな澤で、奇岩奇勝に富み、岩景の秀でたることは附近隨一なりとの評がある。トバロに横はる磊々たる轉石を見ても、荒れたときの物凄さが想像される。

尙も續く美しい樅林を穿つて進むうちに、やがて赤倉澤の出合に達する。蕨取りの小屋はもうつぶれてしまつて跡方もない。小曾根の突端を上下して間もなく川原に降ると、本流はこゝで乙字形にぐつと灣曲し、正面から小穗口澤が合流してゐる。この附近は中々氣持のいゝ處だ。

これより暫く川原を傳つて崩壞地を過ぎ、ヒラをへづつて進むうちに葦の生えた小濕地に出で、更に草地を經て樅付きの段を乘越すと、いつしか本流と別れて水長澤小屋に着く。赤倉澤から地圖で見るよりは餘程遠い感じがする。

小屋の下から愈々水長澤の遡行が文字通りに始まる。樅の倒木に依つて右岸に渡るのは水長澤尾根から沖の鑽山に通ずる徑で、これを辿れば一時間あまりの藪漕ぎで容易に平ヶ嶽の山頂に辿りつくことが出來る。

或は岸をへづり、或は岩をとび、或は流れに逆つて歩きよいところを拾つて遡つてゆく。半時間ばかりして右岸から出る小澤を見送ると直きに澁に出逢ふ。これは左手を捲く。間もなく落ちかゝつた雪橋があつて兩岸から小澤が合流してゐるところに出る。右岸に瀉ぐのはアゲ澤であらう。

第二の雪橋を過ぎると、右手から小澤が瀧を懸けて落ちてゐる。場が惡いので左を高捲きする。十分ほどで又も右手から小澤の落ちてゐるのに逢ふ。リユウの澤（假稱）だ。踏跡はこの澤について少許り上り、數人を容れるに足るリユウの下側を搦んで左岸に通じてゐる。

十五分ほどで第三の雪橋が現はれ、その直ぐ上流のところに魚止ノ瀧が懸つてゐる。二段になつたあまり高く

もない瀧であるが、かなり廣い淵をもつて黒青色に澱んでゐる。尚もヒラを搦んで樵林の中を進むにつれ、對岸に小澤の落ち込んでゐるのが見え出す。日向澤であらう。

リユウの澤から彼れ是れ三十分位で川原へ降りれば、左手から小澤が合流し、兩岸の相逼つて小瀧を懸けた瀞がつゞく。こゝは右岸を高捲きする。更に十分位で右から小澤が瀧となつて落合ふところに出ると、本流は小瀧の連續となり、處々小さいながらも深い瀞をもつてゐるので右岸をへつつて進む。

やがて牧倉ノ澤に達する。水長澤山の鉢卷から流出する澤で、藤原では大場澤（ダイジヨウ）と云つてゐる。かなり急峻な澤で處々に危しげな雪橋を殘し、頭上に鉢卷の岩峰が仰がれる。

本流はこゝで大きく右へ曲り、突當りにも小澤が細流を懸けて落下してゐる。落合には殘雪多く累積し一大雪橋を架けてゐる。

これから先きは水長澤切つての惡場で、兩岸は相迫つて廊下を成し、本流は瀧と瀞との連續だ。轟々の音を耳にし、氣味惡いまでに眞青に澱んだ瀞を時々俯瞰しながら、左岸につけられた鉈目を頼りに進んでゆく。

半時間ばかりで水聲の急で見事な瀧の上に出た。落口の上で右岸にうつる。間もなく第五の雪橋に達した。もう半ば落ちてしまつて兩岸に殘骸を留めるばかりだ。右側をくゞつて進む。こゝにも左岸から小澤がそゝいでゐる。

直ぐ小さな廊下に突當つた。澤通しに通行出來ないので右岸を高捲きする。川原に降ると間もなく左岸から澤が入つてゐた。日影澤であらう。出口は狹いが中々オクリがある。つゞいて小澤、これを過ぎると本澤は左に屈曲する。瀞があつて涉れぬので右岸を高捲きする。

遂に北ノ澤と南ノ澤との合流點に達した。北ノ澤は、こゝで左折し、南ノ澤はもう少し奥へ入つたところで更に二分して中ノ澤を分つ。南ノ澤も中ノ澤も共に落口に見事な瀑布を懸けてゐるのが望見される。殊に中ノ澤は瀧又瀧の連續で其景觀は實に素晴らしい。この澤は水長澤の眞の木流かとも思はるゝほど水量も多く、且つ堂々としてゐる。昔から文珠岩があるといふのは則ちこの澤である。それでこの瀧を「ミツルの瀧」若くは「文珠の瀧」といふ。清水の獵師たちから聞いた所に依れば、文珠岩の有無はいざ知らず、「文珠」なる語はこゝで三澤が合流してゐるので「三人寄れば文珠の智惠」といふ古への譬へから斯くは稱せらるゝ由。其眞疑は別とするも一顧に値する說ではあるまいか。

合流點附近は殘雪豐かで一大雪橋をなし、右岸の臺地には焚木が多く露營にはもつて來いのところだ。以前ここに小屋があつたらしく、白山イチゲや白根葵が人待ち顏に美しく咲き亂れてゐた。

北ノ澤に入ると間もなく澤は右に折れ曲り、十五米程の瀧を懸けてゐる。こゝへ右岸から小瀧の連續した小澤が落合つてゐる。左手を高捲く。十五分もして又も本流が右へ曲ると眼前に三段になつた大瀧が現はれる。上段のは二つに分れ、左の方が大きく、この二つは恰も親子の如く再び手を結んで落下してゐる姿はしほらしい。この澤では最大の瀧である。右岸を攀ぢ登る。兩岸共兀々たる岩で傾斜も相當急であるが、岩が固い上にホールドが多く、案外容易に登攀することが出來た。

これより傾斜は次第に急を加へ、木流は滑瀧の連續となり、轟々たる水聲は谿間に木靈して人聲も辨ぜぬほどである。十分ほどで小瀧の左を高捲き、更に十分ほども進むと、又も大雪橋のところに達した。木流はこゝで左岸の切り立つた大岩壁にぶち當つて左に曲り、再び右に折れてゐる。雪橋の下は小規模ながら兩岸相迫つて見事

な廊下を成してゐる。雪橋を渡つてから左岸の草付きをへつる。

數分にして川原に降るか降りぬに又々深い澤だ。こゝで澤は左に曲る。左岸の岩壁の下には、二、三人を容れるに足るリュウがあるが、河身の近くとてあまり感心した泊場ではない。こゝは右岸の岩壁を攀ぢ登つて小曾根の突端を乘越す。これより岩壁は一先づなくなつて、明朗な澤歩きが出來るやうになつた。

流れと惡戲れつゝ徒渉を繰返すこと大凡そ半時間ばかりでトマの二俣に著く。殆ど同じ位の水量を有する澤が左右から合流してゐて、いづれが本流か一寸判定し難いが、左の方がどうやら大きいので左の澤に入ると行手に懐しい平ケ嶽が見參に及ぶ。

トバロで夫婦瀧を乘越して暫く進むと本流の右曲する赤褐色の岩壁のところに出る。右岸から小澤が合流してゐる。こゝは澤通しに難なく突破して本流に懸つてゐる小瀧を一股ぎにすることが出來た。

つゞいて兩岸相狹つて廊下を成し、深い淵をもつたところにぶち當る。これは右岸をへつれるが、それから約十分の後、いよ〳〵最後の難所が我々を待つてゐる。正面は赤褐色の脆い一大岩壁、そこに十二、三米の瀧が懸つて本流は右へ狹められ乍ら曲折してゐる。下から見えないが狹い廊下の中に澤と瀧とが連續してゐて、殘雪の豐でない限り、こゝを切り抜けることは容易ではない。左岸は取付き易いが百米から百五十米も高捲きをしなければならないので、右岸を選ぶ方がよい。僅か五十米足らずの高捲きで樅付きの段に登つて容易に降下することが出來る。

やがて中の二俣に著く。本流は出合の直ぐ下で小瀧を懸け、深い淵を作つてゐるので右岸をへつる。これも左俣へ入つて小さな瀧を乘越すと直きに十五米平方位の簾瀧が現はれる。眞白な幅廣い帶を垂したやうな素晴らし

い瀧である。左岸を攀ぢ登る。急峻な岩壁だが、石は固く、ホールドが多いので容易に突破することが出來た。瀧上で小澤が合流してゐる。本流・支流共に七、八米の瀧を懸けてゐる。これも右の瀧の右側を搦んで登る。すると直ぐ第二の簾瀧が現はれる。高さ十米、幅八米位。これも亦右手を捲いて登る。そうすればもう沖の二俣だ。右俣は二段の小瀧を懸け、左俣は一段の簾瀧を懸けてゐる。水量から云つても、高みからの目測から判斷しても、左の澤の方が本流らしく考へられる。然し平ヶ嶽の山頂に取付く爲めには右の澤を選んだ方がよい。

右俣に入ると急に水量が減じてしまふ。從つて歩き易くもなるのでピッチは頓に上る。岩から岩へ跳びうつりながら進んで行くと澤がぐつと右へ曲折して眞正面に平ヶ嶽の山頂が仰げるやうになる。二、三米から五米位の小瀧が斷續し、兩岸には南京小櫻や岩鏡が美しく咲き亂れてゐる。

やゝ遡つて愈々平ヶ嶽の山懐に入ると傾斜は次第に加はつて澤は滑瀧の連續となり、處々に殘雪の斷片が横はつてゐる。顧れば背後に赤倉嶽がどつしりした巨軀を擡げて堂々と聳えてゐる。雪渓の盡きる所で澤は二條に分れてゐる。左の澤の方が大きいらしい。急傾斜の岩みちをぐん〳〵登つてゆく。

やがて兩側は藪になり、更に三、四分で本流は又も二股になる。右の方は水量が多いが、澤幅の廣い左の方を選ぶ。直ぐ水が盡き果てた。背後に至佛山を顧みながら、磊々たる急傾斜の岩みちを辿つて登攀をつゞける。

涸澤のツメと覺しきところに達すると其處に岩膚をむき出した露岩があつた。これを右に捲いて登ると一段と細い涸澤が尚もつゞいてゐて、附近にはバイケイサウが美しく咲いてゐた。

急傾斜の岩みちを登るにつれ、又も熊笹の藪が兩側から覆ひかぶさつてゐて歩きにくゝなるが、これも束の間やがて南京小櫻や岩銀杏や日光キスゲの咲き亂れる美しい草原に踊り出て、あたりの景はパツと展ける。

【足　跡】明治二十七年九月、第一回利根水源探險隊が大仕掛で利根水源の遡行を企てたが、水源の事情に精通したガイドなく、加ふるに精密な五萬分の測圖もなかつた爲め、水長澤を水源と思ひ込んで、平ケ嶽から大白澤山につゞく山稜に出で尾瀬に抜けてしまつた（太陽第一年第一號）。

明治二十七年九月、探險隊の一行から四、五日遲れて木暮理太郎氏が渡り者のガイドを連れて一行の通つたと同じいコースを經て尾瀬へ（山の憶ひ出上卷）。

大正十一年、一高の濱田和雄氏が水長澤から平ケ嶽・尾瀬へ。

昭和六年八月、成蹊高校の丹治道生・久野修吉・對島大一・上田信三の諸氏が林主稅をつれて水長澤遡行。澤の中で二泊して平ケ嶽に取付き、ススケ峯より楢俣川下降、澤中で一泊して藤原へ（記錄第二號）。

昭和七年七月、角田吉夫・荻島四雄の兩氏が同じく林主稅をつれて水長澤遡行、平ケ嶽・尾瀬へ。

昭和八年七月、得田甚次・廣野の兩氏が林主稅を案內として平ケ嶽、尾瀬へ。

昭和十一年三月、東京文理大の杉木要氏他二名が清水の人夫二名をつれて水長澤を遡行して平ケ嶽を往復。

昭和十三年七月、水戸高校の福中四郎・石河健太・宇賀神晃男・村井弘平・吉田照藏氏の一行が中島定吉を案內として水長澤遡行、平ケ嶽へ（水高部報第十號）。

昭和十四年七月、水戸高校の篠澤襄二・佐藤愛・細江尙也・關野明一氏が水長澤より白澤山に出で平ケ嶽へ。

昭和十五年七月、水戸高校の福中四郎・江美洋甫・篠澤襄二・飯田康治・山田實・井上雅彥氏一行が水長澤遡行、平ケ嶽・尾瀬へ。

昭和十五年七月、中村謙・中臺橫一氏が貝瀨保をつれて水長澤から平ケ嶽へ。

【記　錄】七月三十日（快晴）。湯ノ花（五・三〇）―水長澤小屋（七・五〇―一一・〇五）―牧倉ノ澤（一一・五五―一二・二〇）―南ノ澤出合（四・〇〇）

七月三十一日（快晴、夕立）。露營地（五・二〇）―トマの二俣（七・五〇―八・三〇）―大岩壁のところ（九・〇〇―一〇・三〇）―沖の二俣（一一・〇〇）―平ヶ嶽（一二・二〇）

【備　考】北ノ澤と南ノ澤出合附近に地圖の大きな誤りがあるらしい。日影澤から合流點まで十五分、合流點からトマの二俣まで正味二時間を要するところを見ると、南ノ澤は獨標一五二一米の西北に流れ出なければならないわけである。尙ほ中ノ澤も合流點附近に落ち合つてゐることは前述の通りである。

劒ヶ倉澤

水長澤小屋へ降る一寸手前の樅林の中で左に分れて、あるか無いかのやうな微な踏跡を辿ると間もなく水長澤の出合に達する。この附近は非常に氣持のよいところである。

遖の大利根も水長澤を過ぎると急に水量を減じ、これが名にしおふ「阪東太郎」かと思ふほど、小さな川になつてしまふが、それだけ兩岸相迫つて流れが急になる。

水長澤の出合から二時間たらずで、シツケイガ廻しの嶮に達する。如何なる嶮難惡路にも怖ぢないといふ羚羊でさへ三舍を避けると云はるゝほど、兩岸が切り立つて狹い廊下を作り、奔流は飛沫をとばして其間を迸つてゐる。よつぽど水の涸れたときでゝもなければ、河身通りに通行することは不可能であらう。然し盆栽取りの徑が左岸のかなり上の方を搦んで通つてゐるから、これに從へば難なく突破することが出來る。

四、五十分で井戸澤の出合に達する。こゝでも行手の深い瀞を避けて、左岸の藪の中へ入つて崖をへづり乍ら進んで行く。やがて脚下に現はれる碧潭は、かつて秋田の獵師が親子連れのシツケイを追ひつめて、この淵まで來たところ、切羽詰つた彼等親子は、今はこれまでとばかり、ザンブと水中に身を投じて、ぐる〳〵巻きに捲かれてしまつたといふ、いとも哀れな傳説をもつ「巻淵」である。

それから一、二分で川原へ降り、間もなく對岸に渉れば、處々道がとぎれて定かでないといふものゝ金山盛んなりしころの跡形が、此處かしこに其名殘りを留めてゐる。

越後澤の落口附近は實に心地のよい渓觀をもつて我々を惹きつけるところがある。本流と越後澤とに挟まれた小高い臺地には以前金山の事務所があり、つゞいて獵師小屋が建つてゐたが、今は其跡形もない。

小屋跡から樹間に明滅する草深い金山みちを辿つて進む。暫くすると對岸の岩壁から劔ケ倉澤が飛沫をあげて滔々と落ち込んでゐる。落口附近には一ノ瀧・二ノ瀧・三ノ瀧とかなり大きな瀧が三つほども懸つてゐて、澤通しに歩くことは非常に困難なので、右岸のヒラをへづつて進んでゆく。

デトの日蔭澤を對岸に眺めながら一寸した山の鼻をぐるつと廻ると、行手に中鎞尾根（ナカシノギ）の末端が見え出す。この邊の河身は大分歩きよい。一寸した徒渉や岩壁のへづりは勿論何回も繰返さなければならないが、何十米も高いヒラをへづる要はない。

入口から二時間ほどで天狗澤の出合に著く。この澤は本流に劣らぬ水量をもつた深い澤で、以前はこの奥に金山があつたところから金山澤と稱へられてゐた。

この邊までは概して右岸の方が歩き易いが、天狗澤を過ぎると暫く左岸にうつる方がよい。岩をへづり、崖を

攀ぢること十五分あまりで、前面に見事な瀑布が飛沫をとばして懸崖から落下してゐるのに直面する。高さは五十米ほどもあらうか、劔ケ倉澤最大の飛瀑で「大膳」といふ瀧である。

この瀧からは右手のガラ〳〵した岩澤を二十米も登つて、左側の崖に取付き、小さな尾根を乗越して再び本澤に降ると、間もなくトマの大場澤（ダイジヨウ）が美しい瀧となつて落ちてゐる。これから暫くは幾度か徒渉こそすれ、比較的樂に河身を通過することが出來るが、一旦大場澤（地圖の水長澤山の東、岩符號のある峰から出てゐる澤）にさしかゝると、劔ケ倉本來の面目は躍如として其姿を顯はし、瀞と廊下と瀧が可なり長い間連續する。晴天つゞきで水量の尠い時ならいざ知らず、雨あがりで水の多いときには、どうしても岩壁をへづるよりほか仕方がない。右岸を五、六十米も登つて岩から岩、草から草へとうつつて、牛よりも最つとのろい歩み——歩むのぢやないずるのである——それを手足の痛くなるほど繰返して行く。

沖ノ大場澤が目と鼻のところへ近付くころになると、本澤も餘程樂に歩けるやうになる。幾つも幾つも懸つてゐる大小の瀧を一つづつ懸命に乘越してトマの追落澤に到り、さらに昔秋田の獵師たちが假住居をして、狩をしたといふ右手の段を通つて再び河原に降り、岩から岩へ跳びうつつて徒渉をつゞけるうちに、又も瀧が次から次へ現はれて到底河身通りには行かれぬやうになる。こゝも右岸をへづる方がよいやうである。

沖ノ日向澤に達すると漸く廊下らしい廊下がとれて、大きな荒石が急に目立つて增えて來る。その岩のうへをぴよん〳〵跳んで行く。三、四十分で沖の追落澤に着く。川幅はこの邊から次第に狹くなつて、河身全體が非常に歩き易くなる。

沖當ノ澤を過ぎると再び懸崖が現はれて傾斜も銳く、本流は殆ど連續した瀧となつて稍々豪壯な觀を呈するが

下流の廊下附近とは異つて手懸りもよく、草付も澤山あるから、遡行には大いした苦勞はない。

やがて頭上に無名の岩峰を仰ぐあたりに、右から一本の涸澤が下つてゐる。本流を見送つてそれを遡る。兩岸は熊笹に掩はれてはゐるものゝ非常に通り易いからぐん〳〵登つてゆく。登るにつれ、あたりには奇岩奇峯が點在し、景は益々展けて懐しい上越の山々が双眸の裡に入つて來る。

半時間ほどで平ケ嶽と其西南に聳える二〇八〇米峰との鞍部に達する。右を見ても左を見ても熊笹と偃松と石楠の恐しい藪だ。然しそれも長い間の惡戰苦闘ではない。ひたすら頂上目指して猛進するうちに、間もなくコイハカヾミ・チングルマ・ショウジョウバカマ・ヒメシャクナゲなど美しい高山植物に彩られた草叢に、きれいな水を湛へた池塘のある高原狀の草地にとび出す。

【足　跡】　昭和八年八月、中村謙・小野塚正生(案内者)。劔ケ倉澤を遡行して平ケ嶽へ(山と溪谷第廿六號)。

昭和十一年八月、黒田正夫、同初子夫妻が林主稅を伴つて劔ケ倉澤遡行、途中一泊の上平ケ嶽から尾根通しに尾瀬へ(ケルン第四三號)

昭和十二年五月、佐藤公正氏。水長澤尾根より獵師小屋に一泊の上、平ケ嶽往復、劔ケ倉澤を下降して午後八時頃本流との出合へ到著。

昭和十四年七月、水戸高校の田中正夫・大原孝吉・前田勉の三氏、劔ケ倉澤より平ケ嶽へ。

この他に中島三千男案内にて劔ケ倉本澤より天狗澤に入り、劔ケ倉山に取付いたうへ、平ケ嶽・尾瀬へ向つた一行がある。

【記　錄】　八月八日(曇夕立)。湯ノ花(六・四〇)―水長澤出合(一〇・〇〇―一〇・三〇)―シツケイマワ

シ（〇・一〇―〇・五〇）―井戸澤出合（一・三〇―一・五〇）―雀淵（二・一五―二・四〇）―越後澤出合（三・三〇）

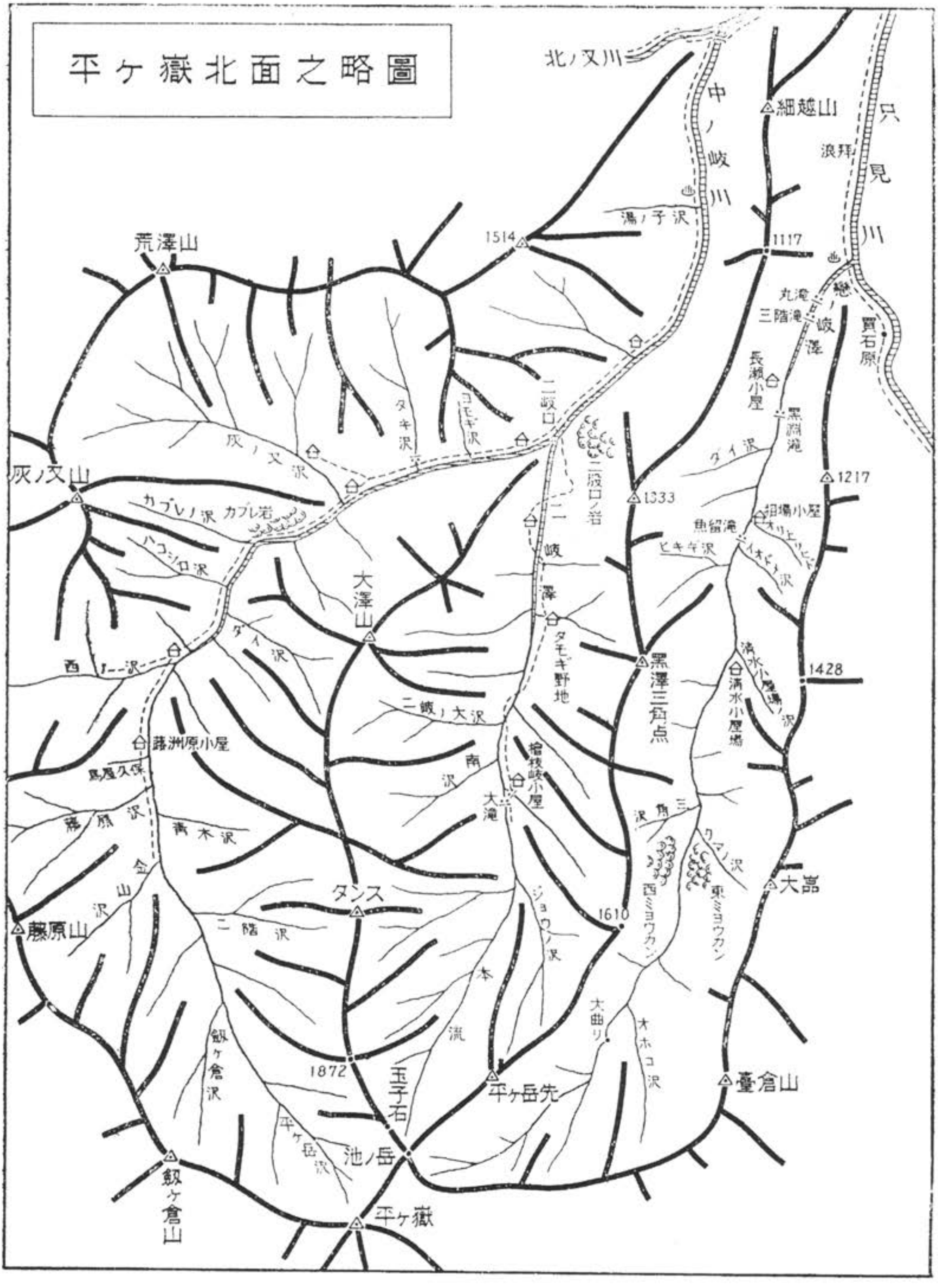
八月九日（曇雷雨）。夜營地（六・一五）―劔ケ倉澤出合（六・三〇）―三ノ瀧（七・一五―七・五〇）―天狗澤出合（九・三〇―九・四五）―大膳（一〇・〇〇―一〇・四五）―大場ノ澤（一一・一五―〇・二五）―沖日蔭澤（二・三五―二・五〇）―露營地（三・四〇）

八月十日（曇）。露營地（五・三〇）―沖日向ノ澤出合（五・五〇―七・五〇）―沖ノ追落澤（八・二〇）―沖富ノ澤（九・一五）―本澤との岐口（一〇・四〇）―國境尾根（〇・一五―一・四〇）―平ケ嶽頂上（二・三〇）

【備　考】劔ケ倉澤も出口附近に大きな地圖上の誤りがあるから訂正してをく。劔ケ倉山の僅か西北から西に分派した尾根はもつと南にうつつて、頂上から西南に走る尾根の位置になり、之を「瀧ケ倉歩き尾根」といふ。從つて地圖に劔ケ倉山の頂上から西南に分派されてゐる尾根は、瀧ケ倉歩き尾根の一部から派出せられることになる。これを「中鎞尾根」といつて積雪期に於て獵師には重要な狩場の一つである。尙ほ瀧ケ倉歩き尾根と中鎞尾根との中間を流れる澤は、天狗澤（一名金山澤）といふ澤で、其落口は地圖のやうに利根の本流には流入せず劔ケ倉澤へ落ち込む、かなり大きな支流である。

中ノ岐川（本流）

中ノ岐川の上流を平ケ嶽澤といふ。瀧又瀧の連續で、登るにも降るにも極めて困難なので、通常は（一）池ノ


平ヶ嶽北面之略圖
北ノ又川
中ノ岐川
細越山
只見川
浪拜
湯ノ子沢
1514
1117
荒澤山
丸滝
三階滝
戀ノ岐澤
買石原
長瀬小屋
二岐口
タキ沢
コモギ沢
灰ノ又沢
灰ノ又山
黒淵滝
ダイ沢
1217
1333
二岐口ノ岩
カブレノ沢
カブレ岩
相場小屋
魚留滝
ヒキギ沢
オリエノヒド
イオギナ沢
ハコシロ沢
二岐澤
大澤山
ダイ沢
西ノ沢
タモギ野地
黒澤三角点
清水小屋場ノ沢
清水小屋場
1428
二岐ノ大沢
露洲原小屋
檜枝岐小屋
南沢
大滝
鳥居久保
藤原沢
青木沢
三角沢
クマノ沢
金山沢
西ミョウカン
東ミョウカン
大嵓
タンス
1610
藤原山
二階沢
ジョウノ沢
本流
大曲り
オホコ沢
叙ヶ倉沢
1872
玉子石
平ヶ岳先
臺倉山
平ヶ岳沢
池ノ岳
叙ヶ倉山
平ヶ嶽

岳から一八七二米の獨立標高點まで降り、それより西北に延びた尾根を降るか、或は（二）平ヶ嶽と劔ヶ倉山との中間二〇八〇米の峰から北に派出した尾根を通ることになつてゐる。

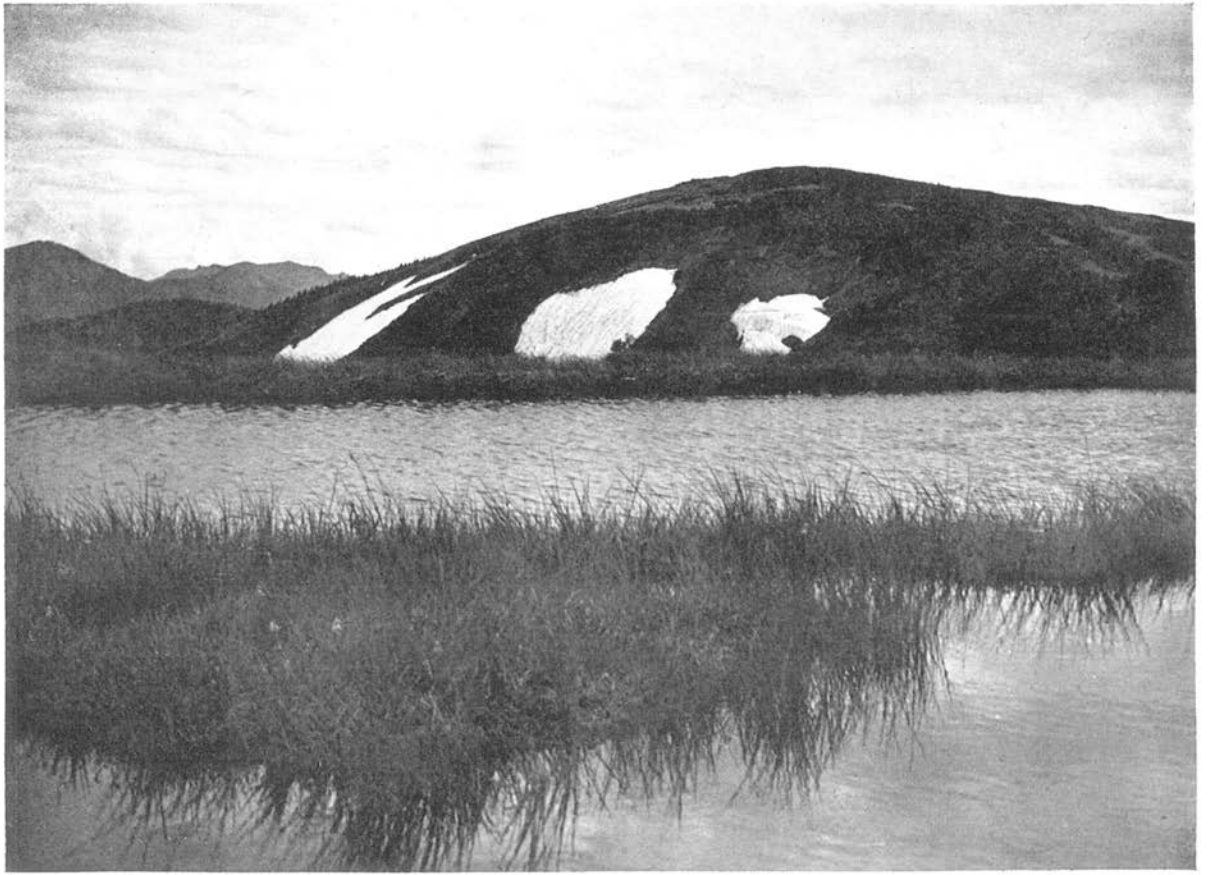
私は角田吉夫氏の「上越國境」にある、一八七二米峰の南に發して西に流れる澤を降つて見たが、思つたより惡い澤で、通過に多大の勞力と時間とを空費してしまつた。

平ヶ嶽の三角點から二十米ほども下を南から東に廻つて、東北に延びた尾根に取付き、其東側を搦んで暫く進むと二〇八〇米の圏を有する池ノ岳に達する。池ノ岳附近はのんびりした草原で、あちこちに數多の池糖が點在し、その周圍には美しい毛氈苔が一杯に繁茂してゐる。顧る平ヶ嶽の頂上は西方から仰いだとは全く異つた姿だ。こゝから西北に走る尾根を少し降ると有名な「玉子石」といふのがある。

池ノ岳から尾根の西側を通る。西側は概ね草付で平ヶ嶽澤の上流を覗きながら、悠々と歩くことが出來る。然し兩股に向つて分派した太い尾根に取りかゝるやうになると、手ひどい藪こぎが始まる。そうして水線符號の這入つてゐる澤に入れば、初めの中は大きな石がゴロ〳〵してゐて歩きにくいだけであるが、漸く落口が見え出す頃になると、急に傾斜が鋭くなつて容易に澤傳ひに降ることが出來ないやうになる。止むを得ず崖緣から三、四十米の高さ（主として右岸）をへづつて進んだが、眼と鼻のところを一時間半も要した。

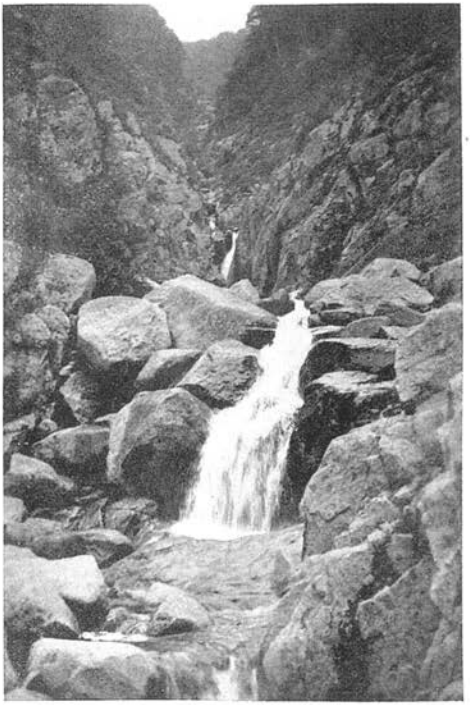
兩股附近から劔ヶ倉澤（劔ヶ倉山から北流する澤）までは、所謂ゴウタウで巨大な岩石が川の中一杯にごろごろして居り、美事な瀧が殆ど連續して懸つてゐるが、これといつて通りにくい惡場もない。

劔ヶ倉澤の出合から一時間あまりは河身通りに降つて行くが、大きな瀧の懸つてゐるところで、左岸の廣い段に登る。藪も大いして深くないから、歩くにそれ程の困難もない。對岸に二階澤の落口が見えるあたりになると、



池ノ岳より平ヶ岳を望む（遠景中央は武尊山　左は至佛山

中村　謙



中ノ岐川上流　　中村　謙

——澤岳ヶ平——

獵師たちのキリツケを處々に散見するやうになり、やがて一縷の踏跡が現はれる——それは細いながらも段々に明瞭になつてゆく。

藤原山（一七五〇・四米）の東南から東北に流れる澤は之を金山澤といふ。五萬分の一の測圖では二階澤と略略その出口が同じやうであるが、實際は半時間ほども下で本流に落ち合ふのであつて、而かも大きいには相違ないが、地圖で見るほど大きな澤ではない。なんでも劔ケ倉澤から金山澤の間は、餘程地圖と實際とは違つてゐるやうである。多分直接本流へ瀉ぐべき支流を金山澤へ落込むやうに認めてしまつたのであらう。

金山澤を過ぎると徑は急によくなる。恐くこの邊は中ノ岐川のうちで最も歩き易い部分であらう。四十分ほどで最奥の小屋である青木小屋を通り拔け、藤原澤や馬屋窪澤を迄迎して、蕗洲原ノ小屋を過ぎ、間もなく西ノ澤の合流點に達する。左岸の高みに西ノ澤小屋が在る。

徑はこゝから川の左岸に沿うて明瞭についてゐる。箱城澤やカブレの澤を渉り、カブレ岩を頭上に仰ぎながら灰ノ又澤やタキ澤を渡れば、やがて二岐澤との落合に著く。この合流點附近は實に感じのいゝところである。徑はそれから更に進んで平石澤を通り、湯ノ子澤を經て北ノ又川との合流點に達する。さうすれば其處はもう銀山平である。

【足　跡】　大正九年七月、慶應の宮川久雄氏が中ノ岐川遡行、平ケ嶽より尾瀬へ（登高行第三號）。

昭和三年七月、早大の渡邊公平氏他六名が尾瀬から平ケ嶽に登り、中ノ岐川を下降せんとして果さず、不本意ながら往路を引返す（リュックサック第六號）。

昭和五年七月、小千谷の倉澤新二氏が中ノ岐川から平ケ嶽往復。

昭和五年七月、法大の阿部秀雄氏、中ノ岐川から平ケ嶽・尾瀬へ（關東學聯第二號）。
昭和六年八月、栃尾の和田軍治氏、中ノ岐川から平ケ嶽を往復。
昭和八年八月、小出の坂西徹太郎氏（尾瀬の會員）が駒から兎・大水上山を經て一旦西ノ澤に降り、青木小屋から中ノ岐川を遡行、平ケ嶽往復。
昭和八年八月、中村謙、平ケ嶽より中ノ岐川下降、銀山平へ（山と渓谷第二十六號）。
昭和九年五月、「尾瀬の會」の小杉一郎・小原六郎の兩氏、中ノ岐川より平ケ嶽・尾瀬へ。
昭和九年八月、關東山岳會の日野重藏・竹内金次郎の兩氏、中ノ岐川より平ケ嶽・尾瀬へ。
昭和十二年八月、成蹊高校の太田新生氏が清水の小野塚金次郎を案内として中ノ嶽から兎・大水上山・西ノ澤中ノ岐川・平ケ嶽・尾瀬へ。

【記　錄】八月十一日（曇）。平ケ嶽頂上（七・五〇）―池ノ岳（九・〇〇―九・三五）―西北の尾根を降つて一九四〇米附近（一〇・〇〇）―中食（〇・四〇―一・二五）―本流との合流點（一一・〇〇）―劍ケ倉澤出合（三・二五）―金山澤（五・四五）―青木小屋（六・一五）―露洲原ノ小屋（六・五〇）
八月十二日（快晴）。小屋（六・四五）―西ノ澤出合（七・〇〇）―灰ノ又澤（八・三五―九・〇〇）―二股口（九・五〇―一〇・二五）―平石小屋（一一・三〇―一一・五〇）―中ノ岐川落口（〇・五五―一・四〇）―清水（三・〇〇）―石抱橋（四・一五）―明神峠（五・三〇―五・四五）―坂本（七・〇五）―大湯（八・〇〇）

【備　考】前述の通り金山澤の合流點附近の測圖に著しい誤記があるやうに思はれる。

二　岐　澤

中ノ岐川の支流、二岐澤は大きな澤で、その上流は傾斜の急なため瀧又瀧の連續で通過は非常に困難といはれてゐる。通常は平ケ嶽から池ノ岳へ廻り、それから尾根通しに平ケ岳先（△一八八六・八米）に到り、北微東に引いた太い尾根をジョウの澤出合（水線記號の出合ふところ）まで降るのであるが、この尾根は地圖で見るとは全然趣きを異にした馬鹿尾根で、初め三時間ほどは極めて緩傾斜で、それから先きは全く薙落されたやうな急傾斜を二時間近くも降らなければならず、搗てゝ加へて地圖には全然かいてない小會根が左右に派出してゐて實に複雜多岐といはなければならない。

池ノ岳の東北面、戀ノ岐澤のツメには盛夏尙ほ雪を藏してゐる。白花シャクナゲに別れを告げ、南京小櫻に眼を喜ばせながら、會津駒のどつしりした風貌を正面にして一息殘雪の上を降ると、小笹を混ぜた美しい草原が暫くつゞく。そうして傾斜が緩になれば白檜の灌木に熊笹とシャクナゲの藪に入る。右側の草付きを迂廻するのも業腹と、中央突破を敢行したが、思つたより藪は長く中々平ケ岳先との鞍部へは出られなかつた。それもその筈地圖で見るよりは、ぐつと左に曲り、右に折れて鞍部に連つてゐるからだ。相變らず燧と會津駒がよく見える。脚下の深い谷は戀ノ岐澤で、對岸には黒木で覆れた臺倉山（一六九五・三米）が默々と横はつてゐる。

これから先きはコメツガと熊笹の藪だが、矮小なので歩き易い。十五分ほどで再び密藪に入つた。すると幾何もなくして平ケ岳先の三角點に辿り著く。地圖と磁石を取り出して見當をつけ、白檜の切れ目に向つて豬突猛進した。シャクナゲと熊笹の密藪。白檜の木に攀ぢ登つて、あたりの様子を探査し、簡略な見取圖を作る。餘程ジ

ウの澤に降りて澤通しに降らうとか思つたが、途中に思はぬ伏兵の横はるを慮つて兼々聞いてゐる通り尾根通しに降ることにした。それが前述の如く、厭き〳〵する難路であらうとは夢にも思はなかつたところである。

尾根筋は專らツガ・檜・白檜などの黒木に覆はれ、下生えにはシャクナゲや熊笹が跳梁してゐる。前半は緩傾斜で、後半は物凄い急斜面だ。加ふるに小曾根が四方八方へ派出してゐるので針路を定めることも容易ではない。我々はついにジョウの澤の出合から少許本流よりに降つてしまつた。仰ぎ見る本流は未だ豊富な殘雪を藏しその割れ目からは見事な瀧又瀧が連續して懸つてゐる。全く急峻な荒澤だ。ジョウの澤の出合までホンの僅かなのに、瀞・瀧・廊下の連續で、その度に高捲きを强ひられる關係上、一時間近くもかゝつてしまつたことは一驚に値する。

ジョウの澤の出合を過ぎると澤は極めて歩き易くなる。瀞には鮖が澤山泳いでゐた。二十分ばかりで十二、三米の瀧に會し、シャクナゲの繁つた右岸を高捲く。川原へ降つてから暫く進むと右から滑瀧を懸けた澤が合流してゐて、檜枝岐小屋は直ぐその上のところにあつた。昭和十三年五月に建て直したもので、奥山の小屋としては上々だ。

これからは一縷の踏跡が右岸につけられてゐる。暫く段をつたひ、それから高みをへつてゆく。本流は相當惡場が連續するらしく轟々の音をたてゝ流れてゐる。背後に池ノ岳が仰がれる。

十五分ほどで川原へ降る。こゝで本流は左に大きく曲る。少許川原を傳ひ、大きな櫸の木のところから右へ入ると、川は再び大きく右へ折れる。三、四分も櫸付のヒラを進むうちに左岸から水量の多い澤が合流する。南澤であらう。

葦の生えた濕地を通り、川の大きく左へ曲る地點で右岸から出るかなりの澤を渉ると十分程で瀧のところに出る。本流はこゝで左へ曲り、右へ折れてゐる。川原へ降つて心持ち戻り氣味に左岸へうつる。

ヒラを傳ふこと僅か數分にして再び川原に降り、流木を利用して直ちに右岸へ取付き、熊笹の中を二十分も歩くと、やがてクモギ野地の小屋に達する。正面には荒澤岳から東に延びた山稜が望まれる。

小屋から約二十分、三本目の小澤のところで左岸に渉り、直ちに小澤を渉ると、こゝにも徴取小屋らしいさゝやかな小屋が建つてゐる。樵林を通り抜けて再び右岸にうつり、有名な「油サゴイ」にかゝる。かなりの高捲きだ。いよ〳〵登つて二股口の岩に近付くと、殘雪を藏した荒澤岳が眞正面に現はれて來る。遖は「上越穗高」と稱へらるゝだけあつて素晴らしい山貌を呈してゐる。

かくして下りにかゝれば、二股澤の出合はもうわけはない。徑は合流點の少許下流のところに出る。出合附近に於ける中ノ岐川本流の左岸は、青味を帶びた眞白な一枚岩の連續で、いつもながら美しく氣持がいゝ。

【足　跡】　大正十三年七月、慶應の杉田寧氏他一名が二岐澤から平ケ嶽・尾瀨へ（登高行第五年）。

大正十四年十月、大平晟・高頭義明の兩氏が大湯の主人櫻井太郎氏と共に二岐澤遡行、平ケ嶽へ向はれたが、折からの暴風雨の爲め惜しくも途中から引き返された。

昭和二年十月、仙臺の馬淵秀一氏が二岐澤から平ケ嶽・尾瀨へ。

昭和四年七月、仙臺の後藤良三郎・慶松光雄の兩氏が二岐澤から平ケ嶽・尾瀨へ。

昭和七年八月、十日町の鈴木祐二・五井鐵彌の兩氏が二岐澤から平ケ嶽・尾瀨へ。

昭和十五年八月、中村謙・中台橫一氏が貝瀨保をつれて平ケ嶽から二岐澤下降。

【記　錄】八月一日（晴後曇）。平ケ嶽（五・五〇）―池ノ岳（六・五〇―七・一〇）―平ケ岳先（八・四五―九・〇五）―中食（一一・〇〇―一一・五〇）―川原（一二・一〇）―ジョウの澤出合（三・四〇）―檜枝岐小屋（四・二五）

八月二日（晴後曇）。小屋（七・二五）―タモギ野地の小屋（八・四五―九・〇五）―二岐澤と本流出合（一〇・一〇）

戀ノ岐澤

この澤は平ケ嶽を繞る他の澤とは異り、大いした瀑もなく、瀧もなく、惡場とてもない代りに殆ど滑瀧の連續を懸けた厭き〳〵するほど長い澤で、澤の中で二泊を餘儀なくされた。入口からクマの澤附近までは、どうやら踏跡があるが、それから上には徑がない。獵師も精々オホコザハ附近までほか行かぬらしく、それから上流に關しては全く無智である。

銀山平から尾瀨へゆく道と別れて戀ノ岐澤に入り、右岸について可なり踏まれた蕨取（ワラビ）りの細徑を辿ると大凡三分ほどで溫泉へ行く徑が右に分岐してゐる。對岸を見れば湯口は靑味を帶びて盛んに湯氣を吐いてゐる。

左上へ一息登つて暫くの間草深いヒラを搦み、それからもう一息小坂を登り切れば其處には大きな夫婦檜が二組ほど立つてゐて、キリツケが澤山してある。蕨取りや獵師たちの休み場らしい。この附近の本流には丸瀧が懸つてゐる由。

これより徑はサンガイの瀧の上を捲いて二十分ほどで對岸に涉る。すると間もなく長瀨小屋に達する。一寸し

た平地に蕨とりのさゝやかな小屋が建つてゐる。

茎の一面に生ひ茂つた濕地を横切り、危かしいヒラのへづりを經て十五分ほどもすると大きな櫟付きの段に出る。踏跡はこの附近で明滅してゐる。私たちは直ぐに澤へ降りて、澤なりに十五分ほども進み、そうして澤がぐつと曲折して滑瀧となつてゐるところから左岸を十米あまりも這ひづり登つたが、本當の徑は澤へ降つて五分ほど歩いたところへ右から瀉いでゐる小澤をのぼるやうになつてゐるらしい。

五分ほどで上の小徑に出た。崖ぶちの櫟の木に「カニベツリ」と認めてある。脚下の溪聲が騒しいところを見ると本流は瀧又瀧の連續らしい。黒淵といふのはこの邊のことか。尚も二十分ほどの危かしいヘヅリがつゞく。大澤（ダイサハ）の出合の手前で本流へ降り、少許大澤へ入つてから直ぐに段に登り、相變らず左岸をへづつたり搦んだりして二、三十分も進むうちに對岸から落ちてゐるオリ上りヒドと稱する細い小澤が目に付く。そうしてその少し許り上のところで本流を横切つて右岸にうつると間もなく相撲小屋場の平だ。小屋は物置を除くほか取り壊してあつた。

附近にはこの冬の傷々しい表層雪崩の被害が歴然として横はり、櫟の限りない倒木が續く。これを踏み越えたり、渡つたりして其場を通り過ぎ、清々しい櫟の原生林に入れば、踏跡は心持ち上り加減に進んで一寸した岩場にかゝる。こゝは一旦澤に降つて二、三分、川の中を徒渉すればよい。再び右岸に戻つてイオドメ澤を過ぎ清水小屋場の澤を渉れば、其處はもう清水小屋場であつて、美しい楓の原生林の中に太左衛門の小屋が建つてゐる。これは戀ノ岐澤最奥の小屋場で、而かも蕨とりの小屋としては實にしつかりしたものである。

小屋を出て暫く行くと、又も表層雪崩の見るも怖しい慘害だ。鬱蒼たる櫟の林もこゝだけは薙ぎ倒されて獨り

明るくなつてゐる。倒木又倒木の折れ重つた上を、或は跨ぎ或は渡つて進んでゆく。俯せば木流は滑瀧をなして流れてゐる。

巨木が盡きてヤマコウバの叢林に入ると雜草が蔓つてゐて容易に歩きにくい。勿論踏跡は朦朧たるもので、僅かに鉈目を見出すのが關の山である。踏跡はこの邊から左岸の梯付きの段へうつる。

滑瀧のところで右岸へ渡つた。ヒラに大殘雪が光つてゐる。仰げば對岸には西ミョウカンの岩壁が巍然として聳えてゐる。

處々に明滅してゐる鉈目を辿り、半時間ほどで殘雪が谷を一杯に埋めてゐるところに降る。右岸から澤が落ちてゐる。これは多分三角澤であらう。

間もなく右岸に舞ひ戻る。草深い上に蔓物がはびこつてゐて、歩きにくいこと夥しい。對岸を見るとクマの澤が瀧となつて落ちてゐる。本流はこのところ心持ち右へ曲つてゐるやうに思はれる。

川原へ降りて暫く澤なりに本流を遡る。間もなくすると右岸に殘雪のべつとり付いてゐる處へ出たので、それをへつり、二十分ばかりで殘雪が谷を一杯に埋めた地點に達する。行手には大きな滑瀧が懸つてゐて倒木が非常に多い。その上を懸命に渡つて進む。

やがて右岸が廣々とした須原になつてゐるところに出た。大きな倒木の錯綜だ。踏み越えたり渡つたりして三十分ほどで大雪橋のところに達する。雪が暫くつゞいてゐたので非常に道が捗取つた。

右側からつゞいて二澤が本流に瀉いでゐる。手前の澤はホンの小澤に過ぎないが、次のは可なり水量の豐富な澤である。多分一六一〇米の獨標から落ちてゐる無名の澤であらう。これでミョウカンの岩壁下は通り越したわ

けだ。戀ノ岐澤もこの邊で渓相を一變し、その特色とも云ふべき滑瀧の連續となり、概ね澤通しに遡行することが出來るやうになる。

無名の澤から十分ほどで階段狀の滑瀧にぶつかる。これは瀧の左側を搦む。それから十五分も進んで幅廣い瀧を乘越し、更に二、三十分も遡れば、大きな滑り瀧のところに出る。この瀧はその上が段になつてゐて直ぐ小さな瀧に連續してゐる。右手の藪を高捲きして之れを乘越す。

瀧の上へ降りてから十分ほどで大きな淵のところへ出る。その上は一寸した滑瀧で、之れを越して二十分ばかり遡ると、こん度は美しい五段になつた瀧が現はれる。左手を搦んで登る。

やがて大きな深淵にぶつかる。本流は相變らず瀧と滑の連續で、或はへつり、或は高く捲いて進んで行く。

二十分ほどもして左から小澤を合すると間もなく第二の雪橋に辿りついた。相當長い雪橋で、いつもながら道が大いに捗取つた。

右から小瀧をかけた小澤を合すると、つゞいて左から可なりの小澤が落ちてゐる。水量はあまり多くはないがこれが所謂「オホコザハ」であらう。戀ノ岐澤の枝澤として名のある最奥の澤である。

オホコザハから五十分ほどもすると、小さな廊下狀を成す岩間にかゝる。こゝには岩間を迸り出る一條の瀧が懸つてゐて一尺位の山椒魚が誰れに脅かされるゝこともなく悠々と游ぎ廻つてゐた。

間もなく澤の極端に大きく曲折した地點にかゝる。澤通しに歩いてゐると少しも分らないが、尾根上から見ると全く甚しい屈曲振りであるので、こゝを「大曲り」と假稱した。

大曲りから十五分ほどで地圖に水線の認めてある小澤を過ぎ、廊下狀の岩間にかゝれば其處にはかなり曲りく

ねつた瀞が横はり、その奥には大きな瀧が飛沫をあげて落ちてゐる。瀞は左をへつり、瀧は右手を高捲きする。川原へ降りてから數分で小瀧を乘越すと、一寸した瀞のところへ出る。これは右を高捲く。もうこの邊まで來ると本流も次第に歩き易くなるが、滑瀧だけはどこまでもその姿をかくさない。

半時間ほどで平ヶ岳先附近の尾根が見え出す。小さな瀞を過ぎ、二澤が左右かる瀧となつて落合つてゐる廊下狀の岩間を通り抜け、二、三十分も進んでから小さな瀧を左に高捲き、更に十五分もして、より大きな瀧を右に高捲くと、暫くの間は小瀧の連續となる。

左からの小澤を見送つて十五分程で奥の二股に達する。地圖で云へば池ノ岳と平ヶ岳先との中間から一四八〇米附近へ注ぐ小澤との合流點である。本流も枝澤も共に瀧となつて落ちてゐる。

奥の二股を出てから三十分ばかりで美事な滑瀧につく。これから傾斜は急にきつくなり暫くは滑り瀧の連續なので、右手の藪を搦む。二十五分ほどもかゝると滑り瀧は終つた。それから幾つかの小瀧を乘越えて更に半時間ばかり遡ると、殘雪が澤一杯に横はつてゐるところへ出る。行手を仰げば池ノ岳の頂上は頭上間近に迫り、願れば會津駒が黒木に掩はれて殿かにその峰頭を窺かせてゐる。

【足　跡】昭和十一年八月、中村謙・櫻井高五郎（案內人）、戀ノ岐澤遡行平ヶ嶽へ（山と溪谷第四十九號）。

【記　錄】八月二日（曇時々晴、雷雨）。須原口（五・五〇）—戀ノ岐澤入口（六・五五）—長瀬（八・〇五）—大澤（九・三五—一〇・二〇）—清水小屋場（〇・一〇—〇・三〇）—雷雨の爲め休憩（一・四五—二・四五）—クマの澤合流點（四・一〇）

八月三日（細雨）。幕營地（八・〇〇）—須原（八・三〇）—無名澤（九・一〇—九・二五）—中食（一〇・

五五—〇・〇五）—大コザハ（二・三〇）—大曲り（三・五〇）
八月四日（雨後曇）。幕營地（八・一〇）—奥の二股（一一・〇五—一一・三五）—池ノ岳（二・〇〇—三・〇〇）—平ケ嶽（三・四五）

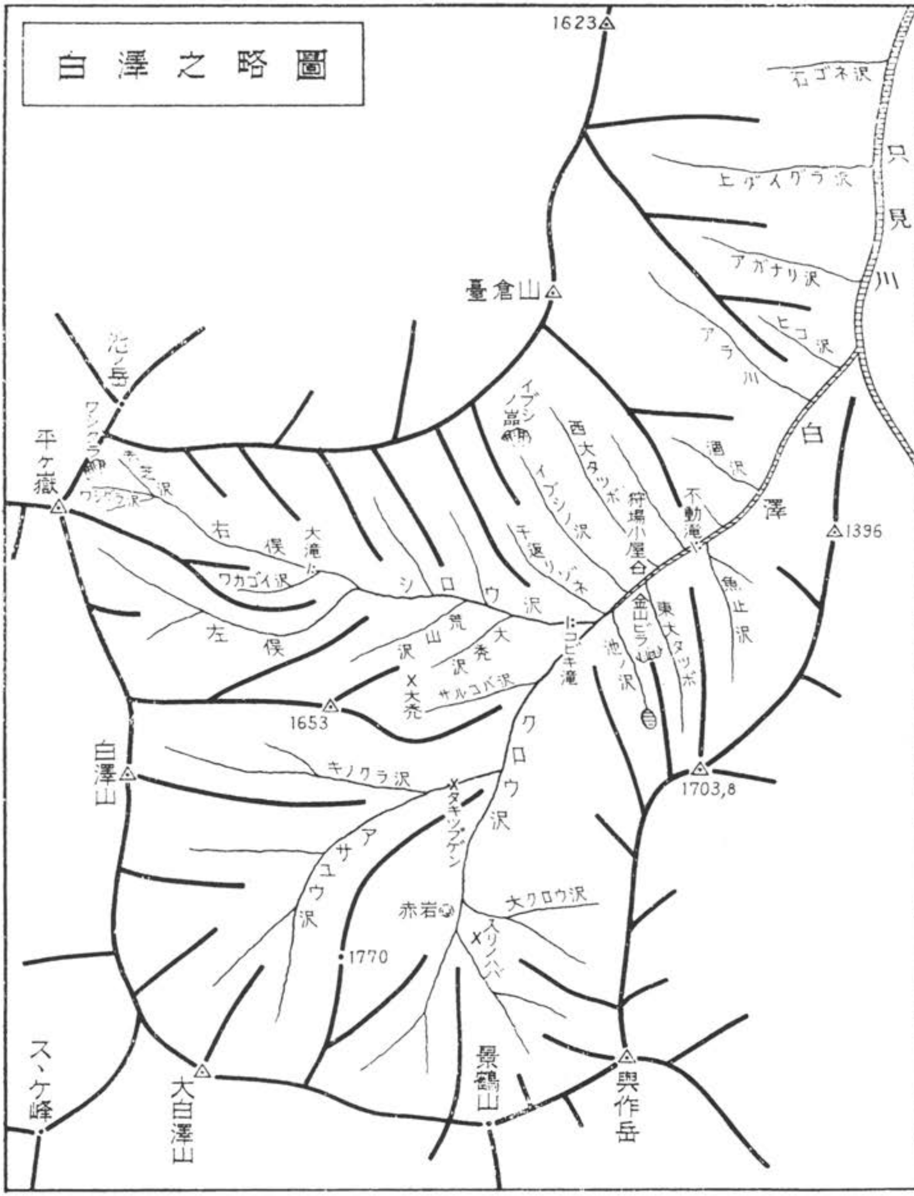
【備　考】陸測五萬「八海山」の圖幅を播くと、大嵓（一六二三・四米）の西方に物凄い岩石符號のかなり長く續いてゐるのを見出すであらうが、實際はその半分ほどで、南の半分は右岸の中腹から下のところへ移すべきである。そうして土地の人々は之を、東ミョウカン・西ミョウカンの名前で呼んでゐる。聞く所に依れば西ミョウカンよりも東ミョウカンの方が嶮しく、兩方共岩嵓が多いといふよりは寧ろ山全體が岩山から成つてゐると云つた方が適當で、冬期には羚羊がよく遊んでゐるとのことである。

白　澤

白澤の上流は二分してシロウ澤とクロウ澤とに岐れてゐる。平ケ嶽に引くのがシロウ澤（平ケ嶽澤とも云ふ）で、景鶴山と大白澤山との水を合して流れ出るのがクロウ澤である。シロウ澤とは其流域に闊葉樹多く、クロウ澤とは其流域に針葉樹が多い爲めに、積雪期には其對照があまりにも著しく目立つて見えるからだといふ。

シロウ澤の源流には鷲嵓といつて大きな岩嵓があるので、之をワシグラの澤といふ。尾根上から三百米ばかりは非常に切り立つた急峻な斜面で、そのうへ水がジク〳〵流れてゐるので、アイゼンなしでは降りにくいやうなところである。

雪が消えて、いましがた若芽をふいたばかりの高山植物が妍を競ふて咲き亂れるさまは、正に天上の樂園にも



白澤之略圖
1623
只見川
石ゴネ沢
アガナリ沢
ヒコ沢
アラ川
臺倉山
池ノ岳
平ヶ嶽
ワシクラ沢
イブシノ嵓
西大タッポ
イブシノ沢
狩場小屋
不動滝
酒沢
白澤
1396
右俣
大滝
ワカゴイ沢
シロウ沢
千返リゾネ
金山ビラ
東大タッポ
魚止沢
池ノ沢
コビキ滝
左俣
荒山沢
大禿沢
大禿
サルコバ沢
1653
クロウ沢
白澤山
キノクラ沢
1703,8
タキツブゲン
アサユウ沢
赤岩
大クロウ沢
1770
スゝケ峰
大白澤山
景鶴山
與作岳

譬へるべきであるが、異常な緊張を要するので、ゆつくり觀賞してゐる暇がない。

五十分ほどもかゝつて漸く緩傾斜のところ迄降ると、ボツ〳〵殘雪が現はれ、更に十分ほどで赤芝澤との合流點に達する。右の方からも無名の小澤が一條落合つてゐる。背後を顧み仰げば、いま降つて來たばかりの鷲嵓の澤は切り立つてずつと上まで續いてゐる。そうしてその右上の方には曾て鷲が巢を造つたことがあるので其名のある鷲嵓といふ巨きな岩嵓が天を劃して聳え立つてゐる。北アルプスでもそう容易くは見られない堂々たる風景である。

雪崩もなく、クレバスもない豐富な殘雪の上を、鼻唄まぢりの氣安さで、どん〳〵降つて行くと、間もなく行手に美しい山容をもつた燧の巨軀が顏を出す。

赤芝澤の出合から二十分ほどで大瀧の上に出る。右手のヒラを高捲きして瀧壺に降ると右岸からワカゴイ澤が合流してゐる。往年獵師がこの澤でワカゴ（熊の子のこと）をとつてから斯くは稱へられるのだそうである。

大瀧は高さ約五十米位で、下から仰ぐと三段になつて見えるが、その上に尙ほ小瀧が二つほども重つてゐるとのことであるから、實際は五段になつた瀧である。

瀧下から尙も殘雪がつゞいてゐる。本流は瀧下でワカゴイ澤を合すると大きく、くの字形に曲折して五分ほどで左俣との出合に達する。左俣は一見水量が豐富で、この方が本流のやうな感じをいだくが、土民測量の結果矢張り右俣の方が本流らしい。

雪渓は尙もつゞいてゐた。五分ほどで又も一寸した瀧の上へ出たが、これは雪橋を工作して容易に降下することが出來た。瀧下へ右から小澤が入つてゐる。つゞいて左から二條の小澤。これを過ぎると間もなく、切り立つ

た岩山のところへ達する。松や檜がその岩間を縫に彩つてゐる。

こゝは頂上から見ると大きく禿げてゐるところで、獵師たちの言に依れば、澤筋からはよく見えないが、其中段が大きく禿げてゐるので遠くからの目標になるとのことである。兩側が切り立つて澤がギュツと狹められてゐるので物凄いデヴリーだ。

シロウ澤も愈々この邊から口をあいてゐてクレヴァスの續出だつた。到る處に危かしい雪橋が今にも落下しさうになつて懸つてゐる。澎湃たる雪融けの水は岩を嚙み、泡を立てゝ流れてゐる。深山の惡澤に相應はしい溪觀だ。瀧と滑と瀑とが限りなく連續し、時々思ひ出したやうに物騷な雪橋が行手を塞いでゐるので、僅かの間ずるにも容易な業ではない。愼重に或はへつり、或は捲いて進んでゆく。

五十分ほどで兩岸共切り立つた岩壁のところに逢着した。瀧が連續してゐて搦むにも搦めないので、止むを得ず右岸を大きく高捲きする。脚下に涼々たる激湍の怒號が薄氣味惡く木靈する。

四十分程もかゝつて惡場を越して殘雪豐かな雪橋の上に降りた。相變らず瀧と滑と瀑との連續だ。これを一々搦み、捲き、へづつて半時間あまりもすると、恐しい倒木群が澤を一杯に埋めて、うず高く重なつてゐるところに出た。倒木を渡つたり、踏みこえたりして進んだが、幸にもそれから暫くの間は殘雪が續いてゐて非常に歩き易かつた。

雪溪は荒山澤を經て大禿の澤の手前で盡きて居つた。一寸高捲きする。大禿の澤はかなり大きな澤で、その奥にはこれも獵師たちにとつて大切な「大禿」と稱する岩嵓があるそうである。

シロウ澤はこの大禿の澤を合すると急に川幅を增し、溪相は頓に一變する。十分ほどで左岸を捲き、更に五分

も進むと大きな雪橋の懸つてゐるところに達した。先きを見ると暫くは大小の危かしい雪橋が斷續するものゝやうである。右岸を搦む。

雪橋が終るともう川原は歩き易くなり、クロウ澤との合流點も直ぐ目と鼻のところに迫る。出合の一寸手前のところにコビキ瀧といふ瀧が懸つてゐる。

こゝから澤を離れて左岸の段に登る。其處は以前獵師小屋のあつたところで、あちらこちらの木にキリツケがしてある。

徑は既に荒廢してしまつて其跡方さへも定かではないが、古い鉈目を頼りに進むうちに、どうやら踏跡も明瞭になり、川沿ひに撫付きのヒラをへづつて行く。

小さな小澤を二つほど越えて、千カヘリゾネと稱する太い尾根を過ぎるとイブシの澤に出る。イブシとは烏帽子の訛りで、この澤の奥に烏帽子によく似た岩があるので其名が生れたのだそうだ。十分位で狩場小屋に著く。この小屋は冬は狩に、春先きは薇取りに使用せらるゝこの邊では重要な小屋である。

狩場小屋からはよい道ではないが、明瞭なみちが白澤の左岸に沿うてついてゐる。二十分ほどで不動ノ瀧が現はれる。これは一名魚留ノ瀧とも云ひ、高頭義明氏一行が平ケ嶽への第一夜をこゝで明かされた由緒ある處だ。

徑は時々澤へ下るかと思ふと直ぐに段に上るかヒラをへづつて進んでゆく。

不動ノ瀧から小一時間でアラカハの出合につく。こゝにも表層雪崩の恐しい被害が横はつてゐた。これより撫つきの段に入り、アガナリ澤へ通ずるヒコ澤といふ小澤を通つて五分ほどで只見川との合流點に達する。

【足　跡】　大正四年七月、高頭義明氏、白澤から平ケ嶽へ。これは白澤とその支流なるシロウ澤との出合から

尾根通しに平ヶ嶽を往復せられたもので、山岳第十年第三號に載つてゐる。

昭和六年七月、山形高校の田中實・吉田三郎の兩氏が駒から中ノ嶽・兎・大水上・平ヶ嶽と尾根通しに縱走して來て、白澤へ降られたが、折からの豪雨の爲め、シロウ澤上流の兩股より少許下から東の尾根へ逃げて白澤本流の出合へ降らる。

昭和八年五月、小出町の櫻井又衞門氏が銀山平の星兼三郎、佐藤善太郎の兩名を案內として白澤の狩小屋から烏帽子ノ嵓へ取付き尾根通しに平ヶ嶽を往復。

昭和十一年八月、中村謙・櫻井高五郎（案內人）。白澤の支流シロウ澤を本流なりに降下。

【記　錄】八月五日（晴後曇）。平ヶ嶽頂上（七・〇〇）—アカシバ澤出合（八・一五—八・三〇）—大瀧上（八・五〇—九・〇〇）—大瀧下（九・二五—九・四〇）—左俣出合（九・四五）—中食（一〇・三〇—一〇・五五）—大禿ノ澤出合（一一・四五）—コビキ瀧（一二・五〇—三・二〇）—狩場小屋（四・四五）

八月六日（曇時々晴）。狩場小屋（六・五〇）—不動ノ瀧（七・一〇）—アラカハ（八・二〇）—只見川との合流點（八・三五）—尾瀨から銀山平への道（八・五五—九・〇五）—原ノ澤（一一・三〇）

【備　考】陸測五萬「藤原」の圖幅を繙いて見るとシロウ澤が白澤へ注ぐもう少し上流へ平ヶ嶽の頂上から流れ落ちる澤があるやうになつてゐるが、この邊の谷に精通してゐる獵師たちにきいて見ても、そんな澤のあることを知つてゐるものはなく、從つてその中間に派出する太い尾根の存在も全然知つてゐないやうである。そういふことから考へて見ると、シロウ澤の奥へ落ちる澤は直接本流へ注ぐのではなく、一旦シロウ澤と合流してから間接に本流へ注ぐのであつて、それは正しく平ヶ嶽の頂上から發して大瀧の下へ出る左俣でなければならないと思ふ。

白馬三山とその以北

盛岡英治郎

參照地圖　陸地測量部五万分ノ一

白馬岳、黒部、泊、小瀧

まへがきにも記したやうに、私に山のよさをはじめておしえてくれたのが白馬岳であつたことから、私の過去の山登りの大部分が白馬三山及びその以北に費されて來た。訪れるごとに新らしい歡びを私に與へてくれ、親しみを增してゆくこの山塊のために、私は先輩や自分達仲間の過去の記錄を纏め上げることを思ひ立つたのである。

記錄は初登攀及び私たち仲間のものをあげたが、何分にも發表された機關雜誌がずい分多く、寡聞な私のこと故、見落したものも少くないことゝ思ふ。會員諸兄の叱正を願ふ次第である。

まへがき

私が白馬岳へはじめて登つたのは昭和三年七月のことであつた。このとき四ツ谷から南股をはいつて白馬溫泉で一泊し、翌日は頂上小屋で泊り、第三日目には雨の大雪渓を下つた。このときまで私は山らしい山へ登つたこともなく、また山登りはつらいものとのみ思つてゐたが頂上近くのお花畠などの美しさにすつかり喜んでしまつて、この登山が私の山への「病みつき」の原因となつてしまつた。その後昭和五年十二月大阪醫大の細野合宿へ水野祥太郎氏の斡旋により加へてもらつて、カヤバ（小屋はまだなかつた）や八方尾根で『七轉八倒』の練習をはじめた。それから、ほとんど毎年のやうに細野へはいりつゞけてゐるうちにいつし

か十年餘の歳月がたつてしまつた。この間の山へ登つた紀行をたどつてみたいと思ふ。

登山記錄の外に天候、雪崩などについてもしらべてみたいと思つたが天候については正しい氣象學上の常識をもたないし、また雪崩についてもやはり物理學ならびに地理學的の知識を待ち合はせのない私にはちよつと手がつかなかつた。申すまでもなく正しい知識のない觀察は、よしやそれが量的にかなりの數に上つたとしても、その結果の統計的なものは全く何の役に立たないのみか、ときとすると害になることすら考へられ得る。卽ち天候や雪崩に關する報告は正しい知識を基礎として始めてそれが參考になり得るのである。

それで結局私の記述は山登りといふ點のみからみた餘り科學的でないものになつてしまつた。なほ題名の「白馬三山」については、私は以前からこの名を使ひたいと思つてゐたところ先年『山岳畫家協會』の展覽會で中村清太郎氏がこの名を用ひてゐられたので私もこゝに用ひた次第である。そしてこの「白馬三山」のあらはしてゐるゲビートは信州側に於ては湯澤及南股入を、また越中側にては中脊尾根を、その南端とすることに約束しよう。北のはしは定義がむつかしいので「その以北」を加へてだいたい海岸線までとることにした。

山名について

一、高頭式編纂の日本山嶽志によると

「蓮華山（別稱朝日岳、大蓮華山）越後西頸城郡、信濃北安曇郡、越中下新川郡に跨る小瀧村大字大所より凡九里にして其山頂に達す、標高一〇、〇三五尺（提要）鑓岳、朝日岳の南にして其別峯なり。雪倉岳の北に位す、以上蓮華三峰と云。袴腰岳土俗裡蓮華と稱す。其他、乘鞍岳あり噴火山なり黑倉山、源臺山等諸山概して之を蓮華山と稱す。（摘譯）形ち蓮華に似たるを以て其名あり。嚴格に言へば一山に非ずして峰頂の群立せるものなり、飛驒山脈の最北に位す」云々。

「白馬岳（蓮華山の一峰）北安曇郡、西頸城郡、下新

川郡に跨る、登路北城村字四ツ谷、西頸城郡小瀧村大所よりす、標高九六八二尺一云々。

「鑓岳（別稱鎗岳蓮華山の一峰）下新川郡、北安曇郡に跨る、小瀧村大所より凡十一里にして其山頂に達す、標高九四九七尺」とある。

この時分には大所よりの登路が現在の四ツ谷口よりもよく利用されてゐたかの様である。尙一〇、〇三五尺の蓮華山は何處をさしてゐるか不明で、歴史の霞の中に煙つてゐる。

二、山岳第一年第一號雜錄「白馬山腹の大雪溪」一記者によると

「信越の境に跨りて三大山あり、海抜一〇、〇〇〇有餘尺坤輿の中樞萬邦の重鎭たり。（中略）朝暾に映じては峯尖の殘雪白駒の蒼空に奔騰するが如し故に民呼んで白馬と云ひ夕陽を受けては眞紅の英姿中天に懸りて紅束の實際に開けるに似たり故に越人名けて大連華と稱す」

とあり、この山が信州名が白馬、越中名が大蓮華なることを云つて居られる。

三、山岳第一年第二號「白馬籠城記」河田默、武田久吉兩氏によると

「（前略）雪が稍、消えかゝる時馬の形の岩が現はれるとかで山麓の民は之を白馬と呼んで居る。此の邊一帶の連山を蓮華と總稱し、又は大蓮華小蓮華に分ち呼び或ひは杓子鑓の稱を用ゐるので山名が極めて曖昧である。」云々。

四　山岳第一年第二號「白馬岳及鑓ケ岳」志村烏嶺氏

五　山岳第一年第三號雜錄「日本アルプスと其登路に就きて」高頭式氏。

六　山岳第二年第一號「蓮華山及針木嶺」大平晟氏これらの文獻によると何れもが同山異名を認めて居る。

七　山岳第六年第三號雜錄「白馬岳の名」蝶郎記によると

「白馬岳はシロウマにてハクバに非ず昔時は大蓮華と稱したる由頂上より北にあたりて八十八夜の頃黒く田の代を耕す如き馬の形現出する故に代馬と云ふ」云々

とある。

八　山岳第九年第一號「白馬岳」市村塘氏によると「白馬と大蓮華とは別な山だ」といつて居られるがこれは少し無理と思ふ。いふまでもなく現在では大蓮華山なる越中名はほとんど消滅して信州名たる白馬岳のみが使用されてゐる。

登路

かなり以前は信州側よりは四ツ谷から北股入、白馬尻を經て頂上へ、越後側よりは大所から蓮華温泉を經ての登路がとられてゐたやうであり、ついで小川温泉より柳又谷を經てのコースが開拓され黒部川を通つてくる登路が開かれたのは比較的新しい。蓮華温泉はずつと昔、上杉謙信により開湯されたものと傳へられてゐるがこれはおそらく部下傷病兵の療養の爲だと考へられよう。

日本山岳會が設立された當時は全く自然の偉觀に接したいといふ氣持からの山登りだつたが、次で自然科學者達がその研究の對象として山に登り、これにまじつて一般の登山者もぼつぼつあつたものと推察される。そして大正八、九年頃から近代的登山の對象として表はれて來た。山岳第二十八年第二號「日本アルプスの雪線に就いて」の冒頭に今西錦司氏が「今から二十年も前の日本アルプスといへば未だ岩登りやスキー登山などといふ所謂近代的登山形式の擡頭するに至つてゐなかつた頃であるがさりとて開拓時代と稱するのもどうかと思はれる様な一種の中繼ぎ時代であつた」と云つて居られるが、卽ち中つぎ時代なる大正三、四年をすぎて十年頃には近代登山形式がやゝ擡頭しかけてきたのである。大正九年三月に慶應の大島亮吉氏外六名の一行及び、ときを同じくして早大の舟田三郎氏外二名の一行が白馬岳積雪登攀をめざしたがともに不幸失敗した。その後何回かのこうした先輩たちの苦闘ののちにやうやく積雪登攀のかゞやかしい記錄が印されたのである。

以下信州側、越中側、越後側と分けてのべることに

し白馬と唐松間の國境尾根はとり扱ひの便宜上、信州側にいれる。夏季よりはじめて積雪期にはいらう。

いまでは何といつても信州側が最も繁盛であり詳しい統計をとつた譯ではないが全登山者の大體七〇パーセント位は四ツ谷からの往復とみてよからう。北股入より大雪渓を登るものと南股入より温泉經由で白馬鑓へ出るのが最もポピュラーであり婦人向きにも好適である。この外に森上から大池經由で尾根を白馬に向ふ人もあるが、これも餘り多くはなささうだ。さらにまた蓮華温泉からのコースは登山者少なく、それにこの登りは國境尾根へ出ればいゝがそれまでは夏期は草いきれがひどいので登りつらい。雪倉岳、朝日岳を經て黒部北又を渡り小川温泉へ出るものは通行者少なく昨今では一夏に僅か數パーティーといふさびしさである。越中側は中脊尾根と清水岳をとほるものと二つあるが、後者の方がよく利用されてゐるやうである。

これらの登山道をはなれて興味深さうなルートを拾つてみよう。信州側では「三山」の頂上よりそれぞれの尾根が山麓へ伸びてゐるが、このうち杓子尾根は餘りにもアンサウンドなために夏期は、かなり苦しいものと思はれる。白馬鑓の南北二本の稜線は面白からう、尤もこれらのうちで鑓北稜以外は何れも初登攀がなされてしまつてはゐるがフレッシュ・マンのトレーニングには利用される價値があらうと思ふ。なほ杓子澤や白馬澤も大雪渓の登高よりも興味深い。

また先にものべたやうに小川温泉へのコースは登山路ではあるが人氣が少ないので愉しいものであり、その外柳又谷も面白からう。その他の越中側の谷筋はどれも瀧が可成り多いので夏期にはどの程度のものか私にはよく判らない。

登山路ならば隨分賑はふこの山々も少しはなれるとスッカリ靜かになる。白馬温泉を根據にして鑓尾根の岩場に遊んだり大出原（オイデワラ）にねころんで高嶺の風に頬をなでられながら去來する雲を眺めるのは世にも愉しいものである。またナンキンコザクラやシロウマアサツキ

が美しく咲きそろひ、緑濃き草地にいくつかの小池が點綴して踏むには惜しいやうな雪倉岳の御花圃、さてはチングルマやハクサンイチゲが美しくかざつてゐる牧歌調ゆたかなイブリ平や夕日ケ原こそはこゝ白馬連峰のもつユニークなよさであらう。夏の終りから秋のはじめにかけての數日間の旅をこの朝日岳トラバースに試みられんことをすゝめたい。早い秋はもう黒部の上流に訪れはじめ、山の大氣はスツカリ靜かに沈んで入道雲の逞しい姿も消えてしまつてゐるが本當の心靜かな秋を迎へ山の靜寂を知ることが出來よう。ことにこゝから眺めた白馬岳は信州側からのそれとちがつて、全く「山なみ」といふにふさはしい樣相をしてゐて餘程奥深い感じが與へられる。そして薄らさむい夕暮れたき火を圍んで何とはなしに感じる人懷しさも夏にはとても判らないものである。

また冬や春ならば細野スキー場から無池小屋附近或ひは少しの不自由をしのんで風吹大池あたりの處女雪にシュプールを殘すのもたのしからう。冬は積雪量が少ないから無理かもしれぬが、春の晴れた一日、細野の部落より中山平をとほつて小日向山へ登り小日向尾根を二股へ下るのもよからうし、下の大平から蓬出橋を渡り尾根傳ひに栂池へ出るコースなど手輕な行程を探すのも山麓生活のよさである。

スキーよりシクイグアイゼンといふはりきつた人々にとつても十分滿足とは行かないまでもかなりのルートは取り得よう。信州側へのびてゐる尾根筋、杓子岳の正面、白馬澤よりの小蓮華、或ひはツェルトザックを携行して越中側の谷筋を歩くのもよからうし、また雪崩に神經をとがらせながら柳又谷を下るのも面白からう。

緊張していくつかの瀧を巻きながら下つた清水（シヨウヅ）木谷や、せをつてゐるスキーの抵抗のために危くとばされかけた國境尾根などみな愉しい春の思ひ出である。

● 信州側

一、小蓮華尾根

○昭和五年三月二十四日　西村格也、楠木義明、西村雄二、多田潤也、井上正憲（甲南高校）外人夫一名　前五・一〇猿倉小屋發—五・四〇長走澤—六・二〇白馬尻—六・五五白馬澤—一一・三〇小蓮華頂上（關西學生山岳聯盟報告第一號による）

この尾根の初登攀である。疾風にたゝられて白馬迄は行かずに、下りも同じコースをとつてゐる。記述によると、さして苦勞はしてゐないやうだ。

○昭和九年三月二十六日　近藤、小林（勘）、今西、（浪速高校）丸山靜男（細野）　曇、前四・三〇猿倉發—六・二〇尾根下—八・三〇尾根に取付く—後〇・〇五小蓮華頂上着。

その後はほとんど毎積雪期に一パーティー位が登降してゐるらしいが、このときも樂に登れた。

二、白馬澤

○昭和九年七月二十五日　近藤壽男、中村英石（浪速高校）　晴後曇　前八・〇〇白馬尻小屋發—白馬澤—三國境白馬頂上（時計故障のため時間不明）（關西學生山岳聯盟報告第六號による）

大雪渓と白馬尻にて合流してゐるに拘らず餘り通らないところである。この登高は記錄的には初登攀のやうだ。

○昭和九年十二月二十七日　今西壽雄、盛岡英治郎（浪速高校）丸山與兵衛（細野）途中引返し。　晴後雪　前七・一〇後澤ベースキャンプ出發—七・三五白馬尻—（一〇・一五—一〇・三〇）白馬主稜二峰下—一一・五五ベースキャンプ歸着。（關西學生山岳聯盟報告第六號による）

積雪期には、まだ登高記錄がない。十時頃より天候激變し引返すの止むなきに至る。

三　白馬主稜（直接尾根）

昭和六年三月三十一日　田中仲三（神戸商大）秋山（關西學院）丸山靜男（細野）　前四・五〇猿倉小屋發—一一・三〇白馬頂上着。

（關西學生山岳聯盟報告第二號による）

この初登攀は白馬連峯の稜線への最初のアタックとして價値あるものと思ふ。愼重なる計劃により、また天候や積雪のコンディションにも惠まれて短時間の登高に成功してゐる。

この登攀以後雪が殘つてゐる時期には日本山岳會の冠松次郎氏の一行及日本登高會の上田徹男氏の一行が成功してゐるが夏期には數パーティーにより試みられたが未完登のまゝで殘されてゐた。

○昭和九年七月十七日及二十日　中村英石、河原暲盛岡英治郎（浪速高校）

十七日曇　前七・一〇白馬尻キャンプ發—一〇・〇〇主稜に取付く—後一・〇〇—二・〇〇約二四〇〇地點—二・五〇、三合雪渓上—三・五〇キャンプ着。

二十日　晴後曇　前七・〇五キャンプ出發—一〇・〇〇尾根にとりつく—後二・五〇國境尾根—二・五五白馬頂上—四・四五キャンプ歸着。（關西學生山岳聯盟報告第六號による）

積雪期の記錄から考へて夏でも丸一日あれば登れると豫想してゐたが案外に時間がかゝり遂にコースつぎ足しの二日になつてしまつた。

四　白馬大雪渓

○明治十六年夏　渡邊敏（大町小學校長）窪田畔夫（郡長）他一名（「山岳」第二十五年第三號雜錄「白馬岳の最初の登山者」八木貞助による）

初登攀といふには變な氣がするが、この初登攀は誰だらうと考へてゐたが「山岳」によつて當時の大町小學校長だと知つたときには異樣な氣にもなり、また當然だとも思つた。何にしても明治十六年だからたいしたものである。

○大正十三年四月　新井長平、遠藤久三郎、馬場忠三郎（明治大學）横澤房吉、横川庄次郎（北城村）

十六日　前八・〇〇四ツ谷出發—九・一〇、二股—後二・〇〇猿倉着。

十九日　快晴前　五・三〇猿倉小屋出發—六・三〇白馬尻—八・〇〇葱平—一一・五〇白馬小屋—後〇・四〇白馬岳頂上—一・〇〇白馬小屋—二・四五葱平—

四・四〇白馬尻—五・三五猿倉着。

二十日　快晴　前八・〇〇猿倉發—一二・〇〇四ツ谷着（ろばた第二年による）

慶應の大島氏や早大の舟田氏などにより試みられた大雪渓は四年後に明大により凱歌があげられた。次に黒田夫妻の記錄をあげておく。

○昭和二年四月　黒田正夫（日本山岳會員）黒田初子、松澤嘉一郎（北城村）

二十八日　四谷—猿倉小屋。

二十九日　前八・〇〇猿倉發—後二・〇〇白馬頂上—四・〇〇猿倉着（黒田正夫氏の書簡による）

なほ積雪期の大雪渓は、はやくも大正十年に頂上から下りた記錄がある。（越後側を參照されたし）

○昭和七年一月六日　小林（信）盛岡（浪速高校）丸山與兵衛（細野）

六日　晴　前四・四五猿倉小屋發—六・〇〇白馬尻—七・四〇葱平—一一・三〇頂上小屋着

七日晴後雲　前七・五〇發—九・三〇白馬尻—一〇・四〇猿倉小屋着。

五　杓子岳主稜

○昭和五年三月二十六日　田中伸三、笠原速男、宮村堅一（神戸商大）丸山靜男、大谷定雄、鹽島鎰司（北城村）

晴後雲　前六・〇五猿倉小屋發—七・四〇スキーデポー—一〇・三〇中小澤から見て頂上の樣に見えるピーク上—後〇・〇五杓子頂上—三・二〇スキーデポー—四・一〇小屋着（關西學生山岳聯盟報告第一號による）

のちに記述せる如くこの主稜とジャンクションをなす二子尾根が大正十五年に登攀されてゐるに拘らず、この尾根は昭和五年まで登られずにゐた。私は兩尾根ともに登つてみたが二子尾根の方が面白いやうに思ふ。

○昭和八年三月二十五日　中村、盛岡（浪速高校）丸山與兵衛（細野）

晴後雲　前六・〇〇猿倉小屋發—七・一五尾根に取付く—九・〇〇二子尾根との接合點—一〇・一〇杓子

頂上着。

六　杓子岳二子尾根

○大正十五年四月一日　四手井綱彦、山本保（第三高校）快晴、前六・二〇猿倉小屋出發―七・三五スキーデポット（一六二〇米）―九・三〇―九・五〇コル―一一・三五悪場前―後一二・二五悪場上―一二・四五杓子頂上―三・三四スキーデポット―四・一五小屋歸着。

（雪質）ザラメ　ネベ（頂上）

（時間）上り一二〇〇米　徒歩三・四五

下り　〃　〃　二・四〇（三高山岳部報告第五號による）

三日前の二十九日に大雪渓よりの白馬頂上を試みたが放山下で惜しくも失敗して引返した。その日の失敗をこの日の登攀でとり返してゐる。何しろこの尾根がこんなに早く大正十五年に登られたことは意外な氣がする。

○昭和九年三月二十六日　盛岡英治郎（浪速高校）丸山與兵衛（細野）

晴後曇　前四・三〇猿倉小屋發―五・三〇中小尾根八・三〇奥二子―一一・〇〇杓子との接合點―後一・〇〇杓子頂上着。

杓子尾根が割合によく登られてゐるのに反してこの尾根は初登攀以後、今まで登つたパーティーがない。登つてみると面白いのに。

七　杓子岳東面

○昭和十二年三月二十三日　山口雅也、福田泰次（甲南高校）

前四・〇〇双子岩キャンプ發―八・〇〇取付き―一一・三〇杓子主稜へ出る―後〇・四〇―一・三〇杓子頂上一・四〇―三・〇〇杓子澤のコル―五・三〇キャンプ着。（關西學生山岳聯盟報告第八號による）

信州側に於て積雪期に殘されてゐるルートは白馬澤からの小蓮華への壁と、この杓子東面だらうと考へてゐたのが杓子東面は遂に甲南の人々により成功された。この壁は長走平あたりから見るとかなり凄くみえ

る。杓子尾根よりに登つたらしいが尾根へとりつくまでに、かなりの苦勞をしてゐる。

八　杓子澤

昭和八年三月下旬　野口榮一（神戸一中）大谷定雄（細野）

記錄はどこにも發表されてゐないので、詳しいことは私には判らないが、大谷定雄に聞いたところによると、朝七時に猿倉小屋を出發して、二子岩のあたりから杓子澤へ下り、澤を登りつめて國境線へついたのは午前十一時頃だつたさうだ。雪は相當に深かつたらしい。

○昭和八年五月三十一日　盛岡英治郎（浪速高校）丸山與兵衛（細野）

曇後雨　南股小屋—杓子澤—杓子、鑓コル—杓子岳—立壁—大雪渓—猿倉小屋（時計故障にて時間不詳）

九　白馬鑓北稜

○昭和七年十一月六日　西島政二（關西大學）丸山護（細野）

晴後雪　前六・四五キャンプ（湯澤と杓子澤との出合より湯澤を二〇〇米遡つたところ）發—後〇・三〇鑓ケ岳頂上—二・三五白馬頂上小屋。（關西學生山岳聯盟報告第四號による）

白馬三山のうちで既に白馬、杓子の稜線は登攀され、こゝ鑓北稜がまだ殘されてゐたが、十一月の新雪をかぶつたときに成功した。報告第四號の四十六頁にはスケッチがある。

○昭和十二年三月二十三日　喜多豐次、武田六郎、（甲南高校）

快晴　前四・〇〇双子岩キャンプ出發—七・〇〇尾根にとりつく—後一・五〇鑓頂上—三・〇〇杓子澤コル—五・三〇キャンプ着。（關西學生山岳聯盟報告第八號による）

強風に苦しんでゐる。下の方は雪が悪く頂上近くになると氷になつてゐる。したがつて上の方では樂に登れたらしい。

十　白馬鑓南稜

○昭和八年五月三十日及び八月二十五日

五月三十日　晴　盛岡英治郎（浪速高校）丸山與兵衛（細野）

前六・三〇南股小屋發—八・四五白馬温泉の眞上—後二・一五約二八〇〇米地點—白馬温泉—南股小屋（途中時計がこはれたので時間不明）

八月二十五日　河原暐、小林信次、盛岡英治郎（浪速高校）

晴後小雨　前八・三〇白馬温泉發—一〇・四〇尾根にとりつく—後二・四五—三・二〇鑓頂上—四・二〇温泉歸着。（關西學生聯盟報告第六號による）

五月三十日には下の方ではかなり雪が使へたが尾根へとりついてからは、はひ松のために時間をウンと食はれ遂に途中引返しの止むなきに至つた。八月二十五日は前回の失敗が役立ち岩の脆いのに相當なやまされたが簡單に登つた。

十一　國境尾根（唐松より白馬へ）

○昭和五年三月　堀田彌一、奥平昌英（立教大學）横川藤一、太田政雄（北城村）（太田は唐松小屋まで）

二十四日　前五・三〇細野發—八・四五中繼小屋—後〇・〇五唐松小屋着。

二十五日　前七・一五出發—七・三〇唐松岳—一〇・三〇不歸キレットの最低鞍部—後一・五〇白馬鑓—三・四〇白馬岳—六・三〇猿倉小屋着。（立教大學山岳部報告第二號による）

スキーを中繼小舍に置き、寢具などは全部人夫にもたせて下し、ザイル、辨當、二三枚の防寒具位のごく輕い支度にて縱走にとりかゝつてゐる。そして不歸のキレットへの下りまでは硬雪のために歩きよく、キレットへの下りには念のためザイルを用ひた。キレット通過では苦勞をしてゐる。天狗の大登の途中で白馬からきた明治のパーティーに會つてゐる。天候雪質ともに恵まれてゐる。

○昭和五年三月　交野武一、宍戸文太郎、岩崎嚴（明治大學）丸山信忠（細野）

二十一日　前四・〇〇猿倉小舍發—一・一〇葱平—

四・三〇頂上小屋着、白馬頂上往復。

二十五日　前八・一〇頂上小屋出發—九・〇〇離山と杓子の鞍部—一〇・一〇—一一・五〇鑓頂上—後一・〇〇前不歸の下—四・四五前不歸と奥不歸とのギャップ—六・一〇　唐松頂上—六・二五唐松小屋。

二十六日　前一〇・二五小屋發—後四・〇〇細野着

（交野武一氏の書簡による）

三月二十五日に明大、立教の兩パーティーが日を同じくして成功した。私の手に立大山岳部報告が容易にはいり「ろばた」第五號がはいらなかつたといふ理由だけで立大のが詳しく書けたのであり、立教のを先に明治のを後に書いたのは時間記錄が判つた順序でこうなつただけであるからこの點は惡しからず御諒承を願ひたい。

夏季に於て誰がこの初縱走をしたかは私にはよくは判らないが「山岳」第九年第三號にある吉澤庄作氏の鑓ケ岳大黑縱走記がさうだと思はれる。尤もこの前に鑓ケ岳までならば志村烏嶺、河田默、武田久吉の諸氏が山岳會成立當時に既に縱走してゐる。

十二　大池尾根

○昭和六年三月　小野寺幸之進、新谷長流、田中敦（第三高校）

三月十六日　前一・一五蕨平出發—二・二五中ノエリとカツラ澤との出合—四・三五—五・二〇山の神の手前—六・三五天狗原—七・五〇—八・二〇大池—九・五〇—一〇・〇五小蓮華頂上—一〇・五〇雪倉尾根とのジャンクション—後〇・二〇—〇・三〇白馬頂上—二・二〇小蓮華頂上—三・二五—四・〇〇大池—五・四五山の神—七・〇〇ワッバ坂のウトの稗田のヌケの上方にてビバック。

十七日　前六・三〇ビバック地出發—七・一〇安藤屋敷—九・一〇蕨平（關西學生聯盟報告第二號による）

前々日の偵察の結果からスキーを持參せずアイゼンとわかんぢきとにした。天候には惠まれ夜のビワークにても風はあつたが氣溫は相當に高く睡眠も少しとることが出來たさうである。

この登攀についで栂池に小屋を持つた早大が新人養成をかねて毎年のやうに大池尾根を白馬に向つてゐるがその第一回は次の記録である。

○昭和七年一月　出牛陽太郎、佐々木皓信、折井健一、山岸金十郎、四枚田良造（早大）

一月一日　快晴無風　前三・一五早大栂池小屋出發—四・三〇天狗原—五・一五—六・〇〇スキーデポ—六・三五—六・四五船越ノ頭—七・三〇—七・五〇小蓮華頂上（零下十一度）—八・一〇三國境—八・五五白馬頂上—九・〇〇—九・四五頂上小屋—一〇・一五旭岳頂上—一〇・五〇頂上小屋（零下十度）—一一・一〇白馬頂上—一二・〇〇小蓮華頂上—後〇・三〇船越ノ頭—〇・五五—一・二〇スキーデポ—二・〇〇小屋歸着。（リュックサック第七號による）

○昭和八年三月　盛岡（浪速高校）丸山與兵衛（細野）

二十九日　晴　前六・三〇白馬頂上小屋出發—七・〇〇頂上三角點—七・一五雪倉尾根とのジャンクション—八・〇五小蓮華岳—九・〇〇大池—九・四五乘鞍スキーはく—一〇・二〇—一〇・五〇天狗原—後〇・四五コヾ池上—二・〇〇落倉の小屋—四・〇〇細野着

頂上より小川溫泉へ出るつもりでゐたところ三日間の籠城の後あきらめて落倉へ下つた。天狗原から下は春のドカ雪に惱まされた。

この大池尾根も大正十三年四月に小谷溫泉の山田寛氏が信濃山岳會員の長岡正信氏と二人で蓮華溫泉から大池に出て尾根縱走してゐる。（越後側を參照されたし）

十三　白馬三坑尾根

○昭和十一年八月一日　松林一民、松井敬一（浪速高校）

これは當然三、白馬主稜のすぐ後へ、のせるべきものであるがこの記錄が部外へ未發表だつたもので記述が少し長くなり、そのために外のものと不均衡になることを慮んばかつてあとまはしにした。次の記述は浪速高校の部內雜誌に於けるもので昭和十二年三月二十

二日に鹿島槍にて遭難した故松林一民氏の遺稿である。

天氣は薄曇り、ガスはないが午後には出るだらうと思はれる、かんばしからぬ天候なれどとに角出發、力をセーブしてゆつくり雪渓を登る。氷河石、S5を一直線にすゝむ。昨日はこのS5は短く白樺のコル（コルW）がこの澤の乘越かと思つてゐたら豈計らんやS5はその手前で左に折れカミン氣味のリンネとなり。それが更にひろがつてずつとつゞいてゐる。このリンネは逆層氣味で時間を食ひさうなので豫定の如く眞直にコルへWへと突切ることにする。取付、ザク〳〵石の崩れるいやな草付を遮二無二登つてコルW、草の生え茂り、灌木まぢりの尾根を行く、第一岩峰に行き當る、黑い岩に相當草がつき木も生えてゐる、三〇メートルの壁は易しさうだつたがとに角アンザイレン。三〇メートル一ピッチでやす〳〵とのりきる。その上は大テラスになつてゐて、草木生え茂り更に一〇メートルほどの壁、これはホールドが少なかつたがこれも難なくこえ、痩せ尾根の偃松をこいで更にもう一段壁をこゆ、都合第一岩峰は三段に分れてゐるわけだ。霧がぢやん〳〵上つてきてさつぱり見當がつかなくなる、アレートをたどつてちよつとしたザッテルに出る。前には第二岩峰が赤い膚をみせてゐる、これは左に卷くことにして昼食。S2が相當な幅を以てグント上つてゐる、S4を上りちよつとした切れ目をまき、このS2を上れば現在のところへはいとも易く上れる。ちよつと今までの努力が馬鹿々々しかつたが三坑尾根アタックを直接に行つてゐると考へれば一點の殘り惜しみもない。もろい赤膚をやすく稜線に出て岩を注意して進む草付の一峰をかんたんにこえると、ジャンダルム氣味のチンネにぶつかる、岩はもろく全然浮石らしい、ガラ〳〵落ちてゆく、三〇メートルのピツチでどうにかかうにか注意に注意して切りぬける。すぐジャンクションらしい。霧をとほしてガラ〳〵のR・Nが急傾斜でこの主尾根R・Hに上つてゐるのがみえる。

荒れた岩稜だ。また赤い岩峰にぶつつかりこれはジャンクションらしい。左腹をまいてザッテルKに出る。S2はこのザッテルまで上つてゐる。とつぜん三合雪渓にあたつてものすごい落石の音、主稜方面らしい。まるで雪崩のやうだ。岩はふたゝび第一岩峰のやうに黒ずんできて草もついてゐて感じがいゝ。コンティニュアスでどん〳〵急ぐ。最後は心配してゐたがガラガラでなく草付のやすいところだつたので難なく頂上に達した。

●越中側

夏季のいはゆる登山シーズンや紅葉美しい秋はとも角として積雪期に於けるシュプールは信州側のそれに比べて實に少ない。これは申すまでもなく黒部川の川筋にをけるほとんどたへ間のない雪崩と、適當な根據地が皆無であることゝによるのであり、次に判るやうにこの方面には過去に於てまだ僅か數パーティーしか數へてゐない。

一　中脊尾根

○昭和八年四月　西島政二（關西大學）丸山護（細野）

十二日　前五・三五祖母谷溫泉發—一一・三〇中脊山—後三・三〇鑓頂上—五・四五白馬頂上小屋着。

十三日　前八・一五出發—一一・三〇天狗原—後〇・三〇神ノ田圃—五・〇〇細野着。

尙祖母谷溫泉までは唐松小屋—餓鬼山—餓鬼ノ田圃南越—祖母谷溫泉のコースである。（關西學生山岳聯盟報告第四號による）

祖母谷小舍には米が少しあり炊事道具も大體そろつてゐた。薪は少々不足勝ちであつたが大して寒さも感じなかつた。寢具はほとんどなかつたが板の間にねるやうなこともなかつた。

十日には偵察のために小舍から三時間半上リスキーを運んでゐる。十二日は雪がゆるんでゐてワカンゲキで苦勞をしてゐる。そして中脊山より百五〇メートル登つたところからアイゼンに穿きかへてゐる。スキー

は、はかなかつたらしい。

二　清水本谷

○昭和十年四月　盛岡英治郎（浪速高校）丸山與兵衛、丸山靜男（細野）

九日　前七・四〇白馬頂上キャンプ出發—八・四〇第二ノ瀧—九・二〇第四ノ瀧—一〇・〇〇第五ノ瀧上—一一・〇〇—一一・二五中食（第六の瀧下）—一一・三〇本谷と中ノ谷との出合—後一・一五カール上（中ノ谷と西ノ谷の間の尾根）—三・三〇清水岳—六・〇〇キャンプ歸着。（關西學生山岳聯盟報告第六號による）

まづ與兵衛、靜男の二人を同行したのは、はじめの計畫として柳又谷を下ることだつたので、荷物などの關係でさうしたのである。しかし山へはいつてみて身體が不調だつたので頂上より日歸りの計劃に變更したのである。

谷筋にて瀧らしい瀧は六つほど確認したがこのうち二つはあいてゐた。清水谷、中ノ谷ともにデブリをところどころに見受けた。なほこの日の行動はスキーを十分利用し得た、瀧をからむときと中ノ谷の雪崩の多い個所の通過を除いてはまつたくのスキー行だつたが、もしワカンヂキを使つてスキーを十分利用しなかつたならば隨分苦しかつたことだらう。

三　清水岳、不歸岳を經て宇奈月溫泉へ。

○昭和六年一月　堀田彌一、斯波悌一郎、小原勝郎小林丘（立教大學）松澤嘉一郎（新田）（白馬頂上まで）

一日　前九・五〇猿倉小屋出發—一一・三〇白馬尻—後〇・二〇三合—三・三〇白馬頂上小屋。

四日　前五・四〇出發—八・〇〇清水岳—一〇・〇〇西ノ谷へ下り清水と不歸の中間位の處へ登りつく—一〇・三〇不歸を西ノ谷側に卷く—後一・三〇百貫と不歸との間—三・〇〇不歸谷大拔下—五・〇〇黑部川落口の瀧の上—一一・三〇錦繡溫泉着。

五日　後三・二〇出發—七・一〇宇奈月溫泉着（立教大學山岳部報告第三號による）

清水岳までは强風に苦しみ、こゝで風をさけるために西ノ谷へ下る。傾斜がゆるくなつてからアイゼンを

スキーにはきかへる。標高二〇〇〇メートルまで下つてからまた尾根へとつつく。不歸と百貫との中間部のコルのところから西へまつすぐ不歸谷を滑り新鐘釣へスキーで下る豫定だつたが降雪量が少なくて大ヌケの下までしかスキーは使へずこゝでワカンヂキにはきかへた。それで豫想外に時間を食つた。

國境尾根を越えて黒部側へ下りたのは、この立大パーティーがはじめてである。獵師以外に全然人のはいらないこの黒部側は（獵師とてもどの程度動いてゐるかは問題であるが）どの谷もどの尾根もバリエーションルートとして手もつけられずに殘されてゐたが、ここにはじめてのパイオニアワークに成功し、これに刺戟されてこの後はボツ〳〵と越中側へはいりはじめたのである。

四　清水岳、猫又山を經て宇奈月溫泉へ。

○昭和九年四月　吉田孝雄、須藤（關西大學）丸山護（細野）

二日　前八・三〇白馬頂上小屋出發—九・二〇旭岳—後一・三〇清水岳—三・一五猫又山—四・三〇ビワーク地點。

三日　前八・〇〇出發—八・五〇突坂山—後七・三〇テント地。

四日　前九・三〇出發—後〇・〇〇黒部川—七・五〇宇奈月溫泉着。（關西學生山岳聯盟報告第五號による）

清水を經て猫又山まで尾根通しにアイゼンとスキーを交互に使つてゐる。猫又山、突坂山の中間の尾根上にて白樺林の中でビワーク。突坂山をこえてからはスキーとワカンヂキを適宜にかはるがはる使つてゐる。第二夜は突坂山から黒薙川、黒部川の合流點に向つて下つてゐる↓尾根上にて白樺林の中にビワーク。この頃より二日間の晴天も崩れて雨となる。第三日は尾根をはづれ氣味にまつすぐ黒部川へ下り道路に出た。これより黒部川を渡渉したりして隨分苦勞して宇奈月に着いた。

五　蓮華溫泉より朝日岳を經て小川溫泉へ。

○昭和六年三月　今西錦司、渡邊漸、宮崎武夫、本

野亨一、遠山富太郎、鹽見武夫（京大三高合同）

三月二十八日　曇一時晴夜小雪　前六・五五落倉出發—一一・〇五—一一・五五尾根にとりつき晝食—後一・一五—一・五〇天狗原下ルックデポー—三・四〇落倉着。

三十日　晴後曇　前六・五〇落倉出發—一一・〇〇—一二・〇七ルックデポーにて食事—後一・〇五—一二五天狗原のお宮—二・一〇—二・四〇スキーをぬぎアイゼンをはく—二・五五—三・二〇再びスキーをはく—四・五〇—五・一五スキーをぬぐ—六・〇〇川を渡り溫泉のある平の一端に上る—六・二五蓮華溫泉着

三十一日　晴後曇　前七・一〇出發—八・一二—八・二六大所川岸—九・〇五—九・三四朝日よりくる谷に出づ、スキーをはく—一〇・五四—一二・〇〇朝日、赤男間のコル、朝日、長栂間のコルよりの谷の出合にて食事—後一・四七—二・一〇アイゼンにかふ—二・四九—三・〇八朝日岳—四・〇三—四・二〇スキーはく—五・〇〇—五・二三スキーぬぐ—五・四七—六・〇〇イブリ—七・〇五獨標—八・五五北又出合、徒渉して獵師のゐる小屋に泊る。

四月一日　雨　滯在。

二日　曇後雨　前一〇・〇八出發—一二・〇〇—一二・三〇越道峠—後二・四五小川溫泉。

この行で教へられることの深かつたのは、わかんぢきであつた。たとへ、技術は未熟で、しかも稍過重であつたにもせよ、過渡期の雪の惡いコンヂションに散々なやまされた僕等は獵師達の活躍の跡を見るにつけ聞くにつけ「わかん」がかゝるコンヂションでは殊に著しい價値を有する事をしみじみ感じさせられた。（關西學生山岳聯盟報告第二號による）

これは越後より越中へこえたものであるが便宜上、越中側の中へ入れた。

溫泉から大所川をわたり朝日からくる谷を上り途中から尾根へ出て、スキーをアイゼンにかへて朝日頂上へ登る。前朝日からスキーをつけ、またやがてぬぎワカンヂキにかへる。報告の末尾にもある通り「わかん」

が餘程役に立つたらしい。

これと同じコースを逆に小川溫泉より落倉へ出た三高パーティーの記錄をあげてみよう。

○昭和八年四月及び五月、杉山佐一、載彻德、郡場正之（第三高校）

四月二十九日　前八・〇〇泊出發―一〇・三〇小川溫泉―後三・〇〇越道峠―四・〇〇ビワーク（地圖の瀧のところ）

三十日　前七・一五出發―八・〇〇北股出合―後三・三〇イブリ山―四・〇〇ビワーク（イブリ山より少し下つたところ）

五月一日　前一〇・四五出發―後二・〇〇朝日岳頂上―六・〇〇ビワーク（朝日頂上より大所川と鉢ケ岳よりの本谷との出合）

二日　前七・〇〇出發―後四・〇〇乘鞍―六・〇〇ビワーク　三日滯在。

四日　前八・一五出發―後一・一五森上。（第三高校山岳部報告第十一號による）

○昭和八年八月　河原（暐）、小林（信）、盛岡（浪速高校）丸山與兵衛（細野）

八月二十八日　前七・二〇白馬頂上小屋發―八・〇〇三國境―八・五〇鉢ケ岳下―一〇・四五―一一・〇〇五雪倉頂上―後二・二〇朝日岳頂上―三・二五朝日小屋。

二十九日　前七・〇〇出發―七・四〇夕陽ケ原―八・一〇イブリ山―一〇・三〇―一一・四五北又谷―一・〇七―一・三〇越道峠―二・三〇小川溫泉着、四・四五發（バスにて）五・三〇泊驛着。

夏山記錄を參考までにつけ加へた。朝日小屋は營林署所屬で無人のカヤぶきの氣持のよいものである。積雪期への偵察をかねてのノンビリとした愉しい山旅だつた。

ずつと以前の夏山について少し書いてみよう。はじめは小川溫泉へのコースを利用したものらしい。「山岳」第二年第一號「白馬岳越中方面の降路」川島祿郎

によると

明治三十九年八月十二日に白馬頂上小屋を出發しその日は約二里餘、鐘釣（シャウヅと發音す）小屋に泊る、第二日は尾根を傳ふて下ること七里強、柳又の小屋に泊る、第三日は雨天のため三里北又の小屋に泊る、第四日に北又より三里にして小川溫泉に到つた。

まづ文中の朱殿坊といふのは地圖上清水本谷と夜澤との間の尾根の上に二二六一とあるのがさうであらう。そこでコースを想像すると白馬より尾根を清水岳に向ひ猫又山を通りオウレン谷の西の尾根をつたつて柳又谷に下り、川筋をヲル谷との合流點に到り、川をはなれて柳又乘越をこえて北又谷に出て、この谷を北上してから今と同じやうに越道峠をこえたものと思はれる。

つぎに「山岳」第五年第一號「越中方面大蓮華山登攀錄」吉澤庄作によると

明治四十年八月十八日に三日市から下立村を經て黑部川にはいり祖母谷溫泉に泊り翌日は休養して二十日に祖母谷を溯行して西ノ谷を登りこの谷をのぼりつめて清水平で野營し二十一日に白馬へ到着してゐる。一行は人夫の五人を加へて十四人であつた。

この二つが云はば初登攀であり高野鷹藏氏が明治四十四年七月二十五日に白馬を出發して二十八日に、また冠松次郎氏が同じく八月十八日に朝五時十五分に鹽頭小屋を出てその日のうちに祖母谷溫泉へ着いてゐる

また「山岳」第九年第三號「鑓ケ岳大黑縱走記」吉澤庄作によると

大正三年八月二十日　三日市—黑薙溫泉—鐘釣溫泉

二十一日　鐘釣溫泉—祖母谷溫泉

二十二日　快晴　前六・〇〇祖母谷溫泉出發—祖母谷溯行—一〇・一〇夜澤との合流點—夜澤溯行—後六・三〇約二・二五〇メートルの地點にて露營。

二十三日　晴　前五・三〇出發—八・〇〇白馬鑓頂上—一一・〇〇天狗—不歸のキレット—唐松岳—七・〇〇大黑鑛山事務所着。

二十四日　前七・〇〇出發—八・三〇餓鬼ノ田圃—

祖母谷温泉―後五・〇〇黒薙温泉歸着。

一行は音澤村の佐々木市次郎と二人だつた。越中側にかける吉澤庄作氏のパイオニア・ワークは目ざましいものがある。卽ち祖母谷を上つての西ノ谷と夜澤との二本のルート、それに白馬―唐松間の初縦走に見事成功してゐる。

六　黒薙川柳又谷

〇昭和六年八月　塚本繁松（日本山岳會員）此川新作、瀧林耕平（下立）

六日　前十時頃宇奈月發―北又谷柳又谷出合測水小屋泊。

七日　前七時過出發―後四時過カシナギ深層谷柳又本流出合泊。

八日　出發―カシナギ谷柳又谷出合―前十一時半廣河原―ヲル谷出合（柳又小屋）―オウレン谷出合泊。

九日　前九時頃出發―十一時ゼンマイ谷出合―後五時過ナル谷乘越澤泊。

十日　前八時半頃出發―六兵衛谷入口―ナル谷―猫又山泊。

十一日　雨のため滯在。

十二日　前十一時半頃猫又山出發―後三時頃清水平

十三日　清水平出發―蓮華谷西谷―東谷西谷合流點―東谷―後四時清水尾根道―白馬頂上小屋。

十四日　前九時すぎ出發―柳又谷源流―ハヤ谷、柳又谷出合―後三時ナル谷落口上―新作瀧―長池泊り。

十五日はこゝから朝日岳へ向ひイプリ谷を下つて北又谷への旅をつゞけた。（山岳第二十六年第三號による）

柳又谷をはじめて通つた記錄である。殘念なことには時間記錄が書いてないのでちよつと見當がつかないことが多い。

七　黒薙川北又谷

〇昭和六年八月　塚本繁松（日本山岳會員）此川新作、瀧林耕平（下立）

八月十五日　長池―鉢ヶ岳―雪倉岳―赤男山―朝日岳―前朝日小屋泊り。

十六日　イプリ平にて休養。

十七日　前五時すぎ出發―イブリ谷―七時ごろ朝日谷との合流點―下りつゞける―右岸を捲く―七時すぎ北又谷との合流點に下り、又右衞門瀧のそばに幕營。

十八日午前中又右衞門瀧見物。イブリ谷の廊下探勝午後は魚止瀧見物。

十九日　人夫此川は歸り二人となる。北又谷を溯行する、午後シロカネ瀧をこえて漏斗谷に入る。午後一時漏斗谷の落口。第五の瀧上で露營。

二十日　漏斗谷を更に上る、午後五時二〇七一・五メートルの三角點につく。國境尾根に出てアヤメ平をへて長栂山へ向ひ、八兵衞平にて露營。

二十一日　八兵衞平―朝日岳―蓮華溫泉。(「山岳」第二十七號第一號による)

柳又谷の紀行と同じくこれにも時間記錄がない。いろんな谷や瀧やを命名したりなどしながら歩いてゐる。

この外に冠松次郎氏もこの方面に昭和七年八月十日から十八日まで九日間の山旅をしてゐるが、これは同氏著「白馬連峰と高瀬溪谷」の三七〇頁「北又谷と柳又谷の旅」にある。

● 越後側

このコースはむかしも今も蓮華溫泉を根據地に利用してゐる。夏季の登山記錄はかなり古いものが「山岳」誌上に發表されてゐるがスキー登山が行はれるやうになつてからのものが案外少なく私が日本山岳會の虎ノ門の圖書室でずい分と探したがみつからなかつた。それでこの方面からのスキー登山の開拓者だといはれてゐる燕溫泉の笹川速雄氏に手紙を出したところ富山の内山數男氏に聞いてほしいとの返事があつたので内山氏宛問ひ合はせた。

最近になつて鐵道省主催のスキーツアーなどが行はれてゐるのに比して一般のスキーヤーのはいり方が少ない。これは交通不便にもよるのであらうが大糸線が全通したあかつきには大所から白池、風吹大池を經て蓮華溫泉へのコースが大いに利用されるものと思ふ。

このコースの下りは、スーキが十二分にたのしめて面白い。ちかいうちに風吹大池の附近にスキー小屋がたつとかいふことを聞いてゐるが、そのときには栂池と結ぶいゝスキーツアーを愉しめるだらう。

夏の記錄をあげる。

○明治三十九年八月三日―六日（蓮華山及針木嶺）「山岳」第二年第一號、大平成による）

三日　後四時二十五分糸魚川着、六時四十分根知村根小屋に泊る。

四日　前六時、根小屋出發―八・一五山之坊―九・三〇大所―後六・三〇蓮華溫泉着。

五日　前七・二〇出發―後二・三〇鉢ヶ岳―三・四〇三國境（文中には小蓮華とあるが前後の關係から三國境と判斷せり）―五・一〇白馬頂上―五・二五白馬小屋着。翌六日に大雪渓を經て四ツ谷へ下りてゐる。大所から蓮華溫泉までは大體現在の夏路と同じらしい。なほこのコースを大正二年の夏に市村塘氏がとほつてゐるが、この紀行は「山岳」第九年第一號、白馬岳（蓮華溫泉方面）にある。

一、蓮華溫泉より鉢ヶ岳をへて白馬頂上へ。

○大正十年三月　内山數雄（富山高校山岳部長）笹川速雄（燕溫泉）他三名。

三月二十五日　富山―糸魚川　二十六日　糸魚川―小瀧村小瀧　二十七日　小瀧村小瀧―山之坊峠―平岩―大所―木地屋　二十八日は準備のため滯在。

二十九日は泡雪が降つたのでしづまるのを待つために滯在。

三十日　晴　前八時木地屋出發―白池―宇戸川畔の獵師小屋。

三十一日　晴　宇戸川小屋出發―八丁坂―蓮華溫泉

内山氏が人夫二名とともに木地屋を出發して八丁坂まできたときに、はじめ同行の約束だつたが所用のため來ることができなかつた笹川氏が人夫二名をつれてうまくこゝで遇ひ以後行を共にした。人夫は一人かへして三名にした。

四月一日　晴　蓮華溫泉出發—瀨戸川をこえて雪倉岳の斜面にとりつく—金山事務所。

四月二日　前四時金山事務所出發(晴)、六時ごろから吹雪きはじめる—鉢ケ岳の麓—長池、このころより猛吹雪となる—旭岳—頂上小屋—前九時二十分、白馬頂上着、このころ少しの晴れ間をみる—縣營小屋からスキーをはき、二十五分のちに白馬尻についた。人夫三名はワカンヂキなので餘程をくれた—後三時、四谷着(內山氏所藏、博文館發行中學世界大正十年七月號雪の北アルプス横斷記、內山數雄による)

白馬頂上への積雪期に於ける初登攀であり大雪渓もはじめての成功行である。吹雪かれて苦闘しながら頂上へついてゐる。頂上にて「萬歳」を三唱したさうであるが、文章をよんだ私もうれしくなつてしまつた。蓮華溫泉小屋、金山事務所はいづれも堀り出して使用してゐる。

二　蓮華溫泉より大池尾根をへて白馬頂上へ。

○大正十三年四月　山田寛(小谷溫泉)長岡正信(松本)何れも信濃山岳會員。

四月十五日　小谷溫泉—池原(糸魚川街道と溫泉への道が分れるところ、地圖にあり)

十六日　池原—稗田山—山ノ神—千國揚—蓮華溫泉

十七日　蓮華溫泉—白馬大池—白馬頂上—大雪渓—四ツ谷。(山田氏の談話による)

なにしろ十七年も前のことであり時間記錄も覺えてゐないとのことであつた。大池まではスキー、大池よりアイゼンにかへて國境尾根を頂上へ縱走してゐる。山田氏は內山、笹川兩氏とともに越後側よりの、否、積雪期に於ける白馬岳のパイオニアーであらう。

そののちにいくつかのパーティーが年々上下してゐるがこのうち私に判つてゐる二、三を次にあげてみよう。

○昭和八年初冬　塚本閣治氏(日本山岳會員)外五名。

十一月三十日　晴　早曉糸魚川驛をハイヤーにて發小瀧下車。小瀧にて人夫雇入八時頃出發。八丁坂附近

積雪約五〇センチ、スキー可能月明を便りに夜七時半頃蓮華溫泉着。

十二月一日　曇後雪　前七時頃蓮華溫泉出發、正午頃製煉所事務所（無人）に着、そのころより降雪の爲め宿泊。

二日　快晴　前八時頃出發、大所川谷筋を登る、新雪よく締りて登高頻る快適。正午鉢ケ岳頂上着。白馬岳頂上手前にて落日、スキーをかつぎ無風の中を月清き山頂を越え七時すぎ頂上小屋に着く。

三日　強風晴後曇　雪煙をついて再び白馬頂上に發つ、十時頃頂上小屋出發、斜滑降にて下る。小雪渓にて小さい雪崩を惹起し一名半身埋沒の程度。危險を避けるため杖制動直滑降にて大雪渓を下る、日沒前猿倉小屋宿泊。

四日　曇　四ツ谷に出て歸京。

なほこの時間記錄は途中十六ミリ映畫撮影のため時間程は五割方遲延。（塚本氏よりの書簡による）

これは今後寫眞撮影などをユックリやる人々にとつてはいゝ參考時間程となることゝ思ふ。

それから最近の記錄としては次のものがある。

○昭和十五年四月　藤島敏男、田邊主計（日本山岳會員）丸山鶴喜代、丸山常雄（細野）

四月五日　晴のち曇強風、夜吹雪　細野—白馬頂上小屋　六日　滯在。

七日　晴のち曇　前九時、小屋出發—鉢ケ岳と雪倉岳との鞍部、蓮華溫泉への分岐點あたり（一一・四〇）—溫泉への夏路の左側（上より見て）に沿ひ蓮華溫泉小屋着（四・四〇）雪は全然滑らず、信州側は天候惡しからず、夕方平穩。

八日　晴　稜線方面は暗し、前八時出發—木地屋（一時間餘り休息）—大峰峠—小瀧（五・三〇）（田邊氏による）

蓮華溫泉から風吹大池、白池をへて木地屋へ下りてゐる、スキーをたのしめた由。

○昭和十五年八月　盛岡（大阪帝大）丸山與兵衛（細野）

八月十九日　曇のち雨　前九、一五白馬頂上村營小屋出發—後〇・〇五白馬大池—一・四〇蓮華溫泉着。

二十日　曇　前八・〇〇出發—一一・〇〇木地屋(半時間休憩)—後〇・二〇平岩着、

最近に召集解除になつて歸村した與兵衛と久しぶりの山歩きをした。

三　白馬大池より雪倉岳へ(國境尾根を便宜上、越後側へ含めた)

〇昭和八年五月　出牛陽太郎、五十嵐俊治、横井勝郎、蔭山榮之助、池野元章、古賀文一、新井春長、坂口保次(早大)

五月十三日　晴　前九・五〇早大栂池ヒュッテ出發—上ノ天狗原(一〇・五〇—一一—一〇)—白馬大池(一二・〇〇)—小蓮華との最低鞍部(後〇・三五—一・〇〇)—小蓮華岳(一・二〇)—三國境(一・三五)—鉢ケ岳(二・〇〇)—雪倉岳(三・一五—三・四〇)—小蓮華岳(五・四〇)—船越の頭との最低鞍部より信州側へ下る、ヒュッテ着(六・三〇)(リュックサック第七號による)

自分の部のヒュッテを根據として雪倉岳まで往復してゐる。私にはこんないゝ根據地が羨ましい。これ以前には雪倉までの記錄は見當らない。

四　白馬頂上より糸魚川へ。

〇昭和十五年四月　盛岡英治郎(大阪帝大)大谷定雄(細野)

四月三十日　前七・〇五細野出發—七・五〇二股—一〇・三〇猿倉—一一・五〇白馬尻—後六・二〇頂上小屋着。

五月一日　前六・三五頂上小屋出發—七・二〇三國境—九・二〇雪倉岳肩—一一・一〇赤男山—後一・四〇朝日頂上—二・四〇長栂山—五・〇〇黒負山—六・一五ビワーク地。

五月二日　前八・二五ビワーク地出發—後一・〇五赤禿山頂上—二・三〇舊縣道大峰峠ノ小屋—四・〇〇小瀧村夏中—四・五五小瀧驛着。(日本山岳會々報九十四號による)

積雪季に於て白馬頂上より北へ歩いた記錄はあるがその終端が雪倉岳であり、また蓮華溫泉から小川溫泉及びこの逆コースの記錄があるがこれも朝日岳を横斷してゐるのにすぎない。これは頂上から國境尾根を長栂山へ出て更に右折して黒倉山、赤禿山と尾根縱走をつゞけて大峰峠に下り小瀧に出た記錄である。ワカンヂキは全く用ひず主としてスキーによつた。

（十五・八・二十七完了）

參考文獻

高頭式　日本山嶽志

志村烏嶺　白馬岳及鑓ヶ岳「山岳」第一年第二號及び第二年第一號

河田默・武田久吉　白馬龍城記「山岳」第一年第二號及第三號

川島祿郎　白馬岳越中方面の降路「山岳」第二年第一號

吉澤庄作　越中方面大蓮華山登攀錄「山岳」第五年第一號

高野鷹藏　白馬岳より祖母谷溫泉へ「山岳」第六年第三號

蝶郎　白馬岳の名「山岳」第六年第三號

市村塘　白馬岳（蓮華溫泉方面）「山岳」第九年第一號

鈴木益三　白馬岳より越中小川溫泉に出るの記「山岳」第十二年第一號

高頭式　日本アルプスとその登路につきて「山岳」第一年第三號

矢平晟　蓮華山及針木嶺「山岳」第二年第一號

八木貞助　白馬岳の最初の登山者「山岳」第二十五年第三號

冠松次郎　白馬連峰と高瀨溪谷

同　祖母谷道「山岳」第七年第一號

吉澤庄作　鑓ヶ岳大黒縱走記「山岳」第九年第三號

渡邊漸　蓮華溫泉より朝日岳へ「山岳」第二十六年第二號

塚本繁松　黒薙川柳又谷「山岳」第二十六年第三號

同　朝日岳と北又谷「山岳」第二十七年第一號

堀田彌一　三月の唐松、白馬尾根傳ひ、立教大學山岳部々報第二號

小原勝郎　一月の白馬岳より黒部谷へ　立教大學山岳部々報第三號

田中　伸三　春期後立山概觀　關西學生山岳聯盟報告第一號
（以下學聯報とする）
遠山富太郎　朝日岳トラバース　學聯報第二號
田中　伸三　白馬岳主稜登攀　右同
田中　敦　大池尾根より白馬岳登攀　右同
西島　政二　白馬鑓信州側　學聯報四號
同　春の祖母谷　右同
吉田　孝雄　白馬岳より宇奈月へ　學聯報五號
盛岡英治郎　白馬連峰の歴史及信州側通路について　學聯報六號
吉田　孝雄　春の後立山黒部側　右同
盛岡英治郎　春の清水本谷　右同
山口雅也、武田六郎　三月の杓子岳、鑓岳　學聯報八號
その他　明治大學「ろばた」第二年
三高山岳部報告第五號及第十一號
早大「リュックサック」第七號など

×　×
×　×

追記

塚本繁松

盛岡氏の右の原稿及び校正刷を一讀して多大の感銘を受けると同時に、深くその勞を謝するものであるが、又同氏が見落した記錄や山旅が相當あるので、出版された上なほゆつくり拜見してその補遺のやうなものを私の知る限り追加したいと思ふ。そしてそれは必ず次號にはまとめるつもりであるから讀者に於かれても氣付かれた點は至急山岳會事務所内私宛に御通知願へれば幸である。かくしてこの文獻を出來るだけ完璧なものにしたい念願である。（一五・一二・一六）

春の白馬頂上より糸魚川へ

盛岡英治郎

昭和十五年四月三十日——五月二日

一行　盛岡英治郎、大谷定雄（細野）

参照地圖　陸地測量部五萬分ノ一　白馬岳、黒部、泊、小瀧、糸魚川

四月三十日、前七・〇五細野出發—九・〇〇下ノ大平—一〇・〇〇中山平（第一回中食）—一〇・三〇猿倉—一一・五〇白馬尻—後一・一〇三合（第二回中食）—三・四五ネブカ平—五・二〇村營小屋（第三回中食）—六・二〇白馬頂上小屋着

細野を四月八日に發つて、ふたゝび細野へやつてきたのは二十三日のことであつた。それから今日まで黒菱や猿倉等へ殆んど毎日のやうに出かけては身體の調子をとゝのへると共に天候が定まるのを待つてゐた。二十九日空模様にもかなり好轉の兆が見え出したし、身體の調子も良いのでいよ〳〵三十日から山へはいることにした。

空は氣持よく晴れわたつてゐる。春の強い陽光がどす黒い野良の土にカツとてりつけてゐる、四日分の食糧と若干の非常食糧、それに寢具などを入れたルックサックは肩に重い。今日までのスキー行からみて、下ノ大平までは徒歩だと覺悟はしてゐても、さて肩にのせたスキーの重みは相當にこたへる。二股までは例の一本道だが、それでも冬や夏とはことなり若葉の美しさが眼をたのしませてくれた。小川のほとりには水草が櫻色に、蕗の苔

が白く咲いてゐる。發電所の前の草叢には土筆が一面に可愛い頭をそろへてゐる。北股は雪解の水で水嵩が增しごう〳〵と音を立てゝ流れてゐる。霞原の造林小屋の上手あたりから雪がまばらに殘つてゐた。土と雪との間にはもう綠がもえてゐる。下ノ大平でスキーをはいた。途中の中山平で飯を食べ、猿倉へは豫定通り十時半に着いた。朝から晴れ上つてゐた空はこの頃から少し曇り初めたが大して氣にかけないで登りつゞけた。白馬尻では流石にまだ冬景色だつた。ネブカ平でシュタイグアイゼンにかへたが越中揚げが吹き凪しはじめたのは愉快ではない、小雪渓をとほりすぎ夏のお花畠のあたりへきた頃から風が相當ひどくなり、國境尾根をとびこしてグン〳〵押してくる雲は隨分逞ましいものだつた。六時二十分頂上小屋へついたが隨分雪がはいつてゐて掃除にかなり手間どり、晩飯を終つたのが十時近かつた。

五月一日、前六・三五出發―六・五〇白馬頂上―七・二〇三國境―八・二五鉢ヶ岳、雪倉岳コル―九・二〇雪倉岳肩（第一回中食）―一一・〇〇雪倉岳、赤男山コル―一一・一〇赤男山肩（第二回中食）―後〇・一〇赤男山、朝日岳コル―一・四〇朝日岳頂上（第三回中食）―二・四〇長栂山下―四・〇〇長栂山、黒負山コル（第四回中食）―五・〇〇黒負山頂上―六・一五ビワーク

五時に起きてみると風はかなり強く小屋に當つて、はげしい音を立てゝゐるが快晴だ、積雪期に於いて白馬以北へは全然シュプールなく、しかも自分としては幾年も前からの宿題であるだけにはりきつて出發した。アイゼンのツアッケが快くさゝつて音を立てゝゐる、まづこの行程の最高峰白馬頂上へ敬意を表した。今朝は富士から白山までみえてゐるが日本海は春霞におほはれてゐる。頂上に別れを告げて下りにかゝつた、今日は出來るだけ先きへ進まねばならぬので、荷物も相當きりつめてピッチをあげる。三國境までは大池へ行くコース通りに尾根を傳ひ、こゝから左に別れて大分下らされる、三國境と鉢ヶ岳のコルまで下つて鉢の右をまくことにしてつつき

朝日岳國境より白馬方面を望む（五月）　　田邊主計

る。丁度うまく鉢と雪倉とのコルへ出た。こゝから雪倉岳へほとんど夏道通りに登つたが頂上近くで左側をまき氣味に歩きこゝで第一回の中食をとる。こゝから赤男山とのコルまでは標高差にして約五五〇米下りるのだが見た眼にも隨分ある、このコルの右側は大所川の源流となり左は柳又谷の上ササゴ又へ落ちてゐるので夏はさ程でもないが、今はかなり悪い。頂上の左側をそのまゝ下りることにしてアイゼンをスキーにかへて滑り始めた。かなりの重荷を持つてクラストした雪の上をスキーで滑り下るのは却つて脚が疲れるので間もなくアイゼンをまたはいた。はきかへてしばらく下りると雪庇が上ササゴ又の谷に向つて出てゐるので少し右よりに遣松の多くあるあたりまでにげる。即ち雪倉頂上よりコルへ向つて下りてゐる尾根らしきものゝ左側を行く譯である。傾斜がだん〳〵急になつてルックサックにつけたスキーがともすると雪面にあたり、そのたびにバランスがくづれさうになる、ピッケルを重さの故で敬遠したのでスリップは禁物だ。雪はこの斜面では陽が高くなつたせいか柔かくなり膝近くまでもぐる、下手なヂグザックは禁物なのでほとんどまつすぐに下り、コル近くではスノー・ボールと一緒に下りた。コルへ着いたときに膝の疲れが大分感じられたので、今下りた斜面をみあげながら『成程なあ』とつぶやきあつた。赤男山は夏道も左をまいてゐるので今は夏道など全く判らないがやはり頂上の左をまいた。頂上の眞下のあたりのところで休憩して第二回の中食をとる。こゝから柳又谷がよく眺められるが、六兵衛谷の落口が悪いらしい、上から見下した處ではこの邊も雪のついてゐるこの頃の季節ならば通れないこともなからうと思はれ、その他はきれいに雪をかぶつてゐるからそんなに悪さうでもない。

中食後スキーにはきかへて出發、ほとんど等高線沿ひに朝日岳とのコルまで出た。こゝから朝日の右側をまいて直接に北の方へ出やうかとも思つたが數年前の夏小川溫泉へ下るときに朝日頂上でかなり迷つたことを思ひ出

して一旦朝日頂上へ出ることにした。コルから頂上への稜線附近には落葉松が多くその間をキックターンをくり返して行く、後一時四十分朝日岳の頂上へついた。この登りにはかなり疲れた。

朝日頂上からは前朝日イブリ山を經て小川溫泉への夏道がついてゐるだけで北方へは夏道もない。小川溫泉へは蓮華溫泉からこゝを通つて數年前の今頃に一パーティーが下りてゐるし私も先年夏下りたので前朝日の方をなつかしんで眺めた。

朝日で三回目の中食をすましてから出かける、こゝから長栂までの間は快くスキーがとんだ。越後側の方は實になだらかで時間が許せばこゝでしばらくすべりたい衝動にかられる。長栂山まではあつけなくたどりついてしまつた。やはりスキーは速い。天候は朝からそのまゝの快晴をつゞけてゐる、陽にやけてピリピリする。長栂山の少し手前から右へ出てゐる尾根（現地では長栂山と云ふ字のあるところなどは判らなく、細長い峰全體を長栂山といふらしく思はれる。また長栂山から北へ出てゐる尾根よりは東へ出てゐる尾根の方が現地では大きくみえた）を滑りつゞける、雪質はザラメに近いものだがそんなに快適でもない。地圖にあるとほりの二つの小ピークをこえて黒負山にさしかゝる、この二つの小ピークは實際上ではかなり手ごたへのある上り下りを強要された。黒負山及びその手前の尾根筋にも右側に向つて相當大きい雪庇が出てゐるので餘りのんびりとも歩けないが、黒負山頂上より少し下のところの雪庇は丁度尾根筋で割れてゐて、左側も傾斜がかなりあつてスキーのまゝでは捲けないので、こゝでアイゼンとはきかへ、しばらく歩いて頂上へついた。時間は五時だが日が長いのでもう少し行くことにした。頂上でまたスキーにはきかへ滑りはじめる。

この尾根は地圖上ではそんなに凸凹もなく距離もなさゝうにみえるが、實際歩くと可成り距離があり滑り甲斐

がある。尤も主觀的な感覺だから正確とはいへないが。

一五二七・〇米の三角點（この山は頂上が丸いので便宜上こゝに丸山と假稱する）の一つ手前のコル卽ち一四六〇米の地點へきたときに六時十五分だつたので、この邊でビヴークすることにして適當な場所を探す。尾根の上の一寸した凹地にブッシュが出てゐるところがあるのでこれを切り拂つて何とか平らにしてそこへグランド・シーツを敷くといふことにして、仕事をはじめ小半時間の後には何とか出來上つた。こゝから左をみると小瀧川の對岸が見えブナの木々の若芽が美しい綠をしてゐる。やがて晴れた空がぼつ〳〵と暮れはじめ美しいアーベントロートを名殘りに宵の明星が輝きはじめた。

泊り場は下と天井とに一枚宛グランド・シーツを用ひ横のおほひには油紙のかなり厚いのを使用して、これを四隅に立てたスキーストックにむすびつけ何とか寢所が出來た。コッヘルが音もなくもえてゐる、とき〳〵雪崩らしい音が聞える

二日、前八・二五出發—八・五五丸山頂上—一〇・〇〇ジャンクション・ピーク—一〇・四五第一回中食—後一・〇五赤禿山頂上—二・〇〇第二回中食—二・三〇舊縣道大峠の小屋—四・〇〇小瀧村夏中—四・五五小瀧驛着—五・五六發—六・三二糸魚川着

昨夜一時頃羽根のシュラーフ・ザックの中で寒くて眼がさめたが、またうと〳〵としたらしく目がさめたときは夜があけて暖くなつてゐた。

アイゼンをはいて出發する。有難いことには今朝も晴れてゐる、尤も今日はだいぶ空が白つぽいのでこの晴天もぢきにくづれさうに思へるが何しろ今日中もてばいゝわけだ。

雪質はザラメで案外かたくアイゼンは丁度爪全部がもぐる程度なので歩きよい、ぢきに丸山頂上につく、三角

點のこはれた櫓があつた、こゝから白馬頂上までズットみわたせるので寫眞をとつた。こゝの眺めは信州側よりみた白馬とはだいぶ異なつて正に『山なみ』といふ感じにふさはしく凸凹をつゞけながら長い山のうねりをしてゐる。昨日黒負頂上からみたときにこゝと赤禿山とのつゞきの尾根がかなり痩せてゐるやうにみえたが、きてみればそれほどでもないがやはりスキーは使へさうにもない。地圖上では幅が廣いやうに感じられるが、現地は幅が狹くて丁度アイゼンで歩ける位のもので兩側とも割合に急な傾斜で落ちてゐる。丸山より二つ目のピークまで（地圖上にて）きたときに地勢がゆるやかになつたのでスキーとはきかへた。このあたりから尾根はほとんど眞北を向いてゐる、赤禿山の方へのものと、北へそのまゝ小瀧川に下りてゐる尾根とのジャンクション附近は意外に惡く目的の赤禿尾根へ右側をからむつもりで行つたが壁になつて落ちてゐて駄目なので北へつゞいてゐる尾根をそのまゝ行きジャンクションの少し北よりに出やうとしたがこゝで遂にアイゼンにはきかへる。赤禿へのつらなりは隨分急な傾斜をなしてゐたがいく分北よりにこの尾根へ取付いた。ジャンクション・ピークあたりよりは喬木がかなりあり山が低くなつてきたことを感じさせる。赤禿への尾根にとりついて第一回の中食をした。尾根を歩くのに餘りもぐらないし、またそんなによい地勢でもないのでアイゼンのまゝ歩く、ジャンクションから赤禿山までは地圖上ではピークが二つあるきりで、簡單な様にあらはしてあるが現地では相當に複雜な凸凹の多い尾根だつたのには驚いた。赤禿までくると尾根上には雪が消えて稜線の左右兩側に大量の雪がベットリついてゐる、尾根筋に丁度獵師のとほつた様な切り開きがあつたので幸とばかりにそこを歩く。「小岩かゞみ」が紅く美しく咲いてゐた。尾根筋の切り開きがなくなつたので左へまいて雪の上を少し歩いて後に赤禿山頂上へきた。

木地屋・大所の部落が實に美しくみえてゐる、どちらもまだ雪の中に冬眠をつゞけてゐる姿であり、大所の上

にある池などはエメラルド色に雪との對照が美しい。物思ひに耽らせるやうな風景である。

赤禿山から山之坊の部落に向つて東に出てゐる尾根へつゞくところが惡く小さいけれども雪庇が出てゐて少々苦勞した。尾根についてスキーとはきかへて第二回の中食をした。眞北の方向にある高浪池が紺碧色の水をたゝへてゐる。先刻見た木地屋といひ、大所といひ、またこの高浪池といひ、山の中にある人里や池は雪の中にあるときにはどうしてこんなに美しいのだらう。

下に山之坊のこじんまりとした部落がみえてゐるが、こゝの北で舊縣道に出るつもりでスキーを滑らす、快適とはいへぬまでも五月のはじめとしてはよい氣持だ。スキーはやはり速く、あつけなく舊縣道に出てしまつた。地圖で六五一米の標高の記されたところで茶店のやうな小さな小舍があり「大峠の小屋」とかいてあつた。街道の殘雪を利用して滑る、出來るだけスキーを利用したがそれも長くはつゞかなかつた。スキーを肩に歩き出す。どの樹も大ていは若芽を出してゐるので美しい、とりわけブナの木は格別だ、みづ〳〵しい綠色をしてゐて『新鮮な綠』といふのがこんなときのために用意されてある言葉かと思はれるくらい美しい。こんな若芽の新綠をみてゐると心が躍動する位たのしい。定雄ととりとめのない話をしながら歩く、道ばたには小川が雪どけ水で增水して流れてゐる、ながれがゆるやかになつてゐるところにはスカンポが咲いてゐたりする。小瀧村へ下りると櫻が滿開で村人達は野良仕事にいそしんでゐた。暑さにうだりながら五時小瀧驛に着いた。一日中晴だつた。

細野に荷物が殘してあるので、定雄と細野へ同行することにする。車中からみた糸魚川流域の小平野にはもう麥が四寸ばかりも伸びてゐた。親切で素朴な人々が待つてくれてゐる細野へと心は急いでゐる。六時三十二分糸魚川へついた。

三月の北ノ又

——駒ヶ岳、中ノ岳、荒澤岳——

田中實

日記

昭和七年三月　櫻井敏夫、故島崎健造、入江明、田中實、吉田三郎（山形高校）、櫻井高五郎、櫻井文太郎（大湯）

三月十五日　雪後曇　小出—大湯

同十六日　半晴後風雪　大湯（七・五五）—枝折峠（シヲリ）（一三・五五—一四・四五）—北ノ又骨投（コツナゲ）澤口のシシ小屋（一五・三〇）

枝折峠への登りの途上、駒ケ岳の眞白な山頂が驚くほど高く霧の切目に隱顯したが、峠の上で突然猛烈な風雪となつた。シシ小屋は骨投澤合流點の草地の記號のあるところに北ノ又川の水に面して建てられ、三面は完全に棟まで埋沒。北ノ又河岸の平に雪煙が狂ひまはり、平を圍む櫹林が轟々と鳴りわたる。小屋の所有者上折立の富永清策が熊の動靜を偵察するために同行して來た。

同十七日　終日降雪　西風時々强くなる。

同十八日　雪後曇　午前十時頃小降になつたので吉田が早速とび出したが、スキーのまゝ股まで入るので驚いてまた潜り込む。新雪小屋のまわりの平で平均四尺位、午後一時頃西風つよくなり雪やみ、枝折峠つづきの尾根や荒澤岳側の尾根が烈しく雪煙をあげるのをみた。日沒頃、鈍い西の空を負つて中ノ岳のドームが影繪のやうに見えてゐたが再び降雪となつた。午後六時雪、零下四度。

同十九日　雪後曇　七時零下四度、十二時三度、十八時零下一度、二十時零下三度。

正午前に雪やみ薄日がさしてきた。スキー膝までぬかる。午後小屋のすぐ上手の倒木をわたつて對岸へ行き、蛇子（ヂャコ）澤とツボクラ澤との間の尾根へ二百米ほど登つてみた。樹林の中の滑降快適、夕方からまた降雪。

同二十日　風雪　西、七時零下五度、十二時零下四度、十五時零下五度、十八時零下七度、終日猛烈な風雪。

同二十一日　風雪、西、七時零下六度、十五時零下五度、十九時零下六度、終日猛烈な風雪。

同二十二日　雪後半晴、七時零下六度、十時零度、十二時零下一度、十七時零下三度。

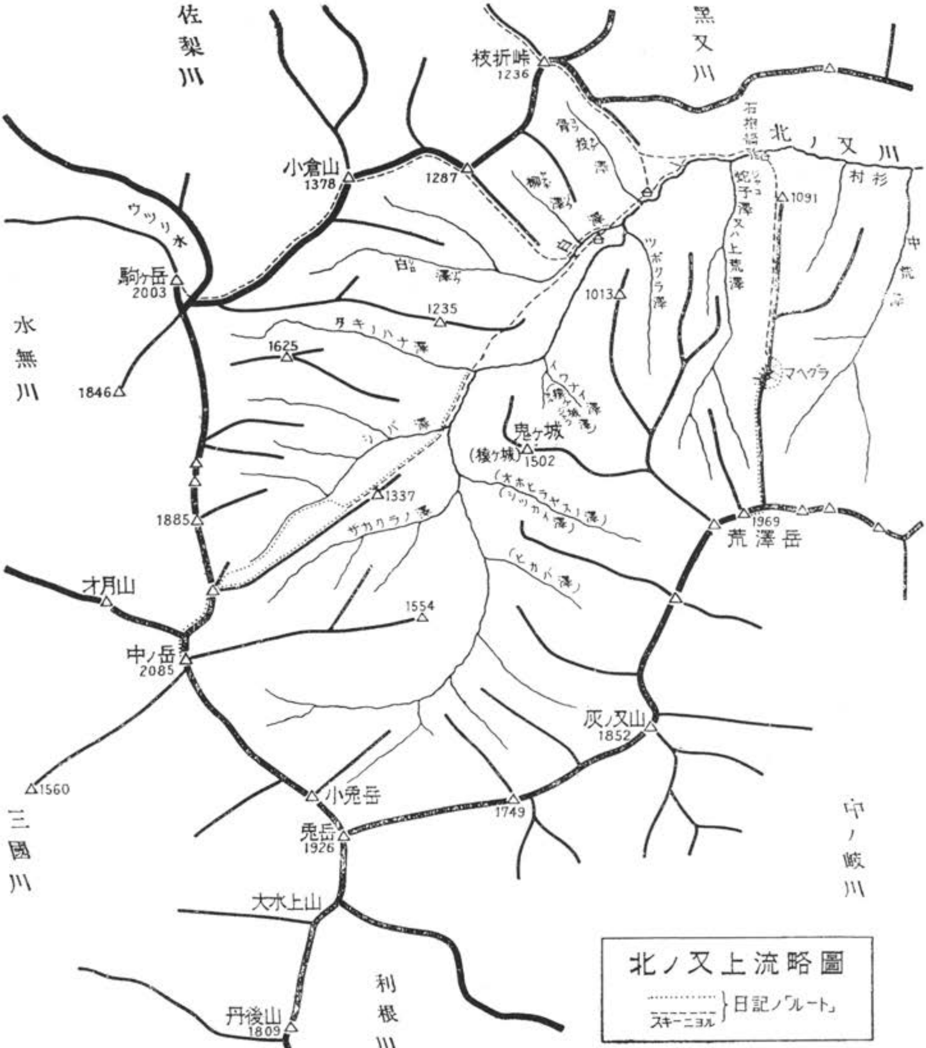
雪やみ正午過から薄日がさし、斷雪の間に荒澤岳が現れた。十九日の所へ出動、文太郎は鐵砲を借りて兎を打ちに行く。雪は急速に締つて行つた。

夜、斷雲飛ぶ、滿月、荒澤岳の山壁が螢光のやうな光を放ち何とも物凄い景觀を呈する。

同二十三日　少雪一時好晴、駒ケ岳。

午前一時少雪、三時少雪、七時曇少雪零下六度、十五時曇三度、十六時少雪零度。

小屋（七・五〇）—獨立標高點一二八七米（九・二〇—九・三五）—小倉山西肩（一〇・〇三—一〇・一三）（一〇・三五—一一・〇五）—駒ケ岳山頂（一一・二五—一二・四〇）—小屋（一四・五五）十五時氣溫三度。


佐梨川
黒又川
枝折峠
1236
小倉山
1378
1287
北ノ又川
ウツリ水
駒ヶ岳
2003
水無川
1846
1625
タキノハナ澤
1235
1013
ツボクラ澤
1091
村杉
中荒澤
マヘグラ
シバ澤
鬼ヶ城
1502
1337
1885
サカクラノ澤
オ月山
中ノ岳
2085
1554
荒澤岳
1969
灰ノ又山
1852
1560
三國川
小兎岳
兎岳
1926
1749
大水上山
丹後山
1809
利根川
中ノ岐川
北ノ又上流略圖
日記ノ「ルート」

白澤（シロソウ）本流と柳澤との間の尾根にとりつき、樹林の中を登つて行くうちに雲が散りはじめ未丈岳が現れてきた。荒澤岳が全容を現す頃には西の空もきれて駒ケ岳の山頂が高く雲の上にのぞき出し、中ノ岳のドームとの間の三つの隆起がしきりに雪煙をとばしてゐた。一二八七米へ登りつく頃は奇麗に晴れわたり暖いいゝ日になつたが、十一時頃南の空が薄ぼやけるとみる間に、忽ち平ケ岳をくもらせ中ノ岳の後に迫つてきた。駒ケ岳頂上の直下ウツリ水の源頭の窪に入ると同時にガスにつつまれ雪となる。小さな雪庇をスキーで蹴破つて頂上へ出る。高五郎、清策もついでワカンで登つてきた。

直ちに往路を一氣に滑降して一二八七米の上手でワカンを待合せる。清策氏はこの尾根から一六二五米の岩場に今年熊が入つてゐるか否かをみにきたのだが、熊不在ときまりこゝで兎狩を始めたので、私達は彼の配下の勢子（ナリコ）をつとめ、三時頃小屋に歸る。北ノ又河畔の雪はひどく腐つてゐた。暮方東京商大の隊が大湯の人夫衆と枝折峠を越えてきて白澤口の小屋へ入る。

同二十四日　曇一時半晴、午前五時二十分零下三度、七時零下一度。

小屋（九・三〇）―枝折峠（一一・三〇―一二・三〇）坂本、卽ち峠道が佐梨川へ下りた處（一四・三〇―一五・一五）―大湯（一七・〇〇）

前日に似たやうな天候であつたが、あまりよく晴れぬとみて大湯へ引揚げた。枝折峠への途上で荒澤岳が現れてきて、荒澤岳を斷念して歸路についたことが惜しくなつたが、一時間ほどするうちに雲の下底が一五〇〇米あたりに一線をひいたまゝ動かなくなり再び姿を見せなかつた。峠から尾根通しの下りは多量の新雪のために、一週間前とはすつかり樣子を變じてゐた。途中明治大學の隊の登つて來るのに會ふ。

同二十五日　雪、大湯―小出。

昭和八年三月　田中實、櫻井高五郎（大湯）

三月二十七日　雨後雪、小出（六・四〇）―大湯（一一・〇〇）

途中上折立の富永清策氏宅へ小屋へ泊めて貰ふことを頼みに寄り、當人が大分前から小屋へ入つてゐる由をきく。

同二十八日　雪、滯在、終日濕雪降る。

同二十九日　曇後晴　大湯（七・一五）―坂本（九・〇〇）―枝折峠（一三・〇五―一三・三五）―北ノ又河畔、骨投小屋の下手（一四・三〇）―石抱橋（一四・五五）橋のすぐ下手の小屋に鍬の柄作りが二人ゐるのに宿を借りる。

新雪が案外深く、枝折峠の最初の登りで直登する高五郎の方が早いので輪樏にかへ、面倒臭いのでそのまゝ峠まで登る。新雪は峠で一尺五寸位、駒ケ岳、中ノ岳、荒澤岳が次第に晴れて出てきた。骨投澤口のシシ小屋の上まで行つて尾根の末端から望見すると、小屋のまはりに輪樏のあとがないので清策氏の不在を知り、石抱へ行つて宿を乞ふことにした。獸を偵察するやうなもんだと笑ふ。北ノ又河岸は新雪ものすごく腐つて、泥田を歩くやうであつた。

同三十日　晴、荒澤岳。

午前四時二十分零下十三度、石抱の小屋（六・五五）―一〇九〇米三角點―前倉の下の鞍部、スキーデポ（八・四五―九・一五）―輪樏で中荒澤側へまきながら七〇―八〇米（高距）を下り、前倉の上手の鞍部へつゞく雪面

を小さな尾根型について登り、前倉上手の鞍部へ出る（一〇・四〇―一一・〇〇）―一六〇〇米附近でシュタイクアイゼンにかへる―荒澤岳の肩（一二・三五）―荒澤岳三角點（一二・五〇―一三・〇〇）―マヘグラ上の鞍部（一四・〇〇―一四・二五）―マヘグラ下の鞍部スキーデポ（一五・〇〇）―石抱（一五・四〇）

九時半頃マヘグラ東側の雪面にゐるとき、この雪面が小さな雪崩を起し始めた。この朝は零下十三度に降り、北ノ又の低地は非常に堅くクラストになつてゐたのでいゝつもりでゐたが、この斜面は高度一三〇〇―一四〇〇米にあり且つ東むきであるため、前日の日射は、夜の寒氣で堅いマーブルクラストを作る程までには、新雪に作用を及ぼさなかつた（前日は正午頃から日がさしてきた）とみえて、二尺位の新しいグズ〳〵にゆるんだ濕雪の層があり、之が雪崩れて前後を三回程浚はれた。ごく速度が小さいので、音がして上に小さな雪煙をみてから、少しでも小高いところへあわてゝバタバタ逃げた。この雪面は、既に底雪崩を豫告する短いシュパルテが多數にはいつてゐたが、まだ底雪崩は一つも出ず、新しい一尺五寸から二尺の、ひどく濕潤した雪層がシュパルテのところへ小さな雪庇になつて乘り出したりして居り、こんなのが崩れて濕雪をまきこんでおちてきたもので、厚さ一尺位幅五六間で非常に速度が緩く、且つ流動することが少く、落ちるといふよりはずれてくるやうなものであつた。ベタベタの雪の癖に雪煙をあげてきたのは意外だつた。

この斜面は午後二時頃から片かげりするので、歸路にはクラストになりかけて居り、逆に中荒澤をへだてた對岸の斜面が、同じやうにザアザアと雪崩れてゐた。

登路に選んだこの蛇子澤、中荒澤間の尾根は、一六〇〇米附近から上はウインドクラストが終日堅く、荒澤岳の主稜は粉雪が吹き溜つてゐた。主稜は時々雲がかすめてゐた。

十八時零下一度、二十四時零下三度。

同三十一日　曇、六時零下三度、十四時六度、十六時三十分三度、十八時一度。

石抱（八・一〇）―骨投澤口のシシ小屋（八・五五）クラストの上全くスキーの條痕を印しない。清策氏に會ひ宿を借りる。二三日所用で須原口へ出掛けてゐたと云つてゐた。

正午から中ノ岳へのルートをみに行く。高溫のため雪はひどくゆるんできた。タキノハナ澤手前の尾根の末端一〇八〇米へ登り、タキノハナ澤落口へ下り、北ノ又本流の左岸をシバ澤落口まで行き、一三三七米に登り、更にその尾根の一三三〇米の鞍部まで行き引返す。非常に歩き易く中ノ岳は遠い割に時間を要しないことを知り、十八時小屋に歸る。

四月一日　曇少雪後快晴、中ノ岳。二時零下五度晴、五時零下三度曇、西北風、雲早し。

小屋（六・〇〇）―タキノハナ澤手前の一二三五米の東一〇八〇米の鞍部―タキノハナ落口への下りでクラストの上で、とばされて落ちたので輪樏にかへ、スキーをタキノハナ澤落口に殘した。まだ堅いから一三三七米の尾根の登りが輪樏の方が速いだらうと思つたからである―シバ澤の落口（七・五五）―一三三七米の上の前日のシュプールの終點（九・二〇―九・四五）快晴となる―主稜へ出る、中ノ岳東北一九〇〇米の肩（一一・三五）―中ノ岳（一二・〇〇―一二・〇五）―中ノ岳東北一九〇〇米の瘤からシバ澤へ下り始む（一二・三〇）―シバ澤最南の俣を下り、高度一三〇〇米の地點で之と別れて前日のシュプールの終點のコルへ登る（一三・三〇―一四・〇〇）―シバ澤落口―タキノハナ澤落口のスキーデポ―滑投澤口のシシ小屋（一六・四〇）

シバ澤最南の俣はいゝスキールートであつた。中ノ岳の主稜は、この澤と同じく澱粉のやうな落着いた粉雪を

堆積し、スキーが利く狀態であつた。澤も尾根も一三〇〇―一四〇〇米以上は日射により雪のくさることなく、終日快適な狀態を持續してゐた。シバ澤を登降すれば、快適なスキー登山を爲し得た筈で殘念に思つてゐる。

往路の尾根は一五〇〇米あたりからは細くなり、主稜へ出る一〇〇米程下に非常に堅い箇所があつた。主稜に出るところは雪庇が出てゐた。

同二日　晴、二時四十分零下八度、六時零下八度、小屋（八・一〇）―枝折峠（九・三〇）―坂本（一一・三〇―一二・〇〇）―大湯（一三・三〇）

同三日　曇、大湯―小出。

枝折峠

この峠（峠に明神の祠があるので明神峠と呼ぶ方が多いらしい）は三月に入ると却々交通が頻繁になるので、木地仕事を稼ぎに宇都野の人達が峠を越えて石抱や村杉へ入つて行くし、須原口以南赤川沿ひの「移住民」衆も必ず寒いうちに獲つた熊の皮を持つて、里の方へ越えて出て來るのださうである。木地仕事に石抱、村杉、清水へ入つた人達は一月遲れのお節句を里で祝ふために、木地を背負つて又里へ出てくる。昭和八年のときの歸りには、かういふ下山の人達と一緒に峠を下つた。粗削だけした鍬の木部を背一杯に頭より高くしよひあげた人達が、十何人も一列になつてこの峠の尾根道を下つて行く風景を、この由緒ある峠にふさはしいものに思つた。會津から利根、秋山に擴がるこの山地の廣袤と、この奥五里餘に亙つて谷沿ひの僅な平に、これ以上の佗しい人の住居も少いだらうと思ふやうな生活が、つゞけられてゐる銀山平をもつこととが自ら釀す雰圍氣が、人をこんな氣持にさそふのであらう。

晴れた日のこの峠の眺望はまた素晴しいものがある。雪面から陽炎のたちさうな三月の晴れた日を、恐しく高い駒ケ岳の眞白な頂を見上げ〳〵して峠の尾根道を登つて行くとき、佐梨川の谷に時々雪崩の重い響がとどろいてあたりの靜謐をやぶるが、止んでしまへば駒ケ岳の山頂は何事もなかつたやうに、靜な白い光線の中に靜まりかへつてゐるばかりである。尾根道を登りつめて峠に出ると、荒澤岳のまさに城廓のやうな雄勁な山體が、ひろく正面の空を限つて對坐してゐるのに目を奪はれる。荒澤岳は何か建築的なものを感じさせる山で、この峠からの姿は確に人の心を奪ふものをもつてゐる。駒ケ岳から中ノ岳に至る障壁が北ノ又の奥を限り、北ノ又の谷は悉く櫛の林に蔽はれて、幾段かの段丘をつくつて荒澤岳の山下を廻廊のやうにめぐつてひらけてゐる。こんな氣持のいゝ峠も少いと感じさせる峠であつた。

過去の記錄に就いて

積雪期の北ノ又附近の登山記錄は昭和八年頃までに次の數例をかぞへる。(勿論私の寡聞のために知らぬものもある筈だし、また昭和九年頃以後については全く心掛けてゐなかつたので、私には全然のブランクになつてゐることを、附記しておかなければならないが。)

一、村杉から枝折峠・小倉山の尾根を經て駒ケ岳の登頂、昭和四年三月五日、神戸商大中川秀次氏。「やま」二十五號(神戸商業大學山岳部、昭和五年)に中川秀次氏「二月の越後駒ケ岳」として紀行が出てゐる由で、積雪期の駒ケ岳の登頂記錄としておそらく最初のものであらう。

二、枝折峠のお宮から一と同一のルートによる駒ケ岳の登頂、波木井六男・齋藤長壽郎・山田喜一・岸英一四氏、昭和四年三月二十二日。(「登高行」七號(慶應義塾體育會山岳部、昭和四年)齋藤長壽郎氏「魚沼駒ケ岳」)

三、八海山から尾根どほし中ノ岳に登頂、兎岳を越えて灰ノ又山に至り、ヒカバ澤の一つ上手の澤を北ノ又に下り村杉に達した記錄。山尾敏郎・金山淳二兩氏、昭和六年三月。（「登高行」一八號（慶應義塾體育會山岳部、昭和六年）大河原喜作、金山淳二兩氏「八海山」）

二十八日、八海山五龍池にテントをあげ、二十九日八海山、三十日テントから中ノ岳に向つたが異常な暖氣のため雪が弛み、瘠尾根のため危險を慮つて中ノ岳との最低鞍部にツェルトザックを被つて泊り、三十一日天候ノーマルとなり中ノ岳に登頂、中ノ岳からスキーをつけ灰ノ又山西の尾根上にビヴァーク、四月一日雨と雪の中を北ノ又へ下つたが本流がすつかり出て居り、且つタキノハナ澤落口の處で本流を塡めたデブリの上を左岸へ渡つてしまつたので、ツボクラ澤出合附近にビヴァーク、二日に村杉に出られたもので、中ノ岳より奥の積雪期の記錄としては唯一のものであるやうだ。（なほ八海山については、一月の記錄が大河原、金山兩氏により同號に記されてゐることをつけ加へたい。）

四、北ノ又、白澤口の小屋から**一・二**と同じく小倉山―駒ケ岳の尾根により駒ケ岳の登頂、昭和七年三月二十四日。同じ小屋からシバ澤とサカクラノ澤との間の尾根を登り中ノ岳肩一九〇〇米の隆起まで往復、三月二十六日。高見要・鈴木英雄・增山清太郎・十合健二四氏。（「針葉樹」六號（東京商科大學一橋山岳部、昭和七年））

五、枝折峠のお宮から駒ケ岳の登頂、昭和七年三月二十七日。私達が枝折峠を下る時會つた明治大學の方達による。

三月は以上のとほりであるが、五月に入ると荒澤岳に次の記錄を數へる。

六、腰付から一五一四米へ出て荒澤岳―灰ノ又山―兎岳―中ノ岳―八海山、昭和四年五月十五日腰付を出て、

十六日に八海山の阿寺山尾根分岐點に達す。齋藤長壽郎・山田喜一・長野清一三氏、(「登高行」七號、齋藤長壽郎氏「荒澤岳・灰ノ又山・兎岳・中ノ岳・八海山」及び「登高行」八號、年報)

七、清水から中荒澤へ入りマヘグラの尾根から荒澤岳—兎岳—中ノ岳—駒ケ岳—小倉山から直接大湯に下る。昭和七年五月十三日清水を出て十五日大湯に達す。中島治一郎氏、櫻井高五郎(大湯)を伴ふ、(「山岳」二十七年二號(日本山岳會、昭和七年)。中島治一郎氏「荒澤岳より魚沼駒ケ岳」)

見聞したことゞも

私のこの地方の積雪期の知見は、上述二回の、三月に一週間程づつ入つたときの經驗がすべてなので、嚴冬期の狀態については全く何も知るところがないが、三月中旬から四月に入る季節の、北ノ又の狀況の見聞きしたものを記して、少しく日記を補つておきたい。

昭和七年は冬のうち降雪量が少く、私達が入つた三月十六日には、骨投澤口の小屋付近は積雪二米半位と思つた。それから一週間ばかりよく降つて二十三日には三米半位になつた。三月中旬になつてこんなに降雪のつづいたことは異例だと云つて居り、雪は殊に十七日のものはフワフワした奴で、スキーのまゝ腰まで入つてしまふものであつたが、三月のこの地方のことで落着くこともまた實に速かつた。雲が薄くなつて雪が小止みになりさへすれば、どん〳〵締つて行くやうであつた。三月中旬になれば大抵の年は晴れる日數は隨分多いやうで、この邊を快適に登つて歩けるやうである。山へ行かれぬ日に小屋の近くでスキー練習をするにも、この附近の大きな楯ばかりの林に蔽はれた廣い尾根は豐なゲレンデで、七年三月骨投澤口で連日降られた時も、小止みになれば忽ち新雪が締つて行くので、ツボクラ澤の東の一〇九〇米三角點の尾根へ登つて結構面白く練習してゐた。たゞ新雪

後の快晴の日中となると、この邊低いところは新雪がひどくくさつて何とも不愉快なものになつてしまひ、こんな時に北ノ又河岸を歩くのは雪面の反射にむされる思ひであつた。

駒ケ岳の登路は、從來の記錄もすべて枝折峠――駒ケ岳の尾根によつてゐる。この尾根は豐富な積雪量のために非常に廣くなつて居り、蜿蜒堤防のやうなものでスキーでの登降には實に快適であり、また一番安易な登路に違ひない。駒ケ岳の東面は全く何一つ見えないまでに奇麗に埋つて居り、駒ケ岳直下ウツリ水の源頭に入る手前、郡界尾根に併さる處が少し細くなつてゐるが、駒ケ岳の風陰でいつも軟い雪を堆積してゐるらしい。七年三月の時にはかなり濕氣の多い重いものであつた。

白澤（シロヂク）は駒ケ岳・中ノ岳の東面で一番緩い廣い澤で、またその南の一二三五米三角點を有する尾根も快適なスキールートとみえた。

中ノ岳直下まで北ノ又を溯るルートは、前記東京商大の隊及び八年に私が通つてゐるルートが獵師の間で普通にとられてゐるもので、一番經濟的なものである。この時季北ノ又川は少くともシバ澤落口から下流は必ず出て居り、而もイワナイ澤の落口の手前が惡い由で、前述のやうに一〇八〇米の隆起へ登るのである。一〇八〇米の瘤は南側に北ノ又本流へ底雪崩をつき出してゐた。之は必ず毎年出るらしく、しかも北ノ又の底雪崩の一番早く出るものらしい。（昭和六年の金山淳二氏等の記錄參照）。シバ澤の南の俣もサカクラの澤も快適なスキールートであるけれども、獵師の話では雪の少い年は下の方の瀧が埋つてゐないことが多いと云ふ。昭和七年は雪の少い年であつたが、前記東京商大の記錄には何も記されてなく、昭和八年に私が登つたときもつい見落してしまつたやうで記憶しない。併し瀧が出てゐたとて困るやうなところではなささうだ。昭和八年に中ノ岳を登つたときは、

シバ澤落口から一三三七米三角點のある尾根を輪樏で登つてゐるが、これは登りかけに未だ朝のクラストが堅かつたので、その方が速さうに思へたからであつた。澤の中の積雪狀態は實際非常によかつたので、シバ澤に入つて最南の支谷をスキーで登ればよかつたと今も殘念に思つてゐる。この澤を登れば中ノ岳頂上までスキーの使用に快適な狀態であつた。昭和七年前記東京商大の方達が登られた時は、一三三七米の尾根のとりつきがひどい吹溜りであつたと記してゐる。シバ澤の正面の二つの支谷と北の支谷は、最南の支谷より急で地貌も惡く、一八八五米の北から出てゐるものは、中央からも側面からもこの日數本のデブリをみた。

中ノ岳、駒ケ岳間の水無川側の面はひどく惡く深く水無川におちてゐるが、上部は大體大きくコンヴェックスをなしてゐるので、中ノ岳、駒ケ岳間の尾根は分水界近くは案外ひろく良好で、八年のときは多少のシュカブラを我慢すれば全部スキーで歩けさうで、三時間あれば駒ケ岳まで行かれるものとみえた。北ノ又側は斷續して雪庇がのぞいてゐる。中ノ岳から兎岳へつづく尾根はまるで廣いので、前記大河原、金山兩氏の記錄に委しいがスキーで歩くには實に快適さうな處であつた。兎岳を越えて蜿蜒三里半の先に平ケ岳の巨鯨のやうな山體が横はり、中ノ岳から八海山に至る細い惡い尾根とは激しい對照を示す。對照といへばまた水無川の流域は支谷といふ支谷から土を交へた底雪崩を押し出し、まつ赤になつてゐるのだが、銀山側北ノ又の谷は地形もずつと穩だが眞白で全く底雪崩に荒されて居らない。この邊としては地形の惡い荒澤岳の北面も未だ少しも底雪崩を出してゐなかつた。前記昭和六年三月二十八日から四月二日に亙る山尾・金山兩氏の通過のときの狀態も、三十一日に異常な暖氣（八海山、中ノ岳間の最低鞍部で日中に氣溫十五度に達したさうである）に見舞はれたにも拘らず同樣だつたやうで、北ノ又の底雪崩の時期は必ず何程か遲れるものらしい。但しあまり遠い先のことではないらしく、

昭和八年四月一日中ノ岳へ登つたとき、既にシバ澤正面の各支谷の南向斜面は勿論、一番おだやかな最南の支谷の北側を境する尾根の南向斜面にも、積雪にシュパルテが出來てゐたし、三月三十日荒澤岳のマヘグラの下中荒澤側の雪面（東向斜面である）にも之をみた。

荒澤岳の登路は、はじめ骨投澤口の小屋からツボクラ澤と蛇子（ジャコ）澤との間の尾根を登るか、この尾根から蛇子澤へ下つて荒澤岳頂上へ登つてゐる尾根（五萬分ノ一「八海山」圖上數字を記入してある尾根）を直登するものを豫定してゐたが、七年五月に櫻井高五郎がマヘグラのある尾根を前記中島氏とともに登つたといふので、それをとることにした。（マヘグラといふのは一〇九〇米三角點から荒澤岳頂上のすぐ東に達する尾根上、一三五〇米から一四五〇米邊に亙る黒い木のボサ〳〵ついた岩峰である）。荒澤岳北面の支稜は、どの尾根も下の方は廣くゆるい美しい櫛林の尾根だが、櫛帶を外れるあたりからは皆急に細くなつてぐん〳〵登つてゐるから、スキーは一三〇〇米位までしか使へない。また無理をして少し位餘計に使つても損だ。澤の奥はまた相當な強い傾斜をもち地貌も悪いので樂なルートはどうしても尾根に求めるよりない。八年三月登つた蛇子澤、中荒澤間の尾根は、その朝がこの邊としては非常に寒く積雪が強く凍つてゐたので、いゝつもりで日が當つてからマヘグラの下を歩き、股まで入る濕雪のために時間もくひ薄氣味の悪い思もしたが、マヘグラの上からは積雪がよく締つてゐて樂だつた。おそらく荒澤岳北面で一番樂な尾根だつたのだらうと思ふ。ツボクラ澤と蛇子澤との間の尾根や、一〇一三米三角點のある尾根は結局細い部分が長いだけ損らしい。一〇一三米三角點の尾根は、昭和七年三月骨投小屋に降込められてゐるとき、雪がやんだばかりの灰色の空の下で、鋭く屈曲してつゞく雪庇の端から盛んに雪をとばしてゐた印象が強く殘つてゐる。しかし之等とても積雪が落着いてゐさへすれば別に困難することはない筈で、

歩くだけで登り得るものだし、また多量の柔い新雪のあつたあとも、この時季のこの邊では雪の落着くことは實に速いのだから、さう永く不安定な狀態をもちつづけることはないのだらうと思ふ。

荒澤岳の北面はこんな狀態だが、南面中ノ岐側はまるでおだやかで兎岳・平ケ岳方面と同樣な相貌を呈して居り、荒澤岳の主稜も幅がひろく、北ノ又を溯つて大平安（オホビラヤス）の上手の尾根をまはつてくれば頂上までスキーで來られるやうだつた。

小屋については、大分以前のことで今は事情が變つてゐるかも知れず或は無意味かもしれないが、昭和七八年の狀態を記しておいてみたい。（昭和十二年版の「山日記」に記載の項だけでは、骨投澤口のものも白澤口のものも、昭和七八年頃と變つてゐないやうだから。）

骨投（コツナゲ）澤口の小屋は北ノ又の骨投澤落口、陸測五萬分ノ一「八海山」圖上草地の記號のある原の南端で、北ノ又の水に臨んで建てられてゐる。六日町營林署の巡視小屋といふことになつて居り、上折立の富永清策氏等の熊狩小屋である。番人二月より五月と記されてゐるが、實際清策氏は冬のうちからよく一人で入つて獵をしてゐるさうである。小屋は丸太の木組に茅を葺きつけただけの「拜み」で、勿論床もはつてないシシ小屋だが、三面奇麗に雪で埋沒してゐるので暖いことは實に暖い。前記のやうな目的の小屋だから、薪、米、味噌、漬物にバケツ、鍋等日用道具一式をそなへ、炬燵まである快適なもので、私達は米、味噌を讓つて貰つてゐた。

白澤口の小屋はこれより三丁程上流で、北ノ又本流と白澤との間の平地にある。白澤（シロソウ）は陸測五萬分ノ一「八海山」圖上では一〇一三米三角點の西で北ノ又川に入つてゐることになつてゐるが、實際はこの邊から下流は、北ノ又本流との間に樹林になつた低い段丘をはさんで並行して流れて居り、ツボクラ澤の合流點のすぐ下流で北ノ

又本流が進路を北から北東に轉ずる屈曲點で、北ノ又に合流してゐるものである。(從つて獨立標高點一二八七米の東側のヤナギ澤は、直接北ノ又本流に入るのではなく白澤に入るのである。)下折立所有で木造のしつかりしたものだが、七年三月東京商大の方が泊られたときは吹込んで隨分寒い小屋だとのことであつた。八年には外がこひをよくしたとみえて、その三月のぞいてみたときには吹込等殆んどなかつた。道具は何もなかつた。尙石抱から村杉には夏期出作りの家の他に、同じく宇都野の人が山仕事に入る小屋が夏道ぞひにいくつかあり、また萬一米、味噌に不足することがあつても、村杉・清水の家には用心米がおいてあるから補給出來るときいた。

雪崩そのほか

清策氏は二月頃からよく骨投澤口の小屋へ入つてゐるのだが、この頃に入つてゐればまた面白いことだらうと思ふ。この多雪の山地の冬の獵師達の活動には興味をひかれるものが多かつた。一次雪崩と、おそらくは二次雪崩をも含めて、分布のひろい「アイ」といふ稱呼でよんで居り、冬のうち北ノ又奥一帶には大きなものが出ると云つてゐた。タキノハナ澤上部がV字形にきれこんでゐる底を、非常に廣く平に埋めてしまつてゐる狀況が、八年三月石抱橋の處から望見された。それから「キレアイ」といふ方言をきいた。きれるといふのは二次雪崩のアプブルッフカンテを思はせるがさうではなく、清策氏によるとクラストの上につもつた新雪がアイをおこすのをいふのだと言ひ、矢張層の問題だつた。大島亮吉氏「本邦に於ける雪崩の方言」の「アイ」の項（大島亮吉氏「山」一二五頁）に、この地域から程近い北魚沼郡入廣瀨村五味澤で、同氏が四月上旬硬いクラストの上にスプリングパウダーが五寸程つもつた朝、土地の者に「今日はアイが出るか」ときいたら、「今日は出る」と答へた由を記してゐるが、「キレアイ」はまさに之に當るもので、此處では獨立の名を與へられてゐたのであつた。春普通

にみられる高次の全層雪崩をナダレとよんでゐたが、「ナダレ」といふ稱があの典型的な底雪崩のみにかたく局限されるものか、或はもう少しひろく、形の違ふ高次雪崩をも含めていふものかは明にしなかつた。大體この人達のラヴィーネンクンデはもつとよくきいて收錄しておけばよかつたと殘念に思つてゐる。降雪量の大、氣溫の性質（概して高いことの他に、日中變化に特徵があるのではないだらうか。晝間の氣溫の上昇が他の山地のこの時季に比し大分大きいやうな氣がする）、おそらくは非常に高い相對濕度等、日本海に直面する北陸の山地の性格から、之等の人達が經驗的にどういふ結論をひき出して對處してゐるかは、興味深いことに違ひないと思ふ。この點で興味をひいたことは、清策氏がサカクラ・シバ澤・イワナイ等の澤は三月なら曇天でも降雪がやんで數時間たちさへすれば普通まづ雪崩の危險を考へないと云ひ、餘程特別な降雪でない限り、二次雪崩の危險時期が非常に速に經過してしまふことを、觀察してゐるやうであつたことである。さりとてイワナイの奥やシバ澤の正面の下を、そんな時にさう安心して歩けるものとは思へないが、昭和七年八年の三月下旬に、私達が北ノ又の谷に二次雪崩と考へられるデブリの大きなものを見掛けなかつたことは事實であつた。荒澤岳北面の上部と、タキノハナ、シバ澤の奥の一部を除けば、北ノ又一帶は佐梨川や水無川の谷とは比較にならぬ程穩な地形ではあり、よほどの多量の降雪がない限りかやうなものは出ぬのかも知れない。

一寸前後するけれども、こんな降雪のつづく季節のうちは、この邊の獵師はさう高いところまで入ることは少いやうで、前述の北ノ又に於てのかうした雪崩に對するこの人達の知見も、案外數少い材料から出來上つてゐるものかも判らない。本格的に仕事を始めるのはもう少し時季がすゝんで、スピーディに行動出來るやうになつてからである。（尤も藤原の組は嚴冬によく遠征して來る由であつたが。）併し早い時季から獵に入るときは、ふかふ

かの馬鹿雪はやむを得ぬ最大關心事に違ひなく、清策氏は爪のないワカンを骨投小屋へ持つてきてゐた。竹を曲げた大きな輪で、中を繩で克明に網目をかゞつてあり、こんな降雪中に北ノ又河畔の平地にかけておいた「捕獸機」（紹（テン）がかゝつたことがあつた）や、おかず用の兎罠を見廻る時の用である。確に都合のいゝものなのだらうが、輪が大きいからひどくガニ股をしないと歩けないし、それでも足を上げるのに重いとみえて輪の前端に繩を結びつけ、之を左右の手に持つて引上げ乍ら御苦勞な六萬をふむので、その後姿はふき出さざるを得なかつた。この滑稽な道具は「北越雪譜」に圖説されてゐることをあとで知つた。

あとがき

この地域の山は積雪期に於ても、より高度の登山の對象として特に注意をむけられる程のものではなし、且つ冬期の交通の便のあまりよくないことは、この地域の登山記錄を數少いものにしてゐるやうだ。すゝめられるままに今更低迷的な古いノートを繰つて、過去の山旅の回想を綴つたのもこのことが動機であつた。

尾瀬原貯水池反對說

川崎隆章

「此の江山の洵美なる、生植の多種なる、是れ日本人の審美心を過去、現在、未來に涵養する原力たり。此の原力にして殘賊せられんか、日本未來の人文啓發を殘賊すると同一般、而かも近年人情醨薄、只管目前の小利小功に汲々し竟に遙遠の大事宏圖を遺却し、或は森林を濫伐し、或は「名木」、「神木」を斬り、或は花竹を薪となし、或は古城斷礎を毀ち、或は「道祖神」の石碣を橋梁に用ひ、或は湖水を涸乾し、或は鶴類を捕獲し盡くし、(中略)以て日本の風景を殘賊する岩干ぞ、且つや名所舊跡の破壞は歷史觀念の聯合を破壞し、國を擧げて赤裸々たらしめんとす。日本の社會は、日本未來の人文を愈々啓發せん爲め、益々日本の風景も保護するに力めざるべからず。(後略、傍點川崎)」(志賀重昂「日本風景論」—「七、日本風景の保護」)

今吾人の前には、我國風景美の代表地尾瀨原(ヲゼガハラ)貯水池問題が横たはつてゐるが、昭和の御代に尙志賀先生が健在せられてゐて、已に却下せられたが、わが祖國の生命と仰ぐ靈峰富士山の山腹をくり拔いてケーブルカー登山計劃を成すとか、木邦隨一の國寶的大濕原尾瀨原に二百三十尺の大堰堤を築造し、その寶庫を一大貯水池底に葬り去らむとする電力國營問題あるを知らるるならば、烈々の愛國の氣慨に富まれし先生は、如何にか浩嘆久しくせられ、人心全く地に落ちたりと哭かるゝことであらうか。

勿論過ぐる東電水力發電問題は、當時學界、岳界の猛反對に遭つて沙汰止みの形になつてゐたが、その後我が國未曾有の大難支那事變起り、獨伊は英國打倒に立上り、世界の風雲極めて緊迫を告げつゝある現下、

我が國に於いては歴史的戰時新體制機構成り、電力の急激なる需要とその對策は、改めて尾瀬原に電氣廳の乘り出しとなり、國營に依る貯水池發電計劃の進められんとする機運となつたのである。

昭和十五年七月九日附東京朝日新聞群馬版の報ずる所に依れば、「風致」よりも「增産」だ、の題下で

「千古の謎を祕めた尾瀬原の大自然にいよ〳〵斧鉞を加へる計劃が、內務、遞信兩省で進められてゐる—群馬、福島栃本三縣に跨るこの地帶は風致地區として全國有數の廣大なもので、曾て東京電燈株式會社で發電計劃を樹てたが風致を害する虞れがあるといふので、沙汰止みとなつたまゝ現在に及んでゐる、然し事變發生以來殷賑產業の目覺ましい勃興に伴ひ電力の需要激增し、又生產擴充による灌漑用水の補給難が叫ばれると共に、累年の災害防止のためにも該地點に發電並に河水統制の必要が喫緊の問題となつたので、兩省でも本格的な計劃を立案することになつたものである、事業主體は國營とし大體群馬縣の奥利根河水統制と相呼應し十年計劃で竣工させる方針で、大藏省の承認を得れば今議會に提案明年度から具體化する模樣である、かくて平和な眠りを續けた大自然の美觀も『增產國策』の脚光を浴びてその面目を一新する譯である」

尙內務省谷口技監談として

「第二期の發電計劃として考へられてゐたが電力が慾しい、水が足らぬ今日の情勢ではかういふ地點の開發を急いでやらねばならぬと思ふ、幸ひ群馬縣で奥利根の河水統制をやるので、これと足並を揃へて十年計劃で實施するのが一番好都合だ、計劃も單に發電計劃だけでなく河水統制もやつて、工場灌漑用水を補給し風水害の防止にも役立たせたらいゝと思ふ。（傍點川崎）」

とある。然りと雖も、殷賑產業の需要激增に伴ひ電力の重大さは、國民の生活に於いても亦身を以て痛感せらるゝ所であるが、それなるが爲に、何故に我が國無二の國寶的原始境を貯水池に開發せんことを急いでやらねばならぬのであるか。何故に候補地を第二、第三の地に求めて、國寶尾瀬原を最後まで護らんとする愛國的熱情を感じないのであるか。私も亦葉隱の精神に生くる日本國民の一人として、國難の爲にはいつにても身命を皇國に捧ぐる赤心に於いて、人後に落つる

ものではない。それなるが故に祖國の絶對不可缺とする生産擴充、國民生活の緊迫緩和上必要とする電力增産と共に又、連綿三千年の光輝ある祖國の大自然の粹を最後まで護らんとするものである。これ國民相互の祖宗への任務であり、又子孫への義務なりと感ずるものである。現下非常時局にありては、後世より顧るとき常軌を逸する場合なしとしない。されば爲政者は益々活眼を高所に持し、國家永遠の大計を進むるにあらざれば覆水盆に還らざるの悔を、千載に殘さねばならないであらう。

次に尾瀬原は何故に祖國が守らねばならぬかとの根據、並びに例へてこれを貯水池に築造しても、地質的地形的に成立しない因由を、諸家の論說を引例して述べて見る。

「尾瀬は風景の上から言つても邦內稀に見る處のものであらう。山岳、湖沼、濕原、溪流、瀑布、森林が、斯程迄に整然と集り、そして限りなき變化を示す所は他に見られまいと思ふ。(中略)若し夫れ尾瀬を植物學的に考察するとしたら、數年の研鑽を以てしても、猶その全部を盡すことは出來まいが、一言にして言へば、尾瀬は實に得難き寶庫である。そして一面その保護を講ずると共に、他面之を研究調査する必要がある。(中略)一方群馬縣の所謂有志は、國立公園の美名の下に蹂躙せんとし、利慾に汲々たる翌は尾瀬ヶ原を貯水池に變じて、發電に使用せんと企てゝ居る。(傍點川崎、以下同)」(武田久吉博士「尾瀬と鬼怒沼」—「尾瀬再遊記」)

「あの珍種に富む尾瀬平。稀に見る景色。學術上無限の寶庫といふ可き濕原。あれを如何に利慾に目がくらんだとは言へ、貯水池にしやうといふ計劃が、同胞によつて試みられ、官權によつて許可されたことは、痛恨の極である。寧ろ國辱である。嗚呼日本の國土は遂に日本人の手によつて亡ぼされる運命から、免れることは出來ないものであらうか。」(武田久吉博士「尾瀬と鬼怒沼」—「尾瀬再遊記」)

「貴重な植物を藏し、本州最大の濕原であり、又その風致も他の追隨を許さぬものを、水底に沒し去らうとする無謀の計劃である。

尤も自然の美を解せず、科學的に見た尾瀬の價値を知ら

ない企業家が、單に地圖を展べて發電能力ある地を物色するとしたら、尾瀬に白羽の矢を立てるも無理からぬであらう。然しそれを許可する官權が、輕々に事を斷じて、少數事業家の爲めに、國費的否それ以上の價値ある尾瀬を破壞して、國家の損失を將來するの愚擧を敢てするに至つては吾人の斷じて放任することの出來ない問題である。」（武田久吉博士「尾瀬と鬼怒沼」――「秋の尾瀬」）

「尾瀬は植物生態學上特に重要なもので、本邦他に求められない資料であるから是非保存の必要がある。（中略）濕原植物群落と泥炭發達の狀態は、數千年の歷史を經て現今に至れる過程を示す貴重の資料である。之を一朝にして失ふは吾人の忍び得ない所である。殊に泥炭發達の途中（中略）石炭出生の狀態を推定させる材料をも包藏してゐるもので、敎育資料としても亦珍重すべき理由を持つてゐる。（中略）本邦本土は氣候及び地勢の關係から大濕原の發達には不適當であるから、尾瀬ケ原の樣な廣大な濕原は他に求むべくもない。殊に其の泥炭發達は吾國の地勢の急峻なことや、雨の多い土地に適しく所々に土砂を混入し、特殊の性質を帶びてをり貴重な理由を更に强める。（中略）一朝之を水下に埋むるが如きは學術上の一大損失である。又もしこれを水下に沒せしめても泥炭の性質上時々浮上して湖水を鎖し、流水河を遮斷し洪水を起さないとも限らないのである。かゝる危險を冒し學術上の寶庫を失ふが如きは識者の取らざる所ではあるまいか。」（中野治房博士「文部省尾瀬天然記念物調査報告」――「尾瀬沼及び附近の植物生態學的調査」）

「目的の如何に拘らず苟もこの天然の寶庫の破壞を招來するやうな計畫はこれを打破し、以て永遠に保存の途を講ずべきものと信じて疑はない。（中略）尾瀬ケ原に貯水池を設けこの天然の寶庫を犧牲にするが如き計畫あるは誠に遺憾とすべく、尾瀬の風致保存並に學術上到底看過すべからざることである。（中略）斯くの如き幾多の天然記念物を藏する地區は國家的至寶として一定の區域を指定して現狀の變更はいふまでもなく、猥に動植物を採集捕獲するが如き行爲は禁じ、以て風致並に動植物相は原始のまゝ永遠に保存するの途を講ずる必要がある。」（鏑木外岐雄博士「文部省尾瀬天然記念物調査報告」――「尾瀬の動物相」）

「尾瀬に親しんだ人は何故此處の自然の保護の爲に人々が

深い關心を拂つてゐるかを直ちに諒解するだらう。（中略）尾瀬が若し富士山のやうに廣く知られてゐるものであつたら、此の問題に親身になる人はきつともつと多いだらう。（中略）我々にとつては、そして日本國民の遠い將來迄の生活からすれば尾瀬の自然は金に換算出來ない程貴重な國寶である。」（松方三郎「反對運動に於ける障害」）

「恐らく始終國家のためのみを顧慮してゐる軍部は、かゝる暴擧に對して監視を怠らないであらうから、必ずそれを阻止するに違ひない。それにも拘らず、依然あの國寶的の尾瀬ヶ原を水底に沒せんとするやうなら、須らく民衆は、國家のため起つて反對しなければならない。それこそ本當の日本魂であると、私は斷言して憚らない。」（武田久吉博士「尾瀬の破壞と保護」）

「今議會で嵐丈の波瀾を卷起してゐる電力案の中心ともなるべきものは、電力を安價に供給する點であり、そしてそのために、政府は尾瀬ヶ原發電計劃を陣頭に立てゝゐる。（中略）ところで、こゝに問題となるのはその堰堤の位置であつて、それによつて貯水池は到底實現の可能性がないことになる。（中略）一步退いて政府案でやるとしても、堰堤の石材はこの近くには得られるものでない。其他セメント人夫の食料等百餘の品は人煙の絶えた山また山を數里も距つた地から、ケーブルか、トラックで送らなければならないし、それの置場もないほどの深山であり、のみならず一年の六、七ヶ月は深雪下に埋まる土地である。平地と見える原は所謂濕原であるから、材料を置けば悉く數メートル下に沈下してしまふ。安全な地は何處も相當の傾斜地である。更に不安なことは、假に水を貯へたとしても、それが池底から漏水しないと太鼓判を押し得る人は、良心と常識のある限り、一人としてあるまいとしか思はれないほど、神祕の尾瀬ヶ原は特殊の地なのである。（中略）尾瀬ヶ原の如き特殊の地域を、簡單に貯水池になし得ると考へたなら失敗は火を睹るより瞭である。假に堰堤が成功したとしてもあの特殊な地勢と氣候の下にある尾瀬において、例の怪草「水蘚」が、或は池底から浮び上り、または周圍から浸入して、再び大規模の濕原を形成しないと保證し得る人も恐らくあるまい。そして一億四千萬圓を泥土の中に投じて了つたとしたら、或はまた完全な貯水池を造るに三億、四億の出費を要するとしたら、低廉な電力は如何にして國

民に供給出來るであらうか。大きな疑問が前途に横たはるを、平氣でゐられる程、現在の國民には餘裕がない。

一方において、深山に圍繞されて横たはる尾瀬ヶ原を貯水池と化したところで、多摩川上流小河内の貯水池問題の如く、幾百の村民を餓死せしめるやうな人道問題は起らない。從つて貯水池の立案者は陳情の村民に包圍される心配もなくて至極ノンビリしてゐられやうが、實のところこれは大きな錯覺である。何故なら、尾瀬ヶ原は本邦で唯一無二といはれる景勝地で、それはしかも神代以來自然の手によつて完成した風景であつて、人工によつて害はれた跡は殆どないといつてよい。本邦の風景地が水電事業とか伐木とかその他の原因で次第に影を潜める今日、尾瀬一帶の地は、官民協力して子々孫々に傳ふべき寶物であり、國民にはその義務がある。それは單に景勝地であるのみでない。學術上の寶庫として、十分に保護を加へると共に、また研究を遂行すべき地域である。昭和七年文部省は多數の學者をこの地に送つて、天然記念物の調査を行はしめたが、その報告書に調査委員達は筆を揃へてその學的價値を賞讃し、その保存の必要を絶叫してゐる。（中略）しかも尾瀬地方の學術的研究は、未だ漸く緒に著いたばかりで、今後に俟つべきものが非常に多い。昭和十年の秋群馬縣に大演習の行はれた際　畏くも聖上陛下の天覽に供せんがために尾瀬ヶ原の床をなす水苔を數メートルの深さに切り取つて、泥炭層の斷面を調製した際の如きも、國土の過去に關する種々面白い事實が發見された。（中略）

一方國防上官民一致して事に當るは結構であるが、外敵の侵入のみに氣を奪はれて、脊後からの鄉土の破壞されるを防ぐを怠つたなら、頭隱して尻隱さずも同然の誇りを受くることを忘れてはなるまい。」（武田久吉博士「電力が國寶か―尾瀬ヶ原貯水池問題」）

「（前略）これを水底に沒せしむる者は、國寶破棄の大罪を犯し、國土破壞の國賊と呼ばれても致し方がない。（中略）農林省、文部省、内務省が學術の上から、また國民保健の上から等々の理由で、保護の必要を認める地域を、遞信省が破棄しやうといふだけでも、この案の杜撰なことが明白ではないか。」（武田久吉博士「電力案と尾瀬ヶ原」）

「（前略）假に華嚴瀧の水を全部鐵管で引いて發電しやうといつたら誰しも恐らく頭から否定するだらう。ところが尾

瀬の發電計劃が完成すると、華嚴瀧の三倍はある三丈ノ瀧は、水一滴落ちない事になる。(中略)わが國の未開發水力はまだ〳〵前途がある。物質文明の嵐の中に、地上の樂園尾瀬一帶を、學術研究の對象として、國民の神經の療養地として、祖國愛の發源地として、靈峰富士と同樣に永く保護して頂き度い。」(大西昇路「尾瀬ヶ原問題」)

「(前略)たとひ開發電力の幾分かを犧牲にしても、保存されねばならない程の重要性がこれら兩者に認められる。遞信省が議會に尾瀬開發計劃を發表する以上(中略)吾々國民の納得出來る說明を聞きたいものである。」(三桂「尾瀬と黒部」)

「(前略)最近には低廉な電力を供給するといふ建前の、電力國家管理案の表看板になつてゐる。(中略)かくまでして唯一無二の景勝地かつまた學術の寶庫を破壞して、それでも國家の利益となり、祖先や子孫に合せる顏があるといふのなら、それこそ超トーチカ級の心臟に相違ない。」(武田久吉博士「尾瀬ヶ原貯水池」)

「(前略)經濟開發第一か、風致保存が第一か。少なくともわが國の國寶として尊重すべき第一級の風景地尾瀬、黒部北山峽のその中心地帶の優れた原始境だけは水電の施設豫定より解放し、永遠に保護して子孫に繼承し以て自然美日本を享有し得る幸惠に浴せしめたいものである。」(冠松次郎「水電と風致」)

「尾瀬地方の水力開發につき今後計劃をすゝめる場合、同地域の名勝天然記念物保存の點に特に留意されたし。」(昭和十三年二月二十八日 文部省が遞信省に當てたる警告文書)

「(前略)文部省に於て選瞩した現代學界の權威が調査研究の結果、國法を以て保存せねばならぬと絶叫した尾瀬の國寶的學術上の價値は何人と雖も否定することは出來まい。内務省、文部省、農林省等の尾瀬への關心、風致保護政策等を見ても、今や尾瀬の風致上、學術上の尊貴さは疑ふ餘地がない。

議會に於ける水力課長の答辯の如きは出鱈目である。現地を知らぬからあんなことが云へるのである。爲政者は心靜かに原始的勝景の國民精神、情操教育上に及ぼす影響について深く考へてみなければならぬ。今次事變に際して、敵國支那の名勝をすら保護してゐる皇軍の勇士が、自國の

自然美が輕率に破壞せられることに堪へられるだらうか。

又、敵國の名勝をすら愛護する皇軍勇士の美しき心情は何によつて培はれてきたか。思ふに祖先傳來の秀麗なる皇土によつて養はれて來たに相違ない。而して今や各地名勝地の次第に都會の延長化し遊廓的享樂場化しつゝある現下、幸にして物質文明の破壞を免かれてゐる清淨なる原始的勝景地の保存こそ刻下の急務である。爲政者は宜しく高所に立ち國家千年の見地より世界無比神代ながらの皇土の自然境の保存、學術寶庫保護の重要さを考へて頂きたい。かく言つたからとて產業の開發、國防の充實、現下電力の重要さを知らぬのではない。たゞ未開發電力を他に多々有しながら、上述の如き貴重の鄕土を早急に破壞發電せんとするを不可とするのである。

この尾瀨近傍を見ても、三條ノ滝の下流阿賀野川水系只見川を開發したゞけでもすばらしい電力を得られるに相違ない。その他我國中に未開發は相當多くあるに相違ない。

最後に私は當局に問ひ且つお願ひする。學術上の寶庫として文部省できへ折紙をつけた尾瀨。日光國立公園中の特別風致區域として、國民の保健上、情操涵養上、厚生省、鐵道省等にても重要視してゐる尾瀨。又古來より自然美を愛好する一般國民の等しく憧憬し愛惜して止まぬ尾瀨。この尾瀨を（他に開發する地が多々あり乍ら）何故に早急に發電破壞しやうとするのか。

當局、爲政者よ、私は懇願する、どうか熟考再考して國寶的勝地學術上の寶庫たる尾瀨ヶ原發電計劃の決定を中止して頂きたい。」（平野長英「尾瀨」）「尾瀨ヶ原發電計劃と國寶的勝地の保護」

斯く通觀し來れば、假令國營の名に依るとも、尾瀨原發電計劃は無謀案の誹を免れるものではない。此處に引例した反對說は、何れも祖國を熱愛する者の心からの絶叫であり、純潔なる國民の聲を代表してゐるものであることを知らねばならない。我が國の國寶的大自然美を抹殺せんとするが如き計劃は、徒らに外侮を受くる外の何者でもなく、世界の大國として今後東亞に君臨する我が國の次代の人的資源を涵養する上からも絶對にとり得ぬ所ではないか。

さきに述べたる如くに、元より私も徒らに風景のみ

に促はれて、生産擴充の基本動力たる發電計劃の重要さを沒却してゐるものではない。昭和十二年準戰時體制に到着した我が國が、一營利會社の手より同年の議會にて頼母木案に成る電力民有國營案が上程され、續いて總動員法案の通過に依つて戰時體制の基礎が確定せられたと共に、電力國家管理案の通過も當然の結末である。

由來電力は水力と石炭にその發源を求むるものであるが、天恵に乏しき我が國も獨り石炭のみは國内の自給率高く、往年石炭は銅と共に重要輸出品の一でさへあつたが、我が國が巨大なる重工業國に進轉せると共に、石炭の需要は急增し、その絶對量すら不足を告ぐるに至りしため、地形上最も理想的と目さるゝわが尾瀬原が、貯水池築造の主體として立案さるゝに至つたものであらう。これ實に電力は總ゆる産業の基礎であり國防の根幹であるが故に、電力國家管理が斷行成し得たものであり、從來の許、認可方針は揚棄されて、遞信省から建設命令が發せらるゝ仕組となつたのであらう。然りと雖も、斯かる時局にありてこそ尚更に、その候補地を他に求めて、祖宗から傳へ來りし國寶尾瀬の原始境をその美しきがまゝに、子孫に繼承するが眞に國を愛する所以であり、その必然性と重要性を加へ來りしものである。又實際問題としても、武田博士、中野博士の交々警告し來れるが如く、尾瀬原は地形並びに地質的に貯水池築造が不可能なるものであり、良心ある技術家の一指をも染め得ざるの聲を聽く所以なのである。

我が國は東亞の盟主である。我が國は何が故に日滿支一體を叫ぶのであるか、我々は靜かに世界の地圖を展いて、歐洲大陸を遙かに凌駕するわが滿洲及び支那大陸の洋々たる姿を眺めやう。電氣廳は本州を數ブロックに分つて配電會社の整理統合を行つてゐるが、爾今愈々旺盛の度を加へる我が國重工業とその增産に對處するには、大陸の大炭礦に火力發電所を建設し、重工業を大陸に樹立すべきである。鐵道省の關門海底隧道の完成間近にあり、朝鮮と本州を結ぶ海底鐵道計劃

も具體化してゐる今日であれば、大陸の河川或は石炭に電源を求めて大電力を本州へ輸送することも不可としないであらう。

折柄去る八月六日新任參拜のため西下した、村田遞鐵相の電力國家管理新方針の車中談は、甚だ我が意を得たものである。曰く

「電力國家管理の代行機關たる日發が政府の補給金を受けて經營されてゐるが、こんなことでは國民の負擔が增すばかりである、會社の機構を變へる必要はないと思ふが、會社をもつと引締めると共に收支の改善を圖ることが急務である。（中略）電力の開發は物動や生產や擴充計劃と關聯せしめることは勿論であるが、更に進んで國土計劃との關係も考慮して、日滿支を一體とする工業立地の推進を目指してその基礎施設たらしむるやうに、綜合的開發を圖らねばならぬと思ふ、電力を多量に要する化學工業などは滿鮮の電力の廉價なところへ持つて行くなどは當然のことであらう。」

誠に然りである。日滿支を通ずる產業圈內の生產擴充の綜合的樹立なくして、科學日本の將來は絕對にないと。何を好んで國民の血の叫びに耳をふさぎ、計劃者自身ですら感じてゐるであらう何者にも換へ難き、祖宗より傳へ來りし尾瀨の大自然美を壞滅する必要があらうか。

尾瀨原貯水池築造は絕對に不可である。

これこそ國を愛するものゝ心底よりの聲である。

新體制機構の旗印は國寶愛護の下に！

然らば吾人は擧つて祖國の大自然美を擁護すべき義務と、光榮ある權利を有するものである。

（皇國紀元二千六百年秋）

辻本滿丸君逝く

木暮理太郎

本會名譽會員工學博士辻本滿丸君は、今年の二月二日に令夫人を失はれて、其百ケ日もまだ濟まない四月廿四日に、ゆくりなくも其迹を追はれて長逝されたことは、誠に悼ましいと申す外に言葉もない。平素運動や昂奮に伴ふ心臟の鼓動が多少異常を呈することを甚しく氣にせられて、口癖のやうに「どうも心臟が弱くていけない」と喞たれ、訪問を申込む友人には、其好意を謝しつゝ勉めて之を斷り、近い工業試驗所への出勤も、車に乘つて往復する程に注意されてゐたので、そのことを知つてゐる古くからの友人は、君の健康に就て心の隅に翳す少し許りの不安の影を拂ひ切り得なかつたにしても、今こゝに君の逝去といふ現實に直面して驚かぬ人はなかつたらうし、又それが矢張り當然心臟の疾患に因るものと想像したことであつたらうと思ふ。

私は令夫人の告別式の行はれた前日の二月四日に、お悔みを述べにお宅へ參上して、三年ばかりお目に懸らなかつた間に、思の外に年寄られた御樣子が先づしみ〴〵と目に痛かつた。一通りの挨拶が濟むと、すぐ「桃山」で催された還曆祝に出席しなかつたことの言ひ譯をされたのは、如何にも辻本さんらしいと思つた。私の慰問の言葉に對しては「全くいやな氣がします、齒が拔けたやうで心淋しいし、どうも張り合ひがなくなりました」と言はれたので、お力落しの程が察せられた。そして僅に十分間ばかりの對話で、話は山ほどあるが昂奮するといけないからこれで失禮しますと別室に退かれてしまつた。私の心は闇然として不安の增大するのを如何ともし難かつたのである。

それから二ケ月は過ぎた、幾度か訪問して其後の樣子を知りたいと思ひ立ちながら、其都度故障の爲に果せないでゐると、四月廿六日の東朝紙上に君の逝去された記事が載つてゐたので、始めてそれと知つてと胸を衝かれた。二月四日のいた〳〵しかつた君の姿がす

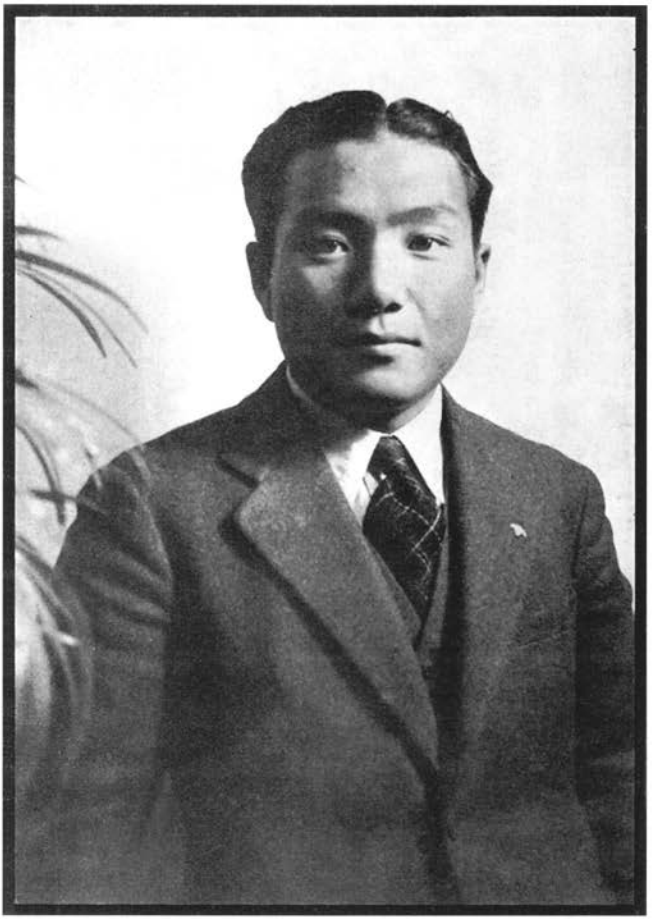
ぐ目に浮んだからである。私が多くの人達と同じ様に、或はそれ以上に「餘程心臟が衰へた結果」であらうと、一途に思ひ込んでしまつたのも決して無理ではなかつたのである。

然るに君の愛壻中司文夫君の話に據ると、三月下旬に君は腸を病みて直に淀橋病院に入院され、亡くなれる迄丁度一ケ月の病院生活を送られたが、心臟の働きは最後まで人並或は寧ろそれ以上であつたと醫師が斷言されたさうである。尙ほ中司夫人から、お妹さんの鴻上夫人の大病を熱心に看護された疲勞が加はつて父の病勢を强めたらしいといふことをも聞かされて、それなら何の遠慮することもなく吾々は、無理にでも何處か適當な山へ誘ひ出して、心臟に對する危惧の念を一掃するやうにして上げればよかつたと悔しく思つたのであつた。しかも斯様な望がいつも宿命的に故人の生前に成し遂げられないで、後悔にのみ終る例の多いことは、哀哉人の世の常なのである。

君が登山を始められたのはいつ頃からであつたか、聞いたこともなければ話されたこともないので私は知らない。しかし早くから山が好きであつたことは、日本風景論の愛讀者であつたといふ君自らの言葉によりて明かである、從つて君が明治三十八年設立當時の山岳會會員であつたことに不思議はない。唯山岳會の發起人であつた諸兄と知り合ひでもなかつたらしい（これは想像である）君が如何して山岳會の設立を知つて入會されたか、それが私の興味を唆つて、いつか尋ねて見やうと思ひながら事に紛れてつい聞くことを忘れてしまつた。察するにこれは日本山嶽志に附錄として添へられた「山岳會設立主意書」といふのを見られて、熱心な君は早速入會されたものではあるまいかと考へる。

君の登山熱は山岳會に入會されると共に急に高まり、明治三十九年の鳳凰登山を手始めに、大正元年頃迄は重に南北アルプスの諸峯を活躍の舞臺として、幾多の初登山や未記錄の山に登攀を遂行し、貴重なる記錄を山岳紙上に發表して、尠からず登山界に貢獻され

故辻本満丸氏



故小森宮章正氏

たのであつた。又高山植物の珍奇なる種類を採集して、斯學に寄與した功も逸してはなるまい。

大正二年頃から八年頃に至る間は、主として上信界秩父、奥羽などの諸山に足跡を印せられるやうになつた。これは其頃から漸く心悸亢進に惱み、それを氣に懸けられ始めて、比較的樂な登山を擇ばれるやうになつた爲である。そして私の聞く所に誤りないとすればそれは大正元年に高頭君と白峯に登られた時、霖雨の爲に大に苦しめられたことが遠因であつたとのことである。大正八年以後は殆ど登山を斷念されてしまつた。

明治四十一年五月に、君は朝鮮へ轉任された城數馬氏の後を襲ひて幹事（當時この稱呼ありしや否やを知らない）に就任された。發起人以外の會員が本會の役員となつた最初であらう。有志晩餐會は實に新幹事たる君の主唱によりて初めて催されたものである。けれども六、七回の後には會の主意が最初の目的から反れてしまつたといふ理由で自ら脫會を宣し、以後決して出席されなかつた。君が幹事を辭して評議員に選ばれたのは、何年であつたか今記憶してゐないが、評議員から名譽會員に推薦されたのは昭和十年十二月であつた。

私が初めて君の名を知つたのは、山岳第一年第三號に揭載された「甲州鳳凰山と地藏岳」と題する紀行文を讀んだ時で、殊に二年三號の「第二回鳳凰登山記」は私の愛讀措く能はざるものであつた。そして確か明治四十四年の五月七日に、神田橋際に在つた和強樂堂で山岳會の第四回大會が開かれた時に、初めて君の風貌に接した。當時私は會員ではなかつたので、南日君に誘はれて出懸けて行つた。君は會務報告をされたやうに思つてゐる。演壇に上ると「自分は喋ることは下手である、どの位下手であるか、それは今すぐ分る」と言はれた其時のその言葉は、不思議にも今尙ほ昨の如く耳朶を打つやうに感じ、髣髴として君の姿が眼前に浮ぶのを覺えるのは、君の眞摯な態度から受けた強い印象によるものであらう。感無量である。

君の葬儀は四月二十七日に、六十四歳の生涯を終るまで四十年に亙つて油脂の研究を續けられてゐた工業試驗所の會議室を式場に充て、小寺所長が葬儀委員長となつて、極めて簡素に、しかし盛大に所葬を執行された。導師である傳通院の住職に差支があつて、午後二時から告別式を先に行ふことになつてゐたので、鳥山君と私とは式場に侍立する積りで其時刻より前に行つたのであるが、葬儀委員からそれには及びませんといはれ、別室に退いて式の終るのを待つてゐた、その爲に小島、武田、田部、茨木其他の諸君が來場されたことを少しも知らなかつた。

告別式が終ると引續いて午後三時から葬儀が營まれた。式場は四十坪ばかりの廣さであるが、參列者は場に溢れた。本會では靈前に花環を供へたいと、遺族の方に照會したところ、故人の遺志であるからと固く辭退されたので、私は本會を代表して鳥山君と共に葬儀に參列し、謹んで弔辭を手向けた。

此日試驗所では、生前の儘である君の研究室第二部第十號室をも公開して、來弔者に觀覽せしめたのは、故人を偲ぶに適した快い處置で、机の上に置かれた書きかけの原稿紙は、特に私の目を惹いた。私は君の遺骨が生前愛用してゐた車に乘せられて、君の靈の住家であらう研究所の門を、これを最後と出で行く光景を腦裡に思ひ浮べながら、顧みがちに歸途に就いたのであつた。

我が山の友辻本満丸君

武田久吉

五月の『山と溪谷』を繙いて、小島烏水君の「山の署名本から見た故人今人」といふ一文を讀んで行く内に、辻本君が由水生と署名して贈られた書物の事に言及されたのに出會つて、思はず微笑を浮べたことであつた。何故なら、私も由水生の署名のある繪葉書を嘗て數度接手した記憶があるし、『山岳』（第六年第三號）

には、由水生の名でメキシコの火山の傳說を譯出されたこともあるからであつた。その辻本君が、それから數日內に他界された報を得て、夢かと許り驚いたことであつた。

餘計なことかも知れないが、序を以て私の記憶力が甚しく減退してしまはない內に記しつけて置き度いと思ふのは、烏水君手澤の『日本風景論』の扉紙に、志賀重昂氏が自詩の轉結を墨書されたのは、『山と溪谷』所載の文によると、該書第六版が出てそれを烏水君が求められてから兩三年後といふからには、明治三十一年頃のやうに取れるが、實は明治四十三年一月十六日の夜、代々木の志賀四松庵で催された日本山岳會第四回有志晩餐會の席上での事である。烏水君はこの木を米國から歸朝の折に偸まれてしまはれたさうだが、志賀氏の筆跡だけは『山岳』第六年第二號の卷頭に覆刻が揭げてあるから、今でも之を見ることの出來るのは幸である。敢て剱川崇拜家の參考にもと、附記して置く。

話を主題に戻して、辻本君の事であるが、同君が始めて私を訪問されたのは、明治三十九年の慥か五六月の頃で、植物に關する用事であつたが、紹介者の小島烏水君から、用向の大要と共に、「尙同君は山岳會々員に有之候云々」と附け足してあつた。會員名簿を見ると、成程三十九年二月入會とある。それで萬が一にも、山岳會の創立が明治三十八年の事でなくて、九年の四月だとすると、辻本君は會の成立前に入會されたことになる。そんなことは、几帳面な辻本君として有り得べきことではない。間もなく同君は、當時山岳會の母會であつた日本博物學同志會にも入會されたが、これは誰の紹介にもよらず、事務所に直接申込まれたことが、その會の機關雜誌『博物之友』第三十三號の會報欄に載つてゐる。これは多分『山岳』第一年第一號の廣告に基いて申込まれたことゝ考へる。

この年以來、辻本君と私との交友は、時に親疎の差はあつても、渝ることなく續けられた。唯近年は面晤の機に惠まれず、時偶の書面の往復位なものであつたのは、今となつて甚だ遺憾千萬である。

若かりし頃の辻本君は、決して頑健といふのではなかつたが、流石に元氣に滿ち、研究心に燃へてゐた。本業の油脂は勿論であるが、登山も亦研究の一つであつたやうだ。記錄は勿論、地圖さへ碌に無かつた時代にあつては、山嶽の形貌、地勢、名稱、登路の如き基本的の諸項も研究の對象たる有樣であつたから、登攀技術、雪中幕營の如き方面に迄中々手を伸ばし得るものではなかつた。從つて辻本君が旺に活躍された明治末期から大正中期に亙つての登山は、誰も彼も普通の登路を、主として夏期に昇降するに止まつたが、辻本君はそれでは十分の滿足を得られなかつたらしく、八ケ嶽の小荒間口の發見とか、鳳凰山の探檢、甲斐駒附近の研究を筆頭に、當時としては多くの登山家の意表外であつた編笠岳の冬期登山を決行されたり、鋸岳の登路を開拓されるなど、大きな足跡を殘された。更に脚を北アルプスに進めて、後立山山脈の跋涉、藥師、上ノ岳を探り、轉じて南アルプスの核心を衝かんとして、惡天候に健康を害せられる迄、年毎に歩武は大きくなつて行つた。

駒ケ岳、鳳凰山あたりや八ケ岳山棄の登山に際しては、熱心に植物採集を行はれて、標品の多くは私の手許まで檢定の爲めに送り越されたが、この方面も熱心に研究せられた結果、忽にして高山植物の大多數を暗んじられ、紀行中に往々植物名を揭げられた。その間に鳳凰山からシャジン（沙參）の一種未知のものを拉し來られたので、兩三年後私はそれが一新種なることを確認して、これにホウワウシャジンなる新名を附して學界に發表することゝした。

大正五年の春私が戰亂の歐洲から西比利亞を通つて歸朝した當座は、餘り山岳に親しむ機會もなかつたが、その夏から霧ケ峯、日光、蓼科附近の大河原峠や大岳の一部などに出かけ、翌春からは東京附近の中級以下の山岳にボツ〳〵接觸するようになつてからは、辻本君との往來も再び頻繁の度を加へて行つた。殊に丹澤道志の兩山塊や大菩薩連嶺等に足繁く入るやうになつてからは、その報告を聞くのを非常な樂みにされ且つ

又登山家の殆ど足を踏み入れない時代の事とて、地勢その他參考となる點を寫して來るように慫慂され、小形の寫眞器を托された。私の寫眞術は實に辻本君に負ふ處が多く、同君の手解きによつて始めたものである。

辻本君は大中小三四の寫眞器を所持され、山岳寫眞には隨分と努力を惜まれず、時折素晴らしい作品をものされ、日本山岳會發行の『高山深谷』に採擇されたものも少くないやうである。明治の晩年に、新乘越からの劒の印畫をセピアトーニングを施し在英の私の手許に送り越されたので、早速額緣に入れて居室の裝飾としたことがある。同君は撮影に方つて中々愼重な態度をとられ、殊に大形の器械を使用の時には、三脚を据えるにも嚴密に水平を檢べ、焦點を合せるにも中々苦心されたやうである。それでゐて山岳に對すると亢奮が激しくなり、偶には失敗があつた。山を見て亢奮せぬ者は熱心が足りないのだと能く言はれたものである。

明治の晩年に健康を害されてから、暫く登山を中止されたやうだが、大正の始め頃から專ら山間の溫泉地に療養に赴かれ、その序に附近の山に足を入れられた。上州の花敷、法師、鹿澤、萬座などは都會からの客としては初期に屬するものゝやうである。信州では鹿敎、靈泉寺、別所、山田、角間、安代、濕、上林、發哺、熊ノ湯を探り、笠ケ嶽、橫手山、岩菅、燒額、龍王、白根、三國山、湯ノ丸、三方を步かれ、又伊豆の吉奈谷津、伊東等にも足を向けられた。岩菅登山は兩三回行はれたらしいが、大正八年には私も誘はれて共に山頂の小屋に二三泊したことがある。安代から私は汗みづくになつて波坂の急坂を登り、沓打の茶屋から琵琶池を經て發哺の天狗ノ湯へ徒步したが、辻本君は沓野の馬子で八字髭を生した黑岩角太郎に口を取らせた馬に跨り、單衣にモンペイの涼しさうないで立ちは淡しかつた。

初めの日は角サンの案內で大沼を探り、沼の北端に立つて瓢箪形の湖の一部を望見した。翌日は高天ケ原を越し、梯子澤を登り、乘切りに達してから山脊を表

岩菅に昇り着き、此處に新設された小屋を根據として兩の間を裏岩菅迄注意したのであつた。最近の狀態は知らないが、その頃の岩菅小屋は設計が甚だ下手で、內部は焚火の烟で呼吸が出來ぬ程であり、戸を明ければ寒氣に苦しめられる有樣であつた。尤も現今は發哺から容易に日歸りが出來るから、こんな小屋は恐らく不用であらう。

岩菅の山頂から、苗場山を望むのも辻本君の豫定の內にあつたらしい。だが私との登山の時には、去來する白雲の間から僅に望見出來たに過ぎなかつた。苗場の登山慾も辻本君は持合せてゐたらしいが、あの頃は慈惠小屋は勿論、手狹な遊仙閣すら無かつたのであるから、實行の機會は無かつたのである。

上越方面に登山家が入つたのは、慥か大正九年の春を以て嚆矢とすると記憶するが、辻本君はこの方面にも不少意を注ぎ、谷川富士遭難（行者？の）の記事まで切抜いて居られた。又武尊山にも大に興味を持つて居られて、その山容を望見し得る適當な地點を物色して居られた。そして奥上州の山岳に對する興味が因であつたか、冬期伊香保溫泉に遊んで、附近の山岳の撮影を試みられたこともある。

辻本君は登山に對して單なる興味を持つて居られたのみでなく、山岳に對して常に敬虔な心を持つて居られ、某山を踏破したとか征服したなどいふ語を、見聞することすら極度に嫌はれたのは、眞面目几帳面な性格の然らしめる處であつたのであらう。從つて山岳に關する記文も、詳細正確な記載的なものを喜ばれ、如何な名文でも、單なる感想のみを表現したやうなものは參考に値しないとて、高く評價されなかつたやうである。だから辻本君の書かれた紀行文は、後遊者の參考資料としては多大な價値を有すること、學術上の報告文と同樣である。

辻本君の几帳面な性質は實に徹底してゐて、時に微笑を禁じ得ぬこともあつた。大正八九年頃、私との往來が甚だ頻繁な頃、訪問の順序なるものを何時とはなしに制定してしまひ、交互である可きを本然とし、片

方から二回續けて訪問することを異例と認められるやうなことすらあつた。又相互に登山旅行の報告をし合ふ習慣であつたに拘らず、偶にそれを實行されない場合は「非公式旅行故通信は略し候」と辯明されたなど、よく辻本君の面目を躍如たらしめるものがある。又同君の祖父ケ岳から西南の展望の寫眞が、どこをどうしてか着色した繪葉書になつて販賣され、而も「杓子ケ岳及槍ケ岳連峯」と銘打つてあるのを見つけられた時の如き非常に憤慨して「繪ハガキ屋などの下働きの爲に寫眞は撮らず」と申し越されたことがある。

辻本君について思出すことは殆ど際限なくある。そして何れも憶いかへして見てほゝゑましい事許りであるのは、君の高潔溫雅な人格の然らしめる處と私は確信する。一生を眞理の探求に捧げた同君の山岳に對する態度は、又以て登山家の模範とす可きものと、私は信じて疑はない。

（六月四日脫稿）

小森宮章正君を偲ぶ

金山淳二
谷口現吉

小森宮章正君が見習士官として入營中、急性肺炎にて去る四月三日、奉天陸軍病院にて戰病死された。あんな元氣のいゝ男でも病氣には勝てぬと見え、氣の毒をしてしまつた。

私は同君の葬儀に列した歸途、フト『山で死なせた方がよかつたかな』と考へた。その方が小森宮君自身としては死場所を得てゐたかも知れぬ。その『山』と言ふのは穗高や劍、況や谷川邊りのことではなく、もつと〳〵大きく、人間の臭などまだ嗅いだこともない山のことである。

もし、そんな處で死んだら、屍だつて見付かるかどうか分らぬ。數年後、再び遠征隊によつて氷漬けとなつて發見されるかも知れぬし、大氷河にたゝきつけられ、食料の空箱で作つた十字架をモレーンに立てゝ墓

とせねばならぬかも知れぬ。

これでは死んだ本人は好きな山のことだし、山が永遠の墓守をして呉れると言ふので本望か知れぬが、その時の隊員には言及しないとしても、遺族の方々には想像以上の御喋きがあると思ふ。

それに遠征隊と言ふ様な社會的注視の環境にある場合には、社會的な影響も考へねばならぬ。獨逸や英國みたいに、登山と言ふものが一般に理解されてる國は兎に角、日本に於ては遠征隊の遭難は、次回の遠征を益々困難ならしめるだらう。

況や現役連中の親達の心配を倍加させ、親孝行な連中は三度に一度は危い山行を中止し、弟妹への登山奬勵に手心を加へるかも知れぬ。

こんなことを色々考へ合せて、やはり病院のベッドで、しかも戰病死として逝いた方がよかつたのだと考へた次第である。

私が何故こんなことを考へたかと言ふと、小森宮君は軍隊から歸つて來るや否や、可能なる範圍に於て、遠征隊とまでは行かなくとも誰か仲間を誘つて、まだ地圖も出來てない様な地方へ、出かけるに違ひないと思つてゐたからである。

小森宮君の説によると、學生時代は登山の修練時代で專ら自分を鍛錬し、各部員の素質を高め以て山岳部全體としての充實を計るべきで、海外遠征は卒業後にすべし、と言ふのであつた。結局學生には重荷過ぎると言ふのだ。

そして小森宮君はこれを實踐せんとしてゐた。

『登高行』九號、十號、十一號を繙いた者は誰でも、よくもこんなに出かけたものだと驚くに違ひない。併し數に於てばかりでなく、小森宮君の登山には多分に思索があり、研究があり、發展があつた。

今私はこれらに就いて説明する煩を避けたい。願くば、前記『登高行』中の同君の書いたものを讀んで戴きたい。

同君の登山經歷を顧る時、雪中露營の研究が大きく浮び上る。昭和八年一月、始めて穗高主稜の一角に天

幕を押し進めて以來、十二年三月卒業の時、北穗高岳露營地を中心として瀧谷を次々とやるまで、左記の如く雪中露營に終始してゐる。殊に雪洞の研究に於ては同君に負ふ所非常に大なるものがあると信ずる。

昭和八年一月　西穗高岳露營
同　八年三月　劍岳露營
同　九年一月　槍ケ岳露營
同　九年三月　北穗高岳露營
同　十年一月　奥穗高岳露營
同　十年三月　劍岳露營
同　十一年一月　劍岳、早月尾根より
同　十一年三月　早月尾根より劍岳へ
同　十二年一月　早月より劍岳八ツ峰
同　十二年三月　北穗高岳露營

又同君の登山經歷（後出）を通觀すると、多分に旅行家的性格のあつたことを知る。學生時代一ケ月以上も東北地方をブラツキ廻り、時に山に登り、都會に遊び、先輩方を訪れた。これが卒業後には大連、鞍山から松花江の移民村、興安嶺を越えて海拉爾と發展し、ホロンバイルの草原を特務機關の自動車に便乘して飛び廻つたりした。この時ハロンアルシャン邊りの包（パオ）の中から見覺えのある顏が出て來たと思つたら、これも有名なバガボンデア加藤泰安君であつた由だ。

この旅行は十二年七月からで、途中で支那事變が起り、熱河には入れず、九月滄々歸つて來た。

その翌年夏は臺灣へ行つた。これに就いては近刊の『登高行』に詳しいから略すとして、十月から十一月にかけては、こんどは方向を變へて北海道平地旅行をやつた。この時は坂本直行氏始め北大の先輩方に會つてゐる筈だ。

この旅行中、翌年一月入營の積りでゐたのに十二月入營と決定、登別かなんかの溫泉でいゝ氣持で潰つてゐる最中電報を受取り、大慌てゞ東京へ歸つて來た。これが同君のバガボンデアとしての、最後の逸話となつてしまつたのである。

そして十三年十二月十日、麻布三聯隊に入營、直ち

に渡滿、博學と熱情から模範兵となり、人氣者であつた同君も、惜しくもこゝに夭折されたのは誠に殘念であり、獨り慶應山岳部、登高會の損失であるばかりでなく日本山岳界全體としても大きな損失であつた。

私は今、小森宮君を追想して駄文をものした。これも同君を悼む心の現れからである。

小森宮章正君略歴

大正三年二月二十四日小森宮由太郎氏長男として東京神田に生れ、市立千駄木小學校、府立第三中學校を經て昭和六年四月慶應義塾大學經濟學部豫科に入學、同十二年三月同學部卒業、引き續き同學文學部に於て一ケ年社會學を專攻す。

昭和十三年七月工藤慶作氏長女慶子氏と婚姻す。

昭和十三年十二月十日現役兵として歩兵第三聯隊に入隊、同月二十二日派遣隊要員として東京出發、北滿警備の重任に赴く、同十四年五月幹部候補生を、同年九月甲種幹部候補生を命ぜらる。

同年十二月奉天〇〇部隊に分遣せられ、豫備役將校生徒として修業の間公病に倒れ、同十五年四月三日奉天陸軍病院に於て名譽の戰病死を遂ぐ。同日特に階級を進め歩兵科見習士官を命ぜらる。

昭和十五年十月功に依り勳八等に叙し瑞寶章を授けらる。

登山歴

昭和六年度

四　月　慶應義塾體育會山岳部に入部す
五　月　富士山、甲武信岳、國師岳、金峯山
六　月　地藏岳
七月―八月　立山、劍、藥師、槍ケ岳縱走及上高地生活（霞澤岳、前穗高岳）
九　月　小佛峠天幕行、武尊山
十　月　木曾駒ケ岳
十一月　富士山
十二月　關溫泉スキー合宿

十二月―一月　清水部落スキー練習（巻機山）
二　月　八ヶ岳（赤岳、阿彌陀岳）
三　月　清水部落スキー練習、乘鞍岳
三月―四月　槍ヶ岳、西穗高岳、明神岳
昭和七年度
五　月　穗高岳
六　月　穗高岳
七　月　燕岳、天上澤、北鎌尾根、槍ヶ岳、穗高岳縱走
八　月、東北山地（栗駒山、飯豐山）
十　月　一ノ倉澤、谷川岳、穗高岳
十一月　富士山
十二月　關溫泉スキー合宿
十二月―一月　西穗高岳高所露營參加、同隊解散後涸澤圈谷班に參加
一　月　清水部落附近スキー登山
二　月　八ヶ岳
三月―四月　劍岳（八ツ峰、源治郎尾根、三窓）立山、大日岳
昭和八年度
五　月　奥穗高岳
六　月　山中山莊懇親行
七　月　笠ヶ岳、抜戸岳、槍ヶ岳、西穗高岳、北鎌尾根千丈澤側稜
九　月　南平天幕行
十　月　北穗高岳、奥穗高岳、涸澤圈谷
十一月　横尾本谷高所露營研究
十二月　關溫泉スキー合宿
十二月―一月　大喰岳高所露營、槍ヶ岳、北鎌尾根
二　月　八ヶ岳、苗場山
三　月　乘鞍岳
四　月　北穗高岳露營、前穗高北尾根、横尾本谷より西穗高への主稜縱走
昭和九年度
六　月　山中山莊懇親行、奥穗高岳、北穗高岳瀧谷側稜、前穗高岳、明神岳、大門峠

七　月　北鎌尾根千丈澤側稜、霞澤岳、涸澤圏谷
九　月　大門峠天幕行
十一月　穂高岳
十二月　關溫泉スキー合宿
十二月―一月　奥穂高岳高所露營、前穂高岳、ジャンダルム
一　月　霧ケ峯、大門峠、關溫泉スキー練習
二　月　鹿澤溫泉スキー練習
三　月　白馬岳
三月―四月　劔岳（編隊登山訓練）、藥師岳

昭和十年度
六　月　清里天幕行、信州峠
七　月　劔岳、立山、針ノ木峠
十　月　穂高岳
十二月―一月　早月尾根偵察、關溫泉スキー合宿、劔岳早月尾根
一　月　關溫泉スキー練習
三　月　關溫泉スキー練習
三月―四月　早月尾根より劔岳（劔岳頂上に於ける雪洞生活）

昭和十一年度
五　月　淺間山麓天幕行
七　月　涸澤圏谷登山合宿
九　月　山中山莊懇親行
十一月　馬場島、小谷溫泉より笹ケ峯
十二月―一月　劔岳八ツ峰（早月尾根より）
二　月　萬座溫泉
三月―四月　北穂高岳、奥穂高岳

昭和十二年度
十二月　關溫泉スキー合宿

昭和十三年度
二　月　藏王山
三　月　關溫泉スキー合宿
七月―八月　臺灣山行（中央尖山、南湖大山、次高山）

（編者註・本稿前文は金山淳二氏の筆になるものお許しを得て本會々報より轉載、後出の略歴、登山歴は谷口現吉氏の編になるものである。）

會務報告

昭和十四年十月定例理事會並に役員總會

十月十日(火)午後六時半　虎ノ門本會事務所に於て開催
出席者　小島、木暮、高頭、木村、藤島、塚本、角田、黒田、西堀、加藤、津田、吉澤、石原、中司

役員總會

一、社團法人設立準備報告
一、役員組織の件

定例理事會

一、山岳第三十四年二號編輯報告
第二號十一月頃配布の豫定
第三十五年一號未だ原稿充分集らざるに付役員諸氏の御援助賜り度
一、會報編輯報告
一、登山團體懇談會開催の件
來月開催の豫定を以て準備中
一、新入會員詮考の件
青木豐穗、井上英夫、森本樊、三君の入會を承認す

十一月定例理事會並に役員總會

十一月十四日(火)午後六時半　虎ノ門本會事務所
出席　高頭、冠、武田、槇、茨木、三田、額田、藤島、加藤、塚本、吉澤、鳥山、西堀、木村、中司
委任　木暮外十三名

役員總會

一、社團法人設立準備報告の件
定款案、設立趣意書可決、右案を以つて主務官廳の内意を伺ふこと加藤理事に一任
發起人に木暮、小島、田部、冠、槇諸氏を推擧することに決議す
一、本年度總會の件
十二月十四日(木)　於商工倶樂部

定例理事會

一、山岳第三十五年編輯報告
主たる原稿豫定左の通り
臺灣の冬山　神商大、蒙古旅行　京大、小興安嶺　京大、加奈陀の山　東良三、カラコラム山名　吉澤一郎
一、會報編輯報告
一、登山團體懇談會の件
一、新入會員承認
名古屋帝大山岳部、川崎堅太郎、坂野猶人、神田豐次郎の諸氏

十二月定例理事會並に役員總會

十二月七日　虎ノ門本會事務所
出席　高頭、茨木、黒田、藤島、角田、鳥山、三田、吉澤、石原、加藤、中司
委任　木暮外廿名

役員總會

一、社團法人設立準備其他經過
一、本年度會員大會開催手筈の件

理事會

一、山日記精算經過報告
十一月決算純益五〇圓〇四錢
一、山岳編輯報告
前報以後追加分、北葛澤の記(西岡)
一、山岳本年第二號精算
發刊費　一〇〇〇部　七六〇圓
一、會報編輯報告
十一月號本日出來、十二月號印刷所へ廻付濟
一、會員章整理の件
一、本年度收支現在迄の概要
一、圖書整理經過報告
一、新入會員詮衡の件
渡邊要次郎氏の入會承認

昭和十四年會員總會報告

十二月十四日　於日本橋商工倶樂部
出席　槇、冠、藤島、高頭、鳥山、中司、吉澤、石原、三田、塚本、他會員十名
(書面反對表決なし)
冠評議員議長となり左の通り議事を進む
一、事務報告及本年度登山界の回顧　吉澤理事
一、役員非改選の件(九月役員總會に於て決議分)　議長

承認

一、會計報告の件　鳥山評議員

承認

日本山岳會を社團法人となす件　提案　議長
一、設立者(發起人)の推薦提案の趣旨及經過報告　藤島理事
一、設立趣意書、定款要旨說明　中司理事
一、社團法人設立の上は本會より引繼ぐべき財産

鳥山評議員

會計報告の通り

以上は十二月七日の役員總會に於て滿場一致可決せる旨說明、重要なる質議もなく直ちに議決に入り、左の通り滿場一致賛成、午後八時十五分決議終了せり
一、本決議「日本山岳會を社團法人組織とすること」
二、附帶決議

（イ）設立者として、木暮、小島、田部、横、冠の諸氏を推薦し社團法人設立に關する一切の權限を委任すること。
（ロ）現日本山岳會の所有する財産は無條件にて法人に繼承すべきこと。
三、諒解事項
（イ）定款案の細目的變更は設立者に一任のこと。
（ロ）現日本山岳會員は社團法人の會員たるべきこと。
（ハ）現日本山岳會役員中原則として會長、副會長、評議員及監事は、社團法人の會長、副會長、評議員及監事に理事は法人の幹事に就任すべきこと。

昭和十五年一月定例理事會報告

一月十八日　於芝虎ノ門本會事務所
高頭、冠、鳥山、木村、三田、藤島、吉澤、加藤、石原茨木、黒田、中司、（委任）小島、木暮、横
一、社團法人設立準備經過報告
日下厚生省と認可に關する手續打合せ中
一、山岳編輯報告
前月報告追加原稿入手
内蒙古調査旅行（上）　宮崎
外に追悼記二（故河野氏、故赤羽氏分）
一、會報編輯報告
十二月號を一月號と合併
一、登山團體懇談會の件
一、事務分擔の件
前年度通りとすることに決定
一、本年度山日記編輯の件
昭和十六年（一月―十二月）山日記として本年末に發刊のことに内定し、具體的問題は岩波書店に相談のこと、吉澤氏に依頼。
一、二月小集會の件
二月十五日（木）商工倶樂部に於て開催
題　ペテガリ遭難の顚末　初見一雄氏の豫定
一、基本金の一部を經常費へ流用の件　承認す
一、新入會員詮考の件　左記五氏入會承認す
栗原和輔、網本芳人、加藤武三、萩原時夫、中京山岳會

二月定例理事會並に役員總會

二月十三日（火）午後六時三〇分　虎ノ門本會事務所
出席者　鳥山、野口、吉澤、茨木、横、塚本、黒田、冠
一、社團法人の件
日下書類作成中、三月上旬までに完成の上厚生省に提出の筈
一、山岳第三十五年一號編輯報告
原稿相當に集まりしも一方に偏する傾きあるため今少し

く様子を見たる上にて四月頃印刷所へ廻す豫定

積雪期に於ける臺灣次高山彙　神戸商大山岳部

タロコ族の經濟生活　右同　阿部武道

北葛澤遡行記錄　西岡一雄

內蒙古調査旅行（上）　宮崎武夫

興安嶺横斷記　京大旅行部

河野齡藏氏追悼記　小島烏水

赤羽良一氏〃　茨木猪之吉

過去五年間の登山記錄（新聞切抜による）　塚本繁松

一、會報編輯報告

一、山日記の件

六月發行は現下の狀勢にては絶對不可能につき年末出來れば發行の豫定、九月に原稿を渡す事にして目下岩波にて豫算組立中

一、登山團體懇談會の件

一、二月小集會の件

一、新入會員詮考の件　左の四氏入會承認す

前田利典、矢島利雄、藤野關夫、古田彰

三月定例理事會報告

三月十九日（火）午後六時三〇分　於虎ノ門本會事務所

出席者　藤島、鳥山、額田、吉澤、塚本、野口、石原、冠　黒田、角田

一、山岳第三十五年第一號編輯報告

本年度分「山岳」（二回分）用紙は會員川喜田壯太郎氏の配慮により入手し得たり

一、會報編輯報告

一、社團法人設立準備經過報告

厚生省關係にて暫時遲延す。社團法人への組織變更に際し之を記念すべき特別の事業につき次回理事會に提案のこと。

右の一つとして日本登山年譜作成の儀承認。

一、左記の新入會員入會承認

近藤貞雄、矢澤義弘、周布光兼

四月定例理事會報告

四月二十三日（火）午後七時　於虎ノ門本會事務所

出席者　槇、藤島、茨木、石原、塚本、木村、津田、角田　吉澤

一、社團法人の件

一、山岳第三十五年第一號の件

一、會報編輯の件

五月より發行者を塚本理事に委囑、會員中より數名編輯委員を選び協同して編輯事務擔當のことに決定。

一、五月小集會の件

五月二十三日(木)日本橋商工倶樂部。早大、商大の現役に最近の山岳部の活動に關し講演依頼のことゝなる。

一、ウエストン氏逝去につき
弔電打電濟(A・C宛)。神河内のブロンズにつき此際何か考慮の事となる。

一、事務員缺員補充の件

一、左記の新入會員入會承認
宮崎二郎、藤田肇、江口重幸

六月定例理事會報告

六月十一日(火)午後六時三十分　於虎ノ門事務所

出席者　高頭、武田、鳥山、槇、藤島、角田、吉澤、茨木

中司

一、社團法人の件

一、「山岳」三十五年第二號は十月乃至十一月發行の豫定。

一、會報編輯報告。

一、山日記の件
十一月下旬發行の豫定

一、京濱山岳聯合の件

一、登山用具の資材配給を受けるに付厚生省の意向打診のこと

一、新入會員左の通り承認せらる
山賀榮一、關戸順吉、山崎安治、佐野和男、井上篤治郎

會務報告

方炊、船戸節夫、中元銀弘

七月定例理事會報告

七月十一日(木)午後七時　於虎ノ門本會事務所

出席者　木暮、武田、冠、茨木、木村、黒田、三田、藤島
吉澤、野口、加藤、石原、角田、高橋、塚本、望月

一、社團法人の件

一、山日記の件
發行所を三省堂、編輯者を吉澤理事とし、本年十一月末頃發行の豫定と決る

一、會報編輯報告

一、京濱山岳團體聯合會の件

一、登山用具資材配給方申請の件

一、谷川岳山小屋建設援助指導の件

一、左記新入會員入會承認。
船本文治、松田一郎、安達泰雄、東濱義男、河崎正明、青木正雄、阿部武道、林和夫、藍田務、深澤吉郎、小熊小五郎、青山學院高等部學友會山岳部(代表者松崎和夫)

九月定例理事會報告

九月十九日(木)午後六時半　於虎ノ門本會事務所

出席者　木暮、武田、冠、鳥山、木村、茨木、槇、三田、

藤島、黒田、塚本、津田、額田、野口、加藤、西堀、中司、望月

一、社團法人申請報告の件
厚生省、登記所共に内覽ずみにて數日中に正式書類提出の豫定。

一、山岳編輯報告の件
別記の内容にて本年十一月下旬發行豫定

一、會報編輯報告の件

一、山日記編輯報告の件
豫定通り編輯進行中。

一、學校山岳部懇談會の件
近く委員を設けて詳細決定のこと。

一、登山用具資材配給の件
近く厚生省宛正式手續の豫定。

一、谷川岳山小屋の件
建設は明年融雪期に延期したるも詳細は追て調査のこと

一、登山者段級制の件

一、「高山深谷」刊行の件

一、本會を全國登山團體の統制機關となすの件
原則決定、最近に具體的研究に入ること

一、入會申込者承認
左の十九氏入會承認さる。
竹内熊彦、竹内米子、小野幸、坂原三四郎、吉岡武治郎、垣内政彦、酒井菊雄、跡部昌三、加計朋吉、井上綱、綾内信彦、飯田輝英、蘆長、佐々木佐太郎、油井寅太郎、福田源一郎、網藏志朗、當本正義、原番

十月定例理事會並に役員總會報告

十月八日(火)午後六時　於虎ノ門本會事務所
出席者　木暮、高頭、冠、鳥山、茨木、横、黒田、加藤、中司、野口、西堀、吉澤、塚本

役員總會

一、日本山岳聯盟結成の件
積極的に結成に向つて進むことゝし、冠評議員を委員長とする小委員會を作り、案を練つて次回役員總會に諮ることゝす。

理事會

一、社團法人の件
十月二日附申請書提出濟

一、山岳編輯報告
編輯擔當者藤島理事外地出張に付吉澤理事中心となりて編輯に當り豫定通り刊行を期す。

一、山日記編輯報告
豫定通り十二月初旬店頭に出せる手筈なり。尚山日記編輯用整理カードを常設することに決定。

一、會報編輯報告

一、「高山深谷・十輯」刊行の件
　出來るだけ刊行することに決定。
一、谷川岳山小屋の件
一、左記入會申込者承認
　笠原茂雄、平井仝、鰺久行

奮闘されてゐる會員も相當の多數に上つてゐるが、いま會員岡本君の戰死の報に接し感懷に堪へない。　次に同じ隊の鹽原少尉より本會宛送達された懇篤な書面に依つて當時の模樣を忍び、謹んで哀悼の意を表したい。

謹啓

時下秋冷の候貴會益々御隆昌の段賀し奉ります。

陳者貴會々員　當隊岡本勝二歩兵中尉殿には本年十月二十日北支那〇〇に於て勇戰敵彈を頭部に受け鬼神を泣かしむ壯烈なる名譽の御戰死を遂げられ、武勳に輝く鮮血を北支の曠野に染められたのであります。

岡本君の御日常は當隊の模範にて吾々の尊敬おくあたわざるものでした。同君の如き立派な將校を失ひました事は當隊のみならず、國家の一大損失であります。然し、同君の御英靈は永久に護國の英靈として東洋の平和をお護り下さる事と信じて居ります。

私達も出陣以來滿二ヶ年戰友として苦樂を共にし今日岡本君を失ひました事は實に感慨無量でございます、同君は出征中陣中閑なる時は山岳に就て常に御研究なされて居り、　其の御熱心さに吾々一同感服をして居りました。

茲に岡本君の名譽の御戰死を謹みてお通知申上げ、同君の御冥福を心よりお祈り申上げる次第です。

（爲御參考、同君の留守宅は　東京大森區雪ヶ谷二二七　芦田雪雄樣方です）

會員計報

岡本勝二少尉　會員番號一四六八番

昭和十四年十月二十日北支石家莊に於て戰死せられたり。

赤羽　良一氏　會員番號一七一七番

昭和十四年十月三十一日病氣の爲永眠せらる。

本會は茲に謹みて哀悼の意を表す。

岡本勝二君の戰死詳報

事變以來、登山靴とルツクを銃と劍に代へて支那の大陸に

昭和十四年十月二十五日

北支多田部隊氣付　釜井部隊小田隊附

陸軍軍醫少尉　鹽原美雄

醫學博士

日本山岳會御中

小森宮章正氏

本會員、慶應義塾山岳部先輩、小森宮章正氏は、奉天陸軍豫備士官學校在學中病を得、昭和十五年四月三日奉天陸軍病院に於て逝去せられた。遺骨は五月十六日に歸還せられ、同二十一日本所法恩寺に於て盛大な告別式が營まれた。

同君は慶應山岳部に在つては、常に同部の中心的存在であられ、本會としても將來同君の活躍に期待せる處尠しとせず玆に衷心より哀悼の意を表するものである。

高橋鎰三郎氏

高橋鎰三郎氏（會員番號二五三）は本會々員たる事、實に三十餘年誠に本會とは因緣淺からざるに、今回不慮の災害に因り、昭和十五年八月十六日七十一歳の高齡を以て逝去せられたり。

氏は平素身體至つて頑健、又健脚にして、最近迄朝夕二里餘の散歩を缺したる事無く、丘歩き位は致し居られたり。偶

偶本年七月廿三日、日本橋野村ビル四階の商科醫に治療に立寄りたる歸途、同ビルを徒歩にて降りたる際、二階より一階への階段にて轉落、直にお茶の水順天堂病院に入院の上百般加療を盡したるも、天命詮方なく、廿五日目の八月十六日午前三時五分永眠せられたり。脊髓骨、肩胛骨、腰骨々折、中樞神經極度の障害の爲め、建全なりし內臟諸器管も爲に其の機能衰弱を來し、遂に肺炎を併發せられたるなり。

氏は日頃、山と書とをことのほか愛せられ、机山と號し居られたりと。

本會は玆に謹みて哀悼の意を表す。

集會記事

第九十一回小集會

昭和十四年十月十二日午後六時から例の商工倶樂部で開催。生憎の荒天で參會者の少いのを心配したが、やつぱり熱心な會員の足は風雨位に阻まれないとみえて、いつもと變らないだけの來會者が集まつた。

會員東良三氏の「西部カナダの新山岳風景」は、ブリテイシュ・コロンビア州の概觀から說かれ、今夏氏が訪れた晩香坡に近いアルタ・レーク、マウント・ガリボールヂーの登山談で、演者一流の諧謔や氣焰も盛んに出た。四十枚に及ぶ幻

燈は右の湖水や山岳の美しい寫眞に、マウント・レニヤ、ウオデイントン、ロブソンなど加奈陀の名山の姿を加へられ、來會者の眼を樂しませた。

幻燈映寫中、電力節約といふ國策の線に沿つてか約一時間に亙る停電があり、ローソクの光の下で、中央氣象臺の岡順次氏から「寒中富士山頂滯在談」を伺つた。

岡氏は富士に於ける氣象臺員の寒中登山の歴史を簡單に述べられ、昭和十一年冬、山頂觀測所に立籠る觀測員の生活狀態、山頂に於ける氷雪の景觀等を映畫に收めるため登山滯頂された折の經驗を語られた。寫眞の專門家で登山の方は素人だとの前置きであつたが、山の玄人ではなくとも山にいくらか慣れてゐる吾々になるほどそんなふうに感じられるものかと思はれることもあつて興味深かつた。

二千米少しの高さでも氷河のある山と、三千七百何米でも氷河のない山との講演をきいて、外へ出るとつめたい秋雨がまだ宵の口の十時といふのに人通りの杜絶へた薄暗い街を佗しく濡らしてゐた。（T・F）

第九十二回小集會（關西）

昭和十四年十月二十四日　於清交社

一、カナダ山岳の近況　　會員　東　良　三氏

茲五六年毎年訪米されてゐる東氏は本年も二度北米及カナダへ旅され最近歸朝されたばかりなのでカナダ山岳の狀況につき詳しいお話を伺ふ事が出來た。山の海と稱されるギャルボージ山塊の登攀について種々ヒマラヤと對照の上興味と刺戟を強く與へられた。卽ち人口稀薄にして完全な地圖をも持たないブリテイシュコロンビアには一萬呎以上の山が一六一峰も有り彼のウインパーをしてスイスを五十倂せたのと同じだと嘆ぜしめた程で何れも氷河圈内にあり美しい溪谷を有し登山興趣に於ては滿點、旅行者は感嘆以外の言葉を知らない。幾十哩歩いても人にあはぬ山旅、ロンリーな氣分を滿喫しつつ針鼠のはねる上を進みゴーツの群が氷河の上を渡つて行く崇高な姿を視つむる時人の世の狹小なわすらひを顧み自然の大いさの前に心からひれふさずに居れない。或ひはスリーピングバッグに身を橫たへ星を仰ぐ野營の折に氷河の空間を埋める遠音をきく時のたまらない氣持。淋しいといはうか人の世でないといふのか怖しくはないが何ともいへない寂漠の感に打たれる。アンネーム、アンナンバーの之等山群に諸君の名をつけよと呼びかけてゐる程山の多いこの地方により深い關心を注いでも決して失望される事はあるまい、と推稱。簡易化された登山方法の紹介から我國の登山裝備についても一言され引續きドナルドモンバー夫妻發見のワデイングトンや夕姿美しいロブソン、マシニノイネの登山史、ガリバルヂパークの良さなど多くの鮮麗なスライドを見せて頂き乍らお話を伺ふ事が出來參會者一同時間の不足を惜しみつゝ閉會した。（當田記）

第九十三回小集會

昭和十五年二月十五日、商工倶樂部で開催。昭和十五年の劈頭、新聞紙上に大きく報導された北大山岳部員の日高山脈に於ける遭難事件に就て、本會々員であり北大山岳部先輩である初見一雄氏から詳細なる報告をきいたのである。

遭難された八名の部員の多くは初見氏の山仲間であり、嘗ては苦樂を倶にした人々であるだけに、冒頭に於て、初見氏はこの遭難事件に就いて語るに當り悲しみを新らたにすると述べ、更らに來聽者に於て好奇心を以てきかれるやうなことがあれば逝ける人々に相濟まない次第であると强調された。

講演は先づ日高山脈に於ける今日までの登山記錄の概觀、ペテガリ岳の積雪期試登の經過、今次遭難した登山隊一行の經歷、登山行程、遭難前後の天候、雪崩の襲來に至るまでを詳細に說かれた。

遭難の報至つて後、捜索隊の編成急行、山岳部員の涙ぐましい努力によつて亡友の骸が短時日の間に一人を殘こして發掘された經過を語られ、最後に雪崩發生の因と想像される點を說き、遭難された人々の行動、判斷等に就いては山友としてまた先輩として同情ある批判を下された。

岳友を失つた悲しみを忍んで、事件の詳細を述べられた初見氏に謝すると共に、吾等は同じく山岳に心をひかるゝ者として、若き有爲の青年を失つたことを悲しみ、八人の靈に哀悼の念を捧げるものである。

次に之も一月上旬、東北の朝日岳に於ける日本登高會々員溝口氏一行の遭難に就て報告を伺ふ筈であつたが最近までその消息が判明せぬため、まだ報告の時期に非ずと辭退されたので次の機會に讓つて集會を閉ぢた。(T・F)

有志晩餐會

一昨昭和十三年の秋の會に久振りで出席して次回の世話人に選ばれたのだが、同じ世話人の梁田久彌君とは相會する機も少いし、それに大體、山好きの仲間が集つて、悠々たる閑談をやるには時勢が餘りにも切迫してゐる。物資不足、閣取引、惡性インフレ懸念といつたやうな言葉が新聞紙とから委を消したなら、有志晩餐會も開きたいと思つてゐたが事態は益々惡化するばかり、この分では中々非常時を脫却出來さうもないので、昭和十五年四月十八日、恒例の「つかさ」で開いた。

參會者廿四名、珍らしい顏觸れも加はつて、時局談抜きの山話に花を咲かせて、十時頃に散會した。次回の世話人は角田、村尾の兩氏にお願ひした。(T・F記)

當日參會者氏名左の如し。

青木昇、田邊主計、島田巽、横有恒、高頭仁兵衛、田中菅雄石塚秀次郎、ジョン・モリス、一高旅行部中村、栗原和輔、東良三、神田豐次郎、茨木猪之吉、吉田竹志、川崎吉藏、初見

一雄、塚本繁松、成瀬岩雄、辻荘一、角田吉夫、村尾金二、深田久彌、藤島敏男、鳥山雅也

第九十四回小集會（關西）

昭和十五年五月十四日　於滿交社

一、スイス雜談　藤島敏男氏

世間も山岳界も何だか割り切れなく落ちつかない氣分にある時、こうして遠いスイスの山の話を聞くのは心のどこかを慰められるやうで、安易な氣持を以てお話が何へ、非常にのびやかな集りであつた。

お話の前に氏自身寫してこられたアルプスの美しい寫眞を多數拜見させて頂き、山戀ひの心を呼び起しまだ見ぬスイスアルプスへの憧れを强く感じさせられた。お話は氏が昭和十年から十三年にかけオーバランド、エンガデイン、ワリス等スイスの山旅に出かけられた時の順に從ひ山の樣子、日本アルプスとの比較、登山者の態度、山小屋内の出來事、山村の景觀と雰圍氣或ひはスキー學校風景といふやうなものに就いて。美しい自由詩をよむやうな淡々としたお話であつたので宛かもスイスの山麓に在つて何ふが如きいゝ氣持になつてしまふ。又最近における山案内料やどの位の費用を要するものかなど一寸想像だけでは見當のつかないお話もつけ加へて頂き參考となつた。

久し振りの小集會であつたが當日は丁度山の集りが外に三組もあり出席されない人のあつたのは惜しい事と思つた。參會者十七名（當田記）

第九十五回小集會

第九十五回小集會は都下學校山岳部の最近の收穫に就いて講演を願ふことゝし昭和十五年五月二十三日午後六時半より商工倶樂部に於て開催した。二十八度にも昇つた晝間の暑さであつたが、ビルの四階の窓から吹き込む涼しい夜風に當りながらスリルを含んだ潑剌たる話を聞くことの出來たのは幸であつた。最初に早大の關根吉郎氏は「明神岳東稜に於ける一つの試み」と題して、本春この目的に對して展開された同學山岳部の綜合的有機的行動に就て語られ、それを中心として過去及び將來に於ける學校山岳部の有り方と言つたものに對する見解を示された。次で東商大の大塚武氏は「北穗高瀧谷」の題下に同じく學生登山者としての眞摯な内省、及び態度に就いて示唆多きものを披瀝され、今冬試みられた瀧谷第四尾根の登攀を祕めて印象的な言葉で語られた。終つて兩氏の持參された寫眞を幻燈に映じて感銘を加へ、十時少し前散會した。時間がなくて討論を充分に盡すことの出來なかつたことは遺憾であつたが、兩氏の講話には我が登山界、乃至日本山岳會の將來に就て示唆する多くの問題を含んでゐた。當日來會者七十一名、特に學生諸氏の多いことが目立つた。（石原記）

出席者左記の通り

吉田竹志、木村鐵吉、堀田彌一、大熊保夫、土屋鐵雄、茨木猪之吉、佐藤誠次郎、宮崎二郎、角田吉夫、額田敏、田邊主計、佐藤貞吉、寺澤一麿、黒田正夫、酒井忠一、藤岡鍵藏、西岡俊雄、藤野關夫、崎田潔、石原巖、黒田孝雄、横有恒、浦松佐美太郎、三田幸夫、關根吉郎、五十嵐清三郎、鈴木正俊、望月達夫、吉澤一郎、以上二九名、會員外四二名。

第九十六回小集會

第九十六回小集會は昭和十五年十月十日日本商工倶樂部に於て開かれた。

講演者　西堀榮三郎氏

演　題　カナダの山嶽見

同氏は社用にて今春渡米され歸路をカナデイアン・パシフイック線にとられた。カナダの山の爲に幾日かを用意されたのであつたが、次々に起る社用の爲に遂に最初の目的を遂する事が出來なかつたのでカナダの山に就いては多くを語れないからと言はれて、先づ以前より關心を持つてゐられた目下南極圏にあるアメリカの探險隊に就て、特にその目的、編成裝具等に關して話された。特別の便宜によつてその當局者たちと直接會談されたのであつて、新聞記事等にあらはれた事よりも多くを我々は知つた。それからレイク・プレシッド等にスキイに行かれた話をされ、最後にカナダの山の話となつた。レイク・ルイズで下車、登高の念はどうしても諦められず、半日の餘裕を以つてどこか〈登らうとする。未明に出てフエア・ヴュウ・マウンテン(九千餘呎)に一人登つて行く處なんかは大いに同感であつた。登頂、グリセイドを飛ばして一氣に下山、汗を流してすぐ汽車に乘りヴアンクーヴアへ向はれたのであつた。その後で同氏の撮影になるコダクロームの幻燈が寫された。これはイーストマンの廣告をするやうなものだと言はれたが廣告する價値がある。實に色彩が美しい。テン・ピークスの並んでゐる所なんか殊に美しく、又空なんか綺麗に出すぎるといふ事であつたが、雲の色が誠に美しかつた。參會者は二十餘人であつたが、それだけの人數では惜しい心地がした。いろいろ旅行なんかをしたいと希つてゐても思ふやうにならない我々はこのやうな話を何〈ゐる機會をいつも樂しみにし有難く思つてゐる。(田邊主計)

出席者左記の通り。

塚本繁松、酒井忠一、岩永信雄、横有恒、吉田竹志、西堀榮三郎、田邊主計、沼井鐵太郎、谷本弘、島田巽、野口末延、堀田彌一、關根吉郎、飛川維之、中司文夫、矢澤義弘、五十嵐清三郎、茨木猪之吉、以上十八名。會員外五名。

以　上

「山岳」投稿規定

一、投稿は何人も自由とす。日本山岳會員たると然らざるとを問はず。
一、原稿の採否は理事會に於て決定す。
一、原稿は返却せざるものとす。
一、別刷所要の向はその旨原稿に朱記せられたし、その費用は筆者の負擔とす。
一、原稿にはその梗概を附せられたし。
一、紀行には概念圖を添付せられたし。
一、寫眞は光澤印畫紙に燒付けられ度、裏面或は別紙に說明記入を乞ふ。
一、校正は編輯者に一任せられたし。
一、地名及ひ外國語は特に明確に書かれ度、地名には振假名を附せられ度し。

原稿蒐集所
東京市芝區琴平町一、不二屋ビル、三〇七號室
日本山岳會編輯所

原稿用紙所用の向は前記編輯所宛て申込みあり度し。

昭和十六年三月十日印刷
昭和十六年三月十三日發行
〔定價金參圓〕

東京市芝區琴平町一、不二屋ビル內
發行所 日本山岳會
電話芝一六四九番
振替口座東京四八二九番

編輯者 藤島敏男 東京市牛込區東五軒町三四
責任校正者 望月達夫 東京市杉並區馬橋二ノ二四〇
發行者 川喜田壯太郎 東京市麹町區一番町二〇
印刷者 植田庄助 東京市芝區濱松町一ノ十三

有所權作著

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XXXV 1940 No. 2.